

文部科学省  
令和6年度国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業  
国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究業務【タイプB】

令和6（2024）年度成果報告書

研究代表者 藤田 晃之  
(筑波大学人間系・教授)

※公開版

# 令和6（2024）年度成果報告書

## 目次

<b>第一部</b> .....	<b>1</b>
1－1. 業務の概要 .....	1
1) 業務の目的 .....	1
2) 業務の内容 .....	1
3) 研究組織の概要 .....	1
1－2. 進捗状況 .....	3
1) 研究実施体制の強化 .....	3
2) 打ち合わせの開催 .....	3
3) 専門家会議の開催 .....	3
1－3. 今後の見通し .....	6
1) 研究員等の雇用 .....	6
<b>第二部</b> .....	<b>7</b>
2－1. 生徒調査 .....	7
1) 調査の概要 .....	7
2) 進捗報告 .....	7
3) 今後の見通し .....	45
2－2. 教員調査 .....	46
1) 調査の概要 .....	46
2) 進捗報告 .....	46
2－3. 大学調査 .....	88
1) 調査の概要 .....	88
2) 進捗報告 .....	91
3) 今後の見通し .....	108
2－4. 基礎調査（学校調査） .....	110
1) 調査の概要 .....	110
2) 進捗報告 .....	110
3) 今後の見通し .....	110
2－5. 基礎調査（大学調査） .....	111
1) 調査の概要 .....	111
2) 進捗報告 .....	111
3) 今後の見通し .....	111
<b>巻末資料</b> .....	<b>113</b>

# 第一部

## 1－1. 業務の概要

### 1) 業務の目的

本業務の目的は、日本における国際バカロレア（以下、IB）の教育効果等に関する調査研究を行うことである。IB認定校（以下、IB校）における実態を把握しつつ、その教育効果等を分析し、調査結果を広く共有することで、日本におけるIBのさらなる導入や活用に資することを目指す。

### 2) 業務の内容

本研究では、「(1) 生徒調査」、「(2) 教員調査」、「(3) 大学調査」という3つの調査枠組みを設定し、それぞれの枠組みにおいて①及び②の調査内容を実施することを計画した。

#### (1) IB校及び生徒を対象とした調査（生徒調査）

- ①基礎調査（学校調査）…日本のIB校（一条校）に対する実態調査を行う。
- ②在学生調査…IB校在学中の生徒の教育効果を明らかにする。

#### (2) 教員を対象とした調査（教員調査）

- ①教員調査…IB校における教員の学びを明らかにする。
- ②英語開講（English-Medium Instruction: EMI）科目調査  
…IB校において英語で開講されている科目的授業実践の特徴を明らかにする。

#### (3) 大学及び修了生を対象とした調査（大学調査）

- ①大学調査…日本の大学でのIBを活用した入試に関する実態調査を行う。  
⇒質問紙調査による部分について、「基礎調査（大学調査）」として位置づける。
- ②修了生調査…IB校卒業後の大学での学びやその後の進路を明らかにする。

本報告書では、生徒調査、教員調査、大学調査の進捗について述べたのち、「基礎調査（学校調査）」、「基礎調査（大学調査）」について報告を行う。

### 3) 研究組織の概要

本研究は、「生徒調査」を担う生徒調査班、「教員調査」を担う教員調査班、「大学調査」を担う大学調査班からなる。これら3つの調査班に分かれて調査を行うが、必要に応じて相互に連携する。また、基礎調査（学校調査）については、生徒調査班と教員調査班が、基礎調査（大学調査）については、大学調査班と株式会社トモノカイが主に担う。

<研究代表者>

藤田晃之（筑波大学）

<調査班統括>

生徒調査・大学調査：浜田博文（筑波大学）

教員調査：井田仁康（筑波大学）

<全体コーディネーター>

菊地かおり（筑波大学）、梅津静子（筑波大学）

ルステモヴァ・アクトルクン（筑波大学）

<IB 機構との連絡調整>

キャロル・犬飼ディクソン（筑波大学）

<各調査班のメンバー>

生徒調査	御手洗明佳（淑徳大学）、齊藤貴浩（大阪大学）、松本暢平（千葉大学）、菅井篤（静岡福祉大学）、菊地かおり、ルステモヴァ・アクトルクン、
教員調査	赤塚祐哉（相模女子大学）、木村光宏（岡山理科大学）、渋谷真樹（日本赤十字看護大学）、原和久（都留文科大学）、佐々木恵美子（聖隸クリリストファー小学校）、梅津静子、一家慶喜（筑波大学）
大学調査	花井涉（九州大学）、島田康行（筑波大学）、江幡知佳（大学入試センター）、岩渕和祥（東京大学）、井藤眞由美（関西学院大学）

<常勤研究員>

ルステモヴァ・アクトルクン（筑波大学）

<非常勤研究員>

一家慶喜（筑波大学）

<リサーチアシスタント（RA）>

生徒調査：玄在均（筑波大学大学院）

<研究補助者（大学院生）>

大学調査：駒走聰俊（筑波大学大学院）、浅越天真（九州大学大学院）

<事務補佐員>

相馬未央（筑波大学）、池田亜都沙（筑波大学）

※所属は 2025 年 3 月 31 日現在。

## 1－2. 進捗状況

### 1) 研究実施体制の強化

- 常勤研究員（1名）、非常勤研究員（1名）、リサーチアシスタント（RA）（1名）、事務補佐員（2名）を雇用した。

### 2) 打ち合わせの開催

3つの調査班全体での打ち合わせ（コアメンバー会議）を7回実施した。

### 3) 専門家会議の開催

本事業に対する第三者からの助言を得るために、2024年度は2回の専門家会議を開催した。2024年度の専門家会議のメンバーは以下の通りである。

石田真理子（仙台育英学園高等学校・秀光コース教頭／国際バカロレアディプロマプログラムIBチーフコーディネーター） 勤務校：私立IB校（MYP・DP）
加藤崇英（茨城大学大学院教育学研究科・教授） 専門分野：学校経営・教育行政
関田晃（さいたま市立大宮国際中等教育学校・校長） 勤務校：公立IB校（MYP・DP）
松下佳代（京都大学大学院教育学研究科・教授） 専門分野：カリキュラム・学習評価
吉田文（早稲田大学教育・総合科学学術院・教授） 専門分野：教育社会学（計量分析）

※50音順／敬称略

#### 【第1回専門家会議】 ※3回に分けて実施

日 時：2024年7月23日（火）14:00～15:00

開催方法：オンライン（Zoom）

出席者（11名）：

専門家会議メンバー（1名）：吉田

調査研究チーム（10名）：藤田、井田、御手洗、原、木村、岩渕、梅津、菊地、  
アクトルクン、一家

日 時：2024年7月23日（火）15:00～16:00

開催方法：オンライン（Zoom）

出席者（10名）：

専門家会議メンバー（1名）：関田

調査研究チーム（9名）：藤田、井田、浜田、御手洗、原、木村、梅津、  
アクトルクン、一家

日 時：2024年7月29日（月）9:00～10:00

開催方法：オンライン（Zoom）

出席者（11名）：

専門家会議メンバー（3名）：石田、加藤、松下

調査研究チーム（8名）：藤田、御手洗、原、齊藤、花井、梅津、菊地、アクトルクン

※50音順／敬称略

第1回専門家会議にて出された主要な質問・コメント等は下記の通り。

〔全体〕

- ・研究プロジェクト全体として教育効果をどのように捉えているのか。英語の運用能力のみに焦点化しないように留意する必要があるのではないか。
- ・国際バカロレア（IB）に関する国内の法制度上の位置づけや関連施策の現状についてどのように把握しているのか。とくに、公立学校においてIBの導入が選択される際、カリキュラムモデルの比較検討はなされているのか。また、特色のある教育プログラムへのアクセスの公平性をどのように考えるのか。

〔生徒調査〕

- ・生徒調査で経年変化を踏まえた分析ができるのはとても重要である。
- ・生徒調査がオンラインで実施できるのは学校現場としては負担が少なくありがたい。

〔教員調査〕

- ・なぜ公立のIB校3校を事例として選定したのか。

⇒学校の立地の地理的なバランスと、MYPの有無等を考慮して3校選定した。

〔大学調査〕

- ・国内大学調査では、具体的にどのようなことを明らかにしようとしているのか。

⇒IB入試の目的や運用、受け入れてきた生徒をどのようにサポートしているか等

- ・IB特別入試の実施を取りやめた大学について、その理由を教えてほしい。
- ・海外大学調査では、どのような点において調査をするのか。日本のIB教育を受けて海外大学に進学した学生への調査は予定しているか。
- ・海外大学への出願のハードルの低さと、国内大学への出願のハードルの高さの差を明確に感じる。
- ・国内大学のIB特別入試への理解が広がってほしい。

## 【第2回専門家会議】

日 時：2025年3月4日（火）13:00～14:30

開催方法：オンライン（Zoom）

出席者（18名）：

専門家会議メンバー（5名）：石田、加藤、関田、松下、吉田

調査研究チーム（10名）：浜田、井田、御手洗、木村、齊藤、井藤、梅津、菊地、  
アクトルクン、一家

オブザーバー（3名／文部科学省）：瀬戸、長谷部、小松崎

第2回専門家会議にて出された主要な質問・コメント等は下記の通り。

[全体]

- IB の教育効果を測るときに、教員をインタビュー対象にして、DP 生と他の生徒の違いを質問するのはどうか。

⇒教員への質問が基本的に教員自身に着目したものだが、自然と生徒の話が登場したケースもある。生徒について教員に伺うことを生徒調査班と協力しながら検討したい。

[生徒調査]

- 生徒のバックグラウンドをどの程度コントロールしているのか。

⇒MYP 経験の有無や海外学校経験の有無を聞いています。バックグラウンドをコントロールすると母数が少なくなるジレンマがある。来年はより精緻化されたものを出していきたい。

- DP 生と他の生徒を比較し、その共通点と相違点をどの程度把握したのか。
- 調査結果があまりスライドに出てこなかった印象がある。かなりの数の調査をされているが今後継続して分析をするのか。

⇒質問紙のデータが出そろったのが 12 月頃であり、具体的な分析は今後行う。

- 差異は出ると思うが、DP 生と他の生徒の違いについて、数字では明確な結果は期待できないかもしれない。満足度などは出るかもしれない。

• 調査をしていると、進路決め等の出口の段階で、入学以前の経験や家庭／生育環境が、突如表出されることがある。今回の調査ではこうしたプログラム前の生徒の経験を踏まえた分析がみえてこない。DP 開始前の影響はどの程度あるといえるのか

- 生徒達の主観的な捉え方に基づいて能力を測るのではなく、調査者による客観的な判断による分析が期待される。

• IB をもって将来的な展望があった／実際こういう力をつけているというようなことを知りたい。

- IB の有効性を証明するのではなく、多様性のある生徒達がいる今日の環境下で IB の効果を実感して理解してもらうのが良いが、それには困難性が伴う。こうした中でどのように IB の効果を示すべきか。

[教員調査]

- MYP 併設校とそうでない学校をバランスよく対象校にしているが、併設の有無で変化はあったのか。⇒3 校間の比較の結果はまだ出せていない。MYP 併設校では MYP で土台ができると捉える教員の語りもある。一方、DP は枠組みがしっかりしているため、より自由な探究を求めて DP をあえて選択しない生徒もいるという話がある。

[大学調査]

- 国内の DP 入試が難しいと感じる生徒がいると IB 入試を使う志願者が減る恐れがある。
- 校内で想定していたスコアと実際のスコアの間に隔たりがあった。出願が最終的な成績が開示される前にある点が難しい。

これらの質問・コメント等を参考に、今後の調査計画に可能な範囲で反映させていく。

### **1－3. 今後の見通し**

#### **1) 研究員等の雇用**

2025 年度は、常勤研究員 1 名を追加で雇用する予定である。

## 第二部

### 2-1. 生徒調査

生徒調査（IB 校及び生徒を対象とした調査）では、「①IB 校調査」及び「②在学生調査」を行う。なお、「①基礎調査（学校調査）」については、「2-4. 基礎調査（学校調査）」において詳述する。

#### 1) 調査の概要

2020～2022 年度に筑波大学が中心となって実施した「IB の教育効果に関する調査研究事業」において、ディプロマプログラム（以下、DP）を実施する学校に在籍する生徒に対して質問紙調査を行った。本調査では、当該事業における調査の課題を踏まえ、調査の実施方法や質問項目の見直し等を行い、IB の教育効果について、生徒の成長・変化をより詳細に明らかにすることを目的とする。

上述の事業における質問紙調査は、年度ごとに実施された。これまで、口頭発表、論文、シンポジウム報告等を通じ、DP を履修する生徒（DP 生）と履修していない生徒（non-DP 生）とを比較し、コンピテンシーの習得状況（自己評価）、高校の授業での学習経験、放課後の学習時間、進路等の変数について検討を行ってきた。

本調査は、DP 生及び non-DP 生の経年変化を把握することを目的としたパネル・データの構築を企図して設計されたが、DP 生の人数の少なさが分析上の課題となり、クロス・セクショナル・データに基づく分析にとどまった。また、DP 以外の課程の効果を検討することができていない点も課題となつた。

以上を踏まえ、本事業における調査では、調査対象校の数を増やし、DP 以外の課程も含めた IB の効果をパネル・データに基づいて分析することを目的とし、調査の実施方法や質問項目を見直した上で、IB 教育の効果をより的確に測定することを目指す。

#### 2) 進捗報告

##### 【打ち合わせの実施】

2024 年度は、研究期間中に打ち合わせを 12 回実施した。主な検討事項は、今年度の調査計画、調査結果の分析方法、ならびに研究成果の公表（学会発表、論文投稿）である。詳細は下記の通りである。基本的には対面（筑波大学）で打ち合わせを行い、適宜、オンライン（ZOOM）およびメールを用いて調査研究に関して意思疎通を図った。

	日時	方法（場所）	検討事項
第 1 回	2024 年 4 月 2 日 (火) 10 時～16 時	対面及びオンライン（Zoom）	・生徒調査質問紙の最終調整
第 2 回	2024 年 5 月 13 日	対面及びオンライン	・調査依頼・実施の進捗について（基礎調査・

	(月)10時～16時	イン（Zoom）	高2生調査) <ul style="list-style-type: none"> <li>・修了生調査の質問紙の作成・議論</li> <li>・基礎調査の分析、役割分担、分析結果に対する議論</li> <li>・国際調査（共同研究）に向けての検討</li> <li>・学会発表、報告書、論文作成に関する見通し</li> </ul>
第3回	2024年6月10日 (月)10時～16時	対面及びオンライン（Zoom）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校2年生調査進捗報告</li> <li>・今後の入力・集計作業の確認</li> <li>・高校2年生調査（9月開始DP）の確認</li> <li>・高校訪問予定（6月～8月）</li> <li>・高校2年生調査の質問紙の英訳の検討</li> <li>・高校3年生調査の質問紙の検討</li> <li>・高校3年生調査の質的調査</li> <li>・修了生調査の検討</li> <li>・IB学会ラウンドテーブルの検討（9月）</li> <li>・調査協力校との勉強会の実施方法の検討</li> </ul>
第4回	2024年7月1日 (月)10時～16時	対面及びオンライン（Zoom）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高2生調査の質問紙の英訳</li> <li>・学校訪問の報告+今後の予定</li> <li>・IB学会大会ラウンドテーブル</li> <li>・コンソーシアムイベント（8/18）への参加について</li> </ul>
第5回	2024年8月2日 (金)10時～16時	対面及びオンライン（Zoom）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門家会議（7/23&amp;29）の情報共有</li> <li>・DP校の状況</li> <li>・IB学会大会ラウンドテーブルと出張費用について</li> <li>・第10回国際バカラレア推進シンポジウムの内容について</li> <li>・高校2年生調査の進捗</li> <li>・高校2年生質問紙の英訳</li> <li>・高校3年生質問紙の確定</li> <li>・修了生調査の検討</li> </ul>
第6回	第6回：2024年9月3日（金）11時～16時	対面及びオンライン（Zoom）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校訪問（8/9）の報告</li> <li>・第10回国際バカラレア推進シンポジウムの報告とフィードバック</li> <li>・IB学会大会ラウンドテーブルについて</li> <li>・全体の調査枠組みについて</li> <li>IB校分類作業の枠組み（案）</li> </ul>

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校 2 年生調査（4～7 月期）集計作業</li> <li>・高校 2 年生質問紙の英訳</li> <li>・高校 3 年生調査（9～12 月期）</li> <li>・修了生調査の検討</li> </ul>
第 7 回	2024 年 10 月 21 日 (月) 10 時～16 時	対面及びオンライン（Zoom）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校 2 年生調査（4～7 月期）集計結果報告</li> <li>・修了生調査の検討</li> <li>・研究成果のアウトプット目標</li> </ul>
第 8 回	2024 年 11 月 11 日 (月) 13 時 30 分～16 時	対面及びオンライン（Zoom）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校 2 年生調査（4～7 月期）</li> <li>・高校 3 年生調査（9～12 月期）</li> <li>・高校 2 年生調査の分析</li> <li>・修了生調査の検討</li> </ul>
第 9 回	2024 年 12 月 23 日 (月) 10 時～16 時	対面及びオンライン（Zoom）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校 2 年生調査（4～7 月期）</li> <li>・高校 3 年生調査（9～12 月期）</li> <li>・調査対象校</li> <li>・フィードバック作業について</li> <li>・修了生調査</li> <li>・報告書の作成について</li> </ul>
第 10 回	2025 年 1 月 20 日 (月) 10 時～16 時	対面及びオンライン（Zoom）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問 2・3・7・10 の因子分析</li> <li>・学校へのフィードバック作業について</li> <li>・報告書の作成について</li> <li>・修了生調査</li> <li>・学校訪問</li> </ul>
第 11 回	2025 年 2 月 26 日 (水) 10 時～16 時	対面及びオンライン（Zoom）	

### 【高校 2 年生調査】

2024 年 4 月～7 月に実施した。

### 【高校 3 年生調査】

2024 年 9 月～2025 年 2 月に実施した。高校 3 年生の調査結果については、次年度の報告書に記載する。

### 【修了生調査】

修了生調査（追跡調査）の実施に向けた検討を行った。

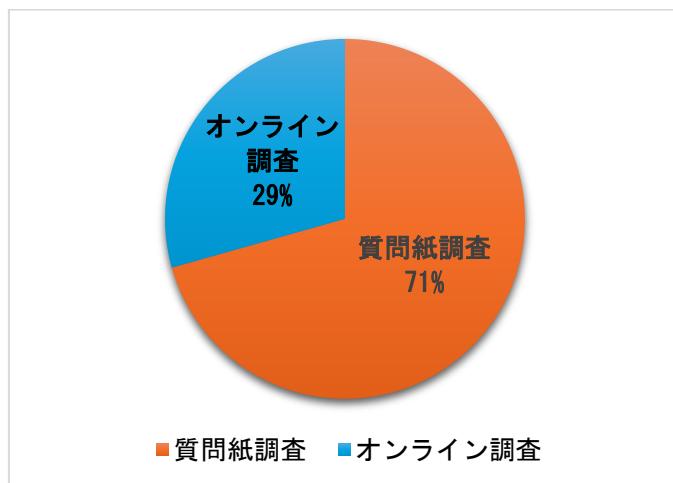
## (1) 高校2年生調査：調査の概要

### ①調査目的等

調査目的	本調査の目的は、日本における国際バカロレア（以下、IB）の教育効果について、生徒の成長・変化をより詳細に明らかにすることである。 また、高校生が学校内外でどのような学習活動や経験をしているかについて実態を明らかにし、生徒の学習状況や活動の多様性、またそれらが生徒の成長や進路選択にどのように影響を与えているかを把握する。
調査対象	IBのディプロマプログラム(DP)を導入する高等学校(一条校)(2024年12月時点43校)に在籍する高校2年生(DP生・non-DP生)
調査方法	集合調査法 調査協力校の要望に応じて、以下の2つの方法で実施した。 ①質問紙による回答                   ②WEB(オンライン)による回答 ※調査票の内容は同一である。
調査時期	2024年4月～7月

### ②調査方法別回答数

質問紙調査	オンライン調査	合計
1267	527	1794
70.6%	29.4%	100%



### ③質問項目の構成

区分	質問項目
質問1. 生徒自身のこと	(1)年組番 (2)学籍番号(生徒番号)
	(3)性別 (4)ディプロマプログラム(DP)の履修
	(5)経験した学校や教育プログラム

質問2. 態度や状況に関すること	(1)知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする（他、全33項目）
質問3. 高校の授業の中で、活動をした経験に関すること	(1)先生の話から知識を得る。（他、全18項目）
質問4. 高校生活の中で、意欲的に参加している活動に関するこ	(1)生徒会・委員会活動への参加（他、全7項目）
質問5. 放課後の学習時間と学習内容に関するこ	(1)1日あたりの放課後の学習時間 (2)1日あたりの放課後の学習時間の配分
質問6. 高校の成績と英語運用能力に関する資格について	(1)現在の成績 (2)現在取得している英語運用能力に関する資格
質問7. 身についている資質能力に関するこ	(1)興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢（他、全22項目）
質問8. 現在や将来に関するこ	(1)学校生活について（全3項目） (2)将来について（全3項目）
質問9. あなたの進路と将来の展望に関するこ	(1)高校卒業後の進路希望 (2)進みたい専門分野 (3)高校やその後の学習を通じて、将来やりたいこと
質問10. 周囲の環境に関するこ	(1)本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある（他、全13項目）

#### 〈参考〉 質問紙調査およびオンライン調査

(質問紙調査)

<p>高校での学習・経験に関する調査</p> <p>※貴様1. (2) 学年番号 (生徒番号) の記入については、先生の指示に従ってください。 ※貴様文部省とてよく指摘がいひ場合は、運動部の申からもつともあてはまる形で〇につけしてください。</p> <p>質問1. あなたの自身のことをうながします。</p> <p>(1) _____ 年 _____ 月 _____ 日          (2) 学年番号 (生徒番号)          (※(0) ので記載は今後、定期評定を行う際に無用ためだけに使用します。)          (3) 性別 ( )          (4) あなたは現在、ディプロマプログラム (DP) を履修していますか。              1. 履修している      2. 履修していない          (5) 以下の項目の中で、あなたが就職した学校や教育プログラムありますか。あてはまる番号を全ての□にタリマーでください。</p> <p>1. インターショナルスクール (日本)      2. インターショナルスクール (海外)          3. 海外の学校      4. 海外の日本人学校          5. 國立・公私立専門教育プログラム (IPW)      6. 國際バカロレア等教育プログラム (WIP)          7. あてはまるのものはない</p> <p>質問2. あなたはどの程度の専門性についてどのくらいわかるはると思いますか。各項目について、もともとわかるとおもき方の□にタリマーください。</p> <p>どちらかども ややこ ややこ どちらかども ややこ ややこ      もともとわかる もともとわかる もともとわかる もともとわかる もともとわかる もともとわかる      ない ない ない ない ない ない</p> <p>(1) 知らないことがあると、よく質問したりするの (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (2) 自分でどうりん人間が考えたことがわかる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (3) 社会の人々でよく使っている (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (4) 自然の現象にふれこむところがいる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (5) 学校では問題なく自分で理解する習慣ができる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (6) 聞き取ることはできるが理解するところ (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (7) 問題を解決する自分でできると考える (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (8) 説明がわかるのでよく聞く (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (9) 他の人の気持ちや考え方を十分に理解することができる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (10) 自分の気持ちや考え方を充分表現することができる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5</p>	<p>高校での学習・経験に関する調査</p> <p>※貴様1. (2) 学年番号 (生徒番号) の記入については、先生の指示に従ってください。 ※貴様文部省とてよく指摘がいひ場合は、運動部の申からもつともあてはまる形で〇につけしてください。</p> <p>質問1. あなたの自身のことをうながします。</p> <p>(1) _____ 年 _____ 月 _____ 日          (2) 学年番号 (生徒番号)          (※(0) ので記載は今後、定期評定を行う際に無用ためだけに使用します。)          (3) 性別 ( )          (4) あなたは現在、ディプロマプログラム (DP) を履修していますか。              1. 履修している      2. 履修していない          (5) 以下の項目の中で、あなたが就職した学校や教育プログラムありますか。あてはまる番号を全ての□にタリマーでください。</p> <p>1. インターショナルスクール (日本)      2. インターショナルスクール (海外)          3. 海外の学校      4. 海外の日本人学校          5. 國立・公私立専門教育プログラム (IPW)      6. 國際バカロレア等教育プログラム (WIP)          7. あてはまるのものはない</p> <p>質問2. あなたはどの程度の専門性についてどのくらいわかるはると思いますか。各項目について、もともとわかるとおもき方の□にタリマーください。</p> <p>どちらかども ややこ ややこ どちらかども ややこ ややこ      もともとわかる もともとわかる もともとわかる もともとわかる もともとわかる もともとわかる      ない ない ない ない ない ない</p> <p>(1) 知らないことがあると、よく質問したりするの (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (2) 自分でどうりん人間が考えたことがわかる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (3) 社会の人々でよく使っている (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (4) 自然の現象にふれこむところがいる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (5) 学校では問題なく自分で理解する習慣ができる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (6) 聴き取ることはできるが理解するところ (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (7) 問題を解決する自分でできると考える (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (8) 説明がわかるのでよく聞く (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (9) 他の人の気持ちや考え方を十分に理解することができる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5      (10) 自分の気持ちや考え方を充分表現することができる (1) 1 — 2 — 3 — 4 — 5</p>
---	---

## (オンライン調査)

【高校2年生対象】高校での学習・経験に関する調査

質問1. あなた自身のこととおしゃがいです。

(1) 年生 \*

(2) 性別

(3) 姓氏

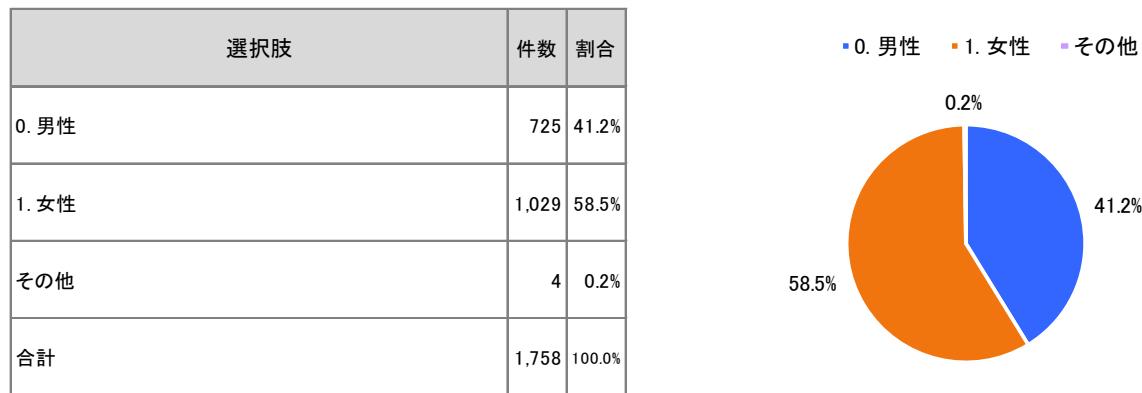
(4) 学年専門 (生徒専用)

(5) 住地

## (2) 高校2年生調査：全体集計の結果

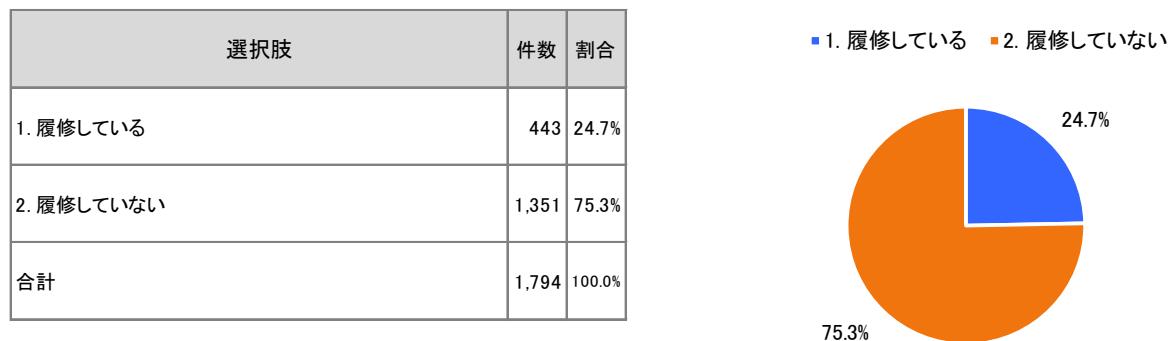
### ①男女比

調査回答者の性別のうち、無回答を除く1,758名を対象に分析したところ、男性が41.2%（725名）、女性が58.5%（1,029名）、その他が0.2%（4名）であった。全体としては、女性の回答者数が男性を上回っていた。



### ②ディプロマプログラム(DP)の履修状況

回答者1,794名のうち、DP生（履修をしている者）は24.7%（443名）、non-DP生（履修していない者）は75.3%（1,351名）であった。



### ③経験した学校や教育プログラム

回答者1,794名に対して、これまでに経験した学校（海外での学校経験含む）や教育プログラムに尋ねたところ、以下のようない傾向が見られた。

最も多いかったのは、「あてはまるものはない」であり、54.7%（981名）である。次いで、「国際バカロレア中等教育プログラム(MYP)」は27.9%（501名）、「海外の現地校」は14.1%（253名）であった。その他、「インターナショナル・スクール（日本）」は6.4%（115名）、「インターナショナル・スクール（海外）」は5.2%（93名）、「海外の日本人学校」は5.4%（97名）、「国際バカロレア初等教育プログラム(PYP)」は2.5%（45名）であった。

選択肢	件数	割合								
			0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	
1. インターナショナル・スクール（日本）	115	6.4%	6.4							
2. インターナショナル・スクール（海外）	93	5.2%	5.2							
3. 海外の現地校	253	14.1%	14.1							
4. 海外の日本人学校	97	5.4%	5.4							
5. 國際バカロレア初等教育プログラム（PYP）	45	2.5%	2.5							
6. 國際バカロレア中等教育プログラム（MYP）	501	27.9%	27.9							
7. あてはまるものはない	981	54.7%	54.7							
回答者数	1,794	-								

#### ④態度や状況（質問2／33項目）

本調査の結果、回答者は責任感や規範意識、協働スキルにおいて高い肯定回答率を示した。

特に、「世の中には色々な価値観や文化があることを理解している」（項目20）では肯定回答率が93.8%に達し、また「他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している」（項目19）も91.7%といずれも高い値を示しており、多文化理解や他者の意見を尊重する意識が強いことがうかがえる。

また、「他の人たちと協力してチームで行動することができる」（項目12）や「自分の行動に責任をとることができる」（項目18）といった社会的な適応能力を反映する項目においても高い肯定回答率が得られ、全体として回答者の社会的適応力が高いことが確認された。

一方で、自主的な学習姿勢や環境意識に関する項目（項目4、5）では、肯定回答率が40%未満にとどまり、否定的な回答が約30%を占めるなど、学びへの動機づけに課題があることが明らかになっている。さらに、健康意識やストレス管理（項目26、31）についても否定回答率が30%を超えており、これらの分野に対する支援の必要性が示唆される。

#### 社会的スキルと協働意識

社会的スキルや協働意識に関しても、回答者は高い能力を示している。たとえば、「他の人たちと協力してチームで行動することができる」（項目12）の肯定回答率は82.1%であり、特に「とてもあてはまる」と回答した割合が36.2%に達した。この結果は、回答者が集団の中で協働する力に自信を持っていることを示している。

また、「他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している」（項目19）の肯定回答率が91.7%と高く、他者の意見や価値観を受け入れる姿勢が際立っていることが確認された。

### 自主学習と環境意識

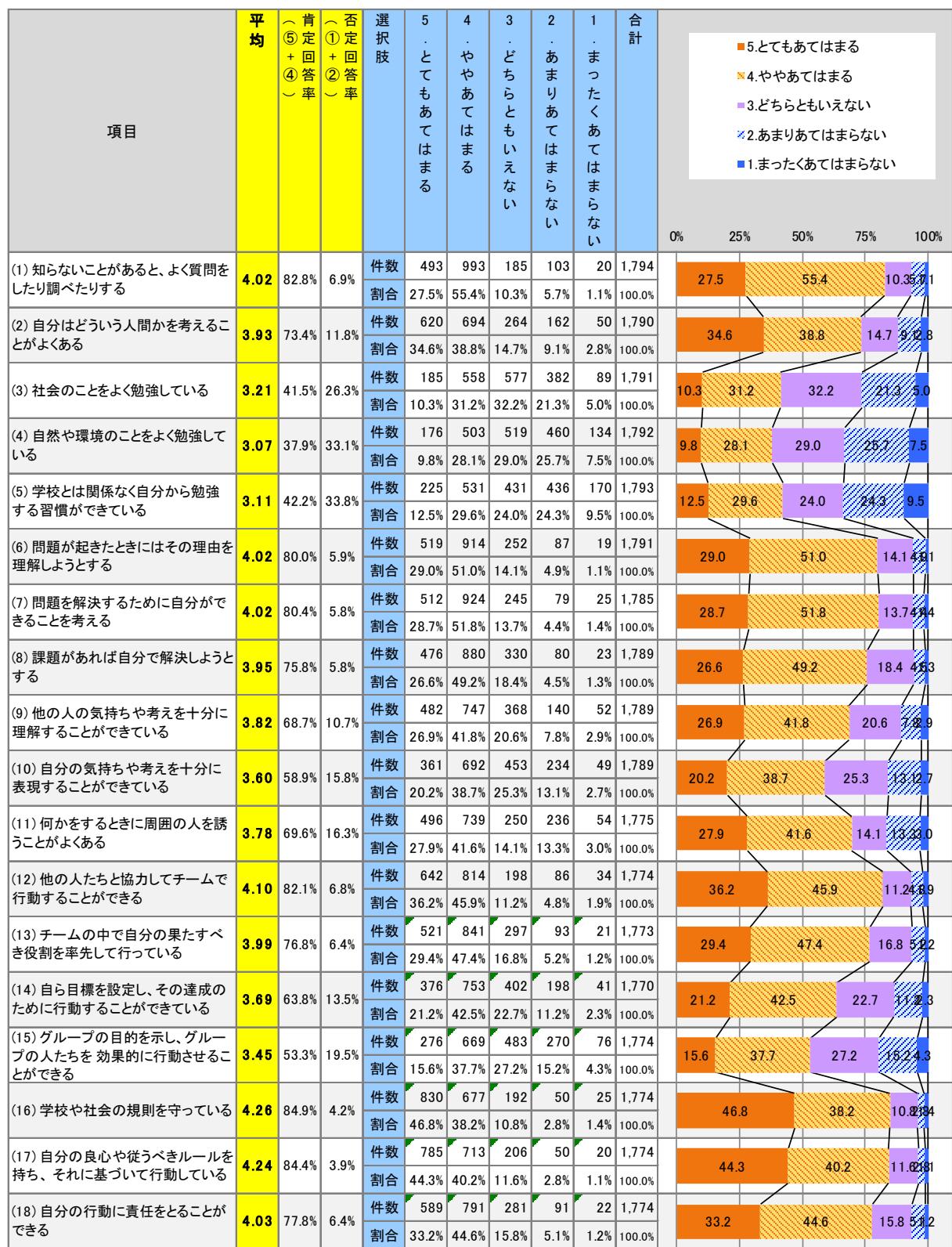
一方で、自主学習や環境意識に関連する項目には課題が見られる。「自然や環境のことをよく勉強している」(項目 4) の肯定回答率は 37.9%にとどまり、否定回答率は 33.1%に上った。また、「学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている」(項目 5) では、肯定回答率が 42.2%であり、自主学習に取り組む人が一部存在するものの、否定的な回答が多く、自主的な学習習慣の形成にはさらなる支援が必要であることが示唆される。

### 問題解決能力

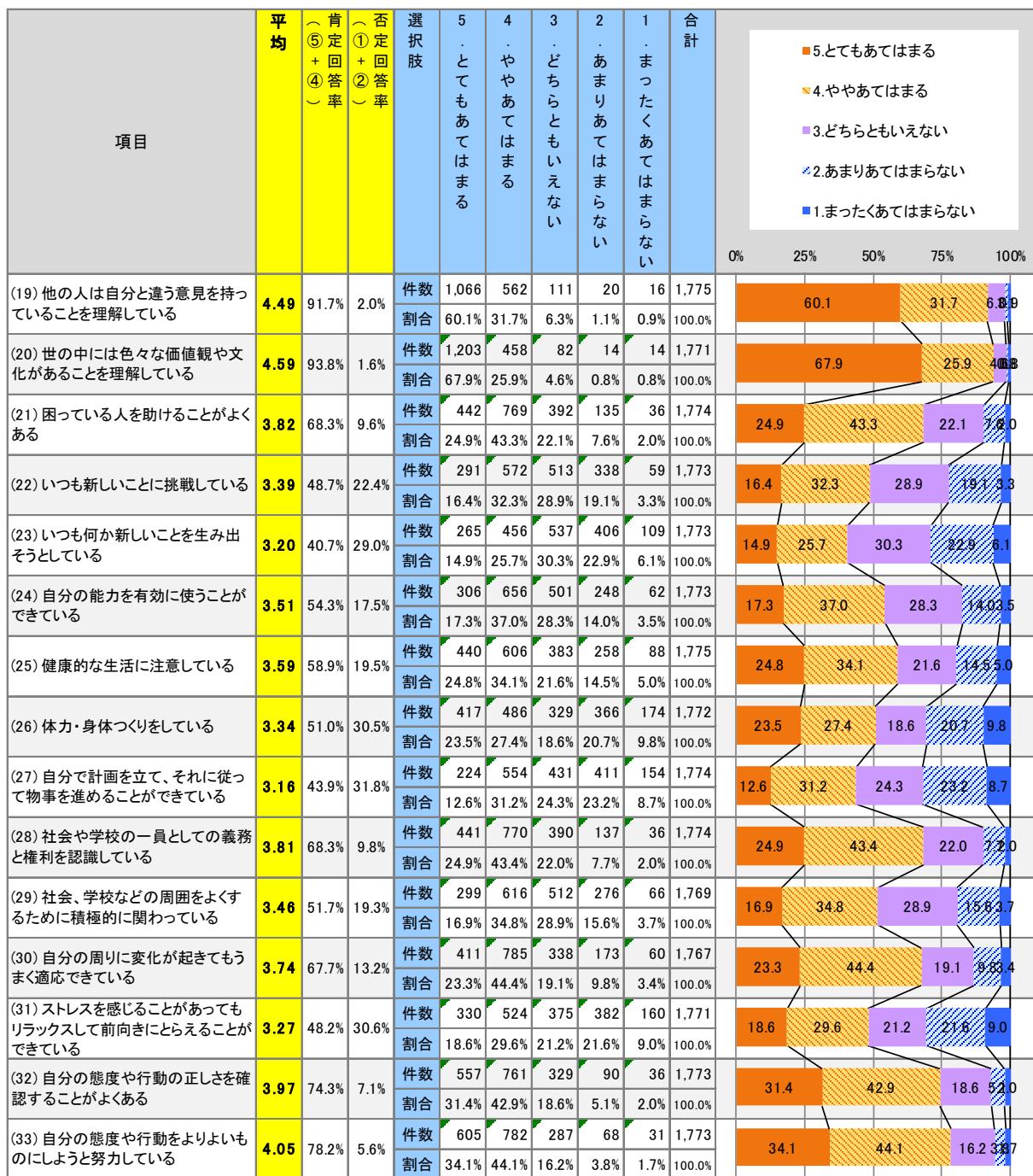
問題解決能力に関しては、比較的高い肯定回答率が見られた。「問題が起きたときにはその理由を理解しようとする」(項目 6) および「問題を解決するために自分ができることを考える」(項目 7) では、それぞれ肯定回答率が 80.0%、80.4%に達しており、多くの回答者が問題の背景を理解し、自ら解決策を考える姿勢を有していることが分かる。

### 健康意識やストレス管理

健康意識やストレス管理に関しては、課題を抱える回答者が一定数存在している。「体力・身体つくりをしている」(項目 26) では、否定回答率は 30.5%であり、健康維持や身体活動への意識が相対的に低い層が存在していることが示唆される。また、「ストレスを感じることがあってもリラックスして前向きにとらえることができている」(項目 31) でも、否定回答率も 30.6%に上り、ストレスへの対処に困難を感じている傾向がうかがえる。



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

## ⑤高校の授業での経験（質問 3／18 項目）

本調査の結果、回答者は学習スタイル、協働スキル、意見交換に関して高い肯定回答率を示した。

特に、「自分と異なる立場や見方を持つ他人の意見を聞く」（項目 8）では肯定回答率が 92.9% に達し、「グループで協力して活動する」（項目 10）も 85.7% と高水準であった。これらの結果は、回答者が他者との意見交換や協働活動に対して高い意識を持っていることを示唆している。また、

「教科書を中心に学ぶ」（項目 2） や 「作成・発表などへのフィードバックを受ける」（項目 18）といった項目でも肯定的な回答が多く、学習活動に対する前向きな姿勢が確認された。

一方で、情報収集や学習成果を社会への還元といった応用的な学びに関する項目（項目 6、項目 14）では肯定回答率が 50%を下回り、否定的な回答が 30%を超える項目もあった。これらの結果は、情報リテラシーや学びの社会的展開に関する課題を示している。

### 学習スタイルと意識

学習スタイルに関しては、教科書を中心とした学びが一般的であることがうかがえる。「教科書を中心に学ぶ」（項目 2）では肯定回答率が 82.8%であり、そのうち「5.いつも」と回答した割合は 32.3%に上った。

一方、「情報収集によって、情報源の信頼性を確認する」（項目 6）では肯定回答率が 35.8%と低く、否定回答率が 31.4%に達しており、情報の取り扱いや選別に課題があることが示されている。

### 協働スキルと意見交換

協働スキルと意見交換に関する項目では、非常に高い肯定回答率が見られた。「グループで協力して活動する」（項目 10）では肯定回答率が 85.7%であり、特に「5.いつも」が 42.1%と最多であった。

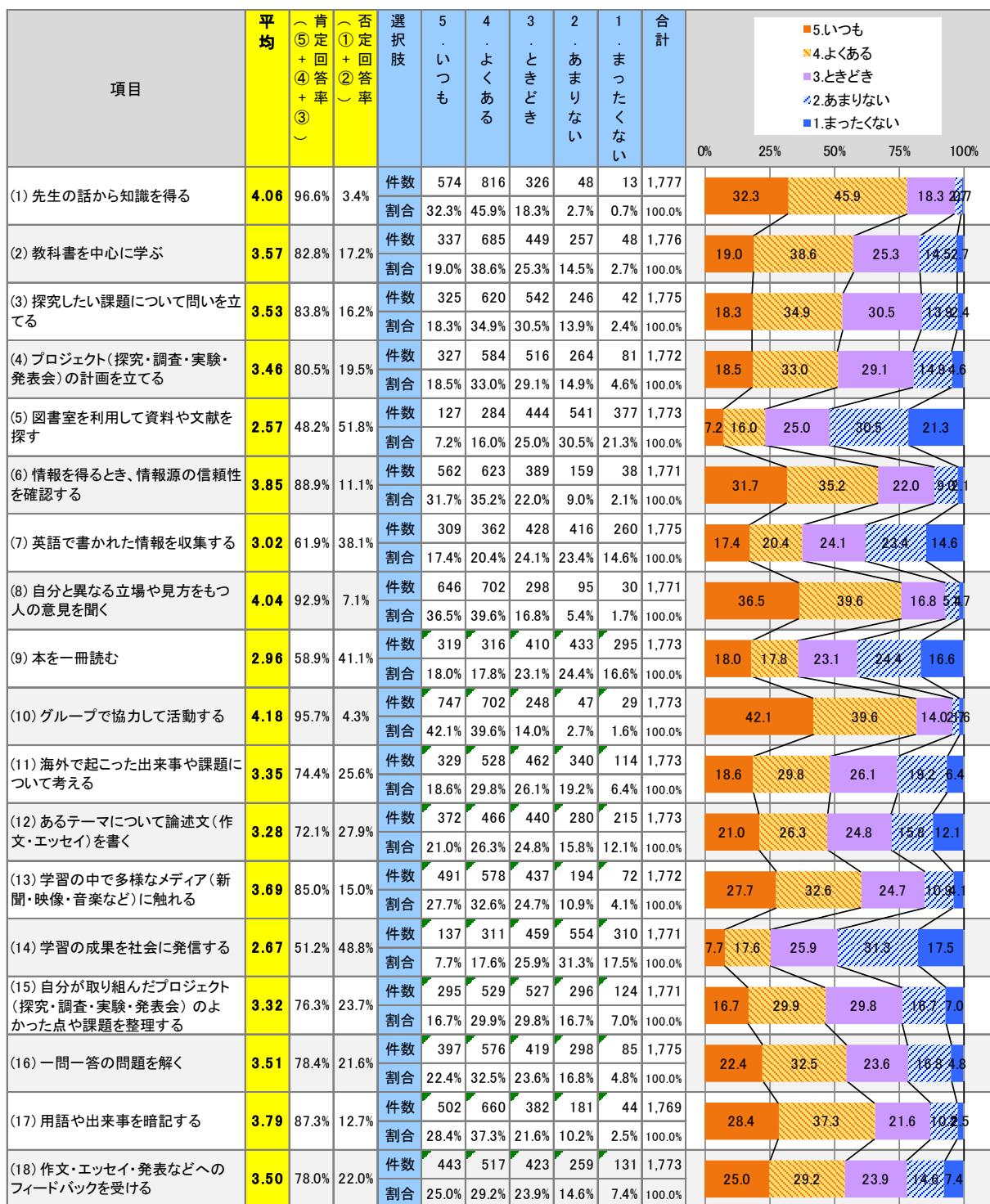
また、「自己と異なる立場や見方を持つ他人の意見を聞く」（項目 8）の肯定回答率は 92.9%と非常に高く、多様な視点を尊重する意識が強いことが明らかとなった。

### 学びの成果と還元意識

学びの成果を社会に還元する意識については課題が認められた。「学習の成果を社会に発信する」（項目 14）では肯定回答率が 51.4%にとどまり、否定回答率が 48.6%と拮抗していた。この結果から、学習成果を他者と共有・発信する機会や、その重要性に対する理解が十分に浸透していない可能性を示している。

### フィードバックと自己評価

「作成・発表などへのフィードバックを受ける」（項目 18）では、肯定回答率が 78.0%と高かった一方、「どちらともいえない」とした回答も 22.5%存在している。このことから、フィードバックの質やタイミング、またそれを通じた自己評価の促進については、さらなる工夫が求められる。



平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

## ⑥意欲的に参加した活動（質問4／7項目）

本調査の結果、回答者は学校行事や部活動などの国内活動に対して高い肯定回答率を示した。特に、「学校行事（体育祭・文化祭等）への参加」（項目3）では肯定回答率が84.5%に達しており、多くの回答者が学校行事を学生生活の重要な要素として捉えていることがわかる。一方で、「海外との交流活動への参加」（項目6）や「留学（短期・長期・交換等）」（項目7）に関しては、いずれも否定回答率が50%を超えており、国際的な活動への関心や参加機会が限られていること

が示されている。

また、「授業外でのプロジェクト・探究活動への参加」(項目4)および「ボランティア活動への参加」(項目5)に関しては肯定回答率が50%前後であり、これらの活動への参加意識にはばらつきが見られた。これらの結果から、国内の学校活動には積極的に取り組む傾向がある一方、課外活動や国際的な活動への関与については課題があることがうかがえる。

### 学校活動への参加

#### ・生徒会・委員会活動

平均値は2.97であり、肯定回答率が42.1%、否定回答率が41.2%であった。生徒会や委員会活動への参加意識は分かれしており、「5.とてもあてはまる」(17.6%)や「4.ややあてはまる」(24.5%)と回答した肯定的な割合は約4割にとどまっている。一方で、否定的な回答が約4割にとどまり、参加意識には分散が見られる。

#### ・部活動・クラブ活動

平均値は3.63であり、肯定回答率が63.7%、否定回答率が26.4%である。部活動やクラブ活動への参加意識は比較的高く、「5.とてもあてはまる」が41.6%を占めている。これにより、回答者の多くが部活動を学校生活の重要な役割を果たしていることがうかがえる。

#### ・学校行事（体育祭・文化祭等）

平均値は4.28であり、肯定回答率が84.5%、否定回答率が5.9%である。回答者は学校行事への参加意識が非常に高く、「5.とてもあてはまる」と回答した割合が51.3%に達している。学校行事への参加意識が非常に高いことが明らかとなった。

### 課外活動への参加

#### ・プロジェクト・探究活動

平均値は3.29であり、肯定回答率が49.1%、否定回答率が30.2%である。プロジェクトや探究活動に積極的な回答者が多い一方で、「どちらともいえない」(20.7%)や否定的な回答が一定数存在しており、活動への参加意識には個人差が大きい。探究活動の魅力や価値を広く伝えることが求められる。

#### ・ボランティア活動

平均値は3.03であり、肯定回答率が42.6%、否定回答率が38.3%である。ボランティア活動への参加意識にはばらつきがあり、「1.まったくあてはまらない」が17.8%と比較的高い割合を示している。回答者の間で活動への関心や参加機会に差があることが示唆される。

### 国際的な活動への参加

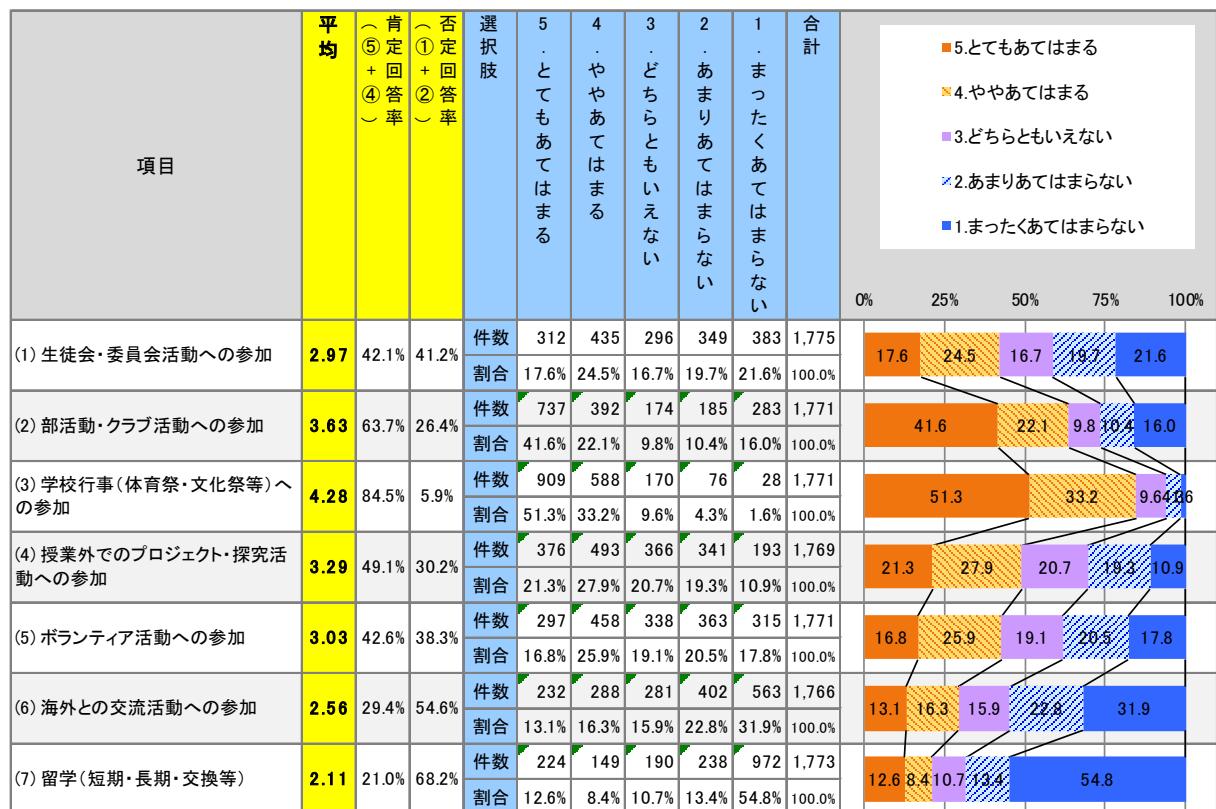
#### ・海外との交流活動

平均値は2.56であり、肯定回答率が29.4%、否定回答率が54.6%である。海外との交流活動への参加意識は低く、「1.まったくあてはまらない」が31.9%と最も多い割合を示している。国際交流への意識や経験が不足していることが明らかとなった。

#### ・留学（短期・長期・交換等）

平均値は2.11であり、肯定回答率が21.0%、否定回答率が68.2%である。留学への参加意識

は非常に低く、「1.まったくあてはまらない」が54.8%に達している。留学に対する関心の低さや心理的・経済的ハードルの高さが課題として浮き彫りとなった。



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

## ⑦学期中の平日放課後の学習時間（＝1日あたりの平均）と学習内容（質問5）

本調査の結果、回答者の放課後の学習時間には大きなばらつきが見られた。最も多かったのは「91分以上120分以下」(20.3%)であり、「31分以上60分以下」(19.2%)、「151分以上180分以下」(11.8%)も一定の割合を占めている。一方、「0分」と回答した割合は6.3%であり、放課後にまったく学習を行っていない層の存在が明らかになった。

学習内容については、「高校の授業の予習・復習・課題」(項目1)に最も多くの時間を割いており、「31分以上60分以下」が28.9%で最多であった。また、「資格試験の準備」(項目5)にも一定の割合が時間を割いており、「1分以上30分以下」(31.0%)と比較的多かった。一方、大学受験の準備(項目4)や調べ学習・探究活動(項目3)には、ほとんど時間を割いていない回答者が多数を占めていた。

### 放課後の学習時間

最も多くの回答者が「91分以上120分以下」の時間を学習に費やしており、その割合は20.3%を占めた。一方で、「0分」と回答した割合も6.3%存在し、学習時間が極端に短い層が一定数いることが課題として浮かび上がっている。また、学習時間が「181分以上」と長時間に及ぶ回答者も11.7%存在し、学習時間には個人差が大きいことが示されている。

### 高校の授業の予習・復習・課題(項目1)

高校の授業の予習・復習・課題に対して、多くの回答者が時間を割いていることが分かる。「31分以上 60 分以下」と回答した割合が 28.9% で最も多く、「1 分以上 30 分以下」が 26.1% でこれに次ぐ。一方、否定的な回答（「0 分」）は 11.6% にとどまっており、多くの回答者にとって高校の授業関連の課題は主要な学習内容であるといえる。

#### 塾・予備校の予習・復習・課題（項目 2）

塾や予備校の予習・復習・課題については、「0 分」と回答した割合が 64.6% と非常に高く、多くの回答者が塾や予備校に通っていない、または予習・復習を行っていないことが明らかである。一方で、時間を割いている回答者の中では、「1 分以上 30 分以下」(11.4%) や「31 分以上 60 分以下」(10.8%) が比較的多い。

#### 調べ学習、探究・プロジェクト活動（項目 3）

調べ学習や探究・プロジェクト活動に関しては、「0 分」と回答した割合が 55.4% と半数を超えており、これらの活動への取り組みは限定的であることが分かる。一方で、「1 分以上 30 分以下」と回答した割合が 26.7% あり、短時間ながらも取り組む回答者が一定数確認された。

#### 大学受験の準備（項目 4）

大学受験に関する準備活動については、「0 分」と回答した割合が 81.0% と非常に高く、これらの活動に取り組んでいる回答者は少数派である。ただし、「1 分以上 30 分以下」と回答した割合が 9.9% であり、一部では意識的に準備を始めていることがうかがえる。

#### 資格試験に向けた勉強（項目 5）

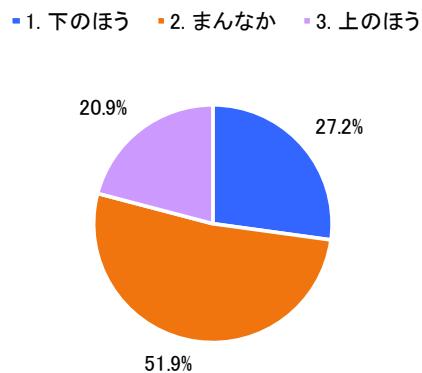
資格試験（英検、TOEIC、漢検など）の準備については、「0 分」と回答した割合が 53.2% であるものの、「1 分以上 30 分以下」が 31.0%、「31 分以上 60 分以下」が 11.0% と一定数の回答者が時間を割いていることが分かる。これは、高校の授業次ぐ主要な学習内容の一つであるといえる。

### ⑧高校の成績と英語運用能力

#### 高校の成績

回答者 1,766 名のうち、最も多かったのは「まんなか」(51.9%) であり、全体の過半数を占めていた。次いで「下のほう」(27.2%) が多く、「上のほう」(20.9%) は最も少ない割合であった。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	480	27.2%
2. まんなか	917	51.9%
3. 上のほう	369	20.9%
合計	1,766	100.0%



## 英語運用能力

本調査の結果、最も多く取得されていた英語資格は「英検（実用英語技能検定）」であり、全体の 72.7%（1,437 名）が該当した。一方、「資格は取得していない」と回答した者も 12.0%（238 名）存在しており、資格取得経験がない層が一定数認められた。

- ・「英検（実用英語技能検定）」

取得者は、全体の 72.7%に達しており、圧倒的多数を占めている。英検は最も広く普及し、認知されている英語資格であることが分かる。

- ・「TOEFL」「TOEIC」「IELTS アカデミック・モジュール」

受検者はそれぞれ、「TOEFL」は 4.7%（92 名）、「TOEIC」は 3.4%（67 名）、「IELTS アカデミック・モジュール」は 2.5%（50 名）であった。これらの国際的資格は受検者が少数にとどまっており主に特定の目的や志向を持つ層に選ばれていると考えられる。

- ・「その他」

「その他」と回答した割合は 4.7%（93 名）であり、英検や国際的資格以外の資格を取得している層も一定数存在する。

- ・「資格は取得していない」

「資格を取得していない」と回答した者は 12.0%（238 名）であり、資格取得に関心が低い、または機会がなかった層がいることが示唆される。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
1. 英検(実用英語技能検定)	1,437	72.7%		72.7			
2. TOEFL	92	4.7%	4.7				
3. TOEIC	67	3.4%	3.4				
4. IELTSアカデミック・モジュール	50	2.5%	2.5				
5. その他	93	4.7%	4.7				
6. 資格は取得していない	238	12.0%	12.0				
合計	1,977	100.0%					

## ⑨身についている資質能力（質問 7）

調査結果から、回答者の多くが社会的な協力や多文化理解に関する資質・能力を高く有していることが明らかとなった。

具体的には、「チームで協力して行動する力」（項目 18）や「人や社会によって違った考え方や文化があることへの理解」（項目 6）において高い肯定回答率が示されており、社会的・文化的スキルの高さがうかがえる。一方で、「数学に関する能力」（項目 22）や「理科に関する能力」（項目 23）では肯定回答率が相対的に低く、否定的な回答が多く見られた項目も確認された。これらの結果は、回答者が社会的資質に強みを持つ一方で、特定の学問分野に課題を抱えている可能性を示唆している。

### 肯定的な回答が多い項目

「人や社会によって違った考え方や文化があることへの理解」（項目 6）は、肯定回答率が 86.4% に達し、調査項目中で最も高い値を示した。また、「5.身についている」と回答した割合も 48.7% と非常に高く、多文化共生への意識の高さが際立っている。

同様に、「チームで協力して行動する力」（項目 18）に関しても肯定回答率が 79.7% と高く、「5.身についている」が 33.4% を示した。これらの結果は、回答者が協働的な態度や行動スキルに自信を持っていることを示している。

### 否定的な回答が多い項目

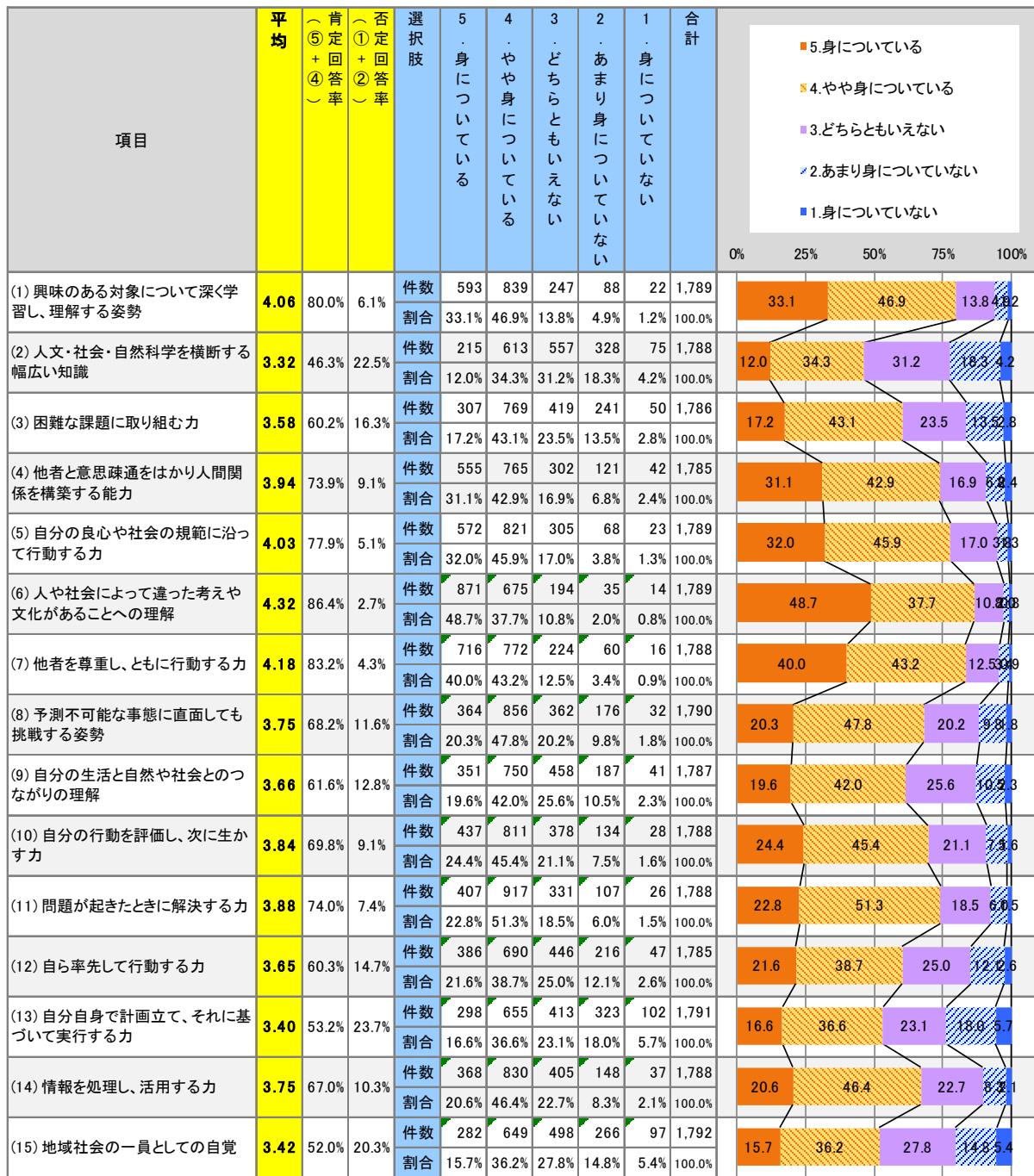
「数学に関する能力」（項目 22）では、否定回答率が 28.0% に上り、うち「1.身についていない」と回答した割合が 8.8% を占めた。数学に対する苦手意識や自信の欠如が一因と考えられている。

また、「理科に関する能力」（項目 23）でも否定回答率が 25.9% に達しており、同様の傾向が見られた。両項目とも「どちらともいえない」の回答も高く、自らの能力への評価が定まっていない層の存在も確認された。これらの結果は、数学・理科分野における基礎学力へ対する自己評

価について課題があることを示している。

#### 自己計画や実行力に関する課題

「自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力」（項目 13）の肯定回答率が 53.2%と平均的水準にとどまり、「どちらともいえない」が 23.1%と比較的高かった。この結果から、回答者の間で自己管理能力への自己評価が分かれており、計画的に行動する力の育成には支援が求められる。



平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均



平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

## ⑩学校生活と将来について（質問8）

### 学校生活

学校生活や学習に対する満足度について分析した結果、以下のような傾向が明らかとなった。「高校生活全体に満足している」(項目③)では肯定回答率が63.7%と最も高かった。一方で、「学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している」(項目①)や「これまでの学校での学習や経験で得られた自分の能力に満足している」(項目②)では、肯定回答率がそれぞれ42.6%、40.4%にとどまり、相対的に低い水準にあった。

#### ・学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している

平均点は3.10であり、肯定回答率が42.6%とやや低い結果となった。一方で、否定回答率は35.1%に達していた。「5.とてもそう思う」と回答した割合は11.7%にとどまり、「どちらともいえない」(22.3%)や否定的な回答が多いことが課題として挙げられる。この結果は、授業の内容や方法に対する課題認識が一部に存在していることを示している。

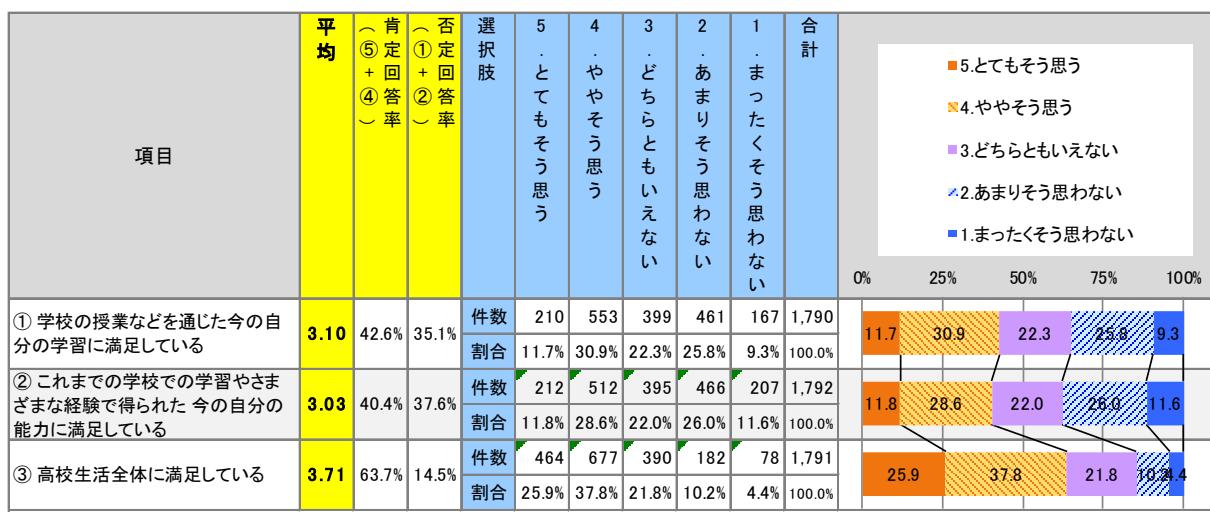
#### ・これまでの学校での学習や経験で得られた自分の能力に満足している

平均点は3.03、肯定回答率は40.4%と調査全体でも低い値を示した。「1.まったくそう思わない

い」と回答した者が 11.6% に上っており、過去の学習や経験を通じた能力獲得に対して否定的な自己評価を抱く層が一定数存在する。この結果は、学校での学習等で得られた個々の能力に十分に満足していない者がいることを示している。

#### ・高校生活全体に満足している

平均点は 3.71 であり、肯定回答率が 63.7% と他の項目に比べて高い水準を示した。「5.とてもそう思う」と回答が 25.9% に達しており、全体的に高校生活へ対する満足度は高い。否定回答率は 14.5% と低く、「1.まったくそう思わない」と回答した割合は 4.4% にとどまった。これらの結果から、多くの回答者が高校生活全体を肯定的に捉えていることが明らかとなった。



平均点：「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

#### 将来について

本調査では、将来に関する意識として、「学びたい分野」、「行きたい大学」、「やりたい仕事」3項目について分析を行なった。その結果、全体として肯定的な回答が多く、回答者の多くが将来に対して一定の目標や計画を持っていることが示された。一方で、「将来、やりたい仕事について考えている」（項目③）では他の2項目と比べてやや低く、キャリアに対する具体的な展望がまだ定まっていない層が一定数存在することが明らかになった。

#### ・将来、学びたい分野について考えている

平均点は 4.17、肯定回答率が 82.2% と最も高い結果を示した。回答者の多くが学びたい分野について明確なイメージを持っていることを示している。「5.とてもそう思う」と回答した割合は 44.7% であり、回答者の半数近くが強い目標意識を持っていることが分かる。一方で、「2.あまりそう思わない」（5.5%）や「1.まったくそう思わない」（2.2%）の否定的な回答は少数にとどまった。

#### ・将来、行きたい大学について考えている

平均点は 4.08 であり、肯定回答率が 78.5% と比較的高い値を示している。「5.とてもそう思う」と回答した割合が 41.9% であることから、将来の進学先について具体的なイメージを持つ回答者が多いことが分かる。ただし、「3.どちらともいえない」（12.6%）の割合がやや高く、進学先につ

いて明確なビジョンを持っていない層が存在する可能性を示唆している。

#### ・将来、やりたい仕事について考えている

平均点は 3.96 であり、肯定回答率が 73.0% と他の項目と比べてやや低い値を示した。「5.とてもそう思う」と回答した割合は 40.6% にとどまり、「3.どちらともいえない」(13.9%) や否定的な回答 (13.1%) が一定数存在している。特に「1.まったくそう思わない」と回答した割合が 4.7% であり、将来のキャリアについて考えが及んでいない層が少なくないことが分かる。



平均点:「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

## ⑪進路と将来の展望

### 進路

本調査では、回答者が進学先として「国内大学」「海外大学」「未定・わからない」「その他」の4つの選択肢を第一希望および第二希望として挙げた結果を分析した。その結果、\*\*「国内大学への進学」を第一希望に挙げた割合が 82.1% と圧倒的に高く、全体的に国内進学への関心が強いことが示された。一方で、「海外大学への進学」は 10.9%、「未定・わからない」および「その他」の割合がそれぞれ 4.1%、2.1% となった。

#### ・国内大学への進学

「国内大学への進学」を第一希望とした回答者は 1472 名、全体の 82.1% を占めた。また、第二希望まで含めると 93.5% となり、国内大学を進学先に選ぶ意向が非常に強いことが分かる。この結果は、国内の教育制度や文化への適応のしやすさ、または進学コストの観点から国内進学を選ぶ傾向を反映している可能性が高い。

#### ・海外大学への進学

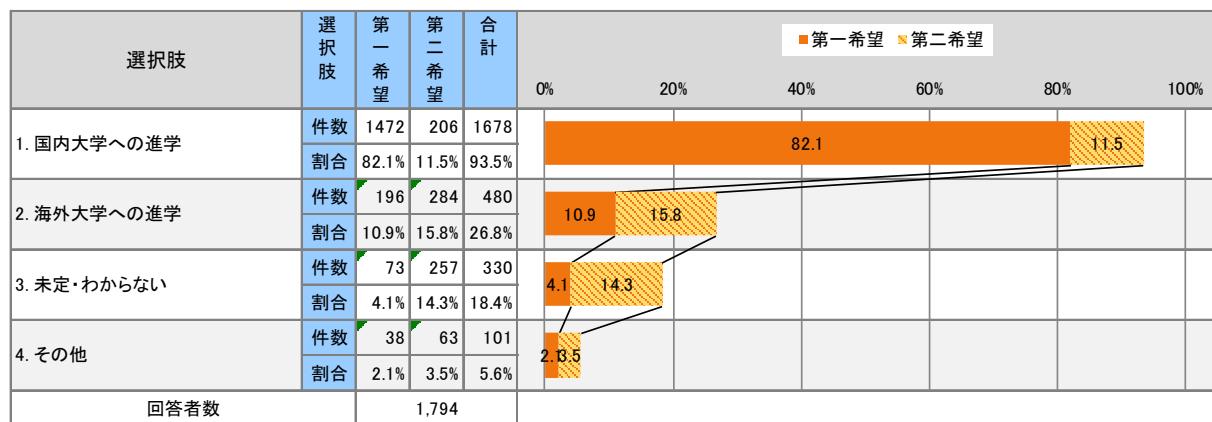
「海外大学への進学」を第一希望に選んだ回答者は 196 名、全体の 10.9% にとどまった。しかし、第二希望を含めると 15.8% となり、全体では 26.8% が海外進学を視野に入れていることが確認できる。この割合は、海外での学びや異文化体験を求める層が一定数存在することを示している。

#### ・未定・わからない

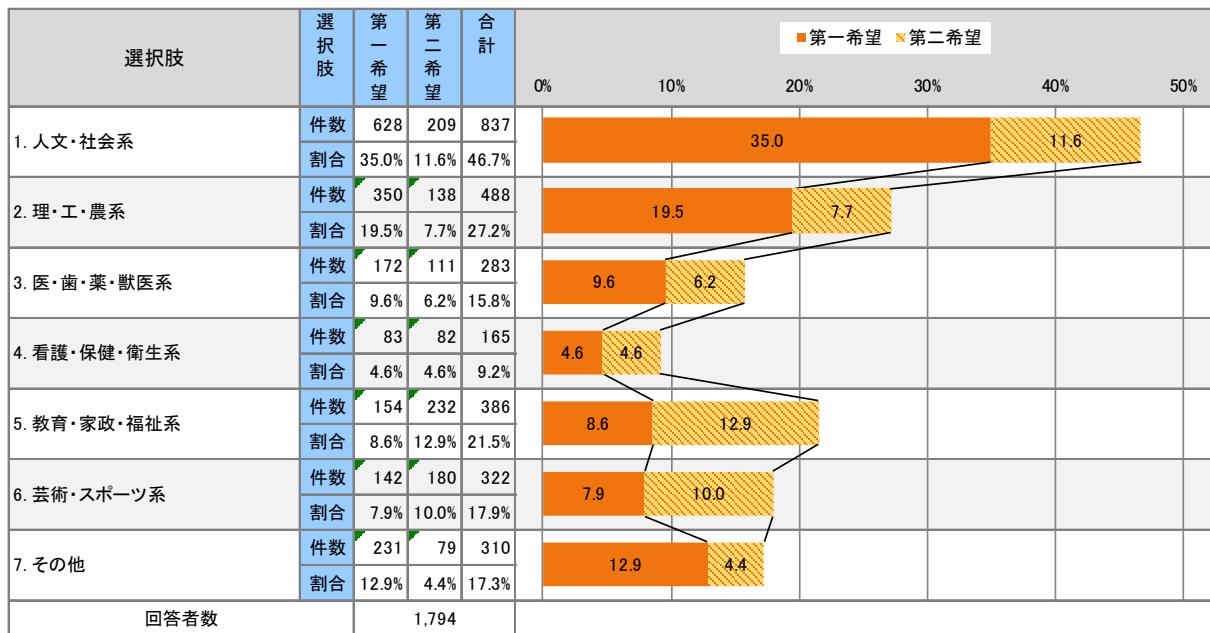
「未定・わからない」を選択した回答者は第一希望では 73 名（4.1%）、第二希望では 257 名（14.3%）であり、合計 18.4% となった。この結果は、進学に関する具体的な方向性が定まっていない回答者が少なからず存在していることを示唆している。

#### ・その他

「その他」を選択した回答者は第一希望で 38 名（2.1%）、第二希望で 63 名（3.5%）であり、合計 5.6% となった。この選択肢を選んだ回答者は、国内外の大学以外の進学先（専門学校や就職など）を検討している可能性がある。



「人文・社会系」を第一希望および第二希望として挙げた割合は 46.7% に達し、そのうち 35.0% が第一希望とした。「人文・社会系」は他の分野と比較して関心がもっとも高いことが示された。一方、「理・工・農系」を選択した回答者は、第一希望および第二希望を合わせて 27.2% に達し、全体の約三分の一を占めた。「医・歯・薬・獣医系」を第一希望として選択した者は全体の 9.6% であったのに対し、「看護・保健・衛生系」を第一希望および第二希望として選択した割合は 9.2% にとどまり、この分野は最も少ない希望者数となった。また、進みたい分野として第三番目に人気が高かったのは「教育・家政・福祉系」で、21.5% のなか 12.9% が第二希望として選択する結果となり、この分野に第二希望として関心の高さも確認された。また、「芸術・スポーツ系」に関しては、第一希望として選択した者が 7.9%、第二希望として選択した者が 10% であり、両者を合わせた選択者の割合は合計で 17.9% となり、全体の中で選択者数が 4 番目に位置していた。



## ⑫周囲の環境（質問 10）

調査結果から、回答者の多くが家庭内での学習環境や親からのサポートに満足していることが分かる。「本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある」(項目 1) や「親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる」(項目 4) において、いずれも肯定回答率が 90%を超えており、多くの家庭が子どもの学習を支える物理的・物質的環境を整えていることがわかる。一方で、「普段の生活の中でお金に困っていると感じることがある」(項目 6) については、否定回答(=困っていない)が 60.9%に達しており、経済的に困窮している家庭は比較的少数であることが明らかとなった。

### 家庭内の学習環境

家庭での学習環境については、「本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある」(項目 1) の肯定回答率が 92.4%と非常に高く、「とてもあてはまる」と回答した割合も 63.0%に達している。この結果は、多くの家庭が子どもが集中して学べる環境を物理的に整えていることを示している。家庭での学習環境の整備は、子どもの学業成績や学習意欲に大きな影響を与える重要な要因である。

さらに、「親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる」(項目 4) に対する肯定回答率も 91.3%にのぼり、「とてもあてはまる」は 64.5%であった。これらの結果から、親が学用品や教材の購入を通じて積極的に子どもの学習を支援している実態が読み取れる。こうした経済的な支援は、子どもが安心して学びに取り組むための基盤となっている。

### 保護者からの精神的サポート

子どもの自主性を尊重し、精神的な支える保護者の関与も明確に確認された。「親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる」(項目 7) の肯定回答率が 87.8%であり、「とてもあてはまる」と回答した割合が 62.5%に達しており、多くの保護者が子どもの夢や目標を尊重している

ことがわかった。

また、「親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる」(項目 8)においても、肯定回答率が 79.7%と高く、特に「とてもあてはまる」と回答した割合が 51.8%を占めた。この結果は、家庭内における良好なコミュニケーションが築かれており、子どもが日常的な悩みを保護者に相談できる関係性があることを示唆している。こうした家庭環境は、子どもの心理的安定および学習意欲の向上に資するものである。

### 経済的状況

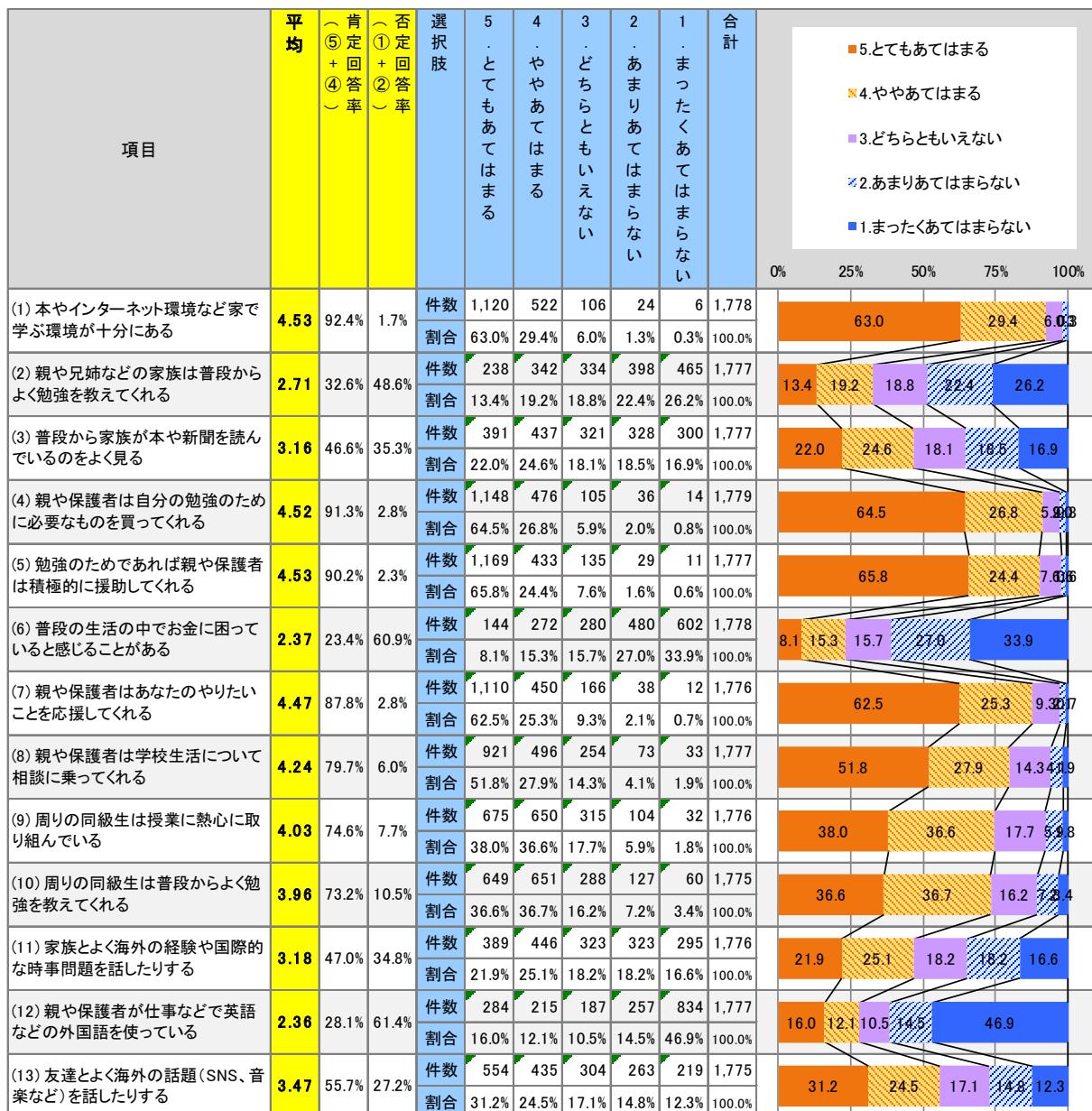
一方、家庭の経済的状況に関する項目では、一定の経済格差が確認された。「普段の生活の中でお金に困っていると感じことがある」(項目 6)については、否定回答率(=困っていない)が 60.9%と比較的高く、経済的に安定している家庭が多数派であることが分かる。しかし、「とてもあてはまる」と回答した割合も 8.1%に達しており、一部の家庭では経済的な負担が子どもの学習環境に影響を与えている可能性が示唆された。

このような家庭に対しては、教材費の補助や学習支援プログラムの提供といった外部からの具体的な支援が必要で求められる。

### 海外経験や多文化交流

海外経験や多文化交流に関する質問では、肯定回答率が比較的に低く、家庭内の国際的な話題や交流の機会が限定的である傾向が見られた。「家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする」(項目 11)については、肯定回答率が 47.0%にとどまっており、「どちらともいえない」と回答した割合が 18.2%を占めていた。これらの結果から、家族間で国際的な話題に触れる機会が乏しい家庭が一定数存在していることが示された。

さらに、「親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている」(項目 12)では、否定回答率が 61.4%と高く、家庭内で外国語を使用する環境が十分に整っていない少ないことが示された。このような環境では、子どもが国際的な視野を広げる機会が限られてしまう可能性がある。



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

### (3) 高校2年生調査: 全体集計のまとめ

本調査の全体集計に基づき、回答者が持つ資質能力や学習環境について、以下の3点にまとめることができる。

#### ①社会的スキルと多文化理解の高さ

本調査では、「チームで協力して行動する力」(項目18) や「人や社会によって違った考え方や文化があることへの理解」(項目6) が高い肯定的な回答が多く、特に社会的スキルや多文化理解に関する能力の高さが確認された。

一方で、家庭内で国際的な視点を育成する環境が整っているわけではない実態も浮かび上がった。「家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする」(項目11) や「親や保護者が仕事で英語などの外国語を使っている」(項目12) の肯定回答率が低かったことは、家庭内での国

際的な話題の共有が限定的であることを示唆している。

## ②理数科教育の課題

「数学」及び「理科」に関する能力（項目 22、23）では否定的な回答が一定数見られた。これにより、理数科教育における学習への自信や達成感の不足が課題として明確になった。

## ③家庭環境と経済的格差

家庭環境においては、「本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある」（項目 1）に関する肯定回答率が 92.4% と非常に高かった。多くの家庭で学習者が集中して勉強できる環境が整っていることが分かる。また、「親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買っててくれる」（項目 4）や「親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる」（項目 7）においても高い肯定回答率が示され、家庭による物質的・精神的支援の充実が示された。

しかしながら、経済的な困難を抱える家庭も一定数存在する。「普段の生活の中でお金に困っている」（項目 6）について、否定回答率が 60.9% と比較的高い一方で、「とてもあてはまる」と回答した割合も 8.1% であり、一部の家庭では、経済的な困難が生徒の学習環境に影響を及ぼしている可能性がある。

#### (4) 高校2年生調査：DP生とnon-DP生の傾向の比較

##### ①自身の態度や状況について [質問2]

質問2では、自身の態度や行動に関する状況を尋ねた。能力獲得に関しては、自己認識を直接的に問う質問項目（質問7）で問うているが、本項目ではこれに加えて、実際の行動ベースに基づく質問項目を設けたものである。この設問は、質問7と同様に、2014年に導入された Dual Language Diploma Programme (DLDP) のベースライン調査の質問項目をもとに一部改編したものであり、IBの10の学習者像、文部科学省の「生きる力」、「学士力」、経済産業省の「社会人基礎力」を加え、KJ法で分類した能力を基礎としている。

回答は5件法（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）に与えられた値をポイントとみなし、各項目の平均値を算出し、DP生の特徴と両者に類似する傾向を確認するため、対応のないt検定を行った【表1-1】。

その結果、33項目中25項目において、DP生とnon-DP生との間で統計的に有意な平均値の差が認められた。特に、効果量は中程度と評価された項目には、「学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている」( $g=.40$ )、「問題が起きたときにはその理由を理解しようとする」( $g=.40$ )、「知らないことがあると、よく質問したり調べたりする」( $g=.38$ )であった。ここから、DP生は、主体的に学ぶ態度や好奇心がnon-DP生よりも高いことが示唆された。

一方で、DP生とnon-DP生との間で統計的有意差が認められなかった項目 ( $p: n.s.$ )として、「健康的な生活に注意している」( $g=-.03$ )、「体力・身体つくりをしている」( $g=.00$ )、「学校や社会の規則を守っている」( $g=.00$ )であった。これらの結果から、身体的健康や規範意識に関する態度は、群を問わず全体に共通して見られる傾向であると考えられる。

【表1-1】自身の態度や状況について

	DP生			Non-DP生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
知らないことがあると、よく質問したり調べたりする	4.26	0.75	443	3.95	0.86	1351	0.38	***
自分はどういう人間かを考えることがよくある	4.09	1.01	441	3.88	1.06	1349	0.20	***
社会のことによく勉強している	3.42	1.06	442	3.13	1.03	1349	0.27	***
自然や環境のことによく勉強している	3.36	1.12	443	2.98	1.09	1349	0.35	***
学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている	3.47	1.14	442	3.00	1.18	1351	0.40	***
問題が起きたときにはその理由を理解しようとする	4.27	0.79	442	3.94	0.85	1349	0.40	***
問題を解決するために自分ができることを考える	4.18	0.82	440	3.97	0.86	1345	0.25	***
課題があれば自分で解決しようとする	4.08	0.84	441	3.91	0.87	1348	0.20	***

他の人の気持ちや考えを十分に理解すること ができる	3.86	1.04	439	3.81	1.00	1350	0.05	n.s.
自分の気持ちや考えを十分に表現することができる	3.68	1.04	442	3.58	1.03	1347	0.10	n.s.
何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある	3.83	1.11	439	3.77	1.08	1336	0.06	n.s.
他の人たちと協力してチームで行動することができる	4.18	0.94	437	4.07	0.90	1337	0.12	*
チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている	4.11	0.84	437	3.95	0.89	1336	0.18	***
自ら目標を設定し、その達成のために行動することができる	3.82	1.01	437	3.65	1.00	1333	0.17	**
グループの目的を示し、グループの人たちを効果的に行動させることができる	3.63	1.05	439	3.39	1.05	1335	0.23	***
学校や社会の規則を守っている	4.26	0.90	439	4.26	0.85	1335	0.00	n.s.
自分の良心や従うべきルールを持ち、それに基づいて行動している	4.32	0.83	437	4.21	0.85	1337	0.12	*
自分の行動に責任をとることができる	4.08	0.94	438	4.02	0.88	1336	0.07	n.s.
他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している	4.59	0.68	438	4.45	0.76	1337	0.19	***
世の中には色々な価値観や文化があることを理解している	4.71	0.63	437	4.56	0.71	1334	0.22	***
困っている人を助けることがよくある	3.89	0.98	437	3.79	0.96	1337	0.11	*
いつも新しいことに挑戦している	3.67	1.08	438	3.30	1.05	1335	0.35	***
いつも何か新しいことを生み出そうとしている	3.45	1.10	437	3.13	1.14	1336	0.28	***
自分の能力を有効に使うことができている	3.67	1.03	438	3.45	1.04	1335	0.21	***
健康的な生活に注意している	3.56	1.26	439	3.60	1.11	1336	-0.03	n.s.
体力・身体つくりをしている	3.34	1.34	436	3.34	1.29	1336	0.00	n.s.
自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができている	3.29	1.19	439	3.12	1.16	1335	0.15	**
社会や学校の一員としての義務と権利を認識している	3.86	0.99	438	3.80	0.95	1336	0.06	n.s.
社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている	3.55	1.09	438	3.42	1.05	1331	0.12	*
自分の周りに変化が起きてもうまく適応でき	3.93	1.03	436	3.68	1.02	1331	0.24	***

ている

ストレスを感じることがあっても リラックス	3.39	1.31	438	3.23	1.22	1333	0.13	*
して前向きにとらえることができている								
自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある	4.08	0.94	439	3.93	0.94	1334	0.17	**
自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している	4.14	0.91	438	4.02	0.90	1335	0.14	*

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s.: not significant

M=平均値、SD=標準偏差、n=回答数、g=効果量（Hedges の補正）、p=有意差 ※以下同様

## ②授業中の学習経験について [質問 3]

質問 3 では、授業中の学習経験について質問した。選択肢（「5:いつも」～「1:まったくない」）に与えられた値をポイントとみなし、各項目の平均値を算出し、DP 生の特徴と両者に類似する傾向を確認するため、対応のない t 検定を行なった【表 1-2】。

その結果、全ての項目（18 項目）で DP 生・non-DP 生間の平均値に統計的有意差がみられた。そのうち、特に効果量の値が大きかった ( $g > 0.5$ ) 項目は、「英語でかかれた情報を収集する」 ( $g = 1.07$ )、「あるテーマについて論述文（作文・エッセイ）を書く」 ( $g = .93$ )、「作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける」 ( $g = .84$ )、「海外で起こった出来事や課題について考える」 ( $g = .70$ )、「本を一冊読む」 ( $g = .60$ )、「学習の中で多様なメディア（新聞・映像・音楽など）に触れる」 ( $g = .56$ )、「プロジェクト（探究・調査・実験・発表会）の計画を立てる」 ( $g = .50$ ) の 7 項目であった。ここから、DP 生・non-DP 生は双方ともに探究活動を行っているものの、DP 生に特徴的な学びの経験として、英語文献の収集や論述文の執筆、さらに文章や発表に対してフィードバックを受けている点が確認できる。

一方で、効果量は中程度であるものの、non-DP 生に特徴的な学びの経験に関する項目は「教科書を中心に学ぶ」 ( $g = .36$ )、「用語や出来事を暗記する」 ( $g = .33$ ) であった。よって、non-DP 生は DP 生と比較して、教科書の役割が強調される傾向にあり、用語の暗記を行うことが多いことが分かる。

【表 1-2】授業中の学習経験について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	n	<i>M</i>	<i>SD</i>	n		
先生の話から知識を得る	4.27	0.74	439	3.99	0.84	1338	0.34	***
教科書を中心に学ぶ	3.29	1.06	439	3.66	1.02	1337	-0.36	***
探究したい課題について問い合わせを立てる	3.88	0.94	439	3.41	1.02	1336	0.47	***
プロジェクト（探究・調査・実験・発表会）の計画を立てて	3.86	1.02	437	3.33	1.08	1335	0.50	***
図書室を利用して資料や文献を探す	2.88	1.29	438	2.47	1.14	1335	0.35	***

情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	4.16	0.94	438	3.75	1.04	1333	0.41	***
英語で書かれた情報を収集する	3.99	1.06	439	2.71	1.23	1336	1.07	***
自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	4.34	0.84	437	3.94	0.96	1334	0.43	***
本を一冊読む	3.55	1.23	439	2.77	1.33	1334	0.60	***
グループで協力して活動する	4.37	0.83	438	4.12	0.89	1335	0.29	***
海外で起こった出来事や課題について考える	3.94	0.99	439	3.15	1.16	1334	0.70	***
あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	4.12	0.96	439	3.01	1.27	1334	0.93	***
学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	4.14	0.94	438	3.54	1.12	1334	0.56	***
学習の成果を社会に発信する	3.02	1.16	439	2.55	1.16	1332	0.40	***
自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会)のよかつた点や課題を整理する	3.69	1.05	436	3.20	1.15	1335	0.44	***
一問一答の問題を解く	3.28	1.21	439	3.58	1.12	1336	-0.26	***
用語や出来事を暗記する	3.53	1.09	436	3.87	1.01	1333	-0.33	***
作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	4.22	0.92	438	3.26	1.21	1335	0.84	***

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s.: not significant

M=平均値、SD=標準偏差、n=回答数、g=効果量（Hedges の補正）、p=有意差

### ③課外活動について [質問 4]

質問 4 では、課外活動への意欲的な参加度について質問した。選択肢（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）に与えられた値をポイントとみなし、各項目の平均値を算出し、DP 生の特徴と両者に類似する傾向を確認するため、対応のない t 検定を行なった【表 1-3】。

その結果、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられたのは、7 項目中 5 項目であった。そのうち、特に効果量の値が大きかった ( $g > 0.5$ ) 項目は、「海外との交流活動への参加」 ( $g = .76$ )、「授業外でのプロジェクト・探究活動への参加」 ( $g = .67$ )、「ボランティア活動への参加」 ( $g = .67$ )、「留学（短期・長期・交換等）」 ( $g = .67$ ) であった。ここから、DP 生は留学やボランティア、探究活動等、課外活動に熱心な傾向があるようだ。

一方で、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられなかった項目 ( $p: \text{n.s.}$ ) は、「生徒会・委員会活動への参加」 ( $g = -.04$ )、「学校行事（体育祭・文化祭等）への参加」 ( $g = -.04$ ) であった。生徒会・委員会活動や学校行事への参加度合いは両者で差がないようである。

【表 1-3】課外活動について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	n	<i>M</i>	<i>SD</i>	n		
生徒会・委員会活動への参加	2.92	1.50	438	2.98	1.39	1337	-0.04	n.s.

部活動・クラブ活動への参加	3.43	1.56	437	3.70	1.47	1334	-0.18	**
学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	4.26	0.99	438	4.29	0.90	1333	-0.04	n.s.
授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	3.92	1.11	437	3.09	1.28	1332	0.67	***
ボランティア活動への参加	3.69	1.27	436	2.82	1.32	1335	0.67	***
海外との交流活動への参加	3.33	1.40	435	2.31	1.33	1331	0.76	***
留学(短期・長期・交換等)	2.81	1.63	437	1.87	1.32	1336	0.67	***

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s.: not significant

M=平均値、SD=標準偏差、n=回答数、g=効果量（Hedgesの補正）、p=有意差

#### ④放課後の学習時間と学習内容について [質問 5]

質問 5 は、学期中の平日放課後の学習時間に関して、1 日あたりの平均を質問したものである。時間は、「x 時間 y 分」のように尋ねたが、分析は分単位に換算して実施した。

DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられたのは 6 項目中 5 項目であった。そのうち、特に効果量の値が大きかった ( $g > 0.5$ ) 項目は、「1 日あたりの放課後の学習時間 (分)」 ( $g = .64$ ) であった。統計的有意差がみられた 5 項目のうち、「1 日あたりの放課後の学習時間 (分)」、「①高校の授業の予習、復習、課題 (問題を解くなど)」、「③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文」は DP 生の平均値が non-DP 生のそれより高かった。DP 生は non-DP 生より 1 日あたりの学習時間が長い傾向にあり、その傾向は、DP 生が学校の授業のための予復習、調べ学習、プロジェクト活動や課題論文のような探究的な学習に時間を長く充てるためであることがうかがえた。他方、「②塾・予備校の予習、復習、課題 (問題を解くなど)」、「④大学受験の準備 (過去問を解く、小論文を書くなど)」の 2 項目は、DP 生の平均値が non-DP 生のそれより低かった。non-DP 生は、塾や予備校での学習を含め、大学進学のための学習に時間を長く充てることがうかがえた。学習時間の違いもさることながら、DP 生と non-DP 生とを比較すると、行っている学習の目的や内容が異なることがうかがえた。

一方で、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられなかった項目 ( $p$ : n.s.) は、「⑤資格試験に向けた勉強 (英検、TOEIC、漢検など)」であった。資格取得のための学習に充てる時間の長さについて、両者の違いは確認されなかった。DP 生・non-DP 生ともに資格取得のために時間を割いているが、この項目からは、それぞれの生徒がどのような資格を取得しようとしているかはわからない。DP 生・non-DP 生の日々行う学習の目的や内容が異なっていたことをふまえれば、目的に応じて取得しようとする資格も異なることが推察され、さらに詳細な分析を行って検討する必要がある。

【表 1-4】放課後の学習時間と学習内容について

	DP 生			non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
1 日あたりの放課後の学習時間 (分)	145.3	78.02	436	99.31	69.75	1294	0.64 ***	

①高校の授業の予習、復習、課題（問題を解くなど）	92.97	104.75	434	66.84	139.90	1284	0.20	***
②塾・予備校の予習、復習、課題（問題を解くなど）	15.91	36.48	404	32.15	93.11	1212	-0.20	***
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	53.96	145.69	415	16.00	46.47	1178	0.45	***
④大学受験の準備（過去問を解く、小論文を書くなど）	7.57	26.57	395	15.12	70.57	1175	-0.12	*
⑤資格試験に向けた勉強（英検、TOEIC、漢検など）	27.44	57.01	414	23.72	113.31	1197	0.04	n.s.

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s.: not significant

*M* : 平均値、*SD* : 標準偏差、*g* : 効果量 (Hedges の補正)

##### ⑤高校の成績と英語運用能力に関する資格について [質問 6]

質問 6 では、まず、高校の成績に関して、各生徒がどのような位置づけにあると考えているかを、「上のほう」、「まんなか」、「下のほう」の 3 つの区分で質問した。【表 1-5】より、各区分について見ると、DP 生・non-DP 生ともに過半数が自身の成績を「まんなか」だと考えていた。しかし、それぞれの生徒について、残る約半数の生徒の分布を調べると、DP 生で「上のほう」と回答する生徒 (26.4%) が目立つに対し、non-DP 生で「下のほう」と回答する生徒 (30.1%) が目立った。カイ 2 乗検定と残差分析を行う必要があるが、DP 生と non-DP 生の成績に関する自己認識の違いは、自己肯定感等にもつながっている可能性があると考えられる。

【表 1-5】高校の成績について

	DP 生		Non-DP 生	
	%	n	%	n
上のほう	26.4	113	19.1	256
まんなか	55.6	238	50.7	679
下のほう	18.0	77	30.1	403

次に、取得している英語運用能力に関する資格について質問した。DP 生も non-DP 生も、過半数が英検（実用英語技能検定）を取得しており、高校生にとって英検がメジャーな資格であることがうかがえた。その他の資格について、DP 生は non-DP 生より、海外大学への進学に用いられやすい TOEFL や IELTS アカデミック・モジュールの受検率が特に高いことがうかがえた。海外大学への進学を念頭に置き、TOEFL や IELTS アカデミック・モジュールのような資格試験の受験に DP 生は向かいやすいのだろう。TOEIC やその他についても同様の傾向がみられた。「資格は取得していない」に目を移すと、DP 生より non-DP 生でそのように回答した生徒の割合が高かった。non-DP 生の場合、英語資格の事前取得を必要としない者がおり、別途大学進学時に用いる入試区分との関連を検討しなければならないが、non-DP 生は、一般選抜のように、各大学が入試として独自に実施する試験を用いようと考える生徒が DP 生より多いと考えられる。

【表 1-6】英語運用能力に関する資格について

	DP 生		Non-DP 生	
	%	n	%	n
英検（実用英語技能検定）	64.7	360	75.8	1077
TOEFL	9.5	53	2.7	39
TOEIC	5.4	30	2.6	37
IELTS アカデミック・モジュール	7.7	43	0.5	7
その他	7.0	39	3.8	54
資格は取得していない	5.6	31	14.6	207

最後に、受検している英語運用能力に関する資格試験のスコアについて質問した（表 1-7）。ただし、本表の解釈には注意を要する。TOEFL は iBT と ITP のスコアが、TOEIC は TOEIC、TOEIC Bridge、L&R と S&W のスコアが混在していることがうかがえるためである。そのため、ここでは IELTS アカデミック・モジュールに着目し、DP 生と non-DP 生の平均値を比較した。なお、IELTS アカデミック・モジュールについても、明らかに他の試験のスコアと思われる値（たとえば 60 や 750）や、生じ得ない値（0）を省いた。

平均値をみると、DP 生が non-DP 生より低かったが、統計的有意差は見られなかった。ただし、non-DP 生は、1344 名のうち 4 名の結果であることには注意を要する。たとえば高校 2 年次から海外大学への進学を強く志向するなど、IELTS アカデミック・モジュールを受験する理由があり、その対策を行っている生徒であることが推察される。また、高校 3 年次にかけて各試験の受験傾向やスコアも変動することも予想される。

【表 1-7】英語運用能力に関する資格のスコアについて

	DP 生			non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	n	<i>M</i>	<i>SD</i>	n		
TOEFL スコア	280.2	278.60	32	323.21	226.33	29	-0.17	n.s.
TOEIC スコア	766.3	192.51	29	540.69	292.46	29	0.90	***
IELTS スコア	6.33	0.88	40	6.63	1.11	4	0.33	n.s.

\*\*\*: *p* < .001, \*\*: *p* < .01, \*: *p* < .05, n.s.: not significant

*M*：平均値、*SD*：標準偏差、n=：回答数、*g*：効果量（Hedges の補正）、*p*：有意差

## ⑥能力獲得に関する自己認識について [質問 7]

質問 7 では、能力獲得に関する自己評価について質問した。これまでに継続的に調査をしてきた質問項目をベースとして、DP 生の調査対象者の増加とともに詳細な分析ができるなどを狙って設定した項目である。選択肢（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）に与えられた値をポイントとみなし、各項目の平均値を算出し、DP 生の特徴と両コースに類似する傾向を確認するため、対応のない *t* 検定を行なった【表 1-8】。

その結果、25 項目中 20 項目で DP 生・non-DP 生間の平均値に統計的有意差がみられた。その

うち、特に効果量の値が大きかった ( $g > 0.5$ ) 項目は、「『外国語（英語等）』に関する能力」 ( $g = .51$ ) である。ここから英語力やグローバル社会の一員として困難な課題へ取り組む力に対して自信をもっていることが分かる。

一方で、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられなかった項目 ( $p$ : n.s.) は、「自分の良心や社会の規範に沿って行動する力」 ( $g = .04$ )、「日本社会の一員としての自覚」 ( $g = .05$ )、「『国語（現代文、古典等）』に関する能力」 ( $g = .06$ )、「地域社会の一員としての自覚」 ( $g = .10$ )、「その他の教科（芸術、体育、専門等）に関する能力」 ( $g = .11$ ) であった。ここから、地域社会や日本社会、社会の規範に対応する能力に対する意識には差がないことが分かった。

【表 1-8】能力獲得に関する自己認識について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢	4.26	0.81	441	3.99	0.89	1348	0.31	***
人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識	3.48	1.03	441	3.26	1.04	1347	0.21	***
困難な課題に取り組む力	3.85	0.92	441	3.50	1.03	1345	0.35	***
他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力	4.07	0.94	439	3.89	0.99	1346	0.18	***
自分の良心や社会の規範に沿って行動する力	4.06	0.87	441	4.03	0.87	1348	0.04	n.s.
人や社会によって違った考え方や文化があることへの理解	4.47	0.76	441	4.26	0.81	1348	0.26	***
他者を尊重し、ともに行動する力	4.26	0.88	440	4.16	0.83	1348	0.13	*
予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	3.92	0.95	443	3.69	0.94	1347	0.24	***
自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	3.75	0.97	442	3.63	0.99	1345	0.12	*
自分の行動を評価し、次に生かす力	3.96	0.97	441	3.79	0.92	1347	0.18	***
問題が起きたときに解決する力	4.07	0.81	442	3.82	0.89	1346	0.29	***
自ら率先して行動する力	3.87	0.99	443	3.57	1.03	1342	0.30	***
自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力	3.64	1.08	443	3.33	1.13	1348	0.28	***
情報を処理し、活用する力	3.97	0.88	442	3.68	0.95	1346	0.31	***
地域社会の一員としての自覚	3.50	1.12	443	3.39	1.07	1349	0.10	n.s.
日本社会の一員としての自覚	3.46	1.14	441	3.41	1.08	1348	0.05	n.s.
グローバルな社会の一員としての自覚	3.91	1.04	443	3.37	1.11	1344	0.49	***
チームで協力して行動する力	4.24	0.84	442	3.98	0.92	1348	0.28	***
リーダーシップの能力	3.6	1.11	442	3.26	1.14	1345	0.30	***
「国語（現代文、古典等）」に関する能力	3.31	1.16	441	3.24	1.08	1347	0.06	n.s.

「社会科（歴史、地理、公民等）」に関する能力	3.54	1.05	442	3.39	1.06	1349	0.14	**
「数学」に関する能力	3.52	1.10	437	3.14	1.17	1347	0.32	***
「理科（物理、化学、生物、地学等）」に関する能力	3.53	1.08	443	3.17	1.10	1349	0.34	***
「外国語（英語等）」に関する能力	4.00	1.00	441	3.45	1.12	1347	0.51	***
その他の教科（芸術、体育、専門等）に関する能力	3.75	1.05	441	3.63	1.02	1340	0.11	n.s.

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s.: not significant

M=平均値、SD=標準偏差、n=回答数、g=効果量（Hedges の補正）、p=有意差

#### ⑦満足度について [質問 8]

質問 8 では、満足度について質問した。選択肢（「5：とてもそう思う」～「1：まったくそう思わない」）に与えられた値をポイントとみなし、各項目の平均値を算出し、DP 生の特徴と両者に類似する傾向を確認するため、対応のない t 検定を行なった【表 1-9】。

その結果、DP 生と non-DP 生の間で平均値に統計的有意差がみられた項目は、全 6 項目であった。そのうち、中程度の効果量 ( $g > 0.3$ ) が認められたのは、「学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している」 ( $g = .38$ ) であった。つまり、non-DP 生よりも DP 生の方が、学校の授業などを通じて現在の自分の学習に対する満足度が高い傾向が明らかになった。

【表 1-9】満足度について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>		
学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している	3.43	1.17	442	2.99	1.17	1348	0.38	***
これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた 今の自分の能力に満足している	3.27	1.20	443	2.95	1.21	1349	0.26	***
高校生活全体に満足している	3.82	1.07	441	3.67	1.10	1350	0.14	*
将来、学びたい分野について考えている	4.30	0.96	443	4.13	0.97	1348	0.18	**
将来、行きたい大学について考えている	4.19	0.05	443	4.05	1.02	1350	0.14	**
将来、やりたい仕事について考えている	4.06	1.15	443	3.92	1.14	1350	0.12	**

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s.: not significant

M=平均値、SD=標準偏差、n=回答数、g=効果量（Hedges の補正）、p=有意差

#### ⑧卒業後の進路と将来について [質問 9]

質問 9 では、卒業後の進路と将来に関する質問をした。希望する卒業後の進路について DP 生・non-DP 生別の結果をまとめた【表 1-10】。

国内大学への進学を第一希望とする DP 生の割合は 60% 程度である一方、non-DP 生は約 90% であった。DP 生のうち海外大学への進学を第一希望とする割合は約 36% で、第二希望とする割

合は約 33%である。一方、non-DP 生のうち海外大学への進学を第一希望とする割合は約 3%である。このように DP 生の半分以上が海外大学への進学を希望しているのに対して、non-DP 生は海外への進学を希望する割合が少なかった。

【表 1-10】希望する卒業後の進路について

	DP 生				non-DP 生			
	第一希望	第二希望	合計	n	第一希望	第二希望	合計	n
国内大学への進学	58.7%	24.8%	83.5%	370	89.7%	7.1%	96.8%	1308
海外大学への進学	35.9%	32.7%	68.6%	304	2.7%	10.3%	13.0%	176
未定・わからない	3.8%	8.4%	12.2%	54	4.1%	16.3%	20.4%	276
その他	0.9%	3.4%	4.3%	19	2.5%	3.6%	6.1%	82

次に、卒業後に進みたい分野について、「人文・社会系」、「理・工・農系」、「医・歯・薬・獣医学系」、「看護・保健・衛生系」、「教育・家政・福祉系」、「芸術・スポーツ系」、「その他」の 7 つの選択肢を示し、第一希望および第二希望を尋ねた。

その結果、「人文・社会系」を第一希望とする割合はどちらも 34%～35%であるが、「理・工・農系」を第一希望とする割合は non-DP 生の方が少し多い。「医・歯・薬・獣医学系」を第一希望とする DP 生の割合が多い一方で、「看護・保健・衛生系」を第一希望とする non-DP 生は DP 生の 2 倍程度となっている。これにより、DP 生の方が高い学力を求められる進学先を希望する割合が多いことが伺える。また、「教育・家政・福祉系」を第一希望とする non-DP 生は DP 生より 2 倍程度多い。

【表 1-11】卒業後に進みたい分野について

	DP 生				non-DP 生			
	第一希望	第二希望	合計	n	第一希望	第二希望	合計	n
人文・社会系	34.1%	14.9%	49.0%	217	35.3%	10.6%	45.9%	620
理・工・農系	17.6%	10.2%	27.8%	123	20.1%	6.9%	27.0%	365
医・歯・薬・獣医学系	12.9%	5.9%	18.7%	83	8.5%	6.3%	14.8%	200
看護・保健・衛生系	2.7%	5.4%	8.1%	36	5.3%	4.3%	9.5%	129
教育・家政・福祉系	5.2%	12.6%	17.8%	79	9.7%	13.0%	22.7%	307
芸術・スポーツ系	9.0%	10.2%	19.2%	85	7.5%	10.0%	17.5%	237
その他	16.3%	7.0%	23.3%	103	11.8%	3.6%	15.3%	207

## ⑨周囲の環境について [質問 10]

質問 10 では、生徒を取り巻く周囲の環境について質問した。選択肢（「5：とてもあてはまる」～「1：まったくあてはまらない」）に与えられた値をポイントとみなし、各項目の平均値を算出し、DP 生の特徴と両者に類似する傾向を確認するため、対応のない t 検定を行なった【表 1-12】。

その結果、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられたのは、13 項目中 9 項目で

あった。そのうち、効果量の値が大きい項目 ( $g > 0.5$ ) はみられなかった。中程度の効果量 ( $g > 0.3$ ) がみられたのは、「友達とよく海外の話題 (SNS、音楽など) を話したりする」 ( $g = .47$ )、「家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする」 ( $g = .40$ )、「周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる」 ( $g = .35$ ) であった。ここから、DP 生だけでなく、身の回りにいる家族や友人も、普段から海外の話題に興味関心があり、また英語が堪能である傾向がみられた。さらに、一緒に学ぶ友人に対して敬意や尊敬の念を抱いている傾向にあった。

一方で、DP 生・non-DP 生間で平均値に統計的有意差がみられなかつた項目 ( $p: n.s.$ ) は 4 項目あった。そのうち、「親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる」、「普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る」は、DP 生よりも non-DP 生の平均値が高かつた。ここから、家族の教育に対する姿勢や家庭の文化的資本 (教育環境) は類似傾向にあるといえる。

【表 1-12】周囲の環境について

	DP 生			Non-DP 生			<i>g</i>	<i>p</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	n	<i>M</i>	<i>SD</i>	n		
本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分 にある	4.66	0.60	438	4.49	0.73	1340	0.24	***
親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えて くれる	2.63	1.37	438	2.74	1.39	1339	-0.08	n.s.
普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見 る	3.09	1.42	438	3.19	1.40	1339	-0.07	n.s.
親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買 ってくれる	4.67	0.67	439	4.47	0.79	1340	0.27	***
勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助し てくれる	4.63	0.73	438	4.50	0.77	1339	0.18	**
普段の生活の中でお金に困っていると感じること がある	2.33	1.36	438	2.38	1.29	1340	-0.04	n.s.
親や保護者はあなたのやりたいことを応援してく れる	4.57	0.77	438	4.44	0.81	1338	0.17	**
親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれ る	4.29	0.97	438	4.22	0.97	1339	0.07	n.s.
周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる	4.28	0.88	438	3.95	0.99	1338	0.35	***
周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる	4.22	0.96	437	3.87	1.07	1338	0.33	***
家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話し たりする	3.58	1.32	438	3.04	1.39	1338	0.40	***
親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っ ている	2.73	1.68	439	2.24	1.47	1338	0.32	***
友達とよく海外の話題 (SNS、音楽など) を話したり する	3.95	1.23	439	3.32	1.39	1336	0.47	***

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , n.s.: not significant  
 $M$ =平均値、 $SD$ =標準偏差、 $n$ =回答数、 $g$ =効果量（Hedges の補正）、 $p$ =有意差

### 3) 今後の見通し

全体の調査デザインに基づき、今後の調査を実施していく。年々調査数やデータの整理・分析が煩雑になっていくことが予想されるため、生徒調査班のメンバーを拡充し、各自の役割を明確化していく。

また、教員調査班、大学調査班とコアメンバー会議等を利用して、情報交換・連携をしていく。特に、大学調査班の「修了生調査」との調査デザインの整理・検討をさらに進める。

## 2-2. 教員調査

教員調査（教員を対象とした調査）では、「①教員調査」及び「②英語開講（EMI）科目調査」を行う。

### 1) 調査の概要

教員調査の2024年度の主な調査内容は次の通りである。第一に、DP教科グループごとの教員の協働的な学びの場として「DP教員の学び合い」を実践した。第二に、事例校調査として、DP認定校を3校選定し、継続的な調査を行った。第三に、事例校調査と並行してEMI調査を行った。なお、参考として一条校ではないインターナショナルスクールのIB校にも訪問し、授業実践等の実態の把握を行った。

### 2) 進捗報告

#### 【DP教員の学び合い】

2024年8月～2025年1月にかけて、9科目に分かれて「DP教員の学び合い」をオンラインにて行った。合計37名のDP教員の協力を得た。

#### 【DP事例校調査】

2024年6月～2025年2月にかけて、事例校調査としてDP認定校3校を3度ずつ訪問し、授業の視察ならびに管理職・コーディネーター・その他の教員や教育委員会での聞き取りを行った。合計51名のインタビューデータを収集した。

#### 【EMI調査】

事例校調査と並行してEMIに関する合計15人のインタビュー調査を行った。

#### 【学会発表】

##### ◆日本国際バカロレア教育学会（2024年9月15日）

- ・「PYP教員の学び」調査プロジェクト進捗報告—2023年度国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究より—

発表者：原和久、佐々木恵美子、渋谷真樹、赤塚祐哉、木村光宏、梅津静子

- ・日本における英語による教科学習の広がり—国際バカロレアの推進による高校段階の学習状況の検討—

発表者：木村光宏、渋谷真樹、赤塚祐哉、原和久、佐々木恵美子、梅津静子

##### ◆オーストラリア教育学会（Australian association for research in education: AARE）（2024年12月4日）

- ・A Study on the Expansion of Subject Learning in English in the International Baccalaureate: An Analysis of the Diploma Program in Japan

Presenter: Mitsuhiro Kimura

以下に、今年度の成果報告を記す。

## (1) 「DP 教員の学び合い」研究報告

取りまとめ：赤塚祐哉（相模女子大学）

### 1. 問題の所在

IB 認定校における DP (Diploma Programme: DP) で指導する教員（以下、DP 教員）は、他の DP 実施校で指導する教員の指導観や授業実践の内容を互いに共有し合う場面が限られている。無論、学校内の取組状況は互いに把握できるであろうし、IB 機構が主催するワークショップに参加することで、最新の知見を得たり、他校の取組状況を把握したりすることはできる。しかしながら、IB 機構が主催するワークショップの頻度は限られている。加えて、DP 教員が実践の場でどのように IB の理念や教育方法を適用させようとしているのか、授業への適用にあたり、どのような工夫や葛藤、阻害要因等があるのかについて、学術的な検討が十分になされているとは言い難い。とりわけ、DP で実施されている教科・科目固有の指導の内実について、国内での知見は限られている。

以上の課題を鑑み、本研究では、DP 教員が互いの指導観や授業実践の内容を共有し、教科・科目固有の指導方法を振り返り、参加者同士が互いに対話を通して学び合うセッションを設定した。セッションを通して IB プログラムに対する指導観を授業でどのように適用しているのかについて明らかにすることとした。

### 2. 研究方法

DP のコアである CAS、TOK に加え、科目ごとにグループを設定した。それぞれのグループでは計 3 つのセッションをオンラインで開催し、それぞれのセッションを通して得られた教員らの語りを分析した。本研究の研究参加者は、全員が国内の一条校で DP を指導する現職の高等学校の教員である。本研究では、研究参加者に焦点（フォーカス）を当てたいテーマを示し、テーマに沿って自由に語ってもらう手法である「フォーカスグループディスカッション（Focus Group Discussion: FGD）」と呼ばれる研究手法（Greenbaum, 2000; Morgan, 1997）を採用した。FGD では、ファシリテーター役を用意することが通例であることから、それぞれのグループで一人ずつ割り当てた。なお、ファシリテーター役は教員調査班のメンバーが務めた。グループの分け方、参加者数、ファシリテーターは【表 2-1】に示す通りである。

【表 2-1】 グループ名と参加者数及びファシリテーターの割り当て

グループ名	参加者数（最大）	ファシリテーター
TOK グループ	5 名	梅津静子（筑波大学）
CAS グループ	3 名	渋谷真樹（日本赤十字看護大学）
グループ 1・言語 A 「文学」「言語と文学」	8 名	原和久（都留文科大学）
グループ 2・言語 B 「英語」	3 名	赤塚祐哉（相模女子大学）
グループ 3・個人と社会	3 名	梅津静子（筑波大学）

「地理」		
グループ 3・個人と社会 「歴史」	5 名	一家慶喜（筑波大学）
グループ 4・理科 「生物」	4 名	木村光宏（岡山理科大学）
グループ 5・数学 「解析とアプローチ」 「応用と解釈」	3 名	木村光宏（岡山理科大学）
グループ 6・芸術 「美術」「演劇」	3 名	佐々木恵美子（聖隸クリストファー小学校）

【表 2-1】では、コアとして TOK 及び CAS、各科目として言語 A、言語 B、地理、生物、数学及び芸術をグループとして設定したことを示している。参加者数（最大）とあるが、それぞれのセッションで欠席した参加者もいたことから、各グループの全セッションにおける最大の参加者数を表している。

セッションで用いた言語は「言語 B」のグループではすべて英語であった。「芸術」のグループでは、3名中1名が英語母語話者であったことから、1名は英語で、2名は日本語であった。それ以外のグループでは日本語を用いた。語りの分析は、「言語 B」及び「芸術」で得られた英語による語りを、日本語に翻訳したうえで行った。

本研究におけるファシリテーターの役割として、以下の 3 つの条件を介入条件として加えた。第一に、特定のテーマに対する参加者の意見・考えを深く掘り下げるため、自由な対話を通じて、オープンに意見や考えを表現できる場を創ることである。第二に、研究参加者は DP 教員であるという共通点はあるものの、地域の事情や学校文化が異なる事情を鑑み、多様な視点を分析対象とすることが不可欠であることから、全員が意見を出すような仕掛けづくりを行うことである。第三に、参加者の非言語としてのふるまいも分析対象となり得ることから、うまく言葉にならない（概念レベルではわかっているようなものなど）内容を、言語化することを支援することである。

セッションの実施方法は次の通りである。まず、グループごとに全 3 セッションを設けて、それぞれを「プレセッション」、「セッション 1」、「セッション 2」と名付けた。プレセッションは約 60 分、セッション 1 及び 2 はそれぞれ約 90 分とした。原則オンラインビデオ会議システムである Zoom を用いたリアルタイム形式とした。また、原則全員がそろってからセッションを開始することとしつつも、セッション開始後の途中参加も可とした。さらに、セッションに急遽欠席する参加者がいた場合でも、そのまま当該セッションを実施可とした。それぞれのセッションで焦点（フォーカス）を当てた内容は【表 2-2】に示す通りである。

【表 2-2】各セッションの目的と内容

セッション名	目的	焦点（フォーカス）を当てた内容
プレセッション	参加者同士のラポール形成と ・ラポールの形成	

(1回目)	「学び合い」の趣旨・概要	・参加者同士を互いに知り合う
セッション1	IB プログラムに対する指導観・ IB の教育理念の授業で適用につ いての共有	・指導上の工夫や葛藤、悩み ・IB の教育理念の実現に向けた学習・指 導上の工夫
セッション2	IB プログラムでの教科における 実践の共有	・参加者による実践事例の具体
(3回目)		

セッション1において、これまでの経験や指導上の工夫、葛藤、悩み等の共有したことを探している。加えて、IB プログラムの特徴である「指導の方法 (Approaches to teaching: ATT)」や「学習の方法 (Approaches to learning: ATL)」を支える「本質的な問いに基づく逆向き設計のカリキュラム」、「概念型学習」、「協働学習」<sup>1</sup>等を実現させるために、どのような授業を開催しているのか、といったことに焦点を当てた。セッション2では、研究参加者がそれぞれの授業において、どのような実践を行っているのか、数名による実践事例を共有した。その際、必要に応じて年間指導計画（ユニットアウトライン）や単元の指導計画（ユニットプランナー）、本時の展開、教材等を互いに持ち寄って議論することに焦点を当てた。ただし、本研究の分析対象は参加者らによる語りであり、参加者により提示された資料そのものについては、分析の対象とはしていない。また、「芸術」については、研究協力者の都合上、期間内でのセッション2の開催が困難であったため、セッション2をデータ分析の対象から外している。

### 3. 分析方法

本研究では、語りを2段階のプロセスによって分析した。第一に、グループごとに得られた語りを定性的に分析した（第1段階：グループごとの語りの分析と考察）。第二に、グループ全体の語りを集約し、全体的な傾向を明らかにするため、計量テキスト分析に分類される樋口（2014）により開発された KH Coder (Version 3. Alpha) を用いた。テキスト分析の対象物はそれぞれのセッションにおいて収集された音声データである。「言語B」の全部と「芸術」の一部の語りは英語で行われたため、当該科目の語りは日本語に翻訳したうえで分析を加えた（第2段階：グループ横断的なまとめ）。

分析の方法として KH Coder を用いた理由は、手作業による処理を排除し、データの統計処理が自動化され、統計的に処理することにより、信頼性と妥当性が向上した点が挙げられる（樋口 2014）これまで多くのテキスト分析は手作業により行われていたことから、データ分析及び処理が恣意的あるいは主観的であるともされていた。そこで本研究において KH Coder を用いて研究参加者の全体的な傾向を捉える分析ツールとして適切であると判断した。

### 4. グループごとの語りについての分析結果と考察

<sup>1</sup> ) 「本質的な問いに基づく逆向き設計のカリキュラム」：単元等の到達目標を念頭に置き、評価活動や核となる問い合わせ、学習活動を計画する。各単元や各授業において、核となる問い合わせを設定し、問い合わせを中心しながら授業が駆動される。「概念型学習」：単元や各授業に通底する概念を設定し、概念への理解を多面的・多角的に深める学習「協働学習」：課題解決等のためにグループによる対話を伴う学習

第一に第1段階の分析プロセスである、グループごとの語りから得られた分析を報告する。第二に、第2段階の分析プロセスである、グループ全体の語りを集約し、全体的な傾向を明らかにする。

## ①TOK グループ実施報告

担当：梅津静子（筑波大学）

### 1. 概要

TOK グループでは【表 2-3】の通り、フォーカスグループディスカッション（FGD）の手法を用いた調査を実施した。また、調査対象者の属性は【表 2-4】の通りである。

【表 2-3】TOK グループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
プレセッション	2024 年 8 月 28 日	オンライン	5 名
セッション 1	2024 年 9 月 30 日	オンライン	4 名
セッション 2	2024 年 11 月 18 日	オンライン	5 名

【表 2-4】TOK グループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当科目	DP 認定校での経験年数
A 教諭	国公立	TOK、DP 化学	5 年以内
B 教諭	国公立	TOK、MYP 美術	5 年以内
C 教諭	私立	TOK、DP 歴史	3 年以内
D 教諭	私立	TOK、DP 物理	5 年以上
E 教諭	私立	TOK、DP 化学	3 年以内

### 2. セッションを通しての成果と考察

#### 1) TOK の運用形態

各校で TOK のさまざまな運用形態がみられた。まず、TOK 担当の運用方法がさまざまであった。TOK 担当が一人の学校、同時に複数人が担当する学校、年間でも流動的な学校等があった。シラバスの運用順も学校によって異なる。TOK の主な構成要素はコアテーマ、選択テーマ、知識の領域（AOK）、評価（TOK 展示と TOK エッセイ）であるが、TOK 展示を早い段階で行う学校もあればそうではない学校もあった。DP に加えて MYP も導入している場合は、TOK 展示と MYP のパーソナルプロジェクトの発表を同時に開催する学校もある。また、DP コースでない生徒に開かれた TOK を実践する学校もあった。

#### 2) 実践の工夫

TOK を担当する教員には多くの実践上の工夫があったが、本稿では 2 点に絞って紹介する。第一に、【生徒の教員への期待をかわす】ことである。正解のない TOK において、生徒が答えを求めてくる傾向については複数の教員から発言があり、教員はそれに対応しない工夫（ひたすらうなづく、分からぬ様子をみせる、質問で返す）をしていた。

第二に、【具体と抽象を行き来するトレーニング】である。この実践例としては、具体的な人名から抽象的な言葉を作る、あるいはその逆の作業を生徒が書きながら練習することや、生徒にとってもなじみのある MYP の探究ステートメント（単元で扱う概念的理解を一文で示したもの）

を例に出し、抽象化は探究ステートメントを自分たちで作成するイメージであることを伝える等の工夫である。これらを通して、教員は生徒が自分の頭で思考する・できるように導いているといえる。

### 3) TOKにおける評価

TOKの評価の特徴のひとつは、総合的印象評価である。これはウィギンズとマクタイの言葉で言い換えれば「全体的(holistic)」な評価であり、「観点別(analytic)」な評価とは異なる(Wiggins & McTighe 2005=2012)。多くのDP科目は、評価規準(criteria)が設けられているため、観点別の評価といえる。総合的印象評価は、一人の採点者が一貫した基準を保つことが難しいというデメリットがある(IBO 2019)。しかし、観点別の評価が最終的な総合点に採点者間で開きができるリスクがある(観点ごとの差が結果的に積み重なって大きな差になるリスクがある)のに対し、総合的印象評価は採点者間の成果物の総合結果を一致させていくことができる(IBO 2019)。とはいえ、実際に採点をする教員は、自身の印象に委ねられる状況に難しさを感じている発言が複数あった。この困難は、答えのないTOKの授業内容はもとより、観点別の評価ではない評価設計をもつTOK教員特有の悩みといえる。

なお、DPの最終成績の満点は45点であるが、TOKはコアのひとつであり、同じくコアのEEの結果との組み合わせで3点満点となる。各科目が7点満点であることを踏まえると「コアなのに3点」と捉える生徒や教員もいた。むろん点数がすべてでは無いものの、そこに割く時間やエネルギーを考えると点数設定に疑問を感じるという。コアを3点に設定する背景には、評価が普段の学びに与える影響(Backwash effect)を正なものにとどめたい考え(IBO 2019)があると考えられるが、3点であることが負に働く可能性もあることが分かった。一方で、点数等の構造に無頓着に取り組んでいる様子の生徒に、あえて点数の話をし、タイムマネジメントを促す教員がいた。ATLのひとつである自己管理スキルの育成という点ではそうしたサポートも必要とも考えられる。

## 3. まとめ

DPの顔といつても過言ではないTOKは、最終的な評価を考慮しつつ、学びの真正性を保つべくカリキュラムデザイナー、そして日々のファシリテーターとして工夫を凝らす教員によって支えられている。本稿で記載できなかった教員の取り組みについては稿を改めて紹介していく。

## ②CAS グループ実施報告

担当：渋谷真樹（日本赤十字看護大学）

### 1. 概要

CAS グループは、IBDPにおいて CAS を担当し、CAS コーディネーターでもある教員 3 名を対象とし、【表 2-5】のようにオンラインにて「教員の学び合い」セッションを行った。参加者の属性は、【表 2-6】の通りである。

【表 2-5】 CAS グループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
プレセッション	2024 年 8 月 28 日	オンライン	3 名
セッション 1	2024 年 9 月 17 日	オンライン	3 名（1 名途中参加）
セッション 2	2024 年 12 月 23 日	オンライン	3 名

【表 2-6】 CAS グループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	担当科目	DP 認定校での経験年数
A 教諭	国公立	CAS、TOK	10 年以上
B 教諭	私立	CAS、TOK、EE、歴史	5 年以内
C 教諭	私立	CAS	3 年以内

### 2. セッションを通しての成果と考察

#### 1) 生徒の自律的学習を支える教員の関与の仕方

CAS は、生徒が主体的に行う体験型の学習である。しかし、CAS の要件を示して生徒に任せるだけでは、さまざまな不具合が生じる。たとえば、非現実的な量やレベルの活動をしようとしたり、教科の課題が済んでいないのに CAS ばかりに注力したりする生徒がいる。また、生徒間でもめて CAS プロジェクトが実施できなくなることもある。

こうした事態に対して、経験の長い教員からは、より教員が関与して、周到な戦略を練ることが提案された。どの学校でも DP が始まる前に、DP コーディネーターが中心となって、生徒と保護者に IB の理念やカリキュラムなどを説明している。その際に、CAS についても十分に説明することが必要である。CAS は有意義であるが、生徒が CAS だけに逃げ込むことがないように、DP の学び全体の中でバランスを取ることが重要である、と述べられていた。

IB のガイドブックでは、定期的に生徒の学習の進捗状況を確認することになっている。毎週コア科目についてサポートする時間を設けている学校や、マネージバックへの生徒の入力を CAS コーディネーターが確認する学校、アドバイザーとの面談を行っている学校があった。DP 担当教員以外にもアドバイザーを依頼し、1 教員あたり 3 人程度の生徒を担当している学校では、週 1 回 10 分程度、昼休みや放課後に生徒がアドバイザーと面談することを薦めていた。面談の際には所

定に記録用紙を用い、DP で定める「学びの成果<sup>2</sup>」に合わせて学習状況を確認していた。CAS コーディネーターが 20 人ほどの生徒を担当している学校では、業務負担が大きくなっていた。

時間的な計画性も重要である。内部評価など教科の課題が立て込んでくる前に CAS プロジェクトを終わらせるように、他の課題とバランスを取りながら、タイムマネジメントするように生徒に促す必要がある、という意見が複数あった。そのために、単に生徒に任せきりにするのではなく、かといって、すべてを教員が指示するのではない指導について話し合われた。たとえば、教員が長期的視点で指導計画を立て、年間計画の中に CAS の成果を発表する行事などを組み込むことが有効である。もともと存在していた文化祭や授業参観日などに CAS プロジェクトの発表を重ねて、他の学年の生徒（DP 以外の生徒を含む）や保護者にも公開している学校があった。適当な時期に CAS プロジェクトについて発表するというゴールを設定することで、生徒の学習を進めることができる。上の学年の生徒の成果報告を下の学年の生徒に見学させることで、CAS をどのぐらいの規模でどのように行うのかを具体的に伝えることもできる。

また、年間を通して学年を超えた DP 生のショートホームルームを設定して、生徒同士が学び合える環境を設定している学校もあった。CAS の活動が終了するたびに振り返りをさせ、証拠物としてポスターを作成させて、廊下に掲示している学校もあった。こうした工夫によって、生徒同士でよい刺激を受けたり、学び合ったりできるようにしていた。

## 2) 他教科等との関連や教員間の役割分担

コア科目である CAS は、DP 取得の必須要件であるため、どの学校でも生徒が確実に実施できるように工夫をしていた。たとえば、学校説明会などのイベントでの仕事や、部活動などを CAS に関連させる学校があった。大学見学などを通して進路を探ることも、要件によっては CAS になり得る。

CAS と進路指導との関連のさせ方についても話し合われた。特に私立大学では、DP のコア科目への注目度が高いという。そこで、志望学部学科によって CAS の内容を変えるなどして、総合型選抜に備えさせている学校もあった。

DP の探究型の学習は、現行の学習指導要領の方向性と合致しており、先取りしているという意見があった。CAS は「よくできたシステム」であり、取り組むことで探究型の学習につなげていくことができるので、DP 認定校ではない学校にも参考になるという意見もあった。探究型の学習や体験学習に力を入れていた学校では、DP 認定前から DP のコア科目に類似の活動をしていた場合もある。そうした学校では、学校全体で従来の教育と CAS との連続性が意識されていた。一方、従来型の日本の大学入学試験対策に注力してきた学校では、CAS に代表されるような課題探究型の学びをする IB コースと、より知識の習得に力を入れる IB 以外のコースとで対立が生まれることもあるとのことだった。

人事異動が多く、DP 教育に関する継承が難しい学校もあった。ひとりの教員が複数のコア科目

---

<sup>2</sup> CAS では、以下 7 つの「学びの成果」を設定している。<sup>①</sup>自分の長所と成長すべき点を認識する、<sup>②</sup>課題に挑戦し、その過程で新しいスキルを習得したことを実証する、<sup>③</sup>CAS 活動を計画し開始する方法を示す、<sup>④</sup>CAS 活動を継続し、やり遂げる粘り強さを示す、<sup>⑤</sup>他の人と共に働くスキルを示し、その意義を認識する、<sup>⑥</sup>グローバルな意義のある問題への取り組みを示す、<sup>⑦</sup>選択と行動の倫理を認識し、考察する

を担当するなど、いくつもの業務を担っている場合には、その教員だけに頼りすぎて、持続可能性が低くなっていることもあった。異動などに備えて、現在の担当者以外にも引き継げるような仕組みが必要であることが話し合われた。

### 3. まとめ

本グループの参加者の中には、4月から突然 CAS を担当するようになった教員も、CAS の経験の長い教員もあり、年間スケジュールの立て方や学習状況の確認の仕方などについて、実践的な話し合いがなされた。経験の長い教員は、IB 教育を普及させるため、知識や経験を積極的に共有してくれた。新任の教員は、こうしたセッションを通して経験のある教員からの学びが大きいと語っていた。

### ③グループ1・言語A「文学」「言語と文学」実施報告

担当：原和久（都留文科大学）

#### 1. 概要

グループ1・言語A「文学」「言語と文学」（以下、言語Aグループ）では、IBDPにおいて「言語A：文学」や「言語A：言語と文学」を担当する教員8名（※）を対象とし、【表2-7】のようにオンラインにて「教員の学び合い」セッションを行った。ただし、プレセッション、セッション1、セッション2のそれぞれの回において、公務や体調不良などのやむを得ぬ理由により欠席者があったため、各回の参加者の実数は7名となった。参加者の属性は、【表2-8】の通りである。

【表2-7】言語Aグループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
プレセッション	2024年9月10日	オンライン	7名（1名欠席）
セッション1	2024年9月24日	オンライン	7名（1名欠席）
セッション2	2024年10月29日	オンライン	7名（1名欠席）

【表2-8】言語Aグループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当科目	DP認定校での経験年数
A教諭	国公立	言語A（文学／言語と文学）	3年以内
B教諭	国公立	言語A（文学／言語と文学）	3年以内
C教諭	私立	言語A（文学／言語と文学）	3年以内
D教諭	私立	言語A（文学／言語と文学）	3年以内
E教諭	私立	言語A（文学／言語と文学）	3年以内
F教諭	国公立	言語A（文学／言語と文学）	5年以内
G教諭	私立	言語A（文学／言語と文学）	5年以内
H教諭	私立	言語A（文学／言語と文学）	10年以上

#### 2. セッションを通しての成果と考察

##### 1) セッション1：「教授法」と「教育観」の変化について

セッション1では、主にIB教育導入後の教授法や教育観の変化をテーマとして、フォーカスグループディスカッションを行った。参加者の勤務地（都市／地方）や教員歴（およびIB教員歴）はさまざまであったが、現在参加者8名が勤務するIB認定校は、すべて国内の一条校（国公立・私立）であり、全員がIB教員となる前は日本の通常の学校で「国語」の授業を担当していたことから、ディスカッションでは、IBの文学・言語教育と日本の国語教育の違いに焦点を当てながら振り返りと意見交流を行った。

まず、「教授法」についてだが、一般的に日本の国語教育においては、大学受験を念頭に教科書に沿って小説や説明文の内容読解を中心に授業が進められている印象を参加者は持っていた。実際、「IB認定校に勤務するまでは生徒が入試などにおいて『正しい』答えを導きだせるように自

らも一問一答の講義形式で指導してきた…」といった声が参加者の多くから聞かれた。一方、参加者の意見を総合すると、IB の文学・言語教育では、文学作品・非文学作品を問わず「文章（テキスト）の中で使われている表現技法や文体の工夫など、書き手が意図した（もしくは意図していない）効果や主題について生徒に分析させ」、「生徒間でディスカッションさせ」ることが多く、「協働的な学びを通して作品への概念的理解を深めさせる」ことが重視されている。DP の最終試験でも、異なる年代に書かれた未知の文章を独自の観点から比較分析させるような問題が出されることから、参加者たちの教育実践においても、作品やテーマの読解のみならず、「表現技法などのテキスト分析やその作品が書かれた時代背景の理解などにかなりの時間を割いて試行錯誤を繰り返しながら指導している」ことが分かった。また、IB のやり方に慣れない生徒のために「文章ではなく、写真、イラスト、ポスターなどを使用」して考えさせたり、「何でもよいので、疑問に思ったことをもとに自分で『問い合わせ』を考えさせて」みたり、「段階的に少しづつ、自分で考えたり、意見を言ったり、『問い合わせ』を深めたりできるように訓練」したりするなど、さまざまな形成的な評価活動を通して、生徒たちが IB のやり方で主体的に学びに取り組むための基礎的資質や能力を高めようと奮闘している姿が、参加者の発言を通してあらためて明らかになった。

また、教授法を支える参加者の「教育観」についても、参加者は全員 IB 教育に意義を見出しており、「生徒全員を正解に導く教育」ではなく「生徒一人ひとりの思考を重視」した教育への転換をめざして教育活動に取り組んでいることが分かった。IB 導入後の変化として、参加者からは、「（以前は）こう書いてあるから、筆者の言いたいことはこうだよねっていう風に、かなり限定的に読みを提示して授業を展開することが多かった」が、IB 導入後は「生徒 1 人 1 人の思考をすごく大切にするものが IB なんだなと感じている」といった意見や、「（以前は）整合性のある説明をするのが授業だと思っていた」が、導入後 IB を実践する中で、「それぞれの生徒が一つの作品に対して様々な角度でのものを見たり、自分なりの問い合わせを立てたりすることが大事だとわかつてきたり」、「（先生の考え方を押し付けるのではなく）生徒の中で、生徒自身が整合性を持って説明できることが大事だと今は考える」などといった発言が聞かれた。また、「（自分は）教科書の本文で言っていることをまとめて伝えるだけの授業をしていた」かもしれないこと、また「生徒が自分の意見をもたなくともいいような形で授業を展開していた」ことに違和感を覚えるようになった経緯を話してくれた参加者もあった。参加者たちの発言からは、生徒一人ひとりの主体的な学びと思考の深化を重視し、自身の教授法や生徒たちの学びの質を高めようと努力する様子が窺われた。

## 2) セッション 2

セッション 2 では、セッション 1 で明らかになった IB 教育の特徴を受けて、3 名の参加者に作成した指導案や教材を持ち寄っていただき、自身の授業実践について概要を発表していただいた後、疑問点などについて参加者全員で意見交流を行った。

3 つの授業実践は、①差別を描いた小説や翻案作品である映画を活用して社会課題や私たちにできることは何かについて考えさせる探究単元、②社会風刺を特徴とする漫画作品やグラフィックノベルを通して生徒自身のアイデンティティについて考えさせる探究単元、③松尾芭蕉の古典文学とテレビ CM を組み合わせ「旅における空間的・時間的な視点」について考察させる探究単元、の 3 つである。①②③の授業実践とも、文学・非文学作品を通して現代の社会課題やグローバルな問題につなげることで、生徒の目を世界に向かせる教育的工夫がみられた。また、いず

れの実践においても、ジャンルの異なる複数の文学・非文学テキストを単元内で比較分析させたり、共通するテーマや作者の意図するメッセージについてディスカッションや協働学習をさせながら、生徒たちにより高次の思考力を身に付けようとさせており、日本の新学習指導要領が目指す「主体的、対話的で深い学び」を具現化する授業実践が行われていることが分かった。

これらの探究単元は、IB が作成したものではなく、単元で取り扱う作品群の選択から形成的評価や総括評価課題のままですべて教員が主体的に策定しており、そこが教科書を中心に進行する日本の国語の授業との大きな違いであり IB の醍醐味であると同時に、IB 教育に新たに関わる教員にとっての難しさであると言えるだろう。

発表後の質疑応答では、「作品体系の構成の仕方」、「漫画は、文学か非文学か」、「非文学作品を分析するための参考文献はあるか」、「どの程度、またどのようなタイミングで生徒に〈概念〉について考えさせるか」など、実践的な意見交換も行うことができた。

### 3. まとめ

本セッションは、参加者が IB を教えるようになってからの教授法や教育観の変化について振り返り、参加者同士が共有することを通してお互いに学び合う機会を創出することを主な目的として行われた。学び合いを通して、IB の文学・言語教育と日本の国語教育の教育理念や教育方法の違い、具体的な授業実践の方法、IB 教育の教員への影響の一端などを明らかにすることことができた。また、実際にどのような授業実践をしているかお互いに紹介しあうことで、授業をする上での葛藤や工夫、悩みなどについても意見交換することができ、調査者にとっても参加者にとって大変有意義な学びの時間となった。

#### ④グループ2・言語B「英語」実施報告

担当：赤塚祐哉（相模女子大学）

##### 1. 概要

グループ2・言語B「英語」（以下、言語Bグループ）では、【表2-9】の通り、フォーカスグループディスカッション（FGD）の手法を用いた調査を実施した。また、調査対象者の属性は【表2-10】の通りである。

【表2-9】言語Bグループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
プレセッション	2024年10月18日	オンライン	3名
セッション1	2024年11月29日	オンライン	3名
セッション2	2024年12月3日	オンライン	3名

【表2-10】言語Bグループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当科目	DP認定校での経験年数
A教諭	私立	言語B（英語）	5年以内
B教諭	私立	言語B（英語）	5年以内
C教諭	私立	言語B（英語）	3年以内 <sup>1)</sup>

注1) ただし、他のIBプログラムでの指導経験は10年以上。

##### 2. セッションを通して得られた語りと考察

セッションでは、参加者の経験やIB教育に携わるようになった経緯を共有した。加えて、参加者らが所属する学校の英語教育における課題や目標などを共有した。特に学習者の英語熟達度とDPで求められる学習の到達目標との落差についての課題が語られた。以下、それぞれのセッションで語られた内容を整理とともに、考察を加える。語りの括弧内は筆者により追記されたものである。

###### 1) 指導方法上の工夫—DPの教育理念と英語熟達度

セッション1では、DP履修者に求められる英語熟達度について主な内容として取り上げられた。参加者らの語りからは、DPの理念と現実の授業運営との落差に苦慮しつつも、教育方法を工夫していることが語られた。C教諭は「理想としては生徒に知識だけでなく批判的思考やリーダーシップ（の在り方）を学んでほしいが、実際の最終試験対策と（授業内容が）乖離している部分がある」と語り、IBプログラムで掲げるATLやATTといった指導・学習観の実現への苦労が語られた。A教諭は「生徒の（英語熟達度の）レベル差が大きく、（欧州言語参照枠CEFR）A2程度の生徒に批判的思考を英語で要求することは難しいと感じことがある」と言及し、英語熟達度が低い層への支援が喫緊の課題であることを語った。他方、B教諭は「授業内の共同学習やペアワークを通じて学習者同士の対話を促し、IB学習者像にある『探究する人』や『コミュニケ

ーションができる人』の育成に努めている」と語った。ただし、限られた授業時数で生徒を能動的に学習させる困難さも語る。C 教諭は解決策として「週ごとにメディアやジャーナルに関する課題を与え、自分で調べて考えてから授業に臨ませる」といった取り組みを紹介し、授業時間外の学修も活用して、英語熟達度の向上と批判的思考の育成の両方を図っていることも語られた。

## 2) 評価づけと学習者へのフィードバックの工夫

セッション 2 では、参加者たちの授業実践と具体的な指導方法を共有した。B 教諭は、ライティング課題である「レター・トゥ・ザ・エディター（意見投稿文）」の指導例を紹介した。指導では、良い例と不十分な例を生徒に比較させたり、ヴィジブル・シンキング・ルーティン（Visible Thinking Routines）と呼ばれる指導法を紹介し、学習者らが「見る（See）、感じる（Feel）、考える（Think）、疑問に思う（Wonder）」ことを感じさせたりしながら、学習者の意欲を喚起している実践例が紹介された。加えて、ライティング課題を課す際には、生徒同士で互いにコメントし合い、「気づき」を通してライティング技能を向上させる取り組みが大切であることが語られた。

A 教諭は DP が始まる前の学年である第 1 学年においては、40 名超で授業を実施していることを報告し、学習者が毎授業、短めの振り返りを記入し、教員が要点を抑えたフィードバックを行うことで学習意欲を喚起させている点が語られた。加えて、ループリックを作成し、プレゼンテーションやリフレクションの観点を「21 世紀型スキル」と絡めながら評価する等、学習者が自らの成長を感じ取れるようにする工夫の重要性が語られた。

C 教諭は、教材作成に時間的制約があるため、「Teachers Pay Teachers」といった教員向けのウェブ資料を閲覧し、そこで入手した資料を生徒の実態に合わせて改変して活用している事例を示した。例えば、新聞記事の書き方を扱う際には、見出しの表現やバイアスの有無を多角的に学ばせる課題を設定し、生徒が実際の見出しを比較しながら自力で「良い記事」の条件を導き出せるような指導上の工夫が語られた。

## 3. まとめ

セッションを通して、IB の教育理念（ATL／ATT や概念理解など）を実践の場に落とし込むには、リアルな世界との結びつきや対話型の学習活動をより一層増やす必要がある、という点が語られた。加えて、学習者同士によるピアレビュー、要点を絞った教員からフィードバック、ループリックを用いた評価規準の明確化などが指導上の工夫として語られた。参加者らの共通した課題は英語学習者の現状の英語熟達度であり、DP の教育理念を実現させるためには国内の実態に合わせた指導方法上の工夫が求められることが示唆された。

## ⑤グループ3・個人と社会「地理」実施報告

担当：梅津静子（筑波大学）

### 1. 概要

グループ3・個人と社会「地理」（以下、地理グループ）では、【表2-11】の通り、フォーカスグループディスカッション（FGD）の手法を用いた調査を実施した。また、調査対象者の属性は【表2-12】の通りである。

【表2-11】地理グループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
プレセッション	2024年8月20日	オンライン	3名
セッション1	2024年9月4日	オンライン	3名
セッション2	2024年12月4日	オンライン	3名

【表2-12】地理グループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当科目	DP認定校での経験年数
A教諭	国公立	DP地理	3年以内
B教諭	国公立	DP地理	10年以内
C教諭	国公立	DP地理	3年以内

### 2. セッションを通しての成果と考察

#### 1) 地理教員からみるIBの特徴とその実践

本稿では、A～C教諭の地理に関する語りに着目し、その内容を以下にまとめる。

地理をはじめ社会科は問い合わせと資料を大事にする科目であると考えてきたが、DP地理においても同様である（A教諭）。IBの授業では、生徒が答えを探し、見つけ、さらに作り上げるプロセスを踏み、とにかく生徒主体を大事にする（A教諭）。そこでは、生徒が考えを言語化し主張することが重視されており、それが評価と一体となっている点に特徴がある（B教諭）。日本の学習指導要領でも構成主義的な学びが求められているが、IBの評価規準の方が学習指導要領の3観点よりも明確である。教授内容については、地理総合とDP地理は親和性が高く、試験問題に類似したもののがみられる。ただ、地理探究と比べDP地理の方が専門的なところまで踏み込む。DP地理は地学や化学等の理科で扱うような内容が含まれ、面白い（C教諭）。地理総合の授業を行う際は、DP最終試験や内部評価（IA）の手法を取り入れ、そうすることでDPに進まない生徒のMYPでの学びとの接続も意識している（B教諭）。DP地理では、公民、地理、歴史、経済、政治すべての要素を踏まえて社会課題を考えるために、地理の網羅する範囲は広いと改めて思うようになった。また、地政学要素が強い点も特徴である（A教諭）。DP地理での手法と、これまで教員が大事にしてきたことの親和性も語られた。また、持続可能な開発のための教育（ESD）等の枠組みも、目指す使命は同じであると感じる（A教諭）。

## 2) DP 地理の面白さや難しさ

DP 地理の面白さとしては、事例の詳しさがある（B 教諭）。DP 地理では理論が最初に登場し、その理論に当てはめながら、事例を教員と生徒が協働して検討していく過程が楽しく、理論を用いることで思考の深まりが起こる（C 教諭）。一方、日本の地理では、理論は簡単に紹介されるだけのことが多い。難しさとしてファシリテーションスキルが挙げられた。授業では生徒の議論に活気がないこともあり、ファシリテーターとしての力量形成をしたい（C 教諭）。授業を経験する中で、教員は事例の引き出しを増やし、さらには個々の生徒に合った事例の提示が可能になっていく。そのためファシリテーターとしての力量形成は時間を要するものであり、1 年もすれば力がついてくる（B 教諭）。地理の議論は材料がないと難しいため、事例は重要であり、概念と具体例はセットで考える（A 教諭）。また、最終試験のエッセイ問題そのものが議論を白熱させるヒントになる。なぜなら地理のエッセイでは問い合わせに対し、根拠を示し物事の両面を書かなければいけない設計になっているからだ（A 教諭）。

## 3) DP 地理の改善点

第一に、訳語について述べたい。地理分野は、日本語よりも英語の方が特定の事象を示した専門用語が多い（例：Emigration や Immigration を訳すと「移民」）。また、論文等でも訳が揃っていない単語が多くある。こうした定訳のない専門用語を、どこまで DP 地理の中で教え表現していくかを検討する必要がある。特に、最終試験では点数を左右しかねない例も共有されており、今後の改善は喫緊の課題である。第二に、日本語の教材の不足である。授業作りで外国語の教材を参考にする話も聽かれ、教員が、日本語に限らずさまざまなサイト等から授業のヒントを得ることが、生徒の視野を広げている。その一方で、ローカルの文脈に理論を応用させる力を養うためにも、日本語教材を今後充実させる必要がある。

## 3. まとめ

以上、地理グループの教員同士の学び合いから得られた地理に特化した語りを整理した。これまで重視してきた教授法との親和性についての語りや、地理総合との類似点の語りも多く聽かれた。DP 地理は日本の学習指導要領との親和性が比較的高い科目である可能性が示唆される。さらに、DP 地理で扱われる詳細な事例や、理論を用いて思考する授業が、DP コース以外の地理の授業を充実させる様子も聽かれた。教員が DP と学習指導要領の両方の地理を担当することで、双方の生徒に刺激的な学びが検討されている。一方で、訳語の問題という DP 地理特有の課題も生じている。世界の事象を学ぶために、日本語に縛られず資料にアクセスする伸びやかさをもちつつ、日本語による DP 地理を充実させていく仕組みづくりが求められているといえる。

## ⑥グループ3・個人と社会「歴史」実施報告

担当：一家慶喜（筑波大学）

### 1. 概要

グループ3・個人と社会「歴史」（以下、歴史グループ）は、IBディプロマプログラムにおいて歴史を担当する教員5名を対象とし、【表2-13】のようにオンラインにて「教員の学び合い」セッションを行った。参加者の属性は、【表2-14】の通りである。

【表2-13】歴史グループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
プレセッション	2024年9月9日	オンライン	4名（1名欠席）
セッション1	2024年9月27日	オンライン	5名
セッション2	2024年12月23日	オンライン	4名（1名欠席）

【表2-14】歴史グループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	担当科目	DP認定校での経験年数
A 教諭	私立	歴史、TOK	5年以内
B 教諭	国公立	歴史	3年以内
C 教諭	公立	歴史、TOK	5年以内
D 教諭	公立	歴史、TOK、CAS	3年以内
E 教諭	私立	歴史	3年以内

### 2. セッションを通しての成果と考察

#### 1) 学習領域と教員の苦悩

まず、すべてのセッションを通じて、学習内容とそれに費やす時間のバランスについて語られた。「一番の悩みっていうか、葛藤は終わらないっていうのが一番の葛藤」（D教諭）のように、最終試験までに学習内容を終わらせることができるのかという課題をすべての教員が抱え苦悩している。そのため、「時系列を維持しながら、重なりを意識してやっているっていうのがすごく意識しているところですね」（B教諭）、「基本的には選んだシラバスを時代順に並び替えて、ある程度オーバーラップしながら」（D教諭）といったようにそれぞれの学習領域で扱うなかでも、共通する歴史事象を「オーバーラップ」させつつも、異なる学習項目・トピックでも対応できるようになる工夫がなされていた。一方で、効率よく授業を進めようとすると、一つの授業で「二つの授業をやっているような感覚になってしまふ」と語る教員もあり、観点を盛り込むことの難しさが垣間見られた。

「オーバーラップ」させていても、「想定しているタイムスケジュールよりは伸びてしまうところはあるので、最近はどれだけざっくりやりつつ、でもやらなければいけないところを押さえられるか」、「どれだけオーバーラップさせても内容が膨大なってしまっているので、進度と残りの量がどれだけ残っているのか見ながら飛ばしたりしています」（D教員）といったように必ずしも

余裕が出るわけではない。2年間を通じて教えた経験のある教員は内容を含め、学習を全体的に管理する術を身につけていた。学校の時間割や受講人数によって差異が出ることが語られており、特に、内部評価（Internal Assessment: IA）についてはIBが規定する20時間の指導時間では到底間に合わないという苦悩が語られた。

## 2) 議論と学習コミュニティ

DPの歴史は議論を重視している科目であり、教員にも議論や生徒同士の学び合いを大事にしたいという姿勢が共通してみられた。そのため、議論を行う学習コミュニティの形成にも意識が向けられており、「授業の中で深めようとしている事柄についての理解と、相手の立場を意識させないと曖昧になる」（E教諭）といったように、生徒が事象を理解することと、他者や自身の捉え方を意識する姿勢をもつことが議論を成立させる上で重要とされた。

教員が学習コミュニティ形成の中で何を意識させているかは、「共通了解を探そうよって話をしていました。この部分は同意できてどこは同意できないのか」（C教諭）や「ある意味、表現の仕方とか、学習集団としての環境の雰囲気の作り方とかも結構大事なのかとか最近は思ったりして」（D教諭）のように語られた。特にDP開始時における「いざ議論ってなった時に、やっぱり自分の意見を言ったとき周りから反論されるのがちょっと怖かったり」（B教諭）、「議論が怖いじゃないけど、議論しているときの友達の言い方が怖いとか」（E教諭）のように、生徒がまだ慣れていない段階での授業の進め方とコミュニティへの働きかけは、どの学校の教員も課題に感じており、それぞれ働きかけていた。

さらにはその意識は、最終試験の記述にも表れる。議論する姿勢がないと「生徒自身が書いている人に対する批判的な見解を書けない」（B教諭）ため、「違う人の意見を聞いて、自分の意見をさらに主張してほしいと思っている」（D教諭）。また、批判的思考は物事を二元論的には捉えないことで促される面があるとし「コマンドタームと近いんですけど、常に生徒には何かグラデーションで考えなさい」（D教諭）と伝えていることが述べられた。

## 3. まとめ

歴史グループの参加者の中には、DP歴史を教えた経験が長い教員と、まだ経験の浅い教員が混在していたが、それぞれに共通する悩みや葛藤の共有がなされ、アドバイスがされるなど、教員同士の学び合いが行われた。内容が膨大であり、時間やコミュニティとマネジメント力が要求される中、各校の実践紹介やコースラインの共有、有用な図書情報など出し惜しみなく交流が図られ、それぞれの教員が学校へと持ち帰り、実践に活かしていた。その中で、実際の最終試験でどのような扱い・評価を受けたのかなどの実践知が共有され、現役のDP歴史教員が集まることでしかなされ得ない学び合いの場が形成された。

## ⑦グループ4・理科「生物」実施報告

担当：木村光宏（岡山理科大学）

### 1. 概要

グループ4・理科「生物」（以下、理科（生物）グループ）は、IBDPにおいて「生物」を担当する教員4名を対象とし、【表2-15】のようにオンラインにて「教員の学び合い」の3回のセッションを行った。3回のセッションの内容は【表2-15】、参加者の属性は【表2-16】の通りである。

【表2-15】理科（生物）グループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加人数
プレセッション	2024年9月5日	オンライン	2名
セッション1	2024年10月7日	オンライン	4名
セッション2	2024年11月25日	オンライン	4名

【表2-16】理科（生物）グループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当科目	DP認定校での経験年数
A教諭	私立	生物	10年以内
B教諭	国公立	生物	3年以内
C教諭	私立	生物	5年以内
D教諭	国公立	生物	3年以内

### 2. セッションを通しての成果と考察

#### 1) セッション1：「教授法」と「教育観」について

セッション1では、主にIB教育導入後の教授法や教育観をテーマとして、フォーカスグループディスカッションを行った。

はじめに、生物の学習は論文を最終的に内部評価課題で作成するため、実際の文脈に落とし込んで、調査における誤差なども考えるというのがIBの特徴であるということが言及された。さらに、授業で行われる実験については、具体的に「納豆などから採集される菌を使うこと」や、「温泉の成分となっている菌を扱うこと」についてそれがIBにおける実験の規定とどのように関わるかということが話題になった。生物教員の中でも実験で扱うことができる資材については慎重に考える必要があり、環境に負荷をかけないような実験デザインが求められる。カリキュラムも数年ごとに変更が行われるため、ガイドに書かれた内容を見ながら、適切に対応することが求められる。

次に、論文を作成する際の注意について議論が行われた。生徒が論文を提出した際に使用されるソフトウェアや、その特徴について議論が行われた。実験における安全管理や計画の指導だけでなく、論文を作成した後も生徒が一人で取り組んだことを適切に示すための注意点があることが示唆された。

さらに、英語で書かれたテキストを教員は使用しているため、専門用語などをどのように説明するかについて、事例が共有された。翻訳については日本語では必ずしも耳馴染みのないものも扱われることがあるため、さまざまな資料にあたりながら、用語集に書かれている程度の説明で理解すればいいのではないかということが議論された。

## 2) セッション2：理科（生物）における実践について

セッション2では、IB教育の特徴について教材を持ち寄り、自身の授業実践の概要説明の後、意見交換を行った。

まず、学習内容の特徴に関する気づきを共有した。テキストに関しては、概念型の学びを意識して書かれており、「日本の教科書の書き方との違い」や「概念を具体的な事象と関連づけてうまく理解に繋げる」という工夫がなされていることが共有された。生物を担当する教員は概ねIBのテキストを評価しており、同時に日本の資料集や図録などの教材を活用しながら指導を行なっている。具体的には、「生体内のエネルギーが必要になる場面はどのような時か」などの問い合わせから「その中で Adenosine Triphosphate (ATP) はどのように働いているか」という問い合わせに発展させて、ATPの役割を理解させるような流れで構成されているということが議論になった。問い合わせによって、概念を探究するような流れがテキストにも反映されていることが伺える。

また、使用する教材についてはテキストを提示して理解させるだけでなく、図録の説明や図を見たり、板書を確認させたりするなどの方法により、多面的・多角的な情報源から理解を促すことで、より深い理解を促している事例が挙げられた。

最後に、概念による理解について、IBでは学習内容については学習指導要領と同様の部分が多いが、「理解や学習内容を結びつける」というところが特徴となっていることが指摘された。生徒や教員が「なるほどね」と思う瞬間というのは、自分の理解と結びつき、概念のレベルが上がった時にもたらされるのではないかという議論がなされた。

## 3. まとめ

本セッションは、参加者の教授法や教育観の変化について振り返り、参加者同士がお互いに学び合うことを通じて、日々の実践を振り返り、それぞれの職能成長に繋げることを目的として行われた。IBの実施により規則に従って「内部評価」の課題に取り組むため、シラバスの理解については慎重な対応が求められる一方で、概ね教員は DP 生物の手法を肯定的に考えているようである。科学的な事象を単元・教科横断的な手法によりつなげて理解するということが概念理解に結びつくことを、実践を踏まえて理解していることがわかった。今後は、理科と数学がどのように関連するかなどの具体的な視点で概念型の学習を捉えることが求められる。

## ⑧グループ5・数学「解析とアプローチ」「応用と解釈」実施報告

担当：木村光宏（岡山理科大学）

### 1. 概要

グループ5・数学「解析とアプローチ」「応用と解釈」（以下、数学グループ）は、IBDPにおいて「数学：解析とアプローチ」や「数学：応用と解釈」を担当する教員3名を対象とし、【表2-17】のようにオンラインにて「教員の学び合い」の3回のセッションを行った。3回のセッションの内容は【表2-17】、参加者の属性は【表2-18】のとおりである。

【表2-17】数学グループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加人数
プレセッション	2024年9月2日	オンライン	3名
セッション1	2024年10月9日	オンライン	2名
セッション2	2024年11月27日	オンライン	3名

【表2-18】数学グループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当科目	DP認定校での経験年数
A教諭	私立	数学（解析とアプローチ）	10年以内
B教諭	国公立	数学（解析とアプローチ）	10年以内
C教諭	国公立	数学（解析とアプローチ）	10年以内

### 2. セッションを通しての成果と考察

#### 1) セッション1：「教授法」と「教育観」について

セッション1では、主にIB教育導入後の教授法や教育観をテーマとして、フォーカスグループディスカッションを行った。

B教諭は「問い合わせを大事にすること」を示し、生徒がATLを通じた探究により、数学の性質や定義に迫ることが大事であると述べた。その前提として、「教員は自分が教えなければ、理解しきれない」という考え方を手放して、生徒に具体的・体験的・実験的な活動から数学について考えることを促すことの重要性が指摘された。議論の中では「定義を示してからでないと、数学を使えない」などの考えがあることも話題になり、最終的に生徒が理解すればいいので、そのアプローチには複数の方法があるという議論がなされた。

また、IB数学の魅力の一つと考えられる「内部評価：数学探究」の理解を広げたいという話があり、実際に行われている指導や具体的な活動の状況が報告された。日本の学習指導要領においても数学の「課題学習」の中で、生徒の活動と学習した数学を結びつけた探究が推奨されているが、その実施についてはあまり議論がされておらず、IBの数学探究の手法を活かすことができるのではないかと考えられる。

さらに、生徒の学びを細かくマネジメントしていく方法として、進捗をエクセルなどにまとめることで、生徒の準備を促し、発表を円滑に進める事例が紹介された。学習者中心の手法は心が

けるものの、最終的に内容を十分にカバーすることや試験でパフォーマンスを発揮できることも同時に考えていることが示された。試験対策については、教員が問題の傾向を把握し、教員が説明することと生徒に説明させることをうまく使い分けることで深い理解に繋げようとしていることが示された。

## 2) セッション2：数学における実践について

セッション2では、IB教育の特徴について教材を持ち寄り、自身の授業実践の概要説明の後、意見交換を行った。

C教諭は、DP数学についてはHLのレベルが高くなることもあり、高校1年生の段階でHL／SLの希望を踏まえてクラス分けを行い、学習の進め方などの状況を確認した上で、最終的に決定を行うようにシステム設計を行なった事例を共有した。他の教員についても科目選択の課題があるとし、それぞれの学校で対策を講じているようである。

その後、数学探究について実践的な議論が行われた。教員の語りの中で、導入のために、予備的な数学探究を行い、本番よりも柔軟に探求させる課題を与え、そこで論文の書き進め方や議論の仕方を経験させる方法が共有された。IBのさまざまな科目で論文を執筆する活動があり、そこで習得したリサーチスキルが活かせると考えられるが、数学探究独特の要素もあると考えられるため、練習を行うことでよりIBの評価に沿った探究を行うことができるといえる。また、数学探究の分析方法については、日常や社会の事象を数学に落とし込んで、それをいかに数学的に検討できるかが重要であり、そのイメージを掴ませることが重要であると指摘した。

最後に、授業における最終試験などの演習については、探究の時間が減るという指摘があるが、学校で演習を行うことで、家庭で探究の準備をするなど、総合的にみるとバランスよくできている側面もあるという話があった。「知識理解や定着」と「探究」をバランスよく実施していくことが、IBに限らず今の学びに求められると考えられる。

## 3. まとめ

本セッションは、参加者の教授法や教育観の変化について振り返り、参加者同士が共有することを通してお互いに学び合う機会を創出することを主な目的として行われた。多くの実践における工夫や背景にある考え方などについて共有することができ、参加者同士の学びだけでなく、報告書や学術研究を通した好事例の発信にもつながると考えられる。今後は他の教科との関連を踏まえた分析を通して更なる発信に努めたい。

## ⑨グループ6・芸術「美術」「演劇」実施報告

担当：佐々木恵美子（聖隸クリストファー小学校）

### 1. 概要

グループ6・芸術「美術」「演劇」（以下、芸術グループ）は、IBDPにおいて「芸術：美術」と「芸術：演劇」を担当する教員3名を対象とし、【表2-19】のようにオンラインにて「教員の学び合い」セッションを行った。参加者の属性は、【表2-20】の通りである。A教諭は日本人で指導言語は日本語、B教諭は外国人で指導言語は英語、C教諭は日本人で指導言語は英語（ただし会話は90%が日本語）である。

【表2-19】芸術グループの実施日時と参加者数

セッション名	実施日時	開催方法	参加者数
プレセッション	2024年9月10日	オンライン	3名
セッション1	2024年9月24日	オンライン	3名
セッション2	2025年3月14日	オンライン	3名

【表2-20】芸術グループ調査対象者の属性

名前	国公立／私立の別	主な担当科目	DP認定校での経験年数
A教諭	国公立	芸術 (Visual Arts)	5年以内
B教諭	私立	芸術 (Visual Arts)	3年以内
C教諭	私立	芸術 (Theatre)	3年以内

### 2. セッションを通しての成果と考察

#### 1) 芸術科教員からみるIBプログラムの特徴

本セッションに参加したDPの芸術科教員が捉えているIBプログラムの特徴は以下の2点が挙げられる。第一に、一般的な芸術科教育と大きく異なり、単なる技術習得ではなく、探究的アプローチであることと、その過程での概念的理解が重視されているという点である。芸術では、表現の技術を学ぶとともに、自分でリサーチし、作品の意味を考えたり、表現の根拠を理論とつなげたりすることが求められる。しかし、重要概念などをもとに単元設計をするPYPやMYPとは異なり、「最終課題に向かうために、必要に迫られて概念に関する組み込んでいかざるを得ない」（A教諭）と捉えられていた。つまり最終課題に取り組むなかで必然的に概念的理解が達成されていくということである。第二に、評価においては、学習のプロセスが重視されている点である。評価課題として美術では、「比較研究」、「プロセスポートフォリオ」、「展示」、演劇では「Inquiring」、「Developing」、「Presenting」、「Evaluating」が設定されている。これらを通して自らの学びを可視化し、省察しながら学習を進めることが重視されている。「単なる制作活動ではなく、そこに至るまでの思考の流れや、どのような意図で作品を作るかが大事であり、IBではそのプロセスを重視する点が他のカリキュラムと違う」（A教諭）と語られた。

## 2) 授業実践の工夫と課題

参加した芸術科教員たちは、独自のコースガイドブックの作成と活用（A 教諭）、アートジャーナルの活用（B 教諭）、短時間での即興劇制作体験の創出（C 教諭）など、さまざまな工夫を凝らしながら実践を行っている。

一方で、以下の 5 点の課題に直面していることが明らかになった。第一に、授業時間の不足とカリキュラムの負担である。「ポートフォリオ作成のための時間をかけさせようとすると、作品制作時間が削られる」（A 教諭）点や、「年間 150 時間の授業時間の確保が困難」（B 教諭）など、プロセスに費やす時間の確保が挙げられた。第二に、生徒の言語能力および思考スキルと表現力の差についてである。芸術科では、作品の背後にある意図やコンセプトを理論とつなげながら言語化する必要があるが、そういう言語能力や批判的思考スキルの不足から困難を感じる生徒が多く、「専門用語の理解」（B 教諭）も含めて支援の方法が課題となっている。また、芸術科が英語で履修されている場合は、「生徒による英語の文章表現の難しさ」（C 教諭）も存在する。第三に、評価規準の理解と運用についてである。IB の評価規準は詳細に定められているものの、芸術科の評価は主観的になることが不可避であり、「異なる文化背景とアートに対する価値観をもつ生徒がいるなかで、一律の客観的な評価規準を適応することの難しさがある」（A 教諭）ことも明らかになった。第四に、生徒の自己管理の難しさである。芸術では、生徒が自ら制作とリサーチを進める必要があるが、多くの生徒が自己管理を苦手としているため、課題提出の遅れが発生しがちである。第五に、自由な作品創作と構造化された探究プロセスのバランスを取ることの難しさである。「生徒が自由に創作する環境をつくりたいが、ある程度方向性を示さないと探究が浅いものになる恐れがある」（C 教諭）が、一方でそれが「生徒の創造性を制限することにならないかと考えてしまう」（A 教諭）との葛藤が語られた。

## 3. まとめ

本セッションを通じて、教員たちは自身の実践を振り返り、他の教員の指導方法から新たな示唆を得る機会となった。芸術科の設置状態は各学校によって異なり、また芸術が 5 つの小科目に細分化されていることから、芸術科教員同士の交流の機会は希少である。そのため、本セッションは貴重な学びの場となっていたといえる。「普段は自分の授業のことばかり考えてしまうが、他の先生の話を聞くことで、新しいアプローチを学ぶことができた」（B 教諭）、「こういう機会がもっとあれば、授業の質を高めるヒントを得られる」（C 教諭）との語りもあり、芸術科教員同士の学びの相互作用が実感された。本セッションのような学びの場を継続することが、芸術科における指導の質向上につながると考えられる。

## 5. グループ横断的なまとめ

### —計量テキスト分析による全体的な傾向についての分析と考察—

担当：赤塚祐哉（相模女子大学）

#### 1. 計量テキスト分析による語りの全体的な傾向についての分析と考察

第2段階では、グループ全体の語りを集約し、グループ横断的な傾向を明らかにする。研究方法として、計量テキスト分析に分類される樋口（2014）により開発された KH Coder を用いて、テキスト分析を実施する。テキスト分析の対象物は各グループのそれぞれのセッションにおいて収集された音声データである。グループ2・言語B「英語」の全部と芸術グループの一部の語りは英語で行われたため、当該科目的語りは日本語に翻訳したうえで分析を加えた。

##### 1) 質問紙調査における頻出単語リストと KWIC コンコーダンスによる分析結果

【表2-21】は、研究参加者を対象に実施したフォーカスグループディスカッション(FGD)によって得られた全ての語りを、KH Coder の頻出単語リストを用いて自動抽出した上位10語である。ただし、ファシリテーターの発言はすべて除外した。総抽出語数は170,285語であった。【表2-21】では、「自分」は総抽出語170,285語のうち、延べ482回出現していたことを示している。そして上位1位であることを表している。

【表2-21】上位抽出語の出力結果（出現頻度順）

#	出現頻度（回）	抽出された語
1	482	自分
2	273	書く
3	261	考える
4	197	問題
5	154	作品
6	145	問い合わせ
7	143	学習
8	132	ペーパー
9	131	概念
10	130	理解

KH Coder に搭載されている「KWIC (keyword in context) コンコーダンス」と呼ばれる分析機能を用いて、【表2-21】の#1～#10の抽出語がどのような文脈で用いられたのかを確認した。その結果、「自分」(#1)は、「問い合わせを自分で探すってことに慣れていない」、「自分の意見というものが洗練されていく」といった文脈で用いられており、参加者が学習者中心の授業展開に対して創意工夫していることが伺える。

加えて「書く」(#2)は、「最終課題としてレポートを書かせて」や「生徒自身に短編小説を書かせます」といった文脈で用いられていた。ここから、参加者が生徒たち書かせることで思考を整

理させたり、表現させようとする試みを重視していることが確認できた。

「考える」(#3) は、「生徒が考えられるようなそういう力を持つるために」、「概念的なところで考える」、「議論を通じて内容を深く考える」といった文脈で用いられていた。とりわけ、これまでにあまり物事を深く考えた経験がない生徒に対する指導上の工夫について語られていた。

「問題」(#4) は、「現実社会の問題」、「ちょっとグローバルな問題」っていうのも生徒に体験させたい」、「当事者だけの問題ではなく」といった文脈で用いられており、IB の教育理念でもある国際的な視点をもった学習者の育成に力点を置いていることも確認できた。

「作品」(#5) は、「自分なりに作品から解釈を作ったり」、「生徒に作品を分析してもらい」といった文脈で用いられており、特に国語や芸術を中心としながら、作品について深く考察する授業展開を行っていることも確認できた。

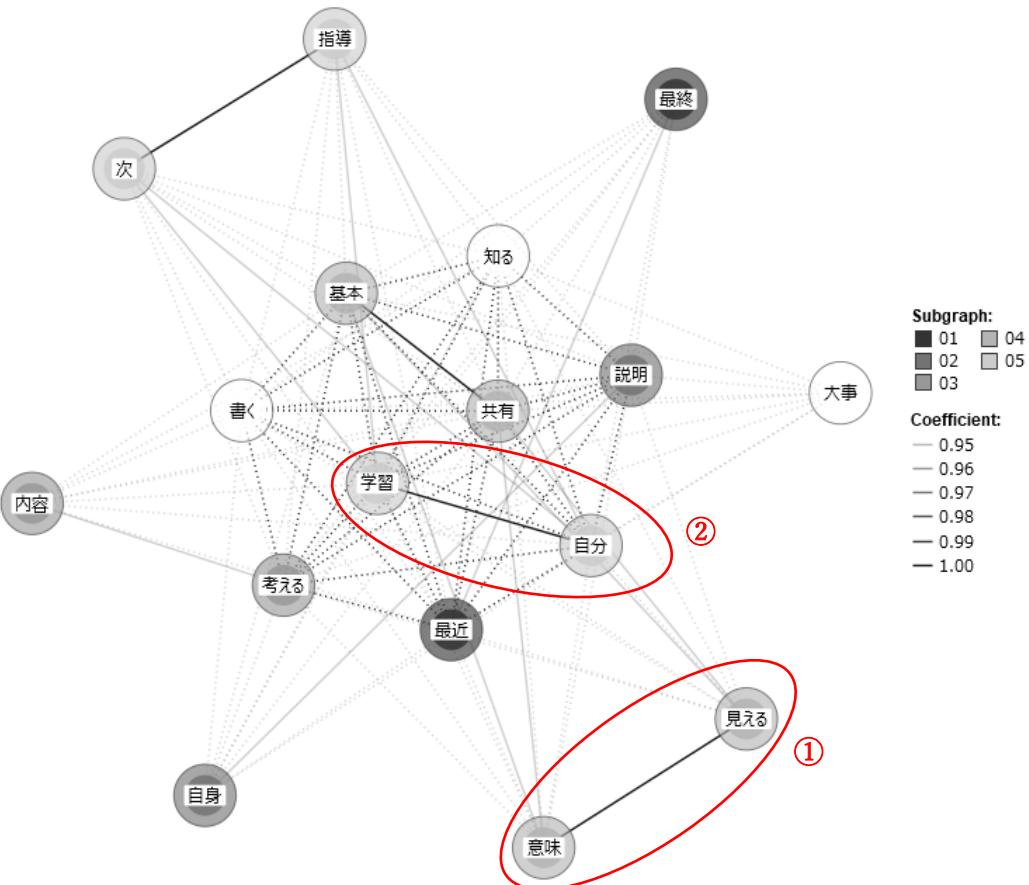
出現頻度 145 の「問い合わせ」(#6) や出現頻度 131 の「概念」(#9) は、「問い合わせを自分でしっかりと作れるようになれって言います」、「基本、問い合わせの中には極めて抽象的ないわゆる概念が入っていますよね」といった文脈で用いられており、問い合わせを学習者自身に生成させることに苦慮している点や、問い合わせを通して教科・科目固有の概念への理解を深めることへの工夫が実施されていることが確認できた。

## 2) 共起ネットワークによる分析結果

次に、FDG で得られた語りから抽出された語は、どのような語とともに使用されていたのか、KH Coder の共起ネットワーク分析機能(語と語の関連度合いを定量分析によって解析する機能)を用いて可視化したのが次ページの【図 2-1】である。

【図 2-1】は、抽出語がどのような語と共に使用(共起)していたのかを示している。共起の高低に係る程度は Jaccard 係数(2つの集合の共通部分の大きさについて計算して求められた数値)を用いて自動的に処理され、係数が大きいほど語と語が近く描かれる(樋口 2014)。共起の高低に係る程度は実線か点線で示され、実線は共起の程度が高いことを示し、点線は程度が低いことを示している。抽出語を囲む円の色は、濃い色(黒色)ほど出現頻度が高く、薄い色ほど、灰色、白色の順に語の出現頻度が低いことを表している。なお、抽出語の位置は特段の意味をもたない。

なお、共起ネットワークの出力条件を次のように設定した。出現した語の取捨選択として最小出現数を 55 に設定し、描画する共起関係として、出現頻度が上位 60 位までの語を抽出した。なお、【図 2-1】内の丸囲み及び数字は筆者による追記である。



【図 2-1】共起ネットワークの出力結果（○囲み線及び○数字は筆者による加筆）

【図 2-1】では、【表 2-21】における上位抽出語「自分」(#1) は、「学習」(#7) と共に程度が高いことが確認できる（【図 2-1】①）。そのほか、「意味」と「見える」の共起の程度の高さ（【図 2-1】②）を示している。

ここから、研究参加者の全体的な傾向として、授業での学習を自分ごととして捉えるための授業展開への工夫を課題意識としてもっていることが読みとれる。「意味」と「見える」は「意味が見えてくる」といった使われた方がされており、視覚的に何か見えるといった使われ方ではなく、頭の中の思考が整理されていくプロセスについて語られていた。このことから、研究参加者の全体的な傾向として、授業を通して学習者が思考を整理したり、深めたりする指導・学習形態を実施することへの課題意識をもっていることが読み取れる。

【表 2-21】及び【図 2-1】の結果をまとめれば以下の 2 点となると考えられる。

- 1) 研究参加者らは、生徒自らが問い合わせができる指導上の工夫を行っている。その目的の 1 つは、問い合わせを通して教科・科目固有の概念への理解を深めようとする態度の育成である。こうした授業を実現することへの課題意識をもっている。
- 2) 生徒が意見や考えを書くことによって表現したり、自分なりに分析・解釈したりする指導上の工夫を行っている。その目的は、学習者が思考を整理したり、深めたりする資質や能力の育成である。こうした授業を実現することへの課題意識をもっている。

#### 【引用文献一覧】

樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版。

Greenbaum, T. L. (2000). *Moderating Focus Groups: A Practical Guide for Group Facilitation*. SAGE Publications.

International Baccalaureate Organization (IBO). (2019). *Assessment Principles and Practices—Quality Assessments in a Digital Age*. Cardiff, UK: IBO.

Morgan, D. L. (1997). *Focus Groups as Qualitative Research*. [2nd ed.]. SAGE Publications.

Wiggins, G. P. & McTighe, J. (2005). *Understanding by Design*. Association for Supervision and Curriculum Development. (= ウィギンズ、G.P.、マクタイ、J. (2012) 『理解をもたらすカリキュラム設計：「逆向き設計」の理論と方法』(西岡加名恵訳) 日本標準.

## (2) 「DP 事例校調査」研究報告

取りまとめ：渋谷真樹（日本赤十字看護大学）

本調査の目的は、IB 認定校の教員の学びの実態を明らかにすることである。日本の学習指導要領と IB のカリキュラムとの類似点が指摘されているものの、長年の自身の教授方法と異なる方法を用いる場合には困難が生じることが予想される。そこで、2024 年度は、DP 教員がさまざまな場面でどのように教師としての力量を高めているのかについて、3 つの DP 認定校を対象にインタビュー調査を行った。対象校として、比較的最近 IB に認定された公立校の中から、大都市圏の A 校、地方都市 B 校と C 校を選定した。それぞれの学校を 3 回ずつ訪問し、管理職・教員への半構造化面接を行った他、授業参観を行った。主なインタビュー項目は、以下の通りである。

### <IB 導入による教授観や教授法の変化>

- ・IB を導入してみて、教え方（教授法）や教育についての考え方（教授観）に変化はありましたか。
- ・教授観が変化したエピソードを教えてください。
- ・IB 教育でもっとも大事だと思うこと（重視していること）は何ですか。
- ・ATL（Approaches to learning）の実現に向けて、どのような実践をしていますか。
- ・ATT（Approaches to teaching）をいかに実践されていますか。
- ・IB 理念はどのようにして実践されていますか。
- ・IB を実践する上で活かされると感じるこれまでの指導方法等はありますか。ある場合、それはどのようなものですか。

### <教員の学びに関する質問>

- ・IB が開始されて、新たに学んだことはありますか。
- ・どのように学びを深めていますか。
- ・学内外の他の教員と協働的に学ぶことはありますか。
- ・教員以外の方（たとえば地域の方）と協働的に学ぶことはありますか。
- ・教員の研修はどのように行っていますか。

### <導入上の課題に関する質問>

- ・IB 教育の貴校への導入について、課題はありますか。
- ・IB を導入するにあたって困っていることはありますか。
- ・IB の教科指導上の課題はありますか。それはどのような課題ですか。
- ・文部科学省や IB 機構への要望はありますか。

## 1. IB 導入による教員の学び

以下、IB が教員の学びを促進した事例を調査対象 3 校に分けて記述する。

### 1) A 校の事例

(文責：一家慶喜)

#### A 校の概要

A 校では日本語 DP を行っており、DP 履修生徒数は 19 名（2022 年度入学）となっている。DP 履修にかかる基準や条件ではなく、希望者が履修できる体制とり、中学 1 年生の段階から説明会などの進路ガイダンスを行っている。全体の教員数は 73 名であり、DP 担当教員数は 8 名である。DP 以外のコースと兼務している教員数は 5 名である。DP 担当教員のうち 6 名が日本の教員免許を、2 名が特別免許を有している。主な指導言語は、日本語のみが 4 名、英語のみが 3 名、両方が 1 名となっている。A 校では 13 名の教員に半構造化インタビューを実施した。

#### A 校の教員の学び

【校内での研修】時間割の中に研修の時間も設けられており、IB 研修と教科会、教科主任会などが連動して教科にとらわれない研修が行われている。

【校内の他教員からの学び】経験のある教員が新たに着任した教員とともに授業を行うほか、他科目の授業などを見る機会を増やすようにしており、わからないことはコーディネーターに聞くとフォローがある。

【開かれた学び】お互いに授業を見学するなどして得られた気付きを、自分の教科にも持ち込もうとしている。また、誰に聞いても答えてくれるなどオープンかつ教員一人一人の理解に対する責任が見られた。

【生徒と共に学ぶ】IB と出会って、生徒とともに学ぶ姿勢や、自分で深めていき面白さを見つけていく姿勢に変わっている。その中でもプロフェッショナルであろうとしている。

【IB 理念の実践】IB のガイドは明瞭なものとして捉えられ、自分のやりたかったこと、持っているスキルなどを十分に発揮できている場があると感じる教員もいた。

【公開すること】A 校として学校や授業を公開することを積極的に行っており、外部への発信だけでなく、教員のモチベーション向上にも意識が向けられている。学校を公開する意識が校内教員同士での学び合いにもつながっている。

【校外への普及】市の研修会の会場として開放されることが多く、休憩時間などに校内を見学してもらい、授業や掲示物、生徒の様子などを公開している。

【校内での IB の普及】A 校全体で重視されている探究について、ATL や ATT などの IB の枠組みを用いて深めている。MYP の学びもそこに活かされている。

【IB 認定校同士の学び】出張として他の DP 認定校を見学する機会が設けられるなど、他校の教員と交流を行い授業実践などの学びを深めている。公立の DP 認定校同士のネットワークもあった。

### 2) B 校の事例

(文責：渋谷真樹)

#### B 校の概要

B 校は長い伝統をもつ学校で、2020 年代に IB に認定された。1 年次の 6 月頃から約 4 ヶ月の

ガイダンス・体験授業を経て DP を選択し、高校 2 年次から 2 年間の類型選択となる。DP の生徒数は 2021 年度入学生が 6 名、2022 年度入学生が 8 名、2023 年度入学生が 6 名となっている。DP 担当教員数は全教員 86 名中 31 名であり、DP 以外と兼任している教員は 22 名である。DP 担当教員のうち主な指導言語は、日本語のみの教員が 20 名、英語のみの教員が 9 名、日本語と英語の両方が 2 名となっている。B 校では 20 名の教員に半構造化インタビューを実施した。

### B 校の教員の学び

**【校内での研修】**次年度 IB を担当する教員は、前年の 1 年間、毎週校内研修を受ける。時間割の中に研修時間を組み込んでいる。グループでユニットプランナーやコース概要を作成して、次年度に備えている。

**【日常的な学び】**フォーマルな研修以外でも、校内で IB 経験の長い教員に質問することができる雰囲気がある。外国人の教員との会話の中から、TOK の指導に活用できるような新たな視点を得ることもある。

**【IB によるラベリング】**多くの教員は、それぞれが工夫をして IB に通じるような授業をしている。個々に試行錯誤していたことに、IB が ATL や ATT といった名前を与えてくれている。

**【生徒と共に学ぶ】**IB と出会って、生徒を引っ張り上げるというよりは、生徒に伴走するような姿勢に変わった。生徒と共に学んでいる。

**【全校体制での取り組み】**IB 専属の教員をつくらず、あえて IB 担当者を替えていくことによって、IB に関する知識や経験をもつ教員を増やしている。そのことで、異動が生じてもフォローできるようにしている。

**【校内での IB の普及】**DP でなく普通科でも IB 的な指導法を取り入れている教員がいる。たとえば、歴史における史料批判の方法は普通科の授業でも応用できる。

**【IB 認定校同士の学び】**近隣で先に IB 認定校になった私立高校からは、現在に至るまでさまざまな情報を提供してもらっている。逆に、自校から他の IB 候補校に情報を提供することもある。電話やオンラインなどで、気軽に聞き合える関係がある。

**【学びの発信】**IB コンソーシアムを引き受けて、他校の教員への発信をしている。公開授業研究会にもかなりの参加者があった。

**【校外への普及】**公立の IB 認定校として、この学校だけの改善ではなく、地域全体に IB での学びを還元できる工夫をしている。たとえば、ほぼ全員の教員が IB の研修を 1 年間受け、IB 認定校でない学校に異動した後でも IB のノウハウが活かせるようにしている。

### 3) C 校の事例

(文責：梅津静子)

#### C 校の概要

C 校は地方都市にあり、2020 年代に MYP 校、DP 校に認定された中高一貫校である。DP コースの定員規模は 20 名程である。DP の生徒数は 2021 年度入学が 20 名、2022 年度が 11 名、2023 年度が 9 名である。DP 担当教員数は全教員 92 名中 35 名であり、DP 以外と兼任している教員は 33 名である。C 校では 18 名の教員に半構造化インタビューを実施した。

#### C 校の教員の学び

**【各教員任せにしないプロフェッショナル・デベロップメント】**教員の働き方が問われる中で、各教員任せで学びを深めることには限界がある。県教育委員会と管理職に学びの時間の確保の責任がある（DP コーディネーター）。

**【他の IB 認定校での研修】**C 校の特徴としては、IB 認定校に 2 年間の研修に行かせる仕組みを整えたことがある。多くの教員から、IB 認定校での研修を通して刺激的な学びを得たとの語りがあった。現在では、C 校が逆に他の IB 候補校から教員を月単位で受け入れている。外部の教員に来てもらうことで、自校の教員の力量形成も視野にいれている。

**【県内外の IB 認定校との視察交流】**県内外の IB 認定校への教員の視察や、視察の受け入れを行っている。

**【文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのイベント】**コンソーシアムのイベントから学びを得ているとの声があった。地方に位置する C 校では、アクセスの保障という観点でオンラインイベントを重宝する声があった。

**【ワークショップへの参加】**ワークショップ 자체が学びの場になっているだけでなく、ワークショップがネットワーキングの場になっており、その後の資料共有等にも繋がっている。

**【専門家の招待】**大学等から専門家を呼び、教員向けに研修や講演を行う機会がある。

**【保護者を含めた学び合いの場】**2 か月に 1 度程、保護者向けの学び合いの場を設け、IB の理念や評価方法を学んだり、TOK を体験したりしている。地域の方にも IB を理解してもらう場としている。

**【教員の DP 体験】**ミーティングの場で、教員による TOK 体験を実施したこともある。

**【授業研究週間】**お互いの授業を参観し合う週を年に 3 回設け、フィードバック等を行っている。

**【研究会や学会への参加】**教員の中には、個人的に研究会や学会に参加したり、研究発表をしている者もいた。生徒を主体的な学習者扱いするには、自分自身も主体的な学習者でなければならないとする声があった。

**【オンラインのプラットフォームの活用】**Facebook や Youtube、IB exchance（IB 機構が管理運営するオンライン上の専門性の学習コミュニティ）等を使って情報収集に励む教員もいた。

**【本を読む】**受験対策を目的としたものでは無く、さまざまな視点を知るため、自分の引き出しを増やすために、書籍を多く購入し本を読むようになったとの発言も複数聞かれた。

## 2. IB 導入による効果と課題

(文責：原和久)

「一条校」で IB を導入し実践する国内の学校は、新学習指導要領（文部科学省 2018）と IBDP の二つのカリキュラム要件を同時に満たす必要がある。では、新学習指導要領と IBDP の関係性は、どのようなものとして IB 教員に認識されているだろうか？また、IB プログラムの導入や運営にはどのような課題があると認識されているだろうか？本節では、インタビューを通して得られたデータをもとに、IB 教員の語りを「IB 教育の位置づけ」、「IB 教育のメリット」、「一条校における IB 教育の課題」の 3 点から報告する。

### 1) IB 教育の位置づけ

インタビューを行った 3 つの IB 認定校の教員からは、IB を実践することで「『主体的・対話的で深い学び』がどのようなものか、具体的に分かる」といった意見や、「IB の学びは、今の日本の

学び方の中で不足しているものをかなり補っている」、「まだまだ古い考え方があるなかで、IB が後ろ盾となっていると感じる」、「学習指導要領の次期改訂の折には、バカラレアの手法をどんどん前向きに取り入れてほしい」といった肯定的な声が聞かれた。このように、IB プログラムは新学習指導要領で示された「新しい学び」の一つの具体例を示すもの、あるいは新学習指導要領を「補完」、「強化」もしくは「深化」するものと認識されている。ただし、IB が日本の教育にとって代わるべきと考える教員はいなかった。今回のインタビューに参加した 3 つの高等学校において、IB プログラムは「一步先を行くカリキュラムモデル」として、新学習指導要領で示された学びを具現化するための具体的方法やヒントを提供するものとなっていると言えよう。

## 2) IB 教育のメリット

では、新学習指導要領に加えて、IB カリキュラムを併用する場合の学習には、どのような教育的なメリットがあるのだろうか。インタビューにおける教員の語りからは、IB の教育実践について、「社会的に広がるような読みにつなげられる」【社会とつながる学び】、「概念の習得にいろんな方向からアプローチして、それを（生徒に）獲得させたい」【概念理解をもたらす学び】、「生徒が個々に自分の学び方を自分のスタイルで発掘しながらやっていく部分があるので、少し手放せるようになってきている」【主体的な学び】、「対象の上っ面だけじゃなくて、全体だったりとか、奥のほう、あるいは比較みたいなところから、その性格を明確にしたい」【複眼的な視点の獲得】、「教科横断的な学習や TOK（知の理論）を通して、担当教科以外の科目の実践に触れ、学んでいる教科の特性などについて振り返る機会となっている」【より高い視座からの考察】といった声が聞かれた。インタビューにおける語りから、IB 教員が新学習指導要領で示されている新しい学び（「主体的・対話的で深い学び」や探究学習など）を具現化するために、IBDP の実践を通して、生徒により高次の思考力を育もうとしている様子がうかがえる。

## 3) 一条校における IB 教育の課題

最後に、一条校において IB 教育を実践するまでの課題について言及したい。IB 教員の語りからは、主に、①授業に関すること、②教員人事に関すること、③IB の認知度に関するこの 3 つの分野で課題が挙げられた。

まず、①についてだが、生徒については「生徒によっては英語力が十分ではないこと」、またそのために「英語での内容の理解が不十分な生徒がいること」、また「適切な日本語の問題集がないこと」などが挙げられた。また教員については、「授業準備や教材研究に時間がかかること」、「二つのカリキュラムに対応した評価が必要なこと」、「（適切な）教材の少なさ」などが IB 教員から指摘された。今回インタビューした教員は、能力はもちろん意欲や意識が高い者が多かったが、それにも拘わらず、二つのカリキュラムへの対応や、オリジナル教材や問題集の作成など、IB 教員には大きな負担がかかっていることが推察される。「働き方改革」が叫ばれる中、IB 教員をどのように支援していくべきか、今後の課題であろう。

次に、②の教員人事に関する課題についてであるが、IB 教員からは「外国人教員や英語で教えることができる教員の確保の難しさ」、「着任した教員への研修」などの課題が挙げられた。これらは教員個人というより、組織的・制度的な課題であり、教育委員会などと共に解決策を探る必要があるだろう。

最後に、③については、「IB の国内での認知度の低さ」、「国内入試への対応」、「どうやって IB の魅力を保護者に伝えるか」などが挙げられた。「国内での認知度の低さ」については、IB 機構や文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム、日本国際バカロレア教育学会、IB 教員養成大学・大学院といった団体・機関が、定期的にセミナーやイベントなどを行っており、IB の認知度も少しづつ上がっているように感じるが、更に継続的な取り組みが必要であると思われる。また、国内における IB を活用した入試において、現実的ではない高い評点もしくは予測評点 (Predicted Grade) を求める大学があることが現場の IB 教員から指摘されている。高等教育機関に対して IB についての理解を高める努力も継続的に必要であると思われる。

### (3) 「DP 事例校調査」研究報告

#### 英語による教科指導（EMI: English Medium Instruction）の広がり —国際バカロレア推進による高校段階の学習状況—

取りまとめ：木村光宏（岡山理科大学）

## 1. 背景

DP (Diploma Programme、以下 DP) が一条校でも実施が広がってきており、その背景として日本語と英語で授業を実施する Dual language DP (以下 DLDP) が挙げられる。DLDP は 2 科目以上を英語、スペイン語またはフランス語で実施することが義務付けられている。DLDP における教授言語の科目の設計は各学校に委ねられており、学校や生徒の状況を踏まえて教授言語が選択されている。言語は自己形成や文化的アイデンティティの模索と維持のほか、多様な文化の理解を深める上でも不可欠で、社会的コミュニケーションの主な手段であるとともに、認知的成长と密接な関係がある (IBO 2014a)。国際バカロレア機構 (2014b) は、生徒の学習経験や背景知識が共通ではないことを踏まえて、適切であると考えられる場合には、学習者の母語を用いて生徒がすでに身につけている理解を積極的に活性化させることの必要性を述べている。第二言語による学習については、認知負荷理論を適用することが広く研究されている (Abbott 2022; Chu et al. 2017)。本節では、IBDP の実施に取り組む一条校による回答をもとに英語による教科指導 (English Medium Instruction、以下 EMI) の実際に着目して整理を行うとともに、今後の研究について洞察を得ることを目的とした。

## 2. 研究方法

2023 年度に実施した質問紙調査「国際バカロレア・ディプロマプログラム (IBDP) の実施状況に関する基礎調査」の結果を用いて分析を行なった。

質問紙は 48 校の IB 認定を受けた一条校を対象に送付し、回答のあった 33 校（国公立 12／私立 21）のデータをもとに分析を行った。本節では母語以外による IB の学びに関わる項目を抽出して分析結果を報告する。質問紙調査の項目は以下の通り。

**問 1.** [IBDP の指導言語と履修形態] 貴校は国際バカロレア・ディプロマプログラム (IBDP) をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

1. すべての生徒が全科目英語（またはフランス語、スペイン語）で履修（言語 A または言語 B を除く）
2. すべての生徒が一部科目を日本語で、その他の科目を英語で履修（日本語 DP）
3. 生徒が「全科目英語」または「一部科目を日本語」を選択して履修
4. その他（具体的に：）

**問 5.** [IBDP 担当教員]

**(9)** IBDP 教員を確保する際に、以下の①～⑩の困難をどの程度感じていますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。※ほぼない (1) ～よくある (5) の 5

件法を用いた。

- ①日本語の運用能力、②英語の運用能力、③日本語・英語バイリンガルでの運用能力、④教員免許・IB 教員資格、⑤学校の指導方針の理解、⑥教科の専門性、⑦学校文化への適応、⑧学級運営・生徒理解、⑨IB に関する経験、⑩教員の給与

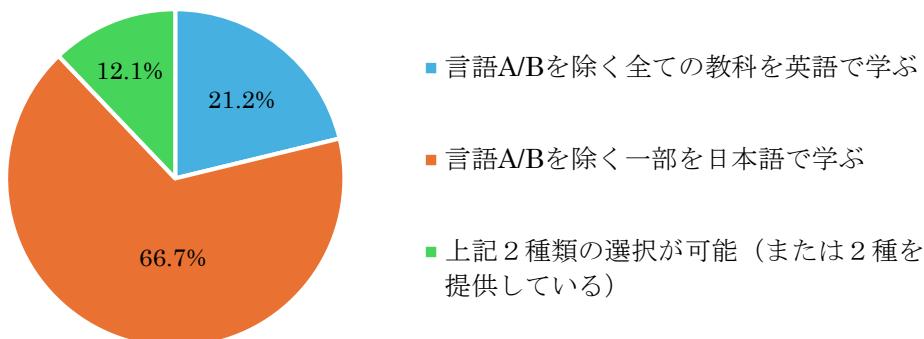
上記項目の他に、IBDP 科目の開講状況やそれぞれの科目の履修者数について質問紙による把握を行なった。

### 3. 結果

#### 【英語による授業実施の種別：教授言語に基づく分類】

英語による授業実施の種別について、教授言語のタイプを 3 つに分類して分析した結果は、以下の通りとなった。

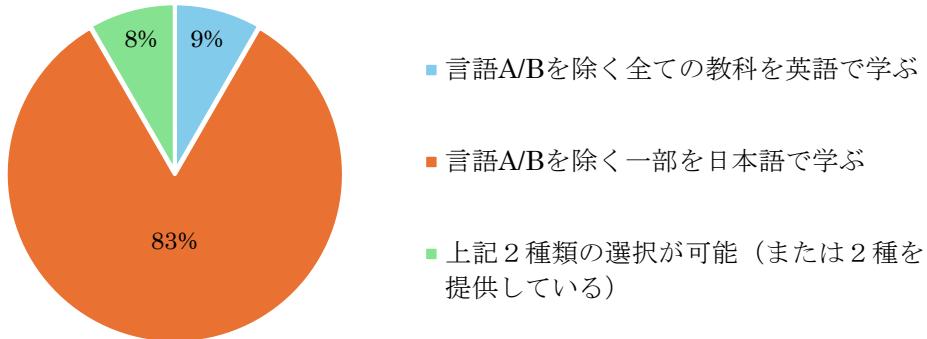
【図2-2】英語による授業実施の種別



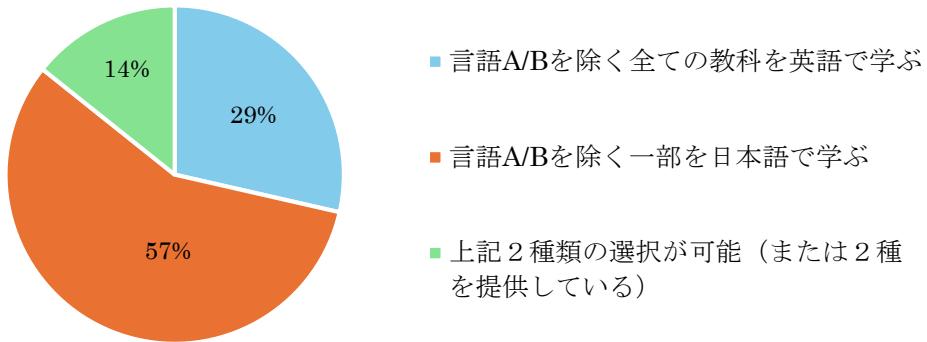
「言語 A／B を除く全ての教科を英語で学ぶ」と回答した学校は 7 校 (21.2%)、「言語 A／B を除く一部を日本語で学ぶ」は 22 校 (66.7%)、「上記 2 種類の選択が可能（または 2 種類を提供している）」は 4 校 (12.1%) となった。最も多かった種別は、一部を日本語で学ぶ DLDP の学校となった。また、教科を英語で学ぶことについては、単に高い英語運用能力が求められるだけではなく、教科の知識と英語運用能力をバランスよく持つことが求められるため、複合的な課題があると考えられる。英語による授業に取り組む教員の語りや海外の事例などを参考にしながら、日本における IB の拡大を英語による授業の視点から捉え直すことが国際的な視野をもつ人材育成のためにも必要である。

次に、国公立と私立の学校に分けて英語による授業実施の種別の検討を行なった。結果は以下の通り。

【図2-3】国公立における英語による授業実施の種別



【図2-4】私立における英語による授業実施の種別

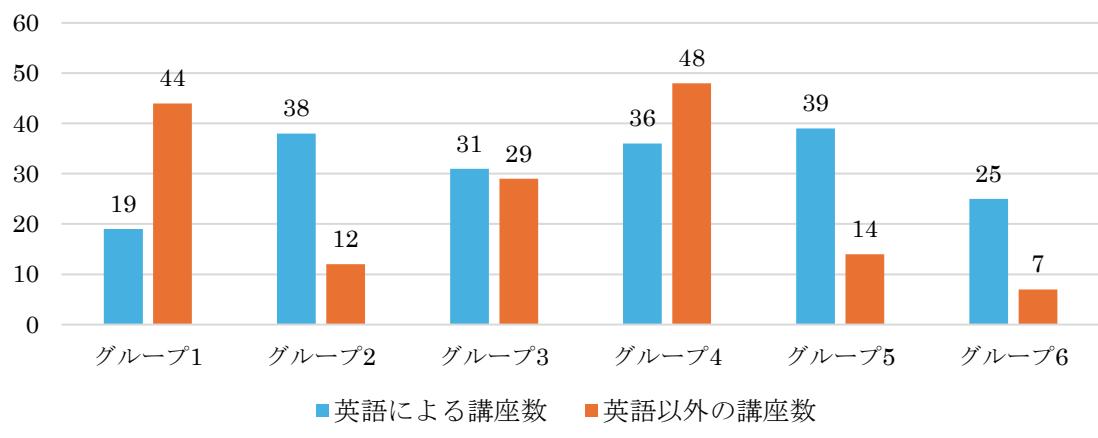


「言語 A／B を除く全ての教科を英語で学ぶ」と回答した国公立・私立の学校はそれぞれ 9% (1 校)・29% (6 校)、「言語 A／B を除く一部を日本語で学ぶ」はそれぞれ 83% (10 校)・57% (12 校)、「上記 2 種類の選択が可能 (または 2 種類を提供している)」はそれぞれ 8% (1 校)・14% (3 校) となった。このことから、国公立よりも私立の学校の方が英語を主とした IB を実施していることがわかる。また、国公立の学校における IBDP は日本語と英語を混ぜた DLDL を実施している場合が多く、段階的に英語による学びを促す DLDL の枠組みが特に国公立の学校において機能し、拡大してきていると考えられる。

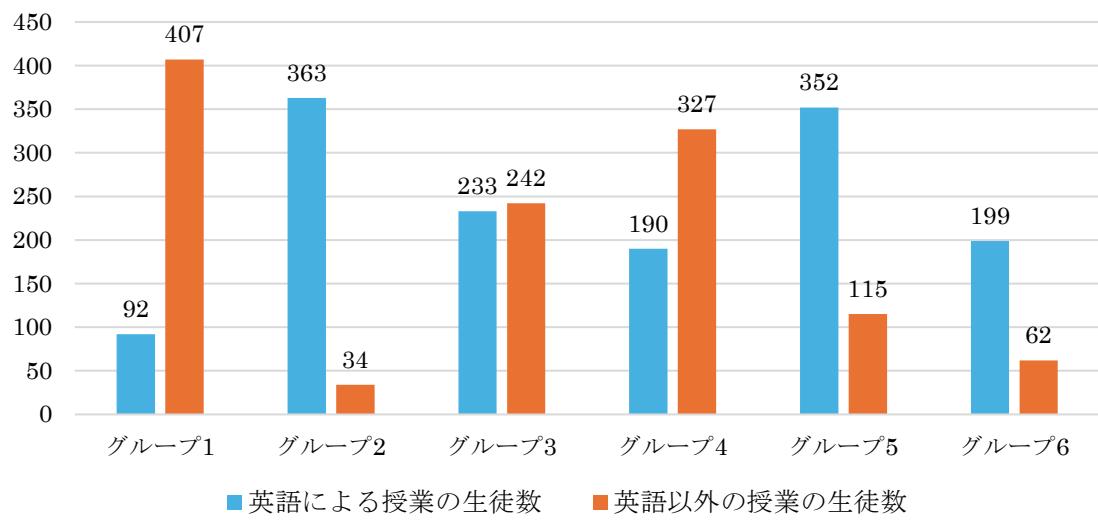
#### 【英語による講座数と生徒数】

英語による授業を受ける講座数および生徒数について分析を行なった。グループ 1 は言語と文学、グループ 2 は言語習得、グループ 3 は個人と社会、グループ 4 は理科、グループ 5 は数学、グループ 6 は芸術となっている。分析の結果は以下の通り。

【図2-5】グループごとの英語による授業の講座数



【図2-6】グループごとの英語による授業の生徒数



英語で学んでいる生徒が多い順にみていくと、英語による授業を受けている生徒の数は、グループ2が講座数、生徒数ともに多く38講座で363名の生徒が学んでいる。次いで、グループ5は39講座で252名が学んでいる。グループ3は31講座233名、グループ6は199名、グループ4は36講座233名が英語による授業を受けている。

グループ1については、日本語の講座を履修することが多いが、母語として英語を履修する生徒もいるため、グループ1では英語による講座がみられ、英語で学ぶ科目の中では「English A: Language & Literature-HL」が最も生徒が多かった。グループ2では英語を第二言語として履修することが多いが、中国語やスペイン語などを母語とする学生がいるため「英語以外の講座数・生徒数」が一定数みられ、英語で学ぶ科目の中では「English B-HL」が最も生徒が多かった。グループ3については、おおよそ半分の講座が英語で行われている状況が明らかになり、英語で学ぶ科目の中では「History-HL」が最も多かった。グループ4については英語以外の講座数が多い傾向がみられ、英語で学ぶ科目の中では「Chemistry-HL」が最も生徒が多かった。グループ5については、英語で学ぶ傾向がみられ、英語で学ぶ科目の中では「Mathematics: Applications and Interpretation-SL」が最も生徒が多かった。グループ6については、英語で学ぶ講座数が多く、

英語で学ぶ科目の中では「Theater」が最も生徒が多かった。

これらの結果から以下の点が指摘できる。

- ①英語で実施される傾向にある科目として、言語習得（グループ2）と数学（グループ5）が挙げられる。
- ②どの講座も200～350名程度の生徒が英語で授業を受け、最終試験に臨んでいる（グループ1を除く）。
- ③理科（グループ4）と個人と社会（グループ3）は日本語で学んでいる生徒の方が多い。

この結果は、主に英語のみで行われている学校と日本語によるDLDP認定校のデータの両方を含むため、今後はより広がってきている日本語によるDLDPに着目して特徴を析出する必要があると考えられる。

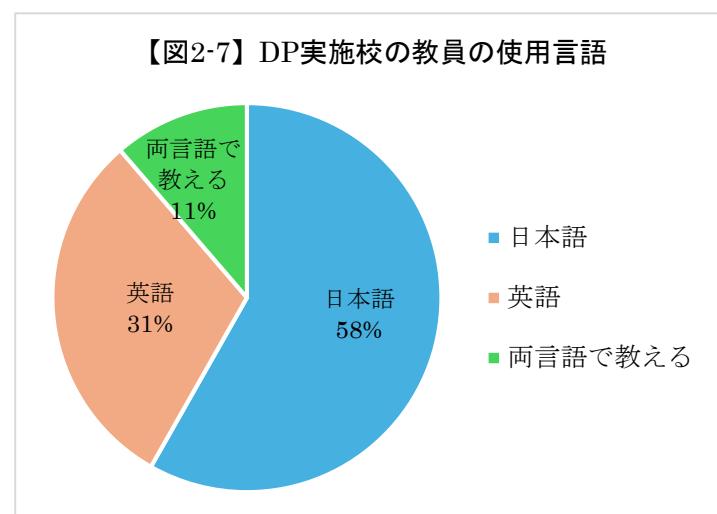
#### 【英語による指導に関わる教員について】

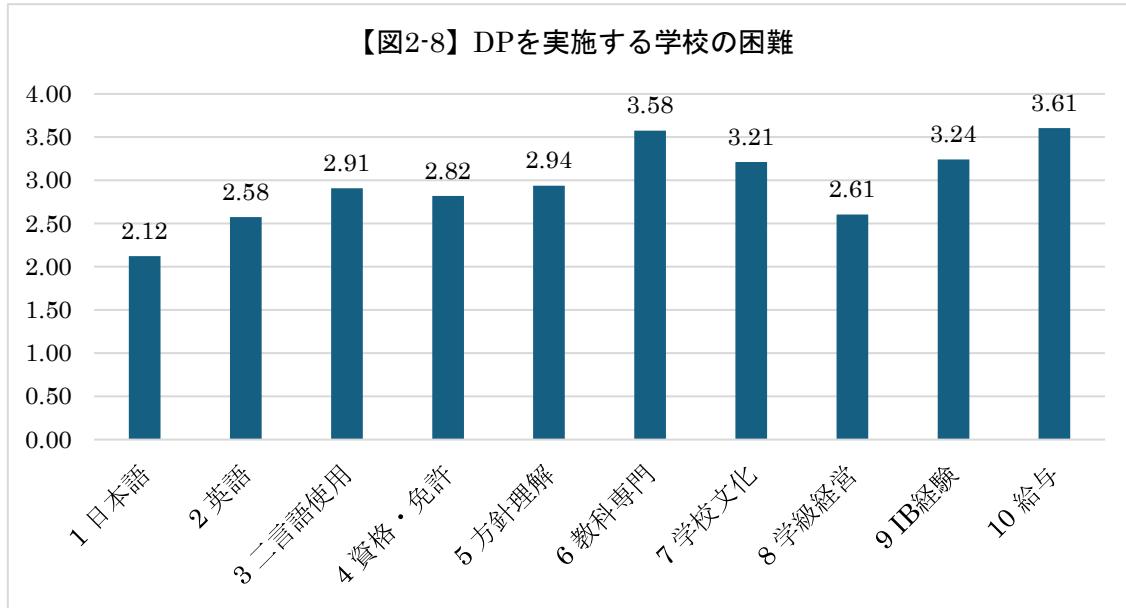
英語を使用する機会について質問紙調査による把握を行なった。DPの教科指導に関わる教員について、日本語のみで対応している教員は340名(58%)、英語で対応している教員は178名(31%)、両言語で教える教員は66名(11%)という結果となった。日本語で対応する場合が58%であることから、DPでは半数以上の教員が日本語で対応している一方、40%以上の教員は英語で対応しており、ある程度の英語の運用能力が必要であることがうかがえる。

この調査では、「授業は日本語であるがテキストが英語」、「英語のテキストを授業内で使用する」、「英語のテキストは使用せず日本語の資料のみで授業を行う」などの単純に分類しにくい状況については考慮できていないため、インタビューなどの質的側面からも実際の使用言語に関する課題や成果について学術的に検討する必要があると考えられる。

#### 【DPを実施する学校の困難について】

DPを実施する際の困難について、5件法による回答を得た(1 ほぼない・2 あまりない・3 どちらともいえない・4 ややある・5 よくある)。スコアが高いほど困難の程度が高いことを示している。結果は以下の通り。





最も多いため項目は、「⑩教員の給与」となった。IBでは教科によっては教科の知識だけでなく、英語の運用能力も求められるため、外国人教員の雇用や日本の教員免許を持ち英語で教科指導ができる教員を求めることがあると考えられる。ある程度の給与を提示できない場合は採用や継続が困難になるため、給与の設定については特に課題として挙げられたと考えられる。

次に多かった項目は、「⑥教科の専門性」である。IBの教員として雇用する際には、教科的な知識や英語の運用能力などの専門性が求められるため、⑥のスコアが高くなつたと考えられる。DPでは数年ごとにIB機構の開催するワークショップへの参加が義務付けられているため、教科担当者として指導しながらもさらに専門性を高める姿勢が求められる。

続く項目は、「⑨IBに関する経験」である。IB経験のある教員の雇用は、該当する教員が少ないため難しいと考えられる。このためIBでは大学の教員養成と連携したプログラムを用意し、教員の確保に応えようとしているが、公立高校などでは人事異動があるためマッチングがうまくいかない事例や、教員の異動によりまた新たにIB教員を探す必要があるという点が課題につながっていると考えられる。教員の雇用についても、より詳細な聞き取りなどを通じて内実を明らかにすることが求められている。

その次は、「⑦学校文化への適応」となった。このことは、外国人の教員や海外経験のある教員が学校の文化に適応する必要性から課題として挙げられた可能性がある。実際にどのような課題があるかについては詳細に検討していくことが求められる。

#### 4. まとめ

本報告では、質問紙への回答があった学校のみを分析の対象とした。IBの拡大により英語による教科学習が広がってきており、その状況を把握し既存の教育の枠組みに応用するには基礎的なデータが不可欠である。最近IB認定校になったばかりの学校も多く、今回提示したデータよりも学校数が増加していることが想定される。今回参加できなかった学校についても引き続き依頼を行い、基礎調査への協力を促すことで、より現実に近いデータによる情報発信が可能となると考える。

今後は、継続的に基礎的なデータを整理することに加え、学校の訪問などを通して、教員に対する聞き取り調査および授業の分析を行うことで、教室での実際に迫る研究の実施を検討している。発展的な分析を行うことにより、英語による教科学習が生徒・教員・学校にどのような影響を与えていているのかを明らかにし、IB 校における調査を通じて得られた知見を IB 校以外の学校にも活かし繋げることが求められると考える。

### 【謝辞】

本研究は、33 校の IB 認定校の協力を得て質問紙調査を実施した。協力いただいた関係者の皆様には深く感謝の意を表します。

### 【引用文献一覧】

- 国際バカロレア機構（IBO）（2014a）『母語以外の言語による IB プログラム学習』IBO.
- 国際バカロレア機構（IBO）（2014b）『IB プログラムにおける「言語」と「学習」』IBO.
- Abbott, A. (2022). Translating aspects of cognitive load theory into practice: Nuanced results from the worked example effect in South African mathematics classrooms. *Impact*, 16, 21-24.
- Chu, H. C., Chen, J. M., & Tsai, C. L. (2017). Effects of an online formative peertutoring approach on students' learning behaviors, performance and cognitive load in mathematics. *Interactive Learning Environments*, 25(2), 203-219.  
<https://doi.org/10.1080/10494820.2016.1276085>

### （4）インターナショナルスクールの訪問から得られた知見

9 月に地方圏に位置するインターナショナルスクール X 校（以下 ISX 校）にて視察を行った。一条校とは異なる IB 校を訪問することで、一条校の IB 校の特徴を改めて認識することができた。例えば、日本の大学の IB 入試について、ISX 校の教員は、日本国内外の大学出願を数多く指導する。指導経験のある教員は、日本の大学では統一された出願プロセスが無く、大学ごとに出願手続きが異なるため、把握が困難でプロセスが複雑であると述べていた。今後、出願システムをよりシステムティックに運用することの必要性が示唆された。

## 2-3. 大学調査

大学調査（大学及び修了生を対象とした調査）では、「①大学調査」及び「②修了生調査」を行う。なお、「1-1. 業務の概要」の「2) 業務の内容」で述べた通り、「①大学調査」の質問紙調査による部分については、「基礎調査（大学調査）」として位置づけたため、「2-5. 基礎調査（大学調査）」において詳述する。

### ◆大学及び修了生を対象とした調査（大学調査）

- ①大学調査…日本の大学での IB を活用した入試に関する実態調査を行う。
  - i) IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査
  - ii) IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査
  - iii) IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査
- ②修了生調査…IB 校卒業後の大学での学びやその後の進路を明らかにする。
  - i) IB 修了生の大学入学後の学びの実態
  - ii) IB 修了生の大学卒業後の進路

### 1) 調査の概要

#### (1) 調査の目的

本調査の目的は、今日の日本における国際バカロレア（以下、IB）を活用した入試の現状と課題、そして IB 修了生の大学入学後及び卒業後の進路状況を明らかにすることである。それにより、今後 IB を活用した入試の導入を検討している大学や現在実施している大学での入試のさらなる改善への示唆を得ることができる。また、IB 修了生の大学入学後の学習パフォーマンス及び卒業後の進路等を明らかにすることで、日本における IB 教育の効果を検証するための基礎的なデータを示すことができるといえる。

#### (2) 問題の所在

文部科学省と IB 教育推進コンソーシアムは、2023 年 3 月 28 日に、国際バカロレア（IB）認定校が、今後認定校になる予定の候補校を含めて、207 校（2023 年 3 月 14 日時点）になったことを発表している。これにより、同省が掲げていた「2022 年度中に 200 校以上」という推進目標を達成したのである。これは、現在（2025 年 1 月）のイギリスにおける 135 校（昨年度から -2 校▼）、ドイツにおける 82 校（昨年度から +1 校△）、スイスにおける 54 校（昨年度から -1 校▼）やフランスにおける 24 校（昨年度から +2 校△）等、欧州の主要国と比較しても、非常に多くの認定校数を有していることが分かる。

このように、日本国内における IB 認定校数の拡大に伴い、問題となってくるのが、これらの IB 認定校を卒業し、国内の大学進学を希望する IB 修了生の大学入学者選抜である。従来、IB は国境を越えて提供されてきた国際教育資格及び大学入学資格であったものの、近年の日本における状況を含め、世界各国においても国内の IB 認定校を卒業し、国内の大学に進学する「国境を越えない IB 修了生」といった現象が見られるようになってきている（花井：2016）。日本においても、これまで IB 資格は、海外からの帰国生が取得する資格として、帰国生入試等で取り扱われてき

た。しかし、先述のように、国内におけるIB認定校数の拡大に伴い、今後これらの学校を卒業したIB修了生の選抜や受け入れ体制の整備は、国内大学にとって喫緊の課題であるといえる。2025年3月現在、日本国内においてIB資格を活用した入試を実施している大学は、82大学（昨年度より+4大学△）であり、まだまだ少ない状況である。

そこで、本研究では、国内におけるIBを活用した入試を実施している大学での実施状況、導入背景やプロセス、選抜方法、課題等について明らかにすることで、今後IBを活用した入試を導入する際の示唆を得たいと考えている。

また、IB資格を取得した生徒の大学入学後の学習パフォーマンスやその後の進路を含めた、IB修了生調査を実施することで、IBの効果を検証するための一つの指標を得ることができると考えている。

### （3）研究課題

以上の点を踏まえ、本調査研究では、以下の2つの研究課題を設定した。

#### 研究課題①：大学調査

- i) IBを活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査
- ii) IBを活用した入学者選抜の要件に関する調査
- iii) IBを活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

#### 研究課題②：修了生調査

- i) IB修了生の大学入学後の学びの実態
- ii) IB修了生の大学卒業後の進路

### （4）調査方法

本研究では、主に半構造化インタビュー調査（今年度はすべてオンライン実施）を通じて、IBを活用した入試を実施している大学における当該入試の導入背景、プロセス、選抜方法や課題等を明らかにする。

### （5）調査スケジュール

2024年度は、主に大学調査を中心に実施した。まず、昨年度に行なった4大学へのインタビュー調査に引き続き、今年度は3大学（後述する）に対して、半構造化インタビューを実施した。なお、修了生調査については、2025年度以降に準備を進める予定である。

### （6）インタビュー調査項目

本調査研究では、インタビュー調査の項目として、以下の項目を設定した。なお、インタビュー項目については、昨年度と同様である。

#### 調査項目

- ・IB入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？
- ・導入にあたって苦労したこと

- ・現在の実施体制（何名でIB入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

#### i) IBを活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査

- ・入試名称と実施区分（総合型選抜の一環かIB特別入試を実施しているのか？）
- ・対象学部・学科について
- ・選抜方法（小論、面接、書類等）について
- ・IBの最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行なっているのか？
- ・学部・学科ごとに選抜方法の違いはあるか？
- ・募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準
- ・どこの国・地域の修了生が多いのか？
- ・入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？
- ・選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

#### ii) IBを活用した入学者選抜の要件に関する調査

- ・出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？
- ・その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？
- ・出願（入学）要件の見直しなどは行なわれているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行なっているのか？
- ・IBサーティフィケートの取扱いについて（ディプロマのみを認めているのか？サーティフィケートも認めているのか？）
- ・IBデュアルランゲージプログラムの出願資格としての取扱い
- ・出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面したこと／している課題はあるか？

#### iii) IBを活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

- ・出願時期について、どのように設定しているか？DP最終試験と重ならないよう意識しているか？
- ・出願時期について、海外からの志願者（帰国情生または留学生）のニーズには対応しているか？海外からの出願は想定されているか？

#### iv) 入学後の追跡調査及び学生サポートについて

- ・入学後のIB修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？
- ・IBの入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？
- ・入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について
- ・入試区分ごとの追跡調査（IR部門との連携を通じて）の有無について
- ・IB入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行なっているのか？
- ・その他、IB入試に関連して何か課題に感じていることはあるか？

## 2) 進捗報告

### (1) 調査結果の概要

2024年7~8月にかけて、【表3-1】の3大学に対して、半構造化インタビューを実施した。以下、調査結果の概要を述べる。

【表3-1】調査対象大学

日時	大学名
7月5日(金) 10:00~11:00	国立E大学(①)
7月24日(水) 15:30~16:30	公立F大学(②)
8月26日(月) 13:00~14:00	国立G大学(③)

#### ①国立E大学

日 時：7月5日（金）10:00~11:00

対応者：国立E大学アドミッション担当教員1名

調査者：花井渉（九州大学）、江幡知佳（大学入試センター）、岩渕和祥（東京大学）、井藤眞由美（関西学院大学）、ルステモヴァ・アクトルクン（筑波大学）、浅越天真（九州大学大学院）

#### IB入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

まず、入試改革を通じ大学教育の質保証を行うことを意図して、2014年にアドミッションセンターが設立された。グローバルな視野を備えた人材の育成を目指した入試の在り方を検討する中で、理系の受験科目における英語の必修化や、英語の4技能試験の導入などの課題とともに、国際バカロレア（IB）特別入試の導入が一案となった。

他の国立大学の事例調査やIB校訪問を通じて、DP取得者にはセンター試験を課さず、面接と書類審査のみで評価するシンプルな入試設計を採用した。さらに、学内シンポジウムやセミナーを開催し、関係者の理解を深めた結果、2015年にIB入試導入を決定し、2016年度入試から教育学部以外の8学部で実施を開始、2017年度からは教育学部も加わり、現在では全学部でIB入試が行われている。

#### 導入にあたって苦労したこと

そもそもIBとは何かということや、IB入試を導入する必要性について、学部の先生方に議論を通して納得していただくことに困難を感じていた可能性がある。

#### 現在の実施体制（何名でIB入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

入試の体制については実施する学部ごとに異なる。

IB入試としての課題というよりは、他の入試方式も含めて全体的な入試業務の負担が大きいと

いう問題がある。IB 入試を他の入試と同時に実施することでスリム化を図っている。また、入試時期が遅いと他大学へ学生が流れてしまう可能性があるので、IB 入試を早めた。

#### 入試名称と実施区分（総合型選抜の一環か IB 特別入試を実施しているのか？）

国際バカロレア選抜（IB 特別入試として実施）

#### 対象学部・学科について

全学部

#### 選抜方法（小論、面接、書類等）について／IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？

#### 別途小論文や面接試験等を行なっているのか？

学部ごとに選抜方法は異なる。書類審査のみの場合もあれば、面接が加わる場合もある。

スコアのみで機械的に選抜するようなことはなく、書類審査のみのコースでもスコアに加えてエッセイ、TOK、CAS などの資料も総合的に評価される。

#### 募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準

歯学部では定員が設けられているが、その他は若干名。

背景としては、IB 出身者に対する期待があると考えられる。

#### どこの国・地域の修了生が多いのか？

海外のインターナショナルスクールから入学する学生もいるが、国内の IB 校を主な対象と想定していることもあり、国内からの進学者が多い。

#### 入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？

IB 入試の実施時期と辞退率の高さが大きな課題となっている。

併願を認めているため、他大学との競合や入試時期の設定が重要である。10～11 月の早い時期に入試を行うと、IB 生の最終試験と重なり出願が困難になる一方、1 月以降に実施するとすでに進学先が決まっているケースが増えてしまう。

また、合格率に比して入学率が低く、第一志望に選ばれることが少ない現状がある。そのため、大学の認知度向上や入試広報機会の充実を図り、IB 生の志望度を高める努力を続けている。

入試担当者としては、日本語を履修していない海外インター出身の生徒が出願を希望する場合にどのように対応していくのかについて、今後検討する必要があると感じている。

#### 選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

導入から一定期間が経過し、学部ごとに入試のノウハウが蓄積されてきていると感じている。また、各学部の入試担当教員の入れ替わりに対応して、IB の概要について説明を行なったり、定員化の働きかけも行なっている。

#### 出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？

学部によっても異なるが、言語 A、ないし B を日本語で履修し一定以上の成績評価を収めていることが求められている。

その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？

IB 入試の導入にあたり各学部で議論が行われたが、共通基準としては、大学教育の主要言語が日本語ということもあり日本語能力が一定以上必要、という点が重視されたと思われる。

トータルスコアの制限に関しては、DP 取得が学力保証と見なされるという共通認識のもと、多くの学部ではスコア基準を設けない方針が採用された。ただし、医学部医学科をはじめとしたいくつかの学部ではトータルスコアの基準を維持している。

なお、歯学部ではその制限を撤廃し、より柔軟な受け入れ体制に移行した。

出願（入学）要件の見直しなどは行なわれているのか？行なわれている場合、どの程度の間隔で見直しを行なっているのか？

必要に応じて、その都度得られた情報をもとにコミュニケーションを取りながら検討を行なっている。

出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

今まででは 1 月出願、2 月実施で行なってきた。IB の最終試験と重ならず、他の大学と競合しないという利点があった。ただ、試験実施前に他の大学へ進学を決めてしまうという危機意識や他の入試方式の日程との関係もあり、前倒しで 11 月下旬出願、12 月実施に変更された。

入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？

IB 選抜で入学した学生のサポートとして、入学後に横のつながりを作る試みや個別面談を行っている。初めは IB 生同士の交流を目的とした集まりを開催していたが、学生たちは自然につながるため、現在は個別面談に重点を置いている。

また、新入生のゴールデンウィーク明け頃に、学生の大学への適応状況や学習状況を確認するため、大学生活について話を聞いていた。多くの IB 生は大学入学前からレポート作成に慣れており、スムーズに大学への学びに移行しているケースがほとんどである。

さらに、GPA を定期的に把握し、必要に応じて学部と連携してサポートを行うなど、入学後の状況を継続的に追跡している。

IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について

（回答者の所属部署は）IB とは別に、全学的な入学前教育を担当している。

今後 IB 生を多く受け入れていく中で、仮に基盤学力という部分についていけないような学生が出てきてしまった場合も、学校推薦型・総合型選抜の合格者を対象とした入学前教育のプラットフォームにより対応が可能だと思われる。

### 入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

〔インタビューを実施した教員〕自身が IR センターという全学 IR 部門の構成員であり、全学の教学 IR も担っている。その意味で、IR 部門との連携の上で、上述の IB 生を対象とした個別面談や GPA の追跡を実施している。

### IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行なっているのか？

現時点では特にない。ただ、出願資料のフォーマット統一をお願いされることなどもあり、連携が可能であるなら検討したい。

(岩渕)

## ②公立 F 大学

日 時：7月 24 日（水）15:30～16:30

対応者：公立 F 大学学部教員 1 名、入試室職員 3 名（内 1 名は事務局長）

調査者：島田康行（筑波大学）、岩渕和祥（東京大学）、江幡知佳（大学入試センター）、井藤眞由美（関西学院大学）、ルステモヴァ・アクトルクン（筑波大学）、駒走聰俊（筑波大学大学院）

### IB 入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

学校推薦型選抜（IB）（以下、IB 入試）の導入背景として、学長の「IB 教員を育成したい」という方針に基づいた新しい学科の設置があった。2015 年頃から、当該学科の設置が進められた。

IB 入試の導入に先立ち、学科の設置を完了させなければならず、IB の教員養成に携われる教員、および IB 以外の分野を含むカリキュラム全体のマネジメントができる教員を集めることに苦労した。

2016 年に文部科学省から学科設置の認可が下りた。また、同年 9 月、IB 機構から IB 教員養成大学としての認可が下りた。

当時は AO 入試（現総合型選抜）が 9 月に、IB 入試が 11 月に実施されていた。AO 入試にはフルディプロマを取得済み or 取得見込みでないと IB 生は出願できない。対して、IB 入試には、日本語 A が 4 点以上で、IB 科目全体の中で 5 点以上の科目が 1 つ以上あれば出願可能とした。

### 導入にあたって苦労したこと

IB 入試の導入自体にはあまり苦労しなかった。

他大学にも、国際〇〇学科のような名称の学部学科があり、それらと差別化を図るために IB の教員養成と北欧への交換留学制度に注目した。

入試方法に関しては、AO 入試と IB 入試の 2 つを設け、間口を広げてできるだけ多くの IB 生を受け入れることを試みてきた。一般的には、どの大学の IB 入試も、フルディプロマ取得済み or 取得見込みでなければ出願できない。一方、F 大学では、「その学生が IB に関わってきたこと 자체が大切だ」という考え方のもと、IB 入試における出願要件をゆるやかに設定した。

現在の実施体制（何名で IB 入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

現在は、学科の教員 3 名、入試管理委員 1 名、事務局 5 名で IB 入試を行っている。IB 入試を導入した初年度は学科準備室の教員 3 名で入試（面接や小論文／プレゼンテーションの採点）を行っていた。

IB 入試の実施体制に関わる課題は特にないものの、IB 教員になりたいと考える学生を確保することが難しい。オープンキャンパスや学校訪問、ホームページ上の宣伝等を通じて努力を重ねている。

入試名称と実施区分（総合型選抜の一環か IB 特別入試を実施しているのか？）

総合型選抜と学校推薦型選抜（IB）

対象学部・学科について

IB 入試の実施は一つの学科に限定している。学内において、IB の存在自体への理解は進み、かつ IB 出身の学生が優秀であることが教員間で浸透しつつある。このため、事務局としては他学科にも拡がることを期待している。

選抜方法（小論、面接、書類等）について／IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？

別途小論文や面接試験等を行なっているのか？

総合型選抜と学校型選抜（IB）、どちらも提出書類のチェックや、小論文、面接などを行っている。

募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準

IB 教員になる人を多く獲得したいと考えているものの、他の入試区分で獲得する学生数等を鑑み、柔軟に対応できるように、現在はあえて定員化せず、若干名の募集をしている。

どこの国・地域の修了生が多いのか？

日本からの IB 生が多い。英語で IB を経験して海外から受験する生徒も少数いる。

入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？

設立当初から、当該学科は小規模であり、1 学年約 40 名程度。このため、学生一人ひとりに密着した手厚いサポートができるが、もう少し募集枠を広げたいと考えている。

来年から総合型選抜（IB 以外の資格でも出願可）においては定員化の予定がある。

選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

ここ最近で、カリキュラムの変更、入試制度の変更が続いたので、入試に関する委員会や教員間で議論してきた。

出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？

総合型選抜と IB 入試を併願する学生も一定数いる。IB ディプロマを取得した人は総合型選抜で入学し、ディプロマを取得できなかった人が IB 入試で救われたケースもある（ただし、全体を通してあまり受験者数は多くない）。

総合型選抜／IB 入試を問わず出願するほとんどの学生は国内一条校出身。

その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？

IB のフルディプロマが取れなくても、もう一回受験機会を与えるという発想に立っている。日本語 A が 4 点以上で、IB 科目全体の中で 5 点以上の科目が 1 つ以上というボーダーラインを設定した明確な理由はない。受験の間口を広げることを考えている。

出願（入学）要件の見直しなどは行なわれているのか？行なわれている場合、どの程度の間隔で見直しを行なっているのか？

特に大きな見直しはしていない。現在、総合型選抜において IB 出身者以外にも留学経験者やスピーチコンテスト入賞者、SGH・SSH 出身者等を募集している。

小論文の言語は日本語。プレゼンテーションに関しては、IB 出身者には EE の内容について、それ以外の受験者には自分で探究した課題について発表してもらう。

出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

総合型選抜は 9 月に出願、試験日は 10 月の始め、合格発表は 11 月 1 日／IB 入試は 11 月の中旬に出願、12 月に試験を実施。

入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？

特に個別で追跡はしていない。各授業での観察程度。

授業内で IB 修了生のパフォーマンスは高く、他の学生をリードしている印象がある。

IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？

IB 機構との連絡や IB 実習をサポートする事務職員／教員はいるが、IB 修了生担当の教員はない。大学全体でサポートしている。

入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について

入学前教育に関して、早い時期に合格した人には、日本語と英語の本を何冊か読ませてレポートを書かせている。

入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

本年度から IR 部門が立ち上がった。IB 入試に限らず、今後学生全体の追跡を行う予定。

IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行なっているのか？

特に他の大学との連携はしていない。

高校を訪問した際、IB 入試の出願にかかる書類の形式が大学ごとに異なると生徒の負担になるため、大学間で共通のフォーマットを用意してほしいという意見があった。

(江幡)

### ③国立 G 大学

日 時：8月 26 日（月）13:00～14:00

対応者：国立 G アドミッション担当教員 1 名

調査者：江幡知佳（大学入試センター）、井藤眞由美（関西学院大学）、ルステモヴァ・アクトルクン（筑波大学）

#### IB 入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

AP 事業で補助金を獲得し、2012 年に開始した。当時は学内で IB のことを知っている教職員は少なかったが、個人的に IB 教育に詳しい教員が中心となって立ち上げた。2012 年～2015 年を研究時期と捉え、ニュージーランドやアジアの IB 校を訪問して IB に関する学びや IB 生への理解を深めることに努めた。

初年度である 2012 年は、11 学部中 5 学部での導入であったが、2015 年以降は全学部（現在は学部の合併があり 10 学部）で実施している。

#### 導入にあたって苦労したこと

導入自体には特に苦労はなかったが、その後の発展においては苦労があった。

（文科省の IB 推進提言以前に IB 入試を導入している大学として）IB 生の獲得は世界との競争であるとの意識を強く持っている。

2015 年に IB 推進を担当する教員を配置し、日本の大学においてマイノリティである IB 生をサポートする体制を導入し、IB 生同士のネットワークも構築してきた。また、IB 校を訪問する際に入試の説明だけではなく大学が求める IB 生についてアピールするなど広報にも工夫を凝らしている（導入当初は年間 1 名程度の IB 生、2015 年当時は総計 6 名であった IB 生は、現在累計で 143 名）。

#### 現在の実施体制（何名で IB 入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

入試課があり、学部ごとにもそれぞれ入試担当教員がいる。

#### 入試名称と実施区分（総合型選抜の一環か IB 特別入試を実施しているのか？）

AO 入試（総合型選抜）の一つの形態としての IB 入試

#### 対象学部・学科について

2015 年以降は、全学部・学科で導入している。

選抜方法（小論、面接、書類等）について／IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行なっているのか？

原則として書類審査（成績評価証明書、自己推薦書、評価書）のみであるが、面接を取り入れる学部が増えている。

募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準

以前は若干名であったが、現在は全学部で定員化している。定員の設定人数が増加している学部もある。IB 生の特徴に関する研究を継続し、IB 生が 21 世紀型スキルを獲得していることのデータやエビデンスを蓄積して提示することで教員を説得して定員化が実現した。

どこの国・地域の修了生が多いのか？

海外生、帰国生、国内インターナショナルスクール生、一条校の DLDP 生、のバランスが取れて、多様な IB 生を受け入れている。国外からは、シンガポール、タイ、ドイツ、オランダ、イタリア、イギリス、スイス、フィリピン、ベルギー、インド、マレーシア、ニュージーランド、台湾など。

入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？

(IB 入試を導入した 2012 年当時は、海外からの学生を想定したものであったが、その後) IB 生が多様化したため、書類審査だけではなく面接を課す学部が増えた。IB の資格を取得していても IB 生らしいスキルを身につけているとは限らないため、面接を通じて、各学部が求める IB 生を見極める必要がある。

共通テストで求めていることを IB 生に求めるのは適切ではないと考えている。日本の大学は IB 生の特徴をもっと良く知るべきだと思う。

本学の IB 入試は比較的歩留まり率がよいが、それでも辞退者はいる。これを課題と捉え、入学前のカウンセリングなどによって IB 生が大学に求める要素を把握してそれに丁寧に対応することや、学部の魅力を正しく伝える努力をしている。

選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

入試委員会を月に 1 回開催している。IB 推進部署から情報提供を行い、学部からの情報や相談を受け付ける。

学部の教員と IB 推進部署との間でのコミュニケーションは密で、信頼関係があると感じている。オープンな意見交換によって、学部ごとに IB 生に求めるものが様々であることなどを把握でき、このことは面接の導入の提案につながった。

保護者や IB 校とも信頼関係を構築しており、フィードバックを受けて、それを IB 入試のあり方に反映させている。

出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？

全学部でフルディプロマを要求している。学部外のプログラムでは、IB サーティフィケートでの出願も受け付けている。

全般に高い言語（日本語）力を求めており、また、各学部の出願資格が示すように、それぞれに履修科目とレベル（HL）指定、科目のスコアの要件がある。

その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？

高い日本語力を求めるのは、国立大学として、日本語で履修する授業が多いため。

医学部と保健学科は日本語 B でも良いが、日本語による国家試験があるため HL6 以上を求めている。

法学部では英語力を重視するなど、学部ごとの求める資質を基準にしている。

出願（入学）要件の見直しなどは行なわれているのか？行なわれている場合、どの程度の間隔で見直しを行なっているのか？

定例会議での議論などをもとに、必要に応じて。

出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

8月募集と10月募集がある。10月募集は全学部を対象に実施しており、8月募集は5月に最終試験を受ける海外のIB生を主な対象として、医学部と工学部のみで実施している。

入学後のIB修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？

追跡しているが、GPAだけを見ると、IB生が際立っているわけではない。ただし、人数が少ないので比較は難しい。GPAで比較するのはIB生にとってフェアではないと感じている。

学会発表や課外活動で活躍するなど、ソフトスキルで秀でたIB生が多くいることを確認している。

HLとSLでは知識量に違いが生じる。IB生と相談して、SLの場合に不足する知識を特定して、教員にフィードバックしている。

IBの入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？

担当者はいる。IB推進部署の教員が中心となって、各学部、入試課、広報が連携する体制を整え、入学者の選抜と入学後のサポートを行なっている。

IB生に入学時のオリエンテーションを実施している。LINEを使ってIB生のコミュニティ（全体、学部ごと）を作っておりIB生が情報共有できる。また、担当教員にはLINEで常時相談することが可能。

学部ごとにもIB担当教員がいて学習サポートを行なっている。

IB生の悩みの例としては、日本の憲法など、既習を前提に大学教員が話をしてこと、グラフ電卓を使用するIB数学と日本の数学との相違、海外IB校出身の学生は入学当初はサークル活動をしたがらないこと、日本の考え方やシステムに慣れていないこと、などが挙げられる。

入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について

入学前カウンセリングを隨時行なっている。

### 入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

特になし。

### IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行なっているのか？

IB 入試に関しては、特に他の大学との連携はしていない。EE（課題論文）研究など、別の形での連携はある。

(井藤)

### (2) 考察（中間報告）

以上、3 大学における IB を活用した入試の現状と課題についてインタビュー調査を通じて明らかにした。そこでいくつかの項目について比較分析を行ない、その特徴を示したい。

【表 3-2】IB を活用した入試の現状と課題に関する比較分析表

選抜方法	書類審査のみ（成績評価証明書、自己推薦書、評価書）(1/3 大学) 書類審査のみ（最終スコア、EE、TOK、CAS などの資料）の学部もある(1/3 大学) 書類審査と面接(2/3 大学) 書類・面接・小論文(1/3 大学)
定員	若干名(2/3 大学)（ただし、IB 教員になる人を多く獲得したいと考えているものの、他の入試区分で獲得する学生数等を鑑み、柔軟に対応できるように、現在はあえて定員化せず、若干名の募集をしている大学 1/3 大学) 歯学部では定員を設けている(1/3 大学) 以前は若干名であったが、現在は全学部で定員化している。IB 生の特徴に関する研究を継続し、IB 生が 21 世紀型スキルを獲得していることのデータやエビデンスを蓄積して提示することで教員を説得して定員化が実現(1/3 大学)
どこの国、地域の修了生が多いのか？	海外のインターナショナルスクールから入学する学生もいるが、国内の IB 校を主な対象と想定していることもあり、国内からの進学者が多い(国立 E 大学) 日本からの IB 生が多い。英語で IB を経験して海外から受験する生徒も少数いる(公立 F 大学) シンガポール、タイ、ドイツ、オランダ、イタリア、イギリス、イスラエル、フィリピン、ベルギー、インド、マレーシア、ニュージーランド、台湾など(国立 G 大学)
選抜方法に係る課題	国際バカロレア特別入試の広報(1/3 大学) IB 入試の実施時期と辞退率の高さが大きな課題(1/3 大学)

	<p>併願を認めているため、他大学との競合や入試時期の設定が重要である。10~11月の早い時期に入試を行うと、IB生の最終試験と重なり出願が困難になる一方、1月以降に実施するとすでに進学先が決まっているケースが増えてしまう（1/3大学）</p> <p>合格率に比して入学率が低く、第一志望に選ばれることが少ない現状がある（1/3大学）</p> <p>日本語を履修していない海外インター出身の生徒が出願を希望する場合にどのように対応していくのかについて、今後検討する必要がある（1/3大学）</p> <p>もう少し募集枠を広げたい（1/3大学）</p> <p>IB生が多様化したため、書類審査だけではなく面接を課す学部が増えた。IBの資格を取得していてもIB生らしいスキルを身につけていえるとは限らないため、面接を通じて、各学部が求めるIB生を見極める必要がある（1/3大学）</p> <p>大学入学共通テストで求めていることをIB生に求めるのは適切ではないと考えている。日本の大学はIB生の特徴をもっと良く知るべきである（1/3大学）</p> <p>比較的歩留まり率がよいが、それでも辞退者はいる（1/3大学）</p>
出願（入学）要件（entry requirement）の設定	<p>日本語A、もしくはBで一定の基準点（2/3大学）</p> <p>IBディプロマ取得済み（または見込み）（1/3大学）</p> <p>日本語Aが4点以上で、IB科目全体の中で5点以上の科目が1つ以上というボーダーラインを設定（1/3大学）</p> <p>学部外のプログラムでは、IBサーティフィケートでの出願可（1/3大学）</p> <p>履修科目とレベル（HL）指定、科目のスコアの要件を設定（1/3大学）</p>
IBサーティフィケートの取り扱い	<p>総合型選抜とIB入試を併願する学生も一定数いる。IBディプロマを取得した人は総合型選抜で入学し、ディプロマを取得できなかった人（サーティフィケート取得者）がIB入試で救われたケースもある（1/3大学）</p> <p>IBのフルディプロマが取れなくても、もう一回受験機会を与えるという発想に立っている。日本語Aが4点以上で、IB科目全体の中で5点以上の科目が1つ以上というボーダーラインを設定した明確な理由はないものの、受験の間口を広げることを考えている（1/3大学）</p>
IBデュアルランゲージプログラムの出願資格としての取り扱い	英語のDPとの区別はしておらず、同等の資格として認めている
出願（入学）要件を設定する上での課題	高い日本語力を求めるのは、国立大学として、日本語で履修する授業が多いため（1/3大学）

	医学部と保健学科は日本語 B でも良いが、日本語による国家試験があるため HL6 以上を求めている（1/3 大学） 法学部では英語力を重視するなど、学部ごとの求める資質を基準にしている（1/3 大学）
出願時期	二期に分けて募集。8月募集と10月募集がある。10月募集は全学部を対象に実施しており、8月募集は5月に最終試験を受ける海外のIB生を主な対象として、医学部と工学部のみで実施している（1/3 大学） 今まで1月出願、2月実施で行なってきた。IB の最終試験と重ならず、他の大学と競合しないという利点があった。ただ、試験実施前に他の大学へ進学を決めてしまうという危機意識や他の入試方式の日程との関係もあり、前倒して11月下旬出願、12月実施に変更された（1/3 大学） 総合型選抜は9月に出願、試験日は10月の始め、合格発表は11月1日／IB 入試は11月の中旬に出願、12月に試験を実施（1/3 大学）
その他、IB 入試に関連する課題	入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスの追跡は行なっているが、GPA だけを見ると、IB 生が際立っているわけではない。ただし、人數が少ないため比較は難しい。GPA で比較するのは IB 生にとってフェアではないと感じている（1/3 大学） IB 生の悩みの例としては、日本の憲法など、既習を前提に大学教員が話すこと、グラフ電卓を使用する IB 数学と日本の数学との相違、海外 IB 校出身の学生は入学当初はサークル活動をしたがらないこと、日本の考え方やシステムに慣れていないこと、などが挙げられる（1/3 大学）

まず、選抜方法については、今年度実施したインタビュー調査では、IB の最終スコアに加えて、筆記試験、小論文や面接を課している大学が 3 大学中 1 大学のみであった一方で、書類審査のみで選抜を行なっている大学が 3 大学中 2 大学であった。ただし、書類審査の種類としては、最終スコア、成績評価証明書、自己推薦書、評価書、EE、TOK、CAS の資料等、多様な書類に基づく審査が行われていることが明らかになった。一方で、IB の最終スコアのみでの選抜を行なっている大学は、現時点では確認することができなかった。

次に、定員については、3 大学中 2 大学において「若干名」としている一方で、歯学部については、明確な定員枠を設けている大学 1 大学あげられた。

次に、どの国や地域からの修了生が多いのかについて、今年度実施したインタビュー調査では、日本国内の IB 認定校出身の修了生を多く受け入れている大学が 3 大学中 2 大学であった。一方で、1 大学では、シンガポール、タイ、ドイツ、オランダ、イタリア、イギリス、スイス、フィリピン、ベルギー、インド、マレーシア、ニュージーランド、台湾など、世界各国からの志願者があり、IB を活用した入試を実施することで、国内のみならず、世界各国からの志願者の増加に一定程度の効果が見込まれることが分かった。また、さらに、日本国内の認定校からの修了生の志願

先として、こうした IB を活用した入試を実施している大学が選ばれている、または受け皿となっていることが明らかになった。

次に、選抜方法に係る課題については、IB 入試の実施時期と辞退率の高さ、併願を認めたことにより、他大学との競合や入試時期の設定、10~11 月の早い時期に入試を行うと、IB 生の最終試験と重なり出願が困難となる一方、1 月以降に実施するとすでに進学先が決まっているケースが増えてしまう、そして、合格率に比して入学率が低く、第一志望に選ばれることが少ない現状があるといった入試時期の設定、実際の入学者の確保等が課題としてあげられている。

出願（入学）要件 (entry requirement) の設定については、IB ディプロマ取得済み（または見込み）としている大学が 3 大学中 1 大学あり、最終試験の結果ではなく、IB 教育自体の内容や学習経験を評価していることが分かった。一方で、HL 科目指定や特定の分野や日本語 A もしくは B において一定程度の成績を求める大学が多かった。

次に、IB サーティフィケートの取り扱いについては、それのみでの出願を認めている大学は、1 大学のみであった。一方で、IB デュアルランゲージプログラムの出願資格としての取り扱いについては、いずれの大学も、英語の DP との区別はしておらず、同等の資格として認めていることが明らかになった。また、一部の大学では、フルディプロマを取得できなかった受験生でも、一定のボーダーラインを設けることで受験機会を与えるようにしている大学もあり、サーティフィケートがフルディプロマを取得できなかった受験生の第二の受験機会（救済措置）として利用できるものになっていることが明らかになった。

次に、出願（入学）要件を設定する上での課題については、学部ごとに重視している言語や授業で使用する言語等を考慮した基準の設定を行なっている大学が多く、その設定が課題であることが明らかになった。

また、出願時期については、国内、海外からの出願を想定した場合に、2 期に分けて募集を行なう大学が確認できた。また、出願時期を 11 月中旬～下旬に設定し、12 月に試験を実施する大学が多いことが明らかになった。また、かつては 1 月出願、2 月試験を実施していた大学も、他の大学が先に決まってしまうことで、当該大学の受験者が減ってしまうために、前倒しをした大学もあり、多くの大学が 11 月中旬～11 月下旬の出願、12 月の試験実施というスケジュールにする大学が多いことが明らかになった。

そして、その他、IB 入試に関する課題については、入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスの追跡は行なっているものの、GPA だけでは、IB 生が際立っているわけではないことが明らかにされている。ただし、人数が少ないと比較は難しく、今後も継続的に追跡調査を進めることで、IB 修了生の学習効果が見えてくることが期待されている。一方で、GPA で比較するのは IB 生にとってフェアではないと感じるといった意見も出されており、多様な指標を用いた学習パフォーマンスの評価が求められているといえる。また、IB 生の悩みの例としては、日本の憲法など、既習を前提に大学教員が話をすること、グラフ電卓を使用する IB 数学と日本の数学との相違、海外 IB 校出身の学生は入学当初はサークル活動をしたがらないこと、日本の考え方やシステムに慣れていないことなどが挙げられており、IB 修了生が高校までの学習経験や学校文化と大学での学習環境・文化に適応することが困難なケースがあり、そのサポートが課題であることが明らかになった。

(3) 今年度（令和6年度）の調査まで得られた示唆

今年度までに、大学調査班では国内においてIBを活用した入試を実施している大学（計7大学）へのインタビュー調査を実施した。

**【表3-3】2023年度調査を含めたIBを活用した入試の現状と課題に関する比較分析表  
(7大学比較)**

選抜方法	書類審査のみ（成績評価証明書、自己推薦書、評価書）（1/7大学） 書類審査のみ（最終スコア、EE、TOK、CASなどの資料）の学部もある（1/7大学） 書類審査と面接（2/7大学） 書類・面接・小論文（2/7大学） IBの最終スコアと、志望理由書、課題論文（EE）の日本語の要約とオリジナルのコピー、TOK・CASに関する活動レポートを全体的に評価（1/7大学） 理系の学部では筆記試験や口頭試問（面接）（1/7大学） 教育系の学部では筆記試験とプレゼンテーション（1/7大学） 国際教養学部、国際商学部、理学部、データサイエンス学部では、筆記試験（小論文もしくは総合問題）+面接（1/7大学） 医学部看護学科：面接（1/7大学） 医学部医学科では、第1次選考（書類審査：IB資格の成績+英語スコア）+第2次選考（面接）+第3次選考（IB資格の成績と面接の成績の合計点に基づく合格者の決定）（1/7大学）
定員	若干名（6/7大学）（ただし、IB教員になる人を多く獲得したいと考えているものの、他の入試区分で獲得する学生数等を鑑み、柔軟に対応できるように、現在はあえて定員化せず、若干名の募集をしている大学1/7大学） 医学部のみ2名（1/7大学） 医学部のみ3名（1/7大学） 医学部のみ5名（1/7大学） 歯学部では定員を設けている（1/7大学） 以前は若干名であったが、現在は全学部で定員化している。IB生の特徴に関する研究を継続し、IB生が21世紀型スキルを獲得していることのデータやエビデンスを蓄積して提示することで教員を説得して定員化が実現（1/7大学）
どこの国、地域の修了生が多いのか？	中国の他のアジア諸国、オーストラリア、ニュージーランド、北米、中南米、ヨーロッパなど（A国立大学） ドイツ、シンガポール、イギリス、オランダ、ベトナム、中国（B私立大学）

	<p>イタリアやシンガポール、イギリス（C 国立大学）</p> <p>国内の一条校出身者からの出願が多い（7～8割程度）（D 公立大学）</p> <p>海外のインターナショナルスクールから入学する学生もいるが、国内の IB 校を主な対象と想定していることもあり、国内からの進学者が多い（国立 E 大学）</p> <p>日本からの IB 生が多い。英語で IB を経験して海外から受験する生徒も少数いる（公立 F 大学）</p> <p>シンガポール、タイ、ドイツ、オランダ、イタリア、イギリス、イスラエル、フィリピン、ベルギー、インド、マレーシア、ニュージーランド、台湾など（国立 G 大学）</p>
選抜方法に係る課題	<p>確定スコアと見込みスコアの比較（2/7 大学）</p> <p>国際バカロレア特別入試の広報（2/7 大学）</p> <p>全ての学部学科において、教員ではなく、アドミッションオフィサーが入試を集約して選考していく体制を構築したい（1/7 大学）</p> <p>IB 入試の出願時期と実施時期（IB の 5 月試験と 11 月試験によって出願までの期間の違いが生じてしまう）（1/7 大学）</p> <p>IB スコアにおける「リマーク」の取り扱いが難しい（1/7 大学）</p> <p>IB スコアの見込み点で合格し、その後最終試験でディプロマが取得できなかつたとしても入学を認めている（1/7 大学）</p> <p>IB 入試の実施時期と辞退率の高さが大きな課題（1/7 大学）</p> <p>併願を認めているため、他大学との競合や入試時期の設定が重要である。10～11 月の早い時期に入試を行うと、IB 生の最終試験と重なり出願が困難になる一方、1 月以降に実施するとすでに進学先が決まっているケースが増えてしまう（1/7 大学）</p> <p>合格率に比して入学率が低く、第一志望に選ばれることが少ない現状がある（1/7 大学）</p> <p>日本語を履修していない海外インター出身の生徒が出願を希望する場合にどのように対応していくのかについて、今後検討する必要がある（1/7 大学）</p> <p>もう少し募集枠を広げたい（1/7 大学）</p> <p>IB 生が多様化したため、書類審査だけではなく面接を課す学部が増えた。IB の資格を取得していても IB 生らしいスキルを身につけていいるとは限らないため、面接を通じて、各学部が求める IB 生を見極める必要がある（1/7 大学）</p> <p>大学入学共通テストで求めていることを IB 生に求めるのは適切ではないと考えている。日本の大学は IB 生の特徴をもっと良く知るべきである（1/7 大学）</p> <p>比較的歩留まり率がよいが、それでも辞退者はいる（1/7 大学）</p>

出願(入学)要件(entry requirement)の設定	HL科目指定(例:歴史か地理か哲学、いずれか一つをHLで履修していること)(2/7大学) 国際系36点以上(1/7大学) 薬学部32点以上(1/7大学) 医学系38点以上(2/7大学) 日本語A、もしくはBで一定の基準点(3/7大学) 理系の学部では、必ず数学HLで5点以上(1/4大学) IBディプロマ取得済み(または見込み)(3/7大学) 日本語Aが4点以上で、IB科目全体の中で5点以上の科目が1つ以上というボーダーラインを設定(1/7大学) 学部外のプログラムでは、サーティフィケートでの出願可(1/7大学) 履修科目とレベル(HL)指定、科目のスコアの要件を設定(1/7大学)
IBサーティフィケートの取り扱い	理工学部の英語コースのみサーティフィケートも認めている(ただし、SATのスコアも求める)(1/7大学) IBディプロマ取得者のみ出願可(3/7大学) 総合型選抜とIB入試を併願する学生も一定数いる。IBディプロマを取得した人は総合型選抜で入学し、ディプロマを取得できなかつた人(サーティフィケート取得者)がIB入試で救われたケースもある(1/7大学) IBのフルディプロマが取れなくても、もう一回受験機会を与えるという発想に立っている。日本語Aが4点以上で、IB科目全体の中で5点以上の科目が1つ以上というボーダーラインを設定した明確な理由はないものの、受験の間口を広げることを考えている(1/7大学)
IBデュアルランゲージプログラムの出願資格としての取り扱い	英語ディプロマ・プログラム(DP)との区別はしていない(4/7大学)
出願(入学)要件を設定する上での課題	通っていた高校で学んでいた範囲は科目によって異なるため、入学前時点での丁寧な支援が必要(1/7大学) 最終試験のスコアの正確性に疑問を感じている(1/7大学) デュアルランゲージとフルに英語でDPを受けた生徒であっても、TOEFLなどの英語スコアの提出を求めている(1/7大学) 高い日本語力を求めるのは、国立大学として、日本語で履修する授業が多いため(1/7大学) 医学部と保健学科は日本語Bでも良いが、日本語による国家試験があるためHL6以上を求めている(1/7大学) 法学部では英語力を重視するなど、学部ごとの求める資質を基準にしている(1/7大学)
出願時期	二期に分けて募集(3/7大学)

	<p>8月募集と10月募集がある。10月募集は全学部を対象に実施しており、8月募集は5月に最終試験を受ける海外のIB生を主な対象として、医学部と工学部のみで実施している（1/7大学）</p> <p>IB入試の実施時期が10月や11月のため、IBの最終試験が11月に実施されるような学校の生徒には負担となっている可能性がある（11月出願の場合）（1/7大学）</p> <p>今まで1月出願、2月実施で行なってきた。IBの最終試験と重ならず、他の大学と競合しないという利点があった。ただ、試験実施前に他の大学へ進学を決めてしまうという危機意識や他の入試方式の日程との関係もあり、前倒して11月下旬出願、12月実施に変更された（1/7大学）</p> <p>総合型選抜は9月に出願、試験日は10月の始め、合格発表は11月1日／IB入試は11月の中旬に出願、12月に試験を実施（1/7大学）</p>
その他、IB入試に関連する課題	<p>IBの最終スコアと本人の学力の差の見極め（1/7大学）</p> <p>インターナショナルスクールと一条校でのIB教育の違いがあるのかどうか（1/7大学）</p> <p>教員不足（1/7大学）</p> <p>各大学によって出願の時期や選考方法が異なっていたり、現在でもIB入試に関する情報収集がしにくい（1/7大学）</p> <p>入学者が増えない中でIB入試を継続していくモチベーションについて（1/7大学）</p> <p>IB入試のみ異なる時期に実施することは難しい（1/7大学）</p> <p>IB科目への単位認定について（1/7大学）</p> <p>入学後のIB修了生の学習パフォーマンスの追跡は行なっているが、GPAだけを見ると、IB生が際立っているわけではない。ただし、人數が少ないため比較は難しい。GPAで比較するのはIB生にとってフェアではないと感じている（1/7大学）</p> <p>IB生の悩みの例としては、日本の憲法など、既習を前提に大学教員が話すこと、グラフ電卓を使用するIB数学と日本の数学との相違、海外IB校出身の学生は入学当初はサークル活動をしたがらないこと、日本の考え方やシステムに慣れていないこと、などが挙げられる（1/7大学）</p>

これまでの調査から得られた示唆については、以下の点を挙げができる。

#### 示唆①：IB修了生の大学入学後の学修パフォーマンスに関するエビデンス蓄積の必要性

これまでインタビュー調査を実施した7大学中、2大学において書類審査に加えて、小論文もしくは面接を課している大学がみられた。多くの大学からは、まだIB教育を受けてきた志願者の

大学で学ぶ準備がどの程度できているのか、どのようなことを IB 教育を通じて学んできたのかについて学内での理解が十分進んでおらず、念のために小論文や面接で IB 修了生の資質・能力を確認したいと考える大学が多くみられた。一方で、大学内的一部の学部・学科において、書類審査のみで選抜を行なっているケースも 2 大学において確認することができた。しかし、全体的にはまだ書類審査のみで選抜するには不安の声があがっていた。これらの点から、今後も継続的な広報活動やシンポジウムの開催、IB 取得による入学者の入学後の学修パフォーマンスの追跡調査（トラッキング）によるエビデンスの蓄積が求められるといえる。

### **示唆②：IB 教育システムと日本の大学入学者選抜制度の違いから生じる課題の克服**

選抜方法については、各大学においてさまざまな課題を抱えていることが明らかになった。特に、見込みスコアと確定スコアの差については、7 大学中 2 大学が課題として挙げている。これは、出願時に提出される IB の最終試験の見込みスコアと最終的な確定スコアとの間に大きな差が生じてしまっている際に、それをどのように選抜資料として取り扱えばよいのかが課題として挙げられていた。

また、IB 特別入試の広報についても、課題として挙げる大学がみられた。これは、国内における IB を活用した入試を実施している大学が、大学全体で IB 入試を実施しているケースもあれば、一部の学部において実施しているケース等、多様な状況にあり、まとまった入試情報の提供が困難な状況にあることが一因であると考えられる。

また、その他の課題として、IB 入試の出願時期と実施時期に関する課題が挙げられた。これは、一部の国立大学では、1 月出願・2 月試験を実施していたものの、多くの私立大学では 10 月～11 月に入試を実施しており、多くの志願者が私立大学に進学してしまうため、国立大学においても私立大学に合わせて、出願時期と入試の実施時期を早める措置を講じているケースがみられた。しかし、10～11 月の早い時期に入試を行うと、IB 生の最終試験と重なり出願が困難になる一方、1 月以降に実施するとすでに進学先が決まっているケースが増えててしまうという、IB の最終試験と国内の出願・入試時期の設定を課題として挙げる大学がみられた。

### **示唆③：世界各国からの IB 生の受け入れに向けた英語プログラム等の拡充の必要性**

出願（入学）要件の設定について、多くの大学においては、日本語 A もしくは B の HL や一定の基準を満たすことを求めるケースがみられた。これは、IB を活用した入試を実施している大学においても、入学後に多くの授業が日本語で実施されるため、入学要件として IB の日本語を要件とするケースが多く確認された。一方で、この点については、日本の大学の授業の多くが日本語で実施されており、世界規模で展開されている IB 認定校からの志願者の受け入れの可能性が限定されてしまっていることを示唆するものであると考える。今後、学部段階における英語プログラムや英語での授業の拡大等が求められる。

## **3) 今後の見通し**

今後の研究の計画については、以下のとおりである。

### **①国内外の大学での IB を活用した入試に関する実態調査（先行研究及びデータ収集・整理）**

2025 年度は、2024 年度に引き続き、国内外の大学における IB を活用した入試に関する先行研究の検討や情報収集・整理を進める。また、「国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧」の情報をレビューし、必要に応じてアップデート作業を行う。また、情報収集・整理と並行して、インタビュー調査へ向けた調査項目の準備を進める。また、可能な範囲で予備調査を実施し、それに基づいて調査項目の再検討を行う。

## ②IB を活用した入学者選抜の形態・方法・要件・出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査（国内における IB を活用した入試を実施する大学への訪問調査）

2025 年度は、2024 年度から引き続き、国内における IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。基本的には訪問調査を実施する予定であるが、適宜オンライン会議システムも活用し、オンラインでのインタビュー調査も実施する。

また、2025 年 2~3 月にかけて、アメリカ及びイギリスの大学における IB を活用した入試に関する訪問調査を実施するとともに、オーストラリアの 3 大学を訪問し、職員へのインタビューと、DP 修了生へのインタビューを行った。詳細については、次年度（2025 年度）の報告書において報告する予定である。

さらに、2026 年度は、引き続き、IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。また、前年度の調査から明らかになった項目について整理するとともに、今日の日本における IB を活用した入試の現状と課題について、更なる活用に向けた示唆について、学会・シンポジウムでの報告や論文としての発信を積極的に進める。

## ③国内外の大学での IB を活用した入試に関する実態調査（国内における IB を活用した入試を実施する大学への訪問調査及び全体総括）

2027 年度は、引き続き、IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。また、2023 年度から進めてきた調査研究（今日の日本における IB を活用した入試の現状と課題等）について、全体総括を行ない、学会・シンポジウムでの報告や論文としての発信を積極的に進める。

（花井）

## 2-4. 基礎調査（学校調査）

### 1) 調査の概要

本調査の目的は、日本の IB 校（一条校）に対する実態調査を実施し、基礎的データを収集・蓄積することである。調査対象は、ディプロマプログラム (DP)、中等教育プログラム (MYP)、初等教育プログラム (PYP) を実施する一条校とする。

文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム事業において、DP 校を対象とした実態調査が 2019 年に実施されており、「デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラムに関するアンケート調査結果」として公表されている。この先行調査を参照しつつ、調査項目を精査し、質問紙を開発した。また、これまで DP 校のみが対象であったが、IB 校の拡大状況を踏まえ、調査対象を MYP 校、PYP 校の一条校に拡大した。

本調査において、全国の IB 校に依頼した質問紙調査の調査票は、巻末資料を参照のこと。

### 2) 進捗報告

1月 8 日（水）国内の IB 校に調査票のフォームリンクまたはメールにて送信

PYP : 20 校／幼稚園 : 8 校、小学校 : 12 校、MYP : 20 校、DP : 46 校

3月 31 日（月）の時点で回収状況

PYP : 20 校／幼稚園 : 8 校、小学校 : 12 校、MYP : 18 校、DP : 39 校

※DP 校のうち 1 校は DP 終了との回答あり。また、2 校は 2024 年度から DP 開始のため参加不可の回答あり。

### 3) 今後の見通し

引き続き、調査票の回収を進める。また、今後の生徒調査、教員調査、大学調査を進める上で必要となる基礎的分析を行う。

## 2－5. 基礎調査（大学調査）

### 1) 調査の概要

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために、日本国内において IB を活用した入試を実施している大学に対して、入試区分、募集人員、対象学部、対象者、出願資格や求める IB スコア基準等を含む、基礎情報を収集、整理することである。

本調査では、「(1) 公開情報」と「(2) 非公開情報」の 2 種類の基礎情報を収集する。(1) 公開情報については、文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページに情報を掲載する（国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧／<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/admissions-policy/>）。また、(2) 非公開情報の回答データは、統計的に処理し、大学名や個人を特定できるかたちで公表はせず、今後の大学を対象とした調査実施の際の基礎データとし、報告書及び学会発表・論文等において公表する可能性があるものとして、収集・分析を行なう。

2024 年度も引き続き、株式会社トモノカイに IB を活用した大学入学者選抜の実施状況に関する基礎調査の実施を依頼した。なお、本調査において、全国の大学に依頼した質問紙調査の調査票は、巻末資料を参照のこと。

### 2) 進捗報告

11月 14 日（木）調査票を国内の大学へ送付開始（87 大学）

11月 20 日（水）調査票の送付完了

12月 13 日（金）調査票の回答期限

※3月 31 日現在、82 大学からの回答を回収済み（未回収：5 大学）。

### 3) 調査結果の概要

#### ①全体的傾向

##### (1) 国公私の別

IB 入試を導入する大学数の内訳は、国立大学 27 校、公立大学 9 校、私立大学 46 校である。国立大学は全国的に分散して導入している。一方、私立大学の導入は首都圏に集中しており、東北地方で 1 校（東北福祉大学）確認できるが、北海道や北陸地方の大学では確認できない。

##### (2) 導入年度

IB 入試の本格的拡大は 2010 年代半ば以降である。特に 2016 年度、2017 年度に導入が集中し、その後も継続的に拡大している。

##### (3) 対象学部

対象学部については、「一部の学部対象」が 43 校に対し、「全学部対象」は 38 校となっている。入試区分によって「一部の学部対象」と「全学部対象」を併用している大学も 1 校ある（中京大学）。大規模大学では部分的導入が多い一方で、全学部対象の導入例として、筑波大学・東京外国语大学・岡山大学・関西学院大学などが挙げられる。

【表 4-1】設置形態別の対象学部

設置形態	全学部対象	一部の学部対象	合計
国立大学	13 校	14 校	27 校
公立大学	4 校	5 校	9 校
私立大学	21 校	24 校	45 校
合計	38 校	43 校	81 校

## ②出願要件・基準

### (1) 出願資格の類型

出願資格は大きく三類型に分けられる。

- ・ IB ディプロマ資格者のみを対象（例：東北大学、秋田大学、筑波大学）：35 校
- ・ IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者も対象（例：帯広畜産大学）：4 校
- ・ IB 資格者に限定せず、その他の者を含む（例：北海道大学、弘前大学、国際医療福祉大学）：39 校
- ・ 「IB ディプロマ資格者のみ」の入試と「その他の者を含む」入試など、複数の資格類型の区分を併せもつ（例：順天堂大学）：4 校

### (2) 対象者の設定

最も一般的なのは、国内一条校+国内インターナショナルスクール+海外現地校 IB 生を含む包括的タイプで、60 校を超える。一方、対象者を国内の一条校出身者のみに限定する大学も複数存在する（例：弘前大学、お茶の水女子大学など）。

### (3) IB スコア基準

IB スコアの基準について、総合得点の基準を設けている大学は 11 校、科目得点の基準を設けている大学は 13 校であった。募集要項等で要確認としている大学は 12 校あり、そのなかには総合得点あるいは科目得点の基準を設けている事例が含まれる可能性がある。一方、基準なしとした大学は 53 校であった。基準の具体例を挙げると、筑波大学（36 点以上であることが望ましい（社会・国際学群国際総合学類）／38 点以上であることが望ましい（医学群医学類））、国際医療福祉大学（32 点以上）、岡山大学（39 点以上（医学部医学科）／32 点以上（薬学部薬学科））、藤田医科大学（38 点以上）、横浜市立大学（40 点以上（医学部医学科））などがある。特に医学部や難関大学においてスコア基準が設けられる傾向が強い。

## 4) 今後の見通し

今後の見通しとしては、本調査を通じて回収した調査票の収集、分析を進め、既存の国際バカラレアを活用した大学入学者選抜例一覧（文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムウェブサイト）の見やすさの改善を図りつつ、更新作業を進める。

# **卷末資料**

## **(1) 生徒調査質問紙**

- ①生徒調査質問紙（高校2年生対象）
- ②生徒調査質問紙（高校3年生対象）

## **(2) 生徒調査集計結果**

- ①高校2年生調査（4月～7月）
  - 全体
  - DP履修あり
  - DP履修なし

## **(3) 基礎調査（学校調査）調査依頼書・調査票**

- ①基礎調査（学校調査）調査依頼書
- ②基礎調査（幼稚園\_初等教育プログラム）調査票
- ③基礎調査（小学校\_初等教育プログラム）調査票
- ④基礎調査（中等教育プログラム）調査票
- ⑤基礎調査（ディプロマプログラム）調査票

## **(4) 基礎調査（大学調査）調査依頼書・調査票**

- ①基礎調査（大学調査）調査依頼書
- ②基礎調査（IBを活用した大学入学者選抜）調査票
- ③国際バカロレア（IB）を活用した入試概要

## **(5) 基礎調査（大学調査）集計結果**

- ①国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧

## 【高校2年生対象】

## 高校での学習・経験に関する調査

※質問1. (2) 学籍番号（生徒番号）の記入については、先生の指示に従ってください。

※質問文でとくに指定がない場合は、選択肢の中からもっともあてはまる番号に○をつけてください。

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(1) \_\_\_\_年\_\_\_\_組\_\_\_\_番

(2) 学籍番号（生徒番号）\_\_\_\_\_

(※(1)、(2)の欄は今後、追跡調査を行う際に照合するためだけに使用します。)

(3) 性別 ( )

(4) あなたは現在、ディプロマプログラム（DP）を履修していますか。

1. 履修している                            2. 履修していない

(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. インターナショナル・スクール（日本）

2. インターナショナル・スクール（海外）

3. 海外の現地校

4. 海外の日本人学校

5. 国際バカロレア初等教育プログラム（PYP）

6. 国際バカロレア中等教育プログラム（MYP）

7. あてはまるものはない

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

まったく	あまり	どちら	やや	とても
あてはま	あてはま	とも	あて	あて
らない	らない	いえない	はまる	はまる

- |                                |       |                       |
|--------------------------------|-------|-----------------------|
| (1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする  | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (2) 自分はどういう人間かを考えることがよくある      | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (3) 社会のことをよく勉強している             | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (4) 自然や環境のことをよく勉強している          | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている   | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする    | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (7) 問題を解決するために自分ができることを考える     | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (8) 課題があれば自分で解決しようとする          | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができている | ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |

まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
---------------------	--------------------	-------------------	-----------------	------------------

- (11) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている -- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (15) グループの目的を示し、グループの人たちを  
効果的に行動させることができる ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (16) 学校や社会の規則を守っている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、  
それに基づいて行動している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (18) 自分の行動に責任をとることができる ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (20) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (21) 困っている人を助けることがよくある ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (22) いつも新しいことに挑戦している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (23) いつも何か新しいことを生み出そうとしている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (24) 自分の能力を有効に使うことができている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (25) 健康的な生活に注意している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (26) 体力・身体つくりをしている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (27) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができている -- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (28) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (29) 社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている --- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (31) ストレスを感じることがあっても  
リラックスして前向きにとらえることができている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (32) 自分の態度や行動の正しさを確認することができるとよくある ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (33) 自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく ない	あまり ない	ときどき	よく	いつも ある
(1) 先生の話から知識を得る	1	2	3	4	5
(2) 教科書を中心に学ぶ	1	2	3	4	5
(3) 探究したい課題について問い合わせ立てる	1	2	3	4	5
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	1	2	3	4	5
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	1	2	3	4	5
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	1	2	3	4	5
(7) 英語で書かれた情報を収集する	1	2	3	4	5
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	1	2	3	4	5
(9) 本を一冊読む	1	2	3	4	5
(10) グループで協力して活動する	1	2	3	4	5
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	1	2	3	4	5
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	1	2	3	4	5
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	1	2	3	4	5
(14) 学習の成果を社会に発信する	1	2	3	4	5
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会) のよかつた点や課題を整理する	1	2	3	4	5
(16) 一問一答の問題を解く	1	2	3	4	5
(17) 用語や出来事を暗記する	1	2	3	4	5
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	1	2	3	4	5

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく ない	あてはま らない	あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
(1) 生徒会・委員会活動への参加	1	2	3	4	5	
(2) 部活動・クラブ活動への参加	1	2	3	4	5	
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	1	2	3	4	5	
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	1	2	3	4	5	
(5) ボランティア活動への参加	1	2	3	4	5	
(6) 海外との交流活動への参加	1	2	3	4	5	
(7) 留学(短期・長期・交換等)	1	2	3	4	5	

質問5. 学期中の平日（月曜～金曜）放課後の学習時間（＝1日あたりの平均）と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように（ ）内に0を記入してください。

例)「およそ（0）時間（40）分」、「およそ（2）時間（0）分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間： よおよそ（ ）時間（ ）分

(2) 1日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	およそ（ ）時間（ ）分
④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書ぐなど)	およそ（ ）時間（ ）分
⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)	およそ（ ）時間（ ）分

質問6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

1. 下のほう

2. まんなか

3. 上のほう

(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

1. 英検（実用英語技能検定）（級： ）

2. TOEFL（スコア： ）

3. TOEIC（スコア： ）

4. IELTS アカデミック・モジュール（スコア： ）

5. その他（具体的に： ）（スコア等： ）

6. 資格は取得していない

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

身に  
ついて  
いない  
あまり  
ない  
どちら  
について  
とも  
やや  
いえない  
身に  
ついて  
いる  
いる

- (1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (3) 困難な課題に取り組む力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (6) 人や社会によって違った考え方や文化があることへの理解 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (7) 他者を尊重し、ともに行動する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

身に  
ついて 身について  
いない いない いえない いる いる

- (8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (10) 自分の行動を評価し、次に生かす力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (11) 問題が起きたときに解決する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (12) 自ら率先して行動する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (14) 情報を処理し、活用する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (15) 地域社会の一員としての自覚 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (16) 日本社会の一員としての自覚 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (17) グローバルな社会の一員としての自覚 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (18) チームで協力して行動する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (19) リーダーシップの能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (20) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (21) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (22) 「数学」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (23) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (24) 「外国語(英語等)」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (25) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

まったく あまり どちら やや とても  
そう思わ そう思わ とも そう そう  
ない ない いえない 思う 思う

(1) 学校生活について

- ① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- ② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた  
今の自分の能力に満足している ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- ③ 高校生活全体に満足している ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

(2) 将来について

- ① 将来、学びたい分野について考えている ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- ② 将来、行きたい大学について考えている ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- ③ 将来、やりたい仕事について考えている ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

質問9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください（第一希望だけでも可）。

第一希望 ( ) 第二希望 ( )

1. 国内大学への進学      2. 海外大学への進学      3. 未定・わからない  
 4. その他（具体的に記入してください： ）

(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください（第一希望だけでも可）。

第一希望 ( ) 第二希望 ( )

1. 人文・社会系      2. 理・工・農系      3. 医・歯・薬・獣医学系  
 4. 看護・保健・衛生系      5. 教育・家政・福祉系      6. 芸術・スポーツ系  
 7. その他（具体的に記入してください： ）

(3) 高校やその後の学習を通じて、あなたが将来やりたいことを教えてください。以下の欄に自由に記述してください（「とくにない」「わからない」場合には、「なし」と記入してください）。

質問10. あなたの周囲の環境についておたずねします。

まったく	あまり	どちら	やや	とても
あてはまらない	あてはまらない	ともいえない	あてはまる	あてはまる

- (1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (2) 親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (6) 普段の生活の中でお金に困っていると感じことがある ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5  
 (13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

質問は以上です。ありがとうございました。

【高校3年生対象】

**高校での学習・経験に関する調査**

※質問1.(2) 学籍番号(生徒番号)の記入については、先生の指示に従ってください。

※質問文でとくに指定がない場合は、選択肢の中からもっともあてはまる番号に○をつけてください。

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(1) \_\_\_\_年\_\_\_\_組\_\_\_\_番

(2) 学籍番号(生徒番号) \_\_\_\_\_

(※(1)、(2)の欄は今後、追跡調査を行う際に照合するためだけに使用します。)

(3) 性別 ( )

(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

1. 履修している(フル・ディプロマの取得を目指す)
2. 履修している(科目履修生/サーティフィケートの取得を目指す)
3. 履修していない

(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. インターナショナル・スクール(日本)    | 2. インターナショナル・スクール(海外)    |
| 3. 海外の現地校                | 4. 海外の日本人学校              |
| 5. 国際バカロレア初等教育プログラム(PYP) | 6. 国際バカロレア中等教育プログラム(MYP) |
| 7. あてはまるものはない            |                          |

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
---------------------	--------------------	-------------------	-----------------	------------------

- |                                      |                       |
|--------------------------------------|-----------------------|
| (1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする -----  | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (2) 自分はどういう人間かを考えることがよくある -----      | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (3) 社会のことをよく勉強している -----             | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (4) 自然や環境のことをよく勉強している -----          | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができている -----   | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする -----    | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (7) 問題を解決するために自分ができることを考える -----     | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (8) 課題があれば自分で解決しようとする -----          | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができている ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |
| (10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができている ----- | 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5 |

まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
---------------------	--------------------	-------------------	-----------------	------------------

- (11) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている -- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (15) グループの目的を示し、グループの人たちを  
効果的に行動させることができる ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (16) 学校や社会の規則を守っている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、  
それに基づいて行動している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (18) 自分の行動に責任をとることができる ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (20) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (21) 困っている人を助けることがよくある ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (22) いつも新しいことに挑戦している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (23) いつも何か新しいことを生み出そうとしている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (24) 自分の能力を有効に使うことができている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (25) 健康的な生活に注意している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (26) 体力・身体つくりをしている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (27) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができている -- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (28) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (29) 社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている --- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (31) ストレスを感じることがあっても  
リラックスして前向きにとらえることができている ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (32) 自分の態度や行動の正しさを確認することができるとよくある ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5
- (33) 自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく ない	あまり ない	ときどき	よく	いつも ある
(1) 先生の話から知識を得る	1	2	3	4	5
(2) 教科書を中心に学ぶ	1	2	3	4	5
(3) 探究したい課題について問い合わせ立てる	1	2	3	4	5
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	1	2	3	4	5
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	1	2	3	4	5
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	1	2	3	4	5
(7) 英語で書かれた情報を収集する	1	2	3	4	5
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	1	2	3	4	5
(9) 本を一冊読む	1	2	3	4	5
(10) グループで協力して活動する	1	2	3	4	5
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	1	2	3	4	5
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	1	2	3	4	5
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	1	2	3	4	5
(14) 学習の成果を社会に発信する	1	2	3	4	5
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会) のよかつた点や課題を整理する	1	2	3	4	5
(16) 一問一答の問題を解く	1	2	3	4	5
(17) 用語や出来事を暗記する	1	2	3	4	5
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	1	2	3	4	5

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく ない	あてはま らない	あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
(1) 生徒会・委員会活動への参加	1	2	3	4	5	
(2) 部活動・クラブ活動への参加	1	2	3	4	5	
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	1	2	3	4	5	
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	1	2	3	4	5	
(5) ボランティア活動への参加	1	2	3	4	5	
(6) 海外との交流活動への参加	1	2	3	4	5	
(7) 留学(短期・長期・交換等)	1	2	3	4	5	

質問5. 学期中の平日（月曜～金曜）放課後の学習時間（＝1日あたりの平均）と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように（ ）内に0を記入してください。

例)「およそ（0）時間（40）分」、「およそ（2）時間（0）分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間： よおよそ（ ）時間（ ）分

(2) 1日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	およそ（ ）時間（ ）分
④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書ぐなど)	およそ（ ）時間（ ）分
⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)	およそ（ ）時間（ ）分

質問6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

1. 下のほう

2. まんなか

3. 上のほう

(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

1. 英検（実用英語技能検定）（級： ）

2. TOEFL（スコア： ）

3. TOEIC（スコア： ）

4. IELTS アカデミック・モジュール（スコア： ）

5. その他（具体的に： ）（スコア等： ）

6. 資格は取得していない

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

身に	あまり	どちら	やや	身に
ついて	身について	とも	身についてついて	
いない	いない	いえない	いる	いる

(1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

(2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

(3) 困難な課題に取り組む力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

(4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

(5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

(6) 人や社会によって違った考え方や文化があることへの理解 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

(7) 他者を尊重し、ともに行動する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

身に  
ついて 身についてとも 身についてついて  
あまり どちら やや 身に  
いない いない いえない いる いる

- (8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (10) 自分の行動を評価し、次に生かす力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (11) 問題が起きたときに解決する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (12) 自ら率先して行動する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (14) 情報を処理し、活用する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (15) 地域社会の一員としての自覚 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (16) 日本社会の一員としての自覚 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (17) グローバルな社会の一員としての自覚 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (18) チームで協力して行動する力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (19) リーダーシップの能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (20) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (21) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (22) 「数学」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (23) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (24) 「外国語(英語等)」に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (25) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力 ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

まったく あまり どちら やや とても  
そう思わ そう思わ とも そう そう  
ない ない いえない 思う 思う

(1) 学校生活について

- ① 学校の授業などを通じた今の自分の学習に満足している ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- ② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた  
今の自分の能力に満足している ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- ③ 高校生活全体に満足している ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

(2) 将来について

- ① 将来、学びたい分野について考えている ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- ② 将来、行きたい大学について考えている ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- ③ 将来、やりたい仕事について考えている ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

質問9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください（第一希望だけでも可）。

第一希望 ( ) 第二希望 ( )

- 1. 国内大学（国公立）への進学
- 2. 国内大学（私立）への進学
- 3. 海外大学への進学（私費）
- 4. 海外の大学への進学（奨学金等の経済支援が前提）
- 5. 未定・わからない
- 6. その他（具体的に記入してください： ）

(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください（第一希望だけでも可）。

第一希望 ( ) 第二希望 ( )

- 1. 人文・社会系
- 2. 理・工・農系
- 3. 医・歯・薬・獣医系
- 4. 看護・保健・衛生系
- 5. 教育・家政・福祉系
- 6. 芸術・スポーツ系
- 7. その他（具体的に記入してください： ）

(3) 質問9(1)で「1. 国内大学（国公立）への進学」「2. 国内大学（私立）への進学」と回答した方にうかがいます。あなたが現段階でもっとも希望する大学等に進学するとき、どのような区分の入試を受けるつもりですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

- 1. 大学入学共通テスト
- 2. 一般選抜（前期課程・後期課程）
- 3. 特別入試（学校推薦型選抜（指定校・公募）・総合型選抜など）
- 4. 特別入試（国際バカロレア（IB）特別入試など）
- 5. その他（具体的に記入してください： ）
- 6. まだ決めていない

(4) あなたは、大学入試対策として以下の取り組みをどの程度行っていますか。

まったく ない	あまり ない	ときどき	よく ある	いつも
------------	-----------	------	----------	-----

- |   |                            |       |                           |
|---|----------------------------|-------|---------------------------|
| ① | 大学入学共通テストや一般選抜のための勉強をしている  | ----- | 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 |
| ② | 英語運用能力等の資格試験に向けて勉強している     | ----- | 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 |
| ③ | 筆記試験（小論文やエッセイ）のための準備を行っている | ----- | 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 |
| ④ | 口述試験（面接）のための準備を行っている       | ----- | 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 |

(5) 高校やその後の学習を通じて、あなたが将来やりたいことを教えてください。以下の欄に自由に記述してください（「とくにない」「わからない」場合には、「なし」と記入してください）。

質問10. あなたの周囲の環境についておたずねします。

まったく	あまり	どちら	やや	とても
あてはま	あてはま	とも	あて	あて
らない	らない	いえない	はまる	はまる

- (1) 本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (2) 親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (3) 普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (4) 親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買っててくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (5) 勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (6) 普段の生活の中でも金に困っていると感じことがある ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (7) 親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (8) 親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (9) 周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (10) 周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (11) 家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (12) 親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5
- (13) 友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする ----- 1 —— 2 —— 3 —— 4 —— 5

質問は以上です。ありがとうございました。

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID : 全体集計

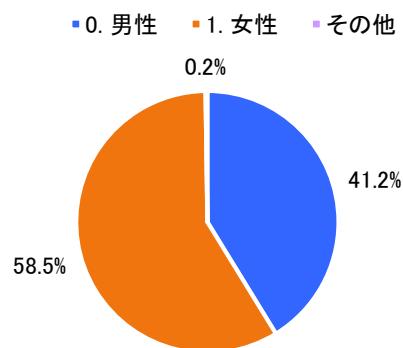
回答者数

1,794

## 質問1. あなた自身のことをうかがいます。

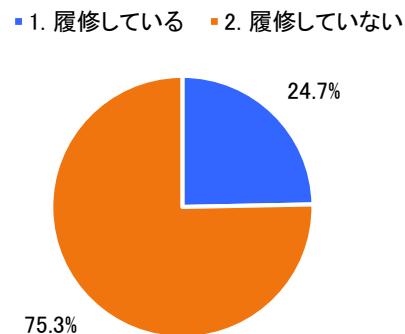
(3) 性別

選択肢	件数	割合
0. 男性	725	41.2%
1. 女性	1,029	58.5%
その他	4	0.2%
合計	1,758	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している	443	24.7%
2. 履修していない	1,351	75.3%
合計	1,794	100.0%



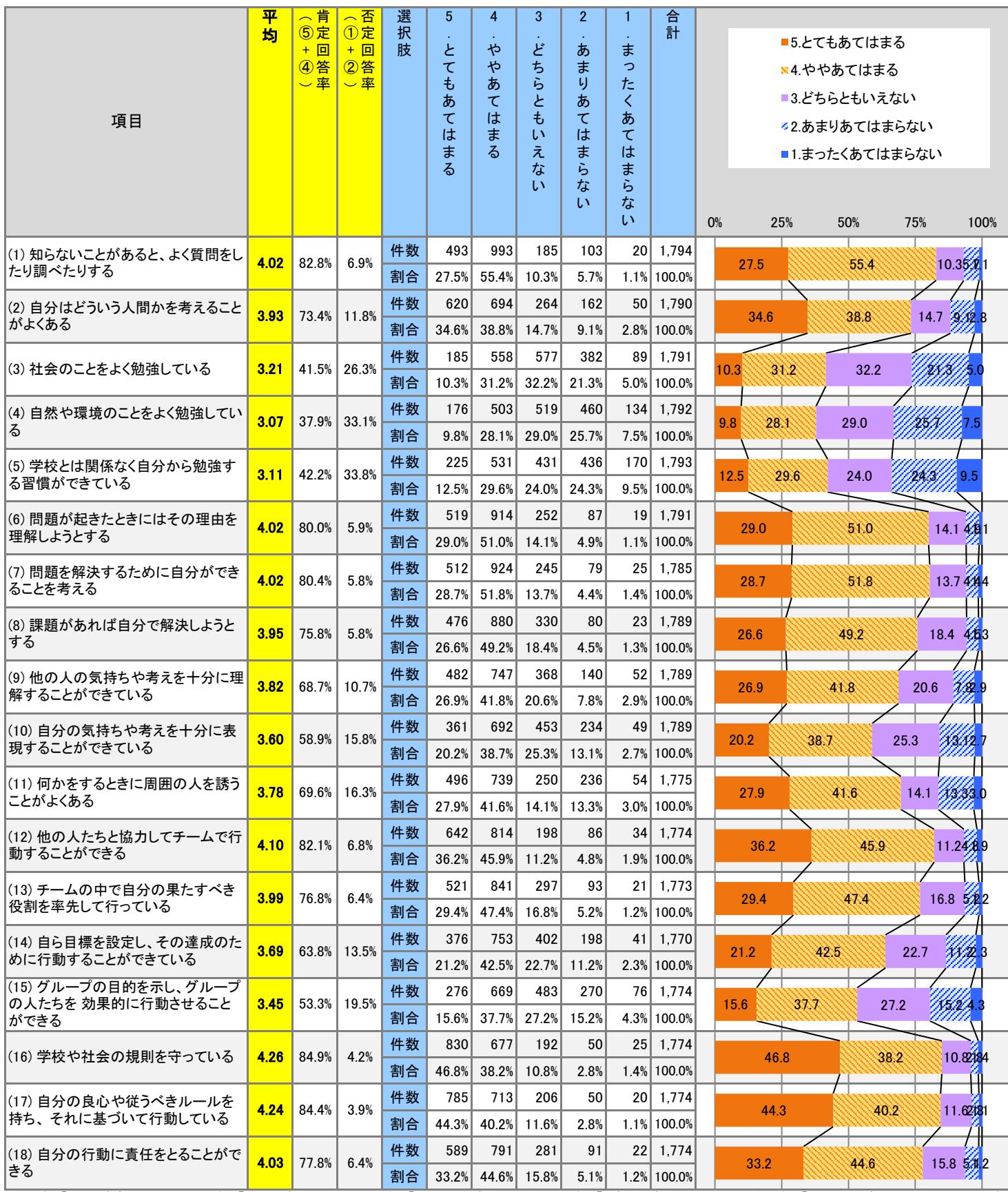
(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
1. インターナショナル・スクール（日本）	115	6.4%	6.4						
2. インターナショナル・スクール（海外）	93	5.2%	5.2						
3. 海外の現地校	253	14.1%	14.1						
4. 海外の日本人学校	97	5.4%	5.4						
5. 國際バカロレア初等教育プログラム(PYP)	45	2.5%	2.5						
6. 國際バカロレア中等教育プログラム(MYP)	501	27.9%	27.9						
7. あてはまるものはない	981	54.7%	54.7						
回答者数	1,794	-							

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,794
----	-------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

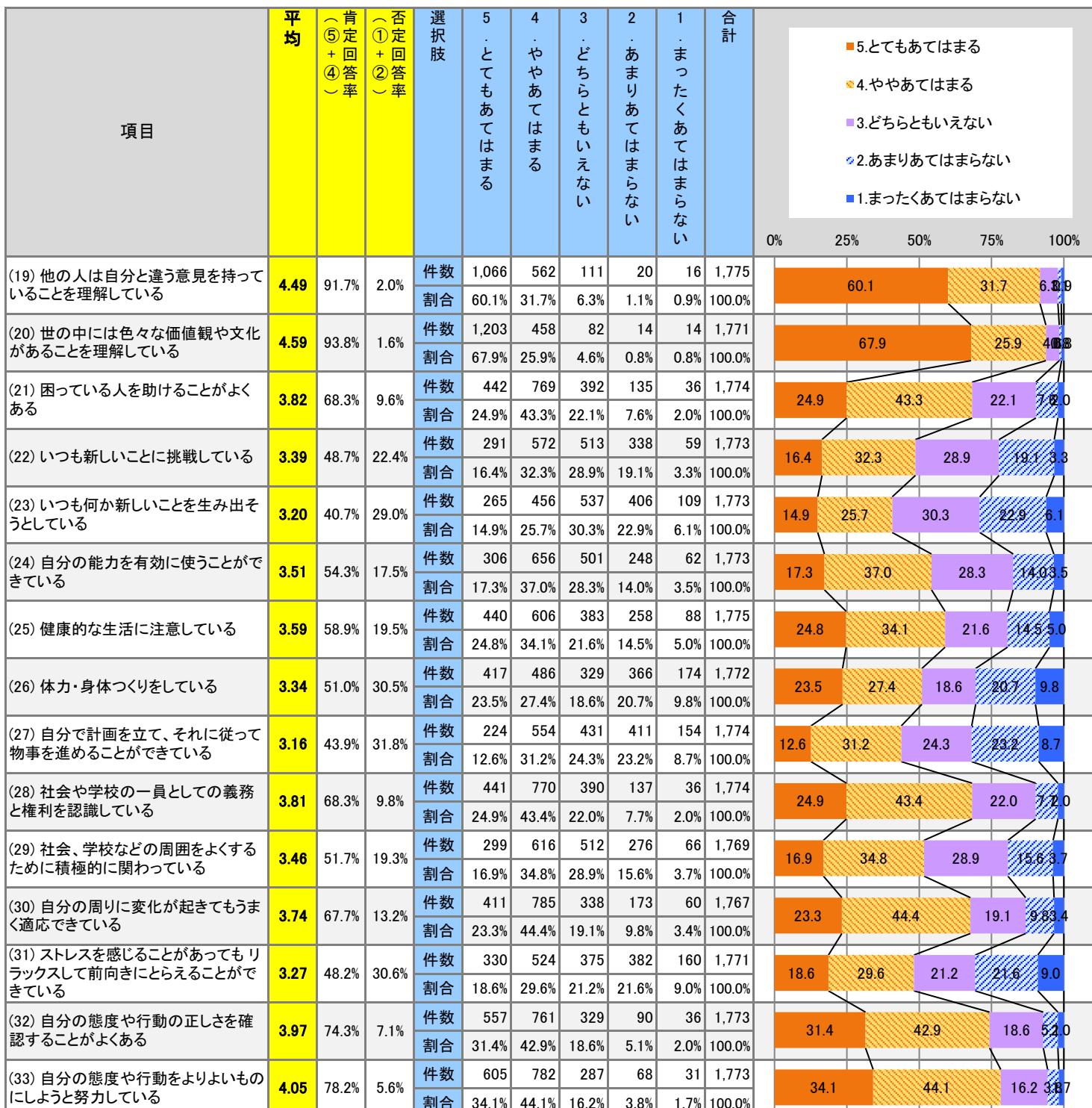


平均点：「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,794
----	-------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

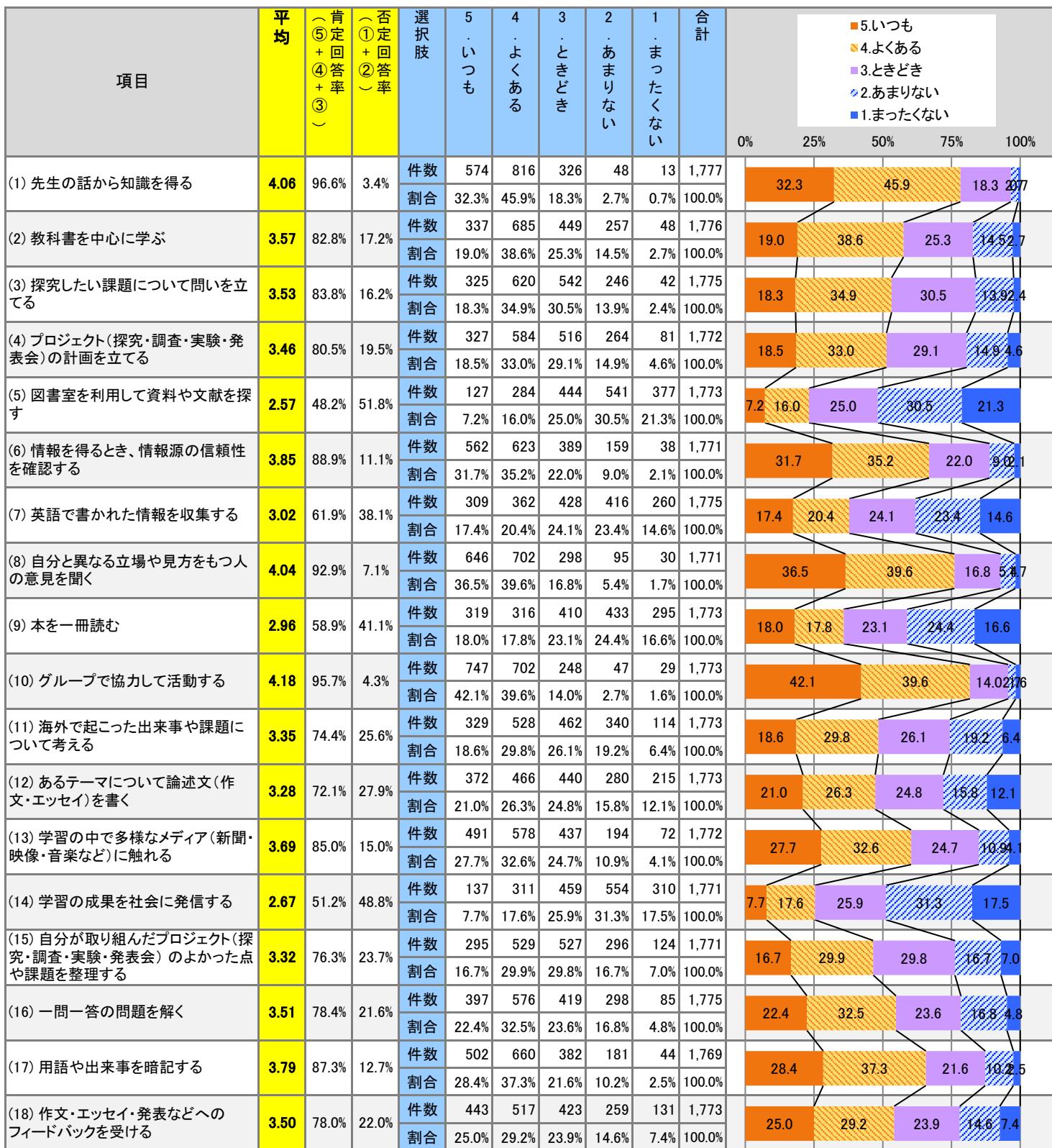


平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計											回答者数	1,794
----	-------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	------	-------

質問3.これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,794
----	-------------	------	-------

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していませんか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID : 全体集計

回答者数

1,794

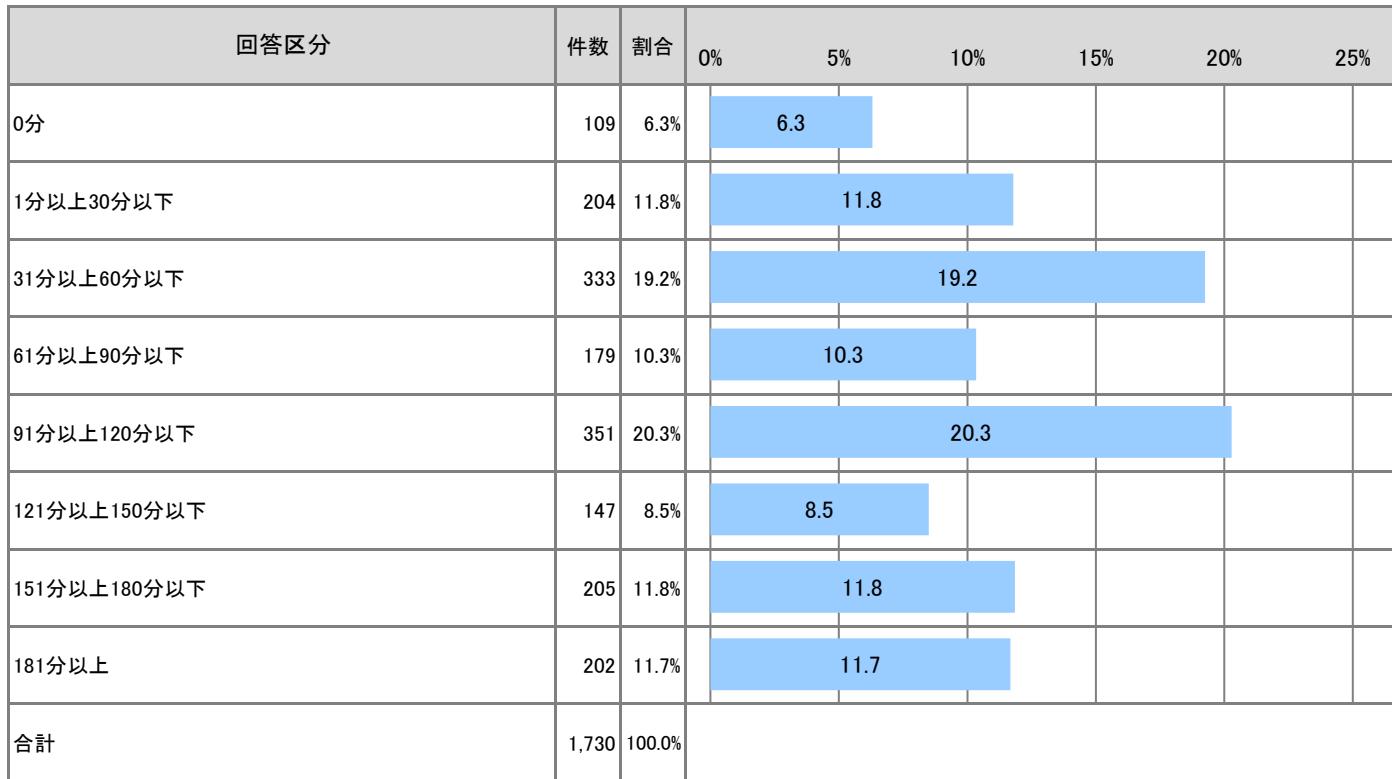
## 質問5. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(=1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように( )内に0を記入してください。

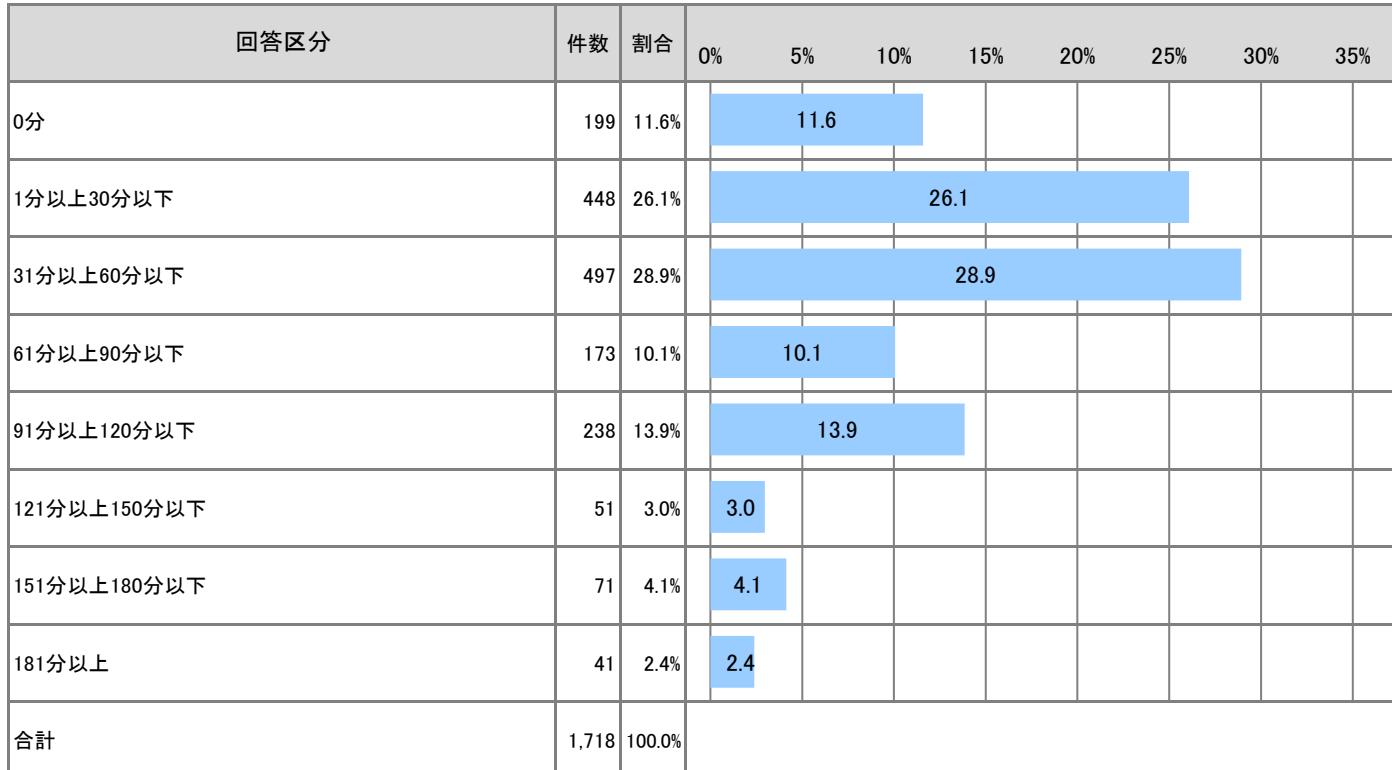
例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間: よよそ( )時間( )分



(2) 上記の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

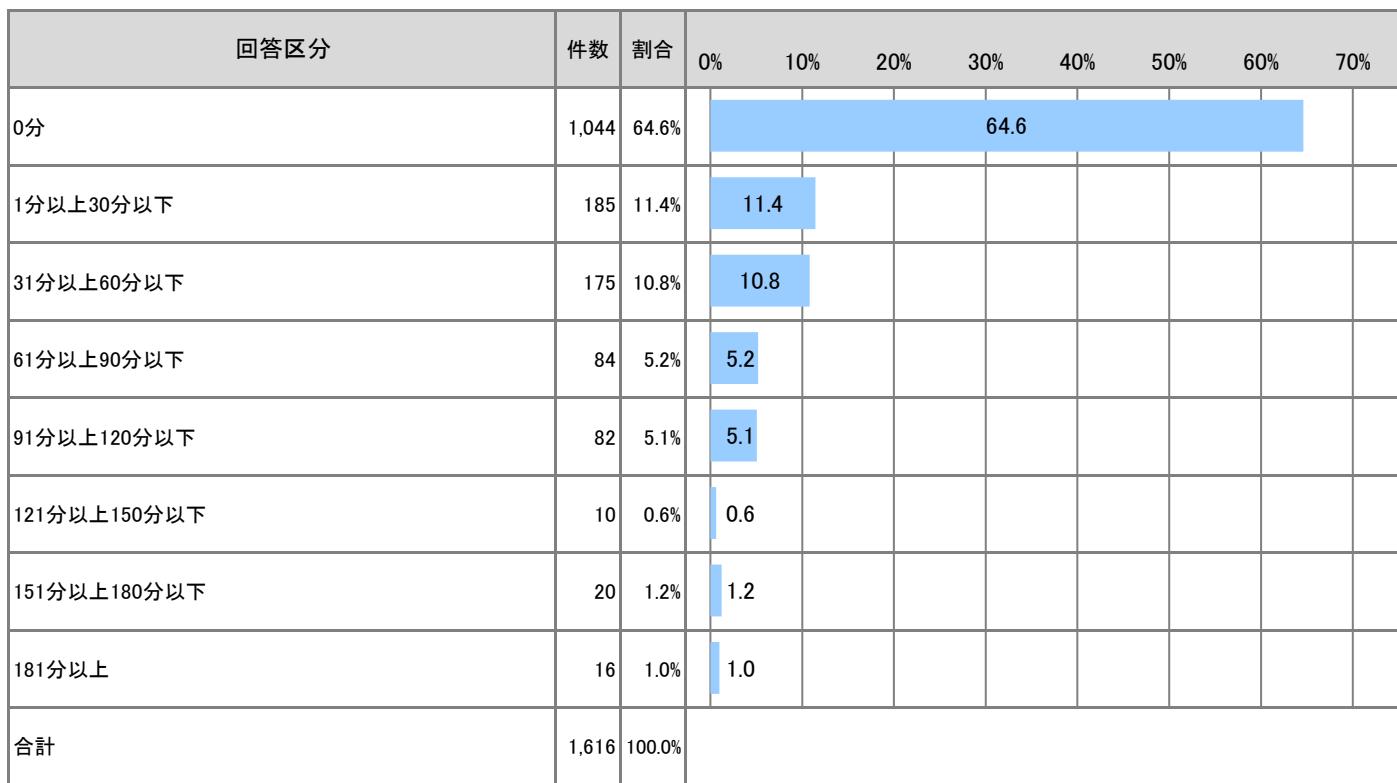
①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)



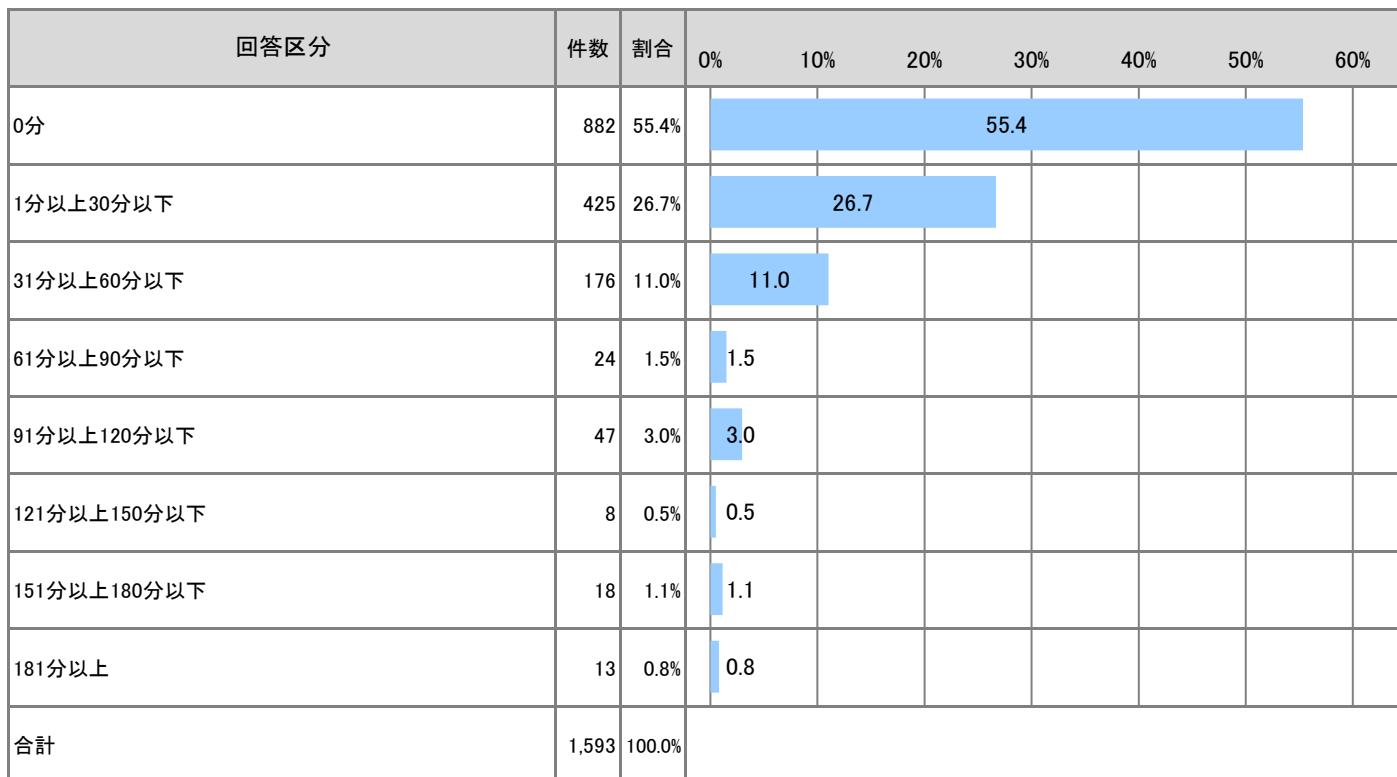
# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID	： 全体集計	回答者数	1,794
----	------	--------	------	-------

## ②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)



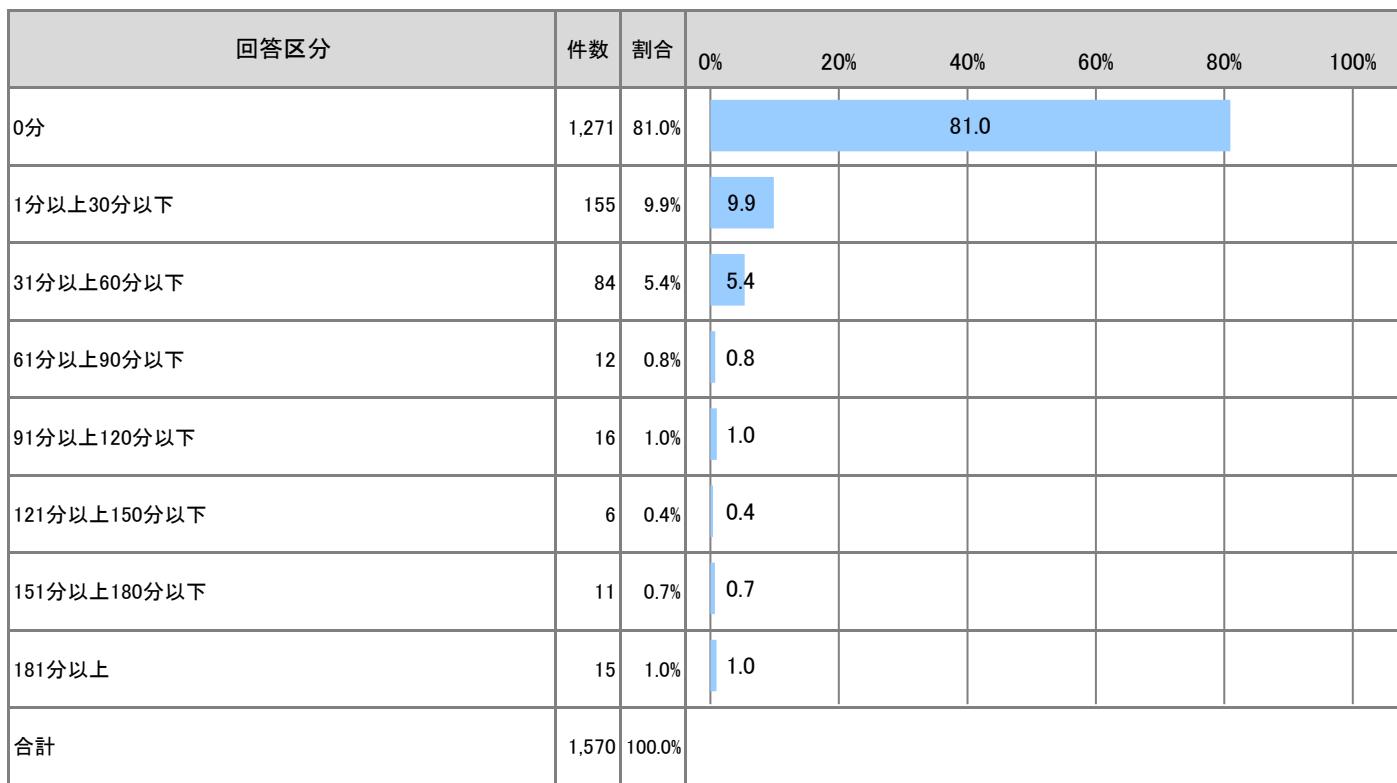
## ③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文



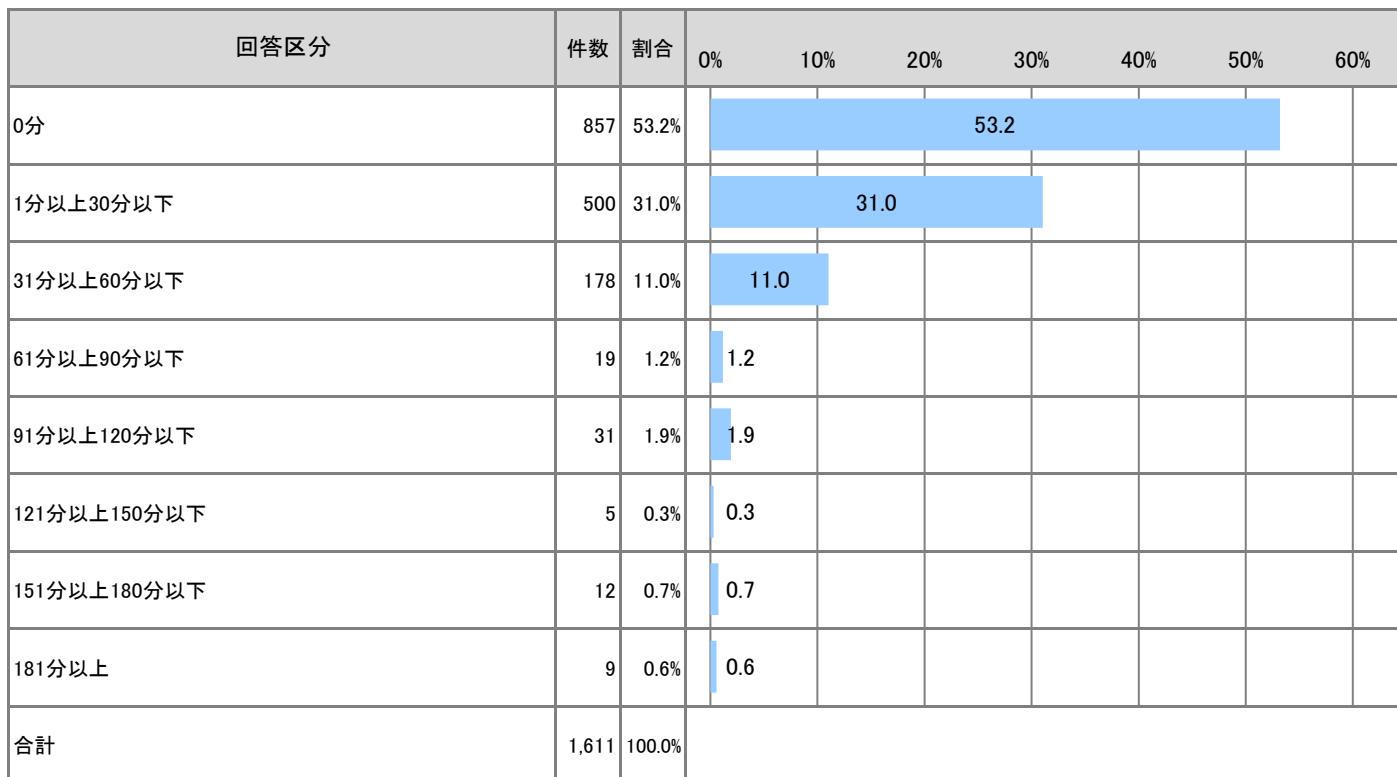
# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID	： 全体集計	回答者数	1,794
----	------	--------	------	-------

## ④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)



## ⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)



# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID : 全体集計

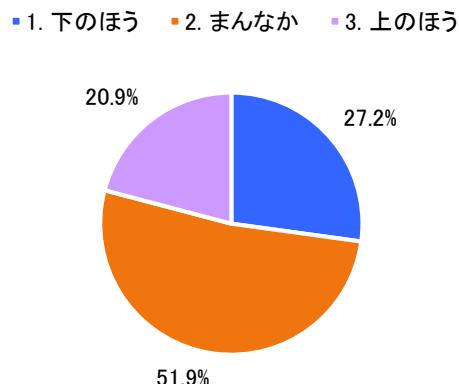
回答者数

1,794

## 質問6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	480	27.2%
2. まんなか	917	51.9%
3. 上のほう	369	20.9%
合計	1,766	100.0%



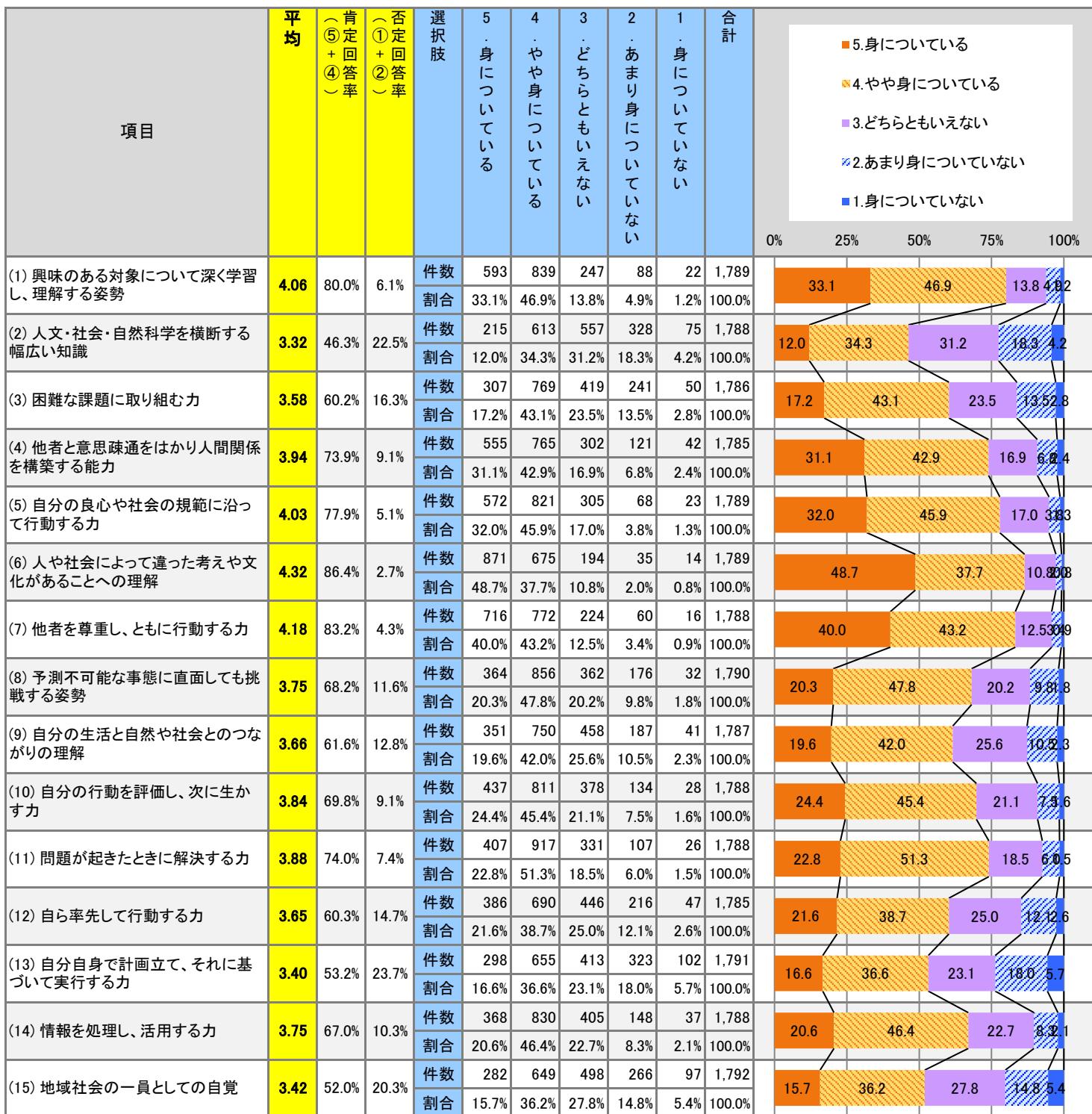
(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
1. 英検(実用英語技能検定)	1,437	72.7%		72.7			
2. TOEFL	92	4.7%	4.7				
3. TOEIC	67	3.4%	3.4				
4. IELTSアカデミック・モジュール	50	2.5%	2.5				
5. その他	93	4.7%	4.7				
6. 資格は取得していない	238	12.0%	12.0				
合計	1,977	100.0%					

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,794
----	-------------	------	-------

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID	回答者数	1,794
----	------	------	-------

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数
----	-------------	------

## 質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

### (1) 学校生活について



平均点：「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

### (2) 将来について



# 高校での学習・経験に関する調査

区分

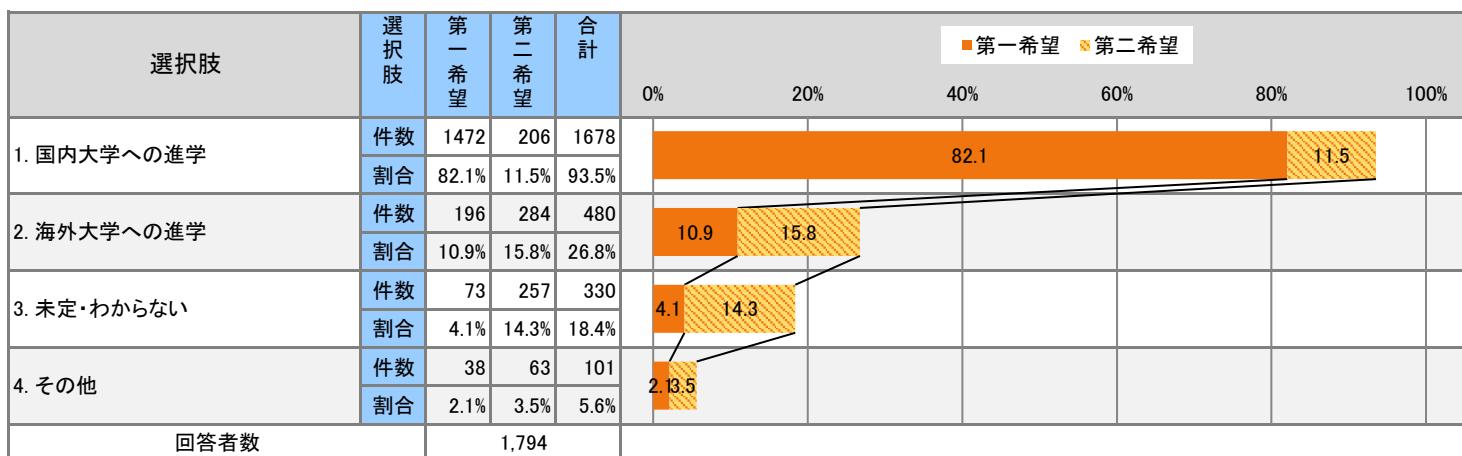
学校ID : 全体集計

回答者数

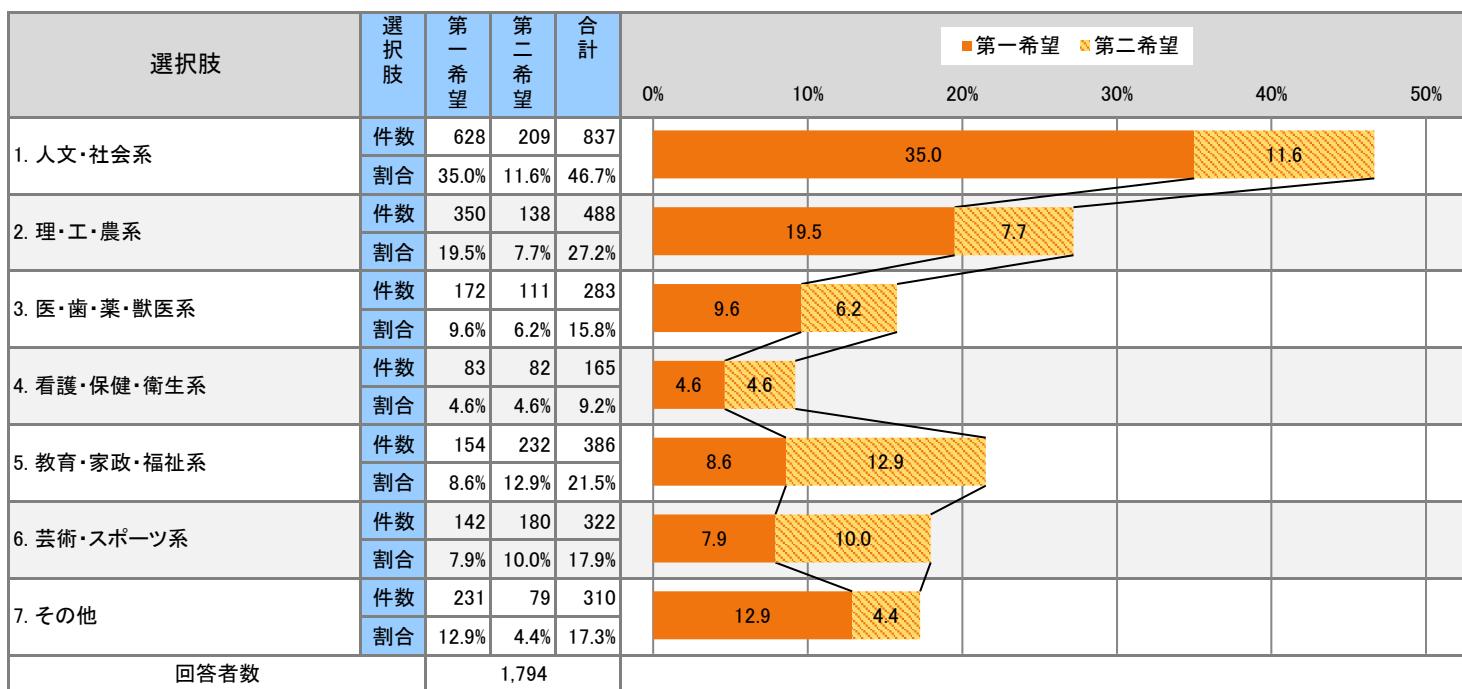
1,794

## 質問9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



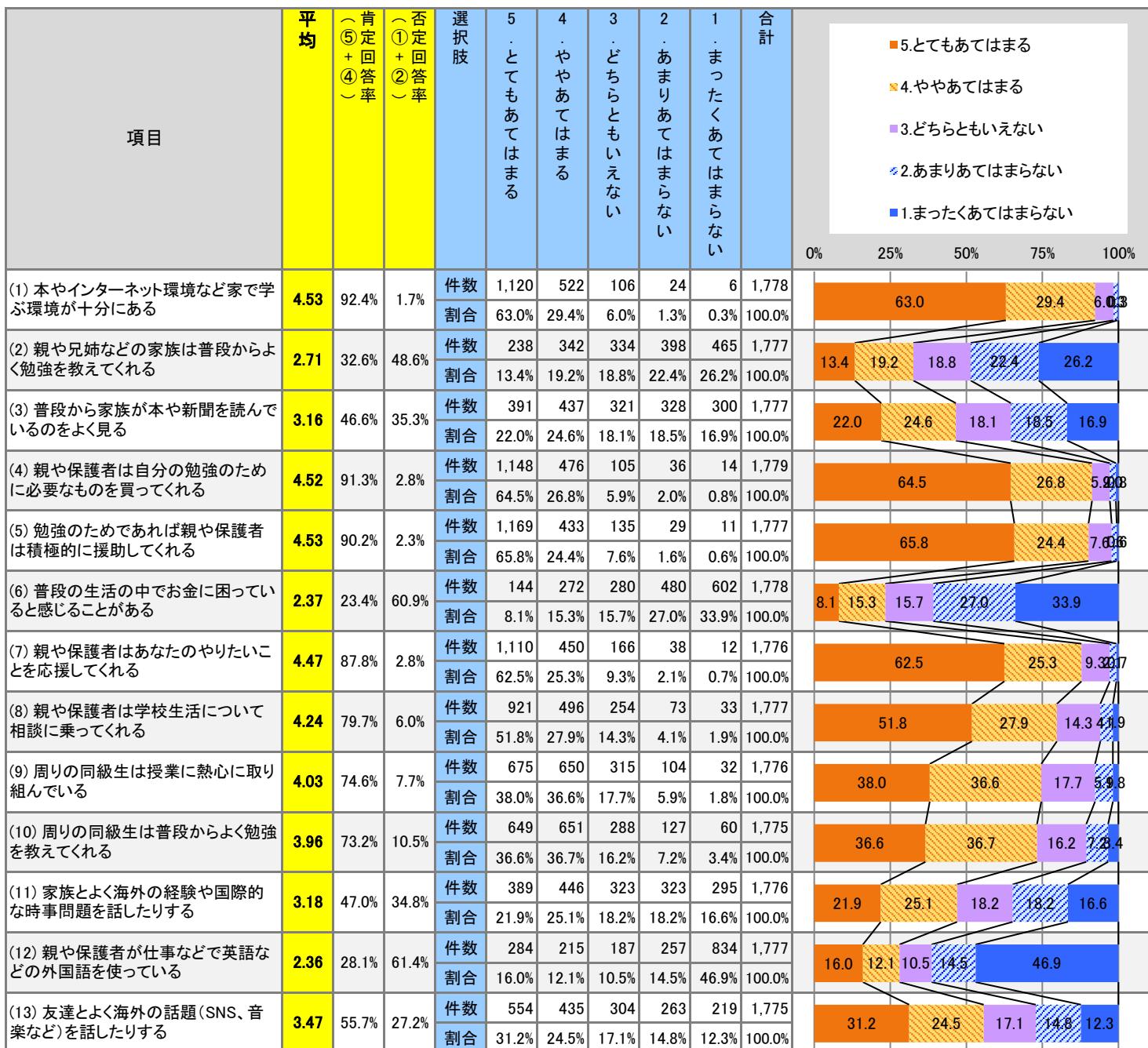
(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID : 全体集計	回答者数	1,794
----	-------------	------	-------

## 質問10. あなたの周囲の環境についておたずねします。



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 1.履修有り：全体集計

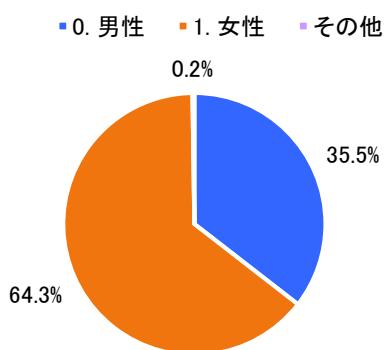
回答者数

443

## 質問1. あなた自身のことをうかがいます。

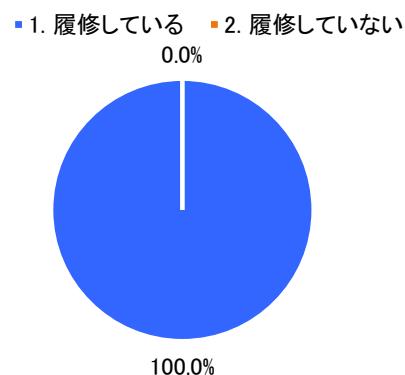
(3) 性別

選択肢	件数	割合
0. 男性	153	35.5%
1. 女性	277	64.3%
その他	1	0.2%
合計	431	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している	443	100.0%
2. 履修していない	0	0.0%
合計	443	100.0%



(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0% 10% 20% 30% 40% 50% 60%							
			0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	
1. インターナショナル・スクール（日本）	46	10.4%	10.4							
2. インターナショナル・スクール（海外）	49	11.1%		11.1						
3. 海外の現地校	109	24.6%			24.6					
4. 海外の日本人学校	37	8.4%		8.4						
5. 國際バカロレア初等教育プログラム（PYP）	20	4.5%			4.5					
6. 國際バカロレア中等教育プログラム（MYP）	226	51.0%				51.0				
7. あてはまるものはない	125	28.2%				28.2				
回答者数	443	-								

# 高校での学習・経験に関する調査

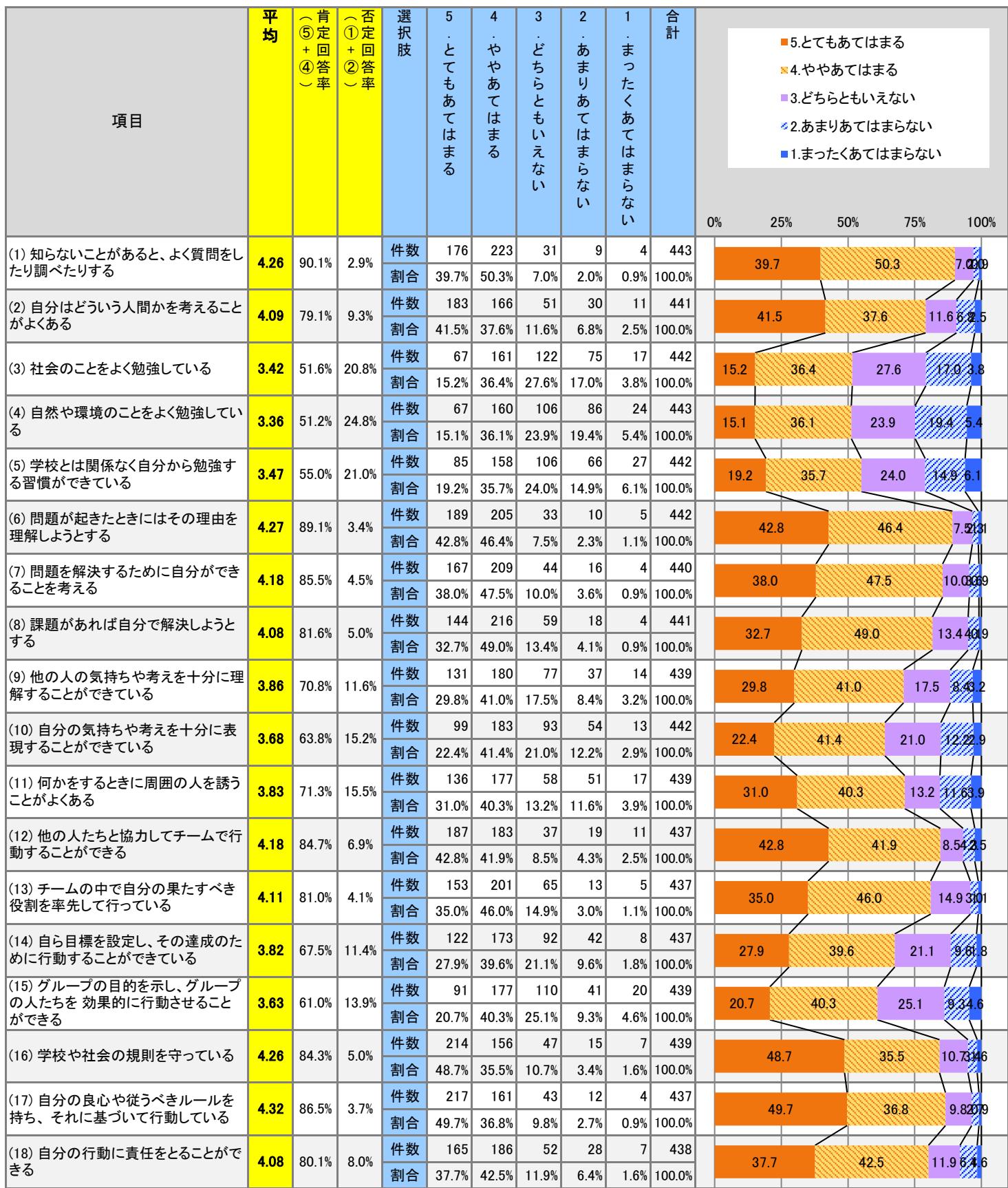
区分

学校ID 1.履修有り：全体集計

回答者数

443

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点：「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

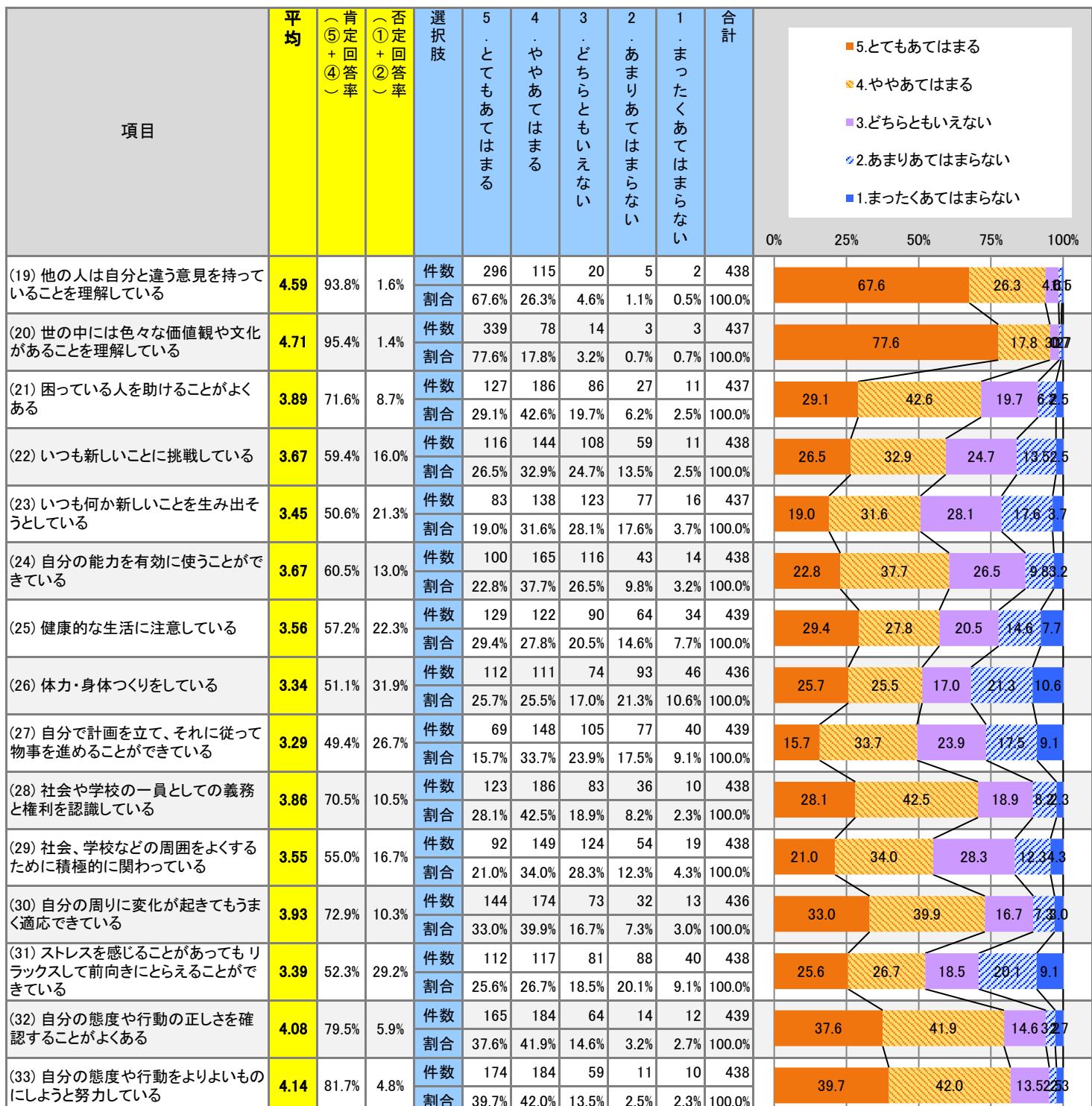
区分

学校ID 1.履修有り：全体集計

回答者数

443

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

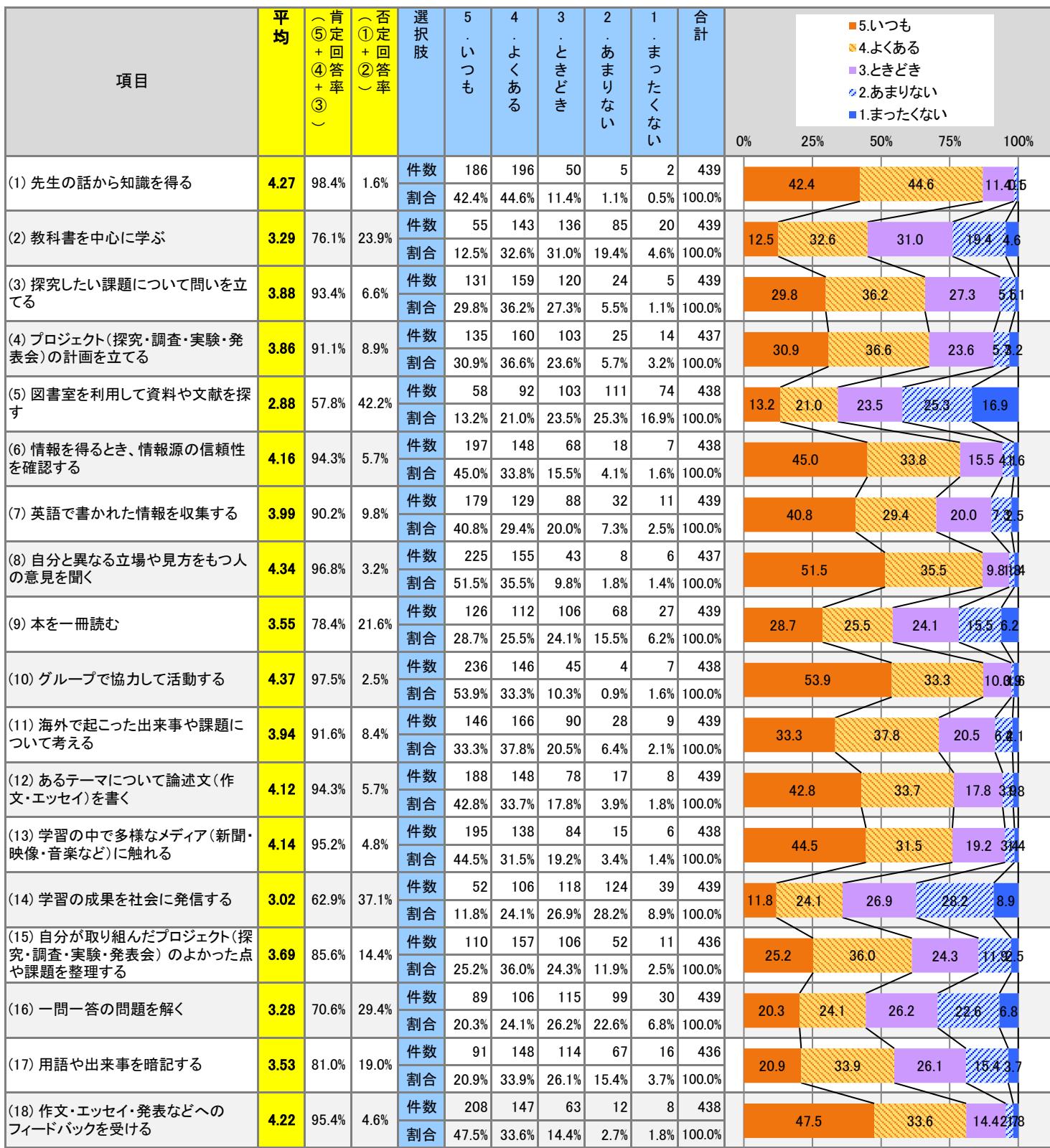


平均点：「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.履修有り : 全体集計	回答者数	443
----	--------------------	------	-----

質問3.これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

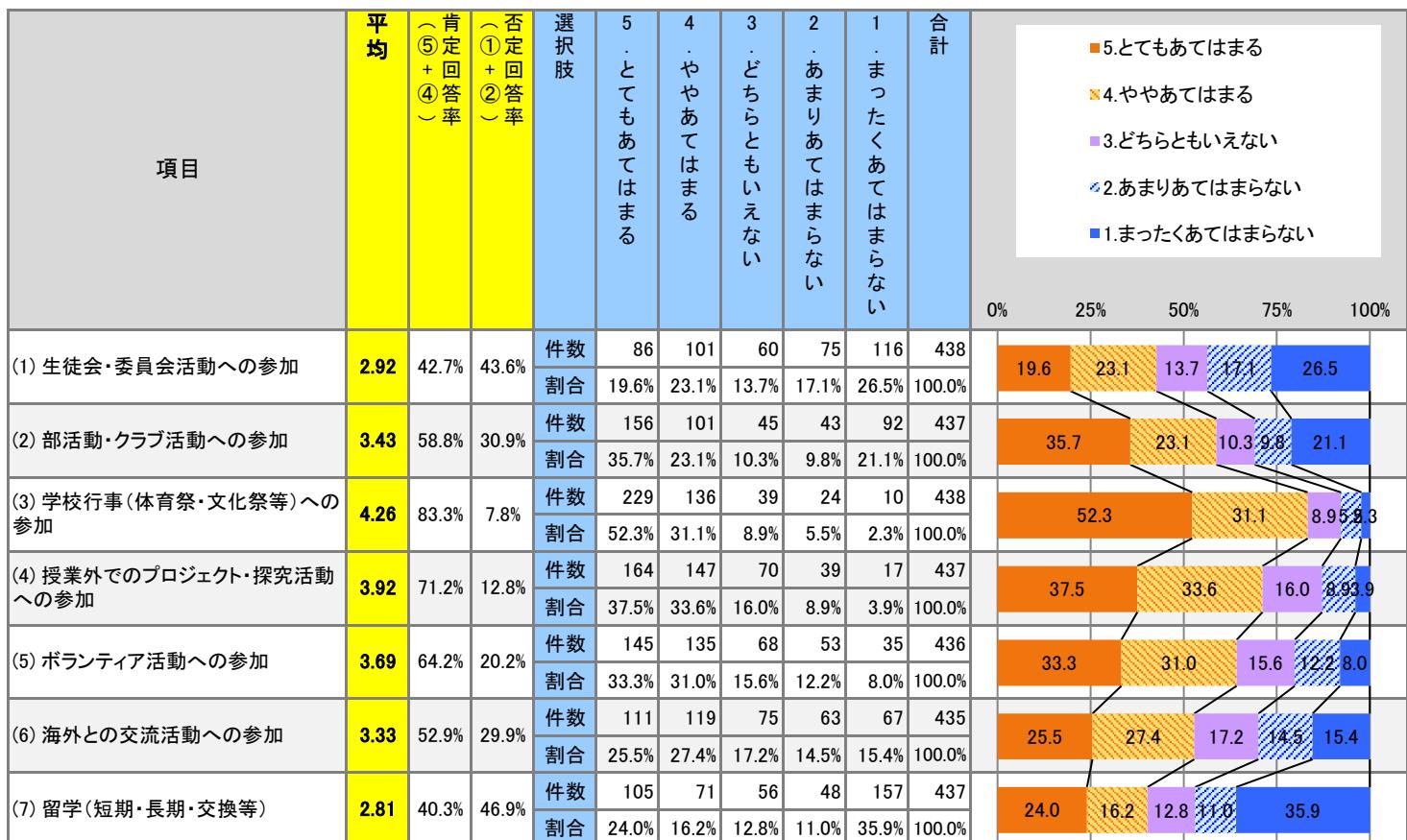
区分

学校ID 1.履修有り：全体集計

回答者数

443

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していませんか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 1.履修有り：全体集計

回答者数

443

## 質問5. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(=1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように( )内に0を記入してください。

例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間：およそ( )時間( )分

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%
0分	10	2.3%	2.3					
1分以上30分以下	13	3.0%	3.0					
31分以上60分以下	62	14.2%		14.2				
61分以上90分以下	37	8.5%		8.5				
91分以上120分以下	98	22.5%			22.5			
121分以上150分以下	40	9.2%		9.2				
151分以上180分以下	84	19.3%			19.3			
181分以上	92	21.1%			21.1			
合計	436	100.0%						

(2) 上記の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

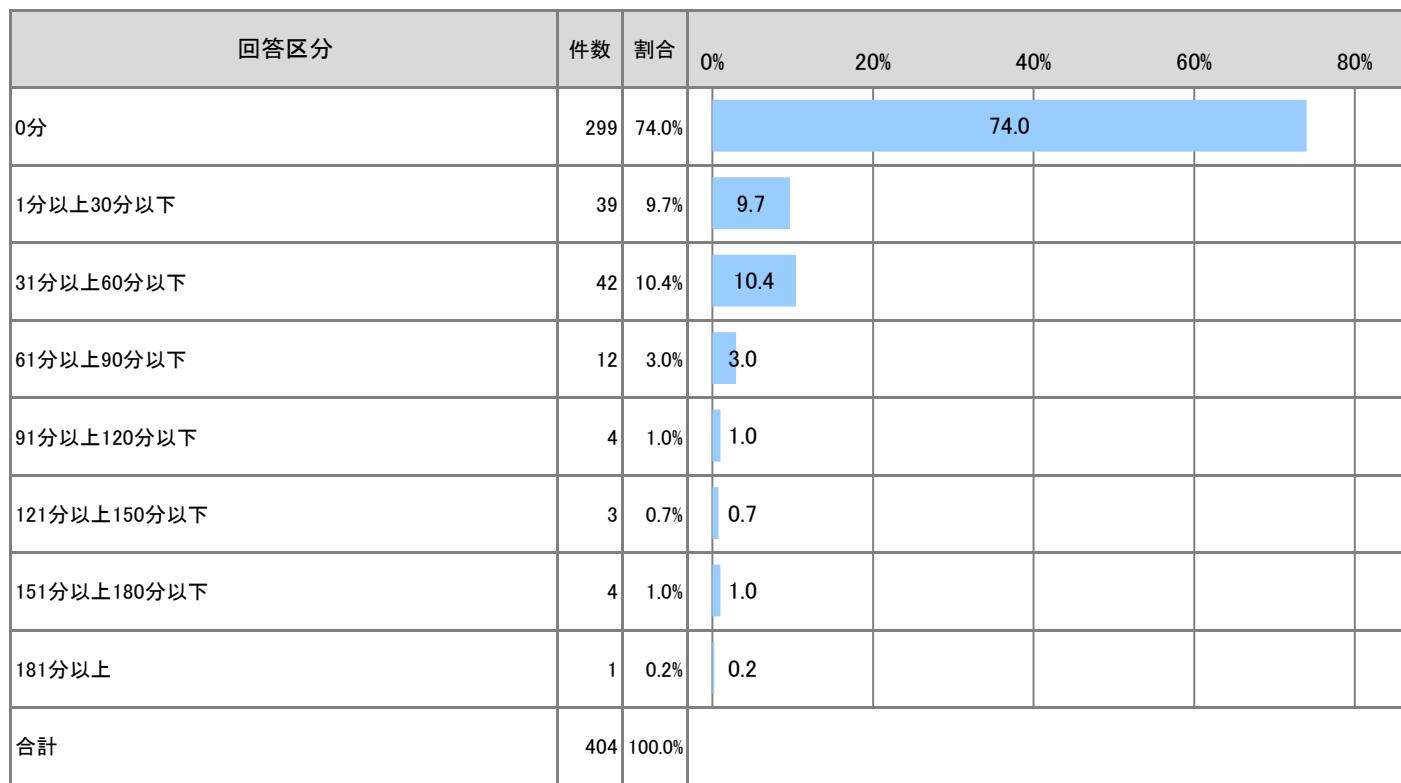
①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)

回答区分	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
0分	23	5.3%	5.3						
1分以上30分以下	79	18.2%		18.2					
31分以上60分以下	113	26.0%			26.0				
61分以上90分以下	52	12.0%		12.0					
91分以上120分以下	90	20.7%			20.7				
121分以上150分以下	20	4.6%	4.6						
151分以上180分以下	35	8.1%		8.1					
181分以上	22	5.1%		5.1					
合計	434	100.0%							

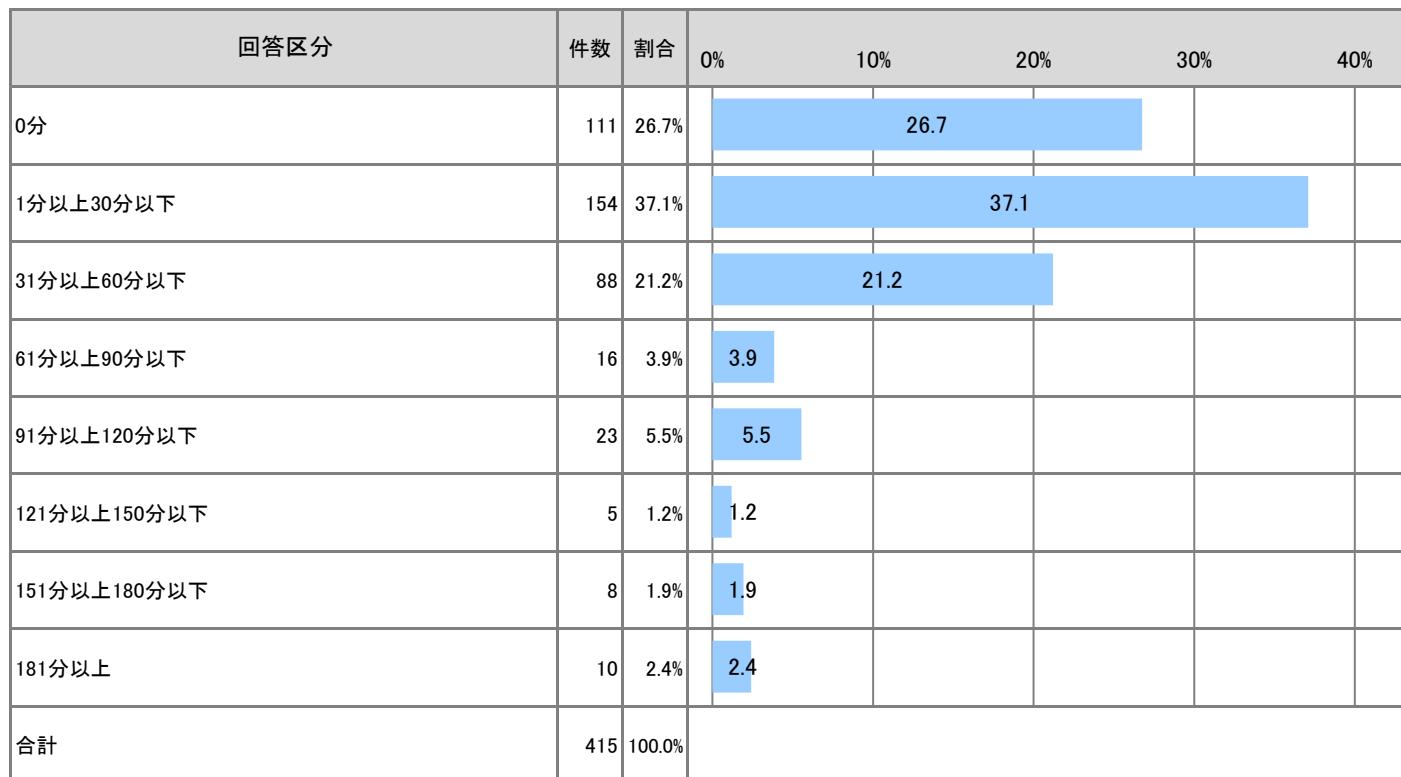
# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.履修有り : 全体集計	回答者数	443
----	--------------------	------	-----

## ②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)



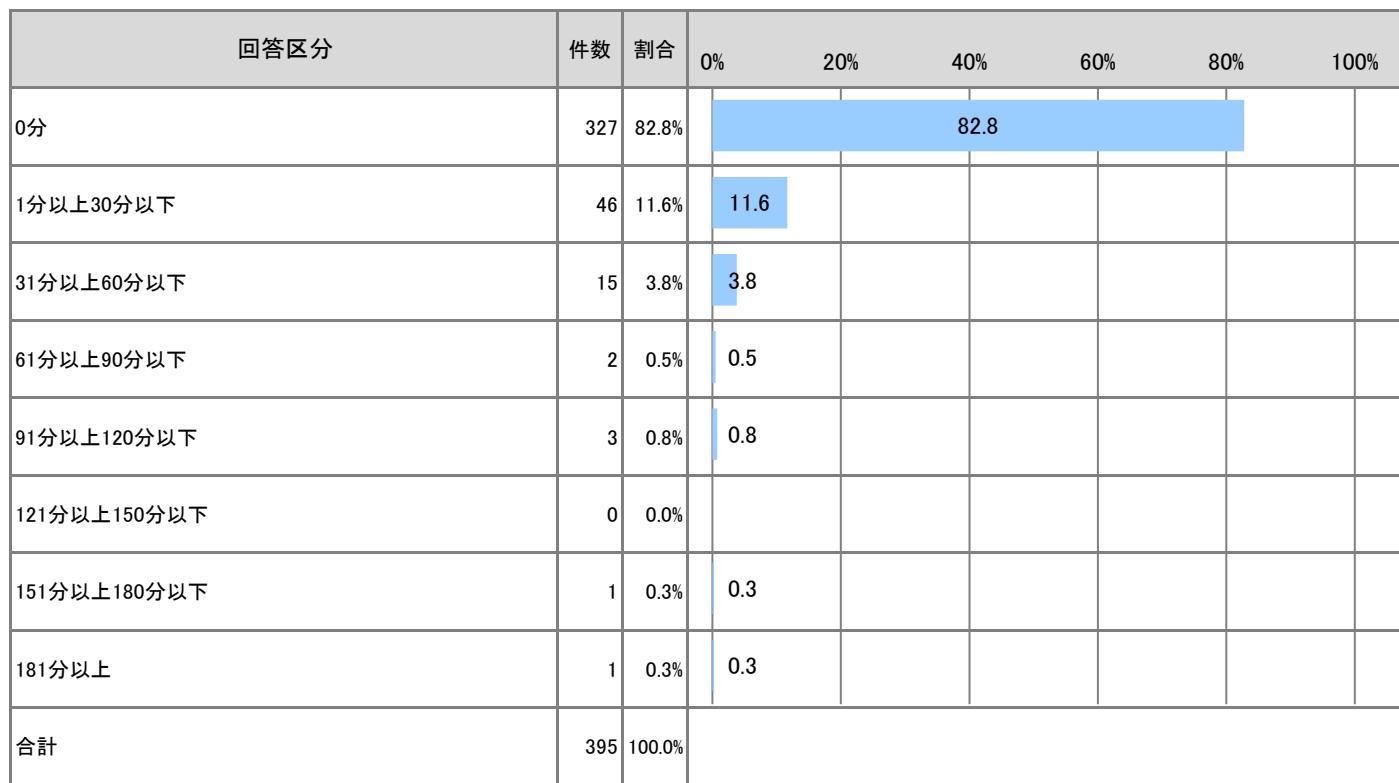
## ③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文



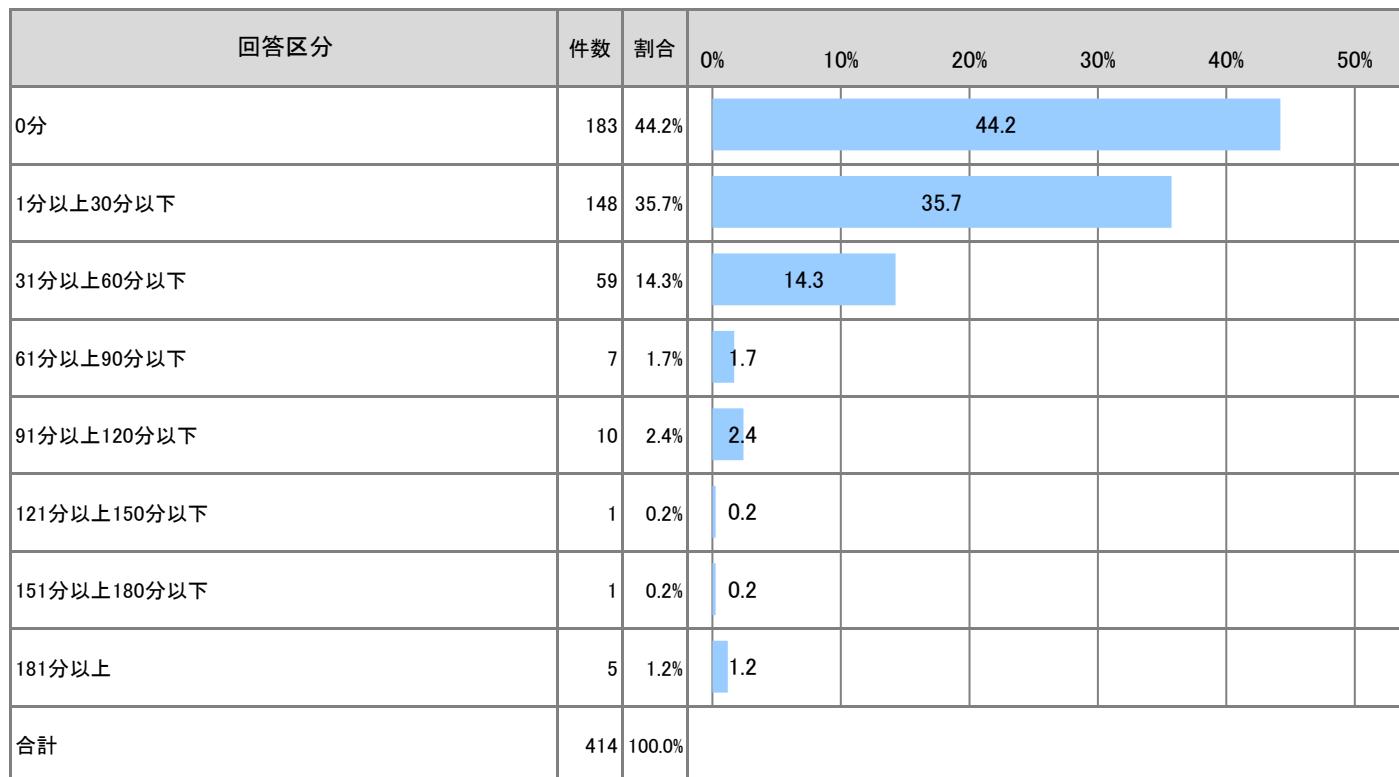
# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.履修有り : 全体集計	回答者数	443
----	--------------------	------	-----

## ④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)



## ⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)



# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 1.履修有り：全体集計

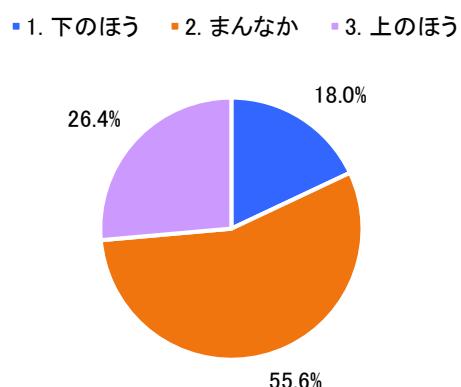
回答者数

443

## 質問6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	77	18.0%
2. まんなか	238	55.6%
3. 上のほう	113	26.4%
合計	428	100.0%



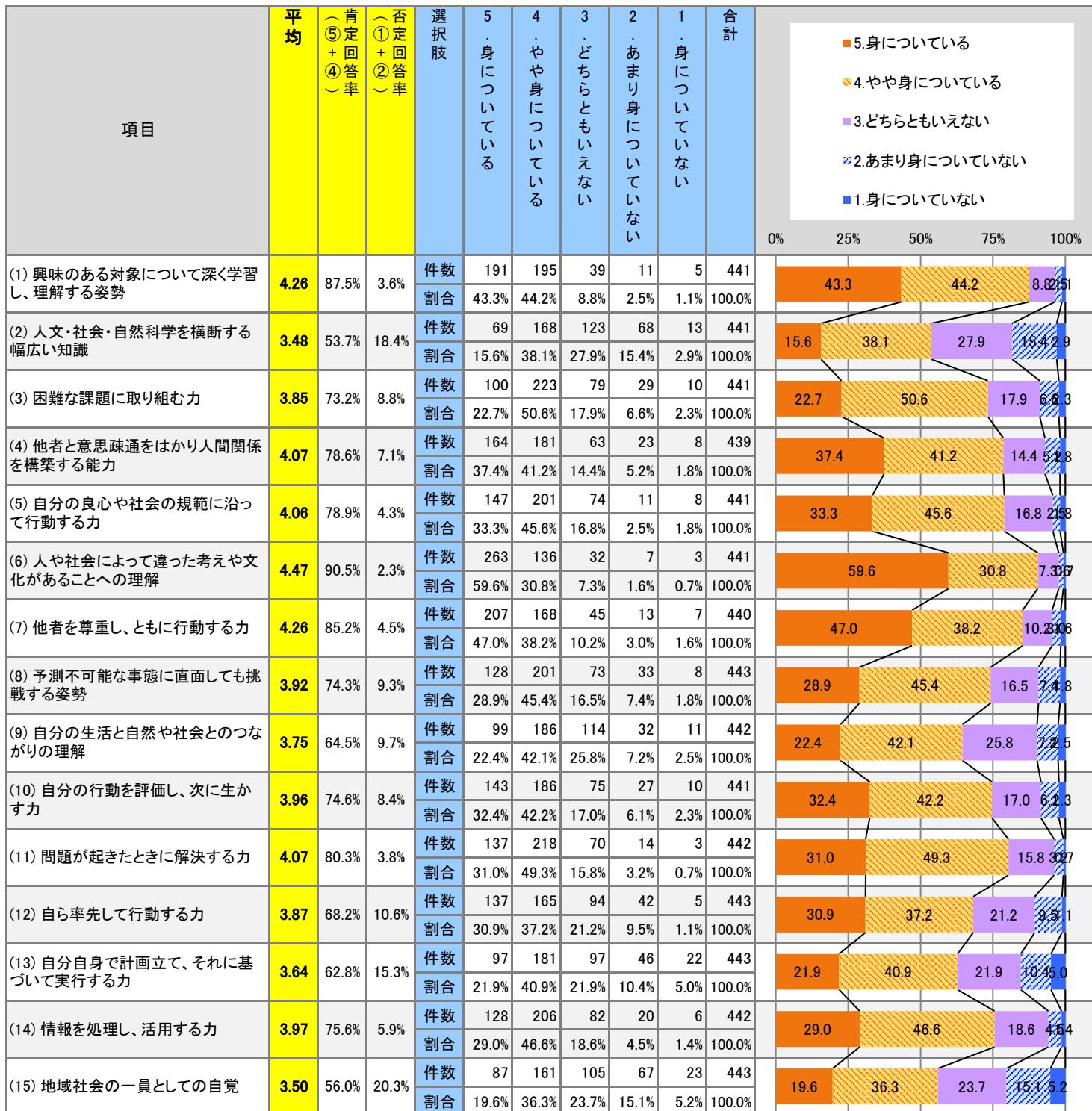
(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. 英検(実用英語技能検定)	360	64.7%					64.7			
2. TOEFL	53	9.5%		9.5						
3. TOEIC	30	5.4%			5.4					
4. IELTSアカデミック・モジュール	43	7.7%			7.7					
5. その他	39	7.0%				7.0				
6. 資格は取得していない	31	5.6%					5.6			
合計	556	100.0%								

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.履修有り : 全体集計	回答者数	443
----	--------------------	------	-----

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 1.履修有り：全体集計

回答者数

443

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 1.履修有り：全体集計

回答者数

443

## 質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

### (1) 学校生活について



平均点：「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

### (2) 将来について



平均点：「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

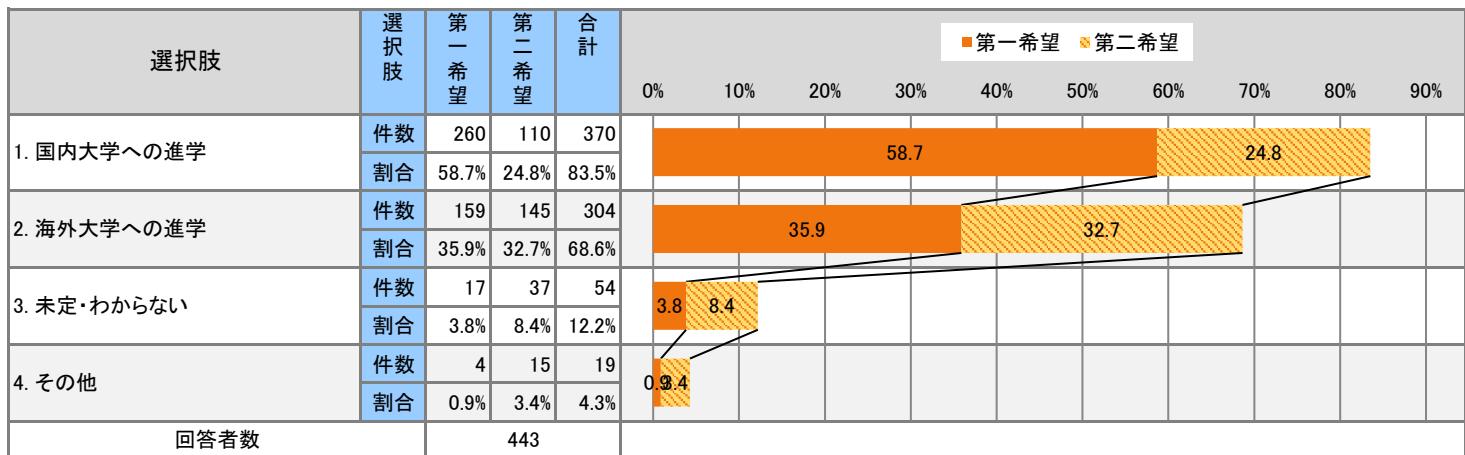
学校ID 1.履修有り：全体集計

回答者数

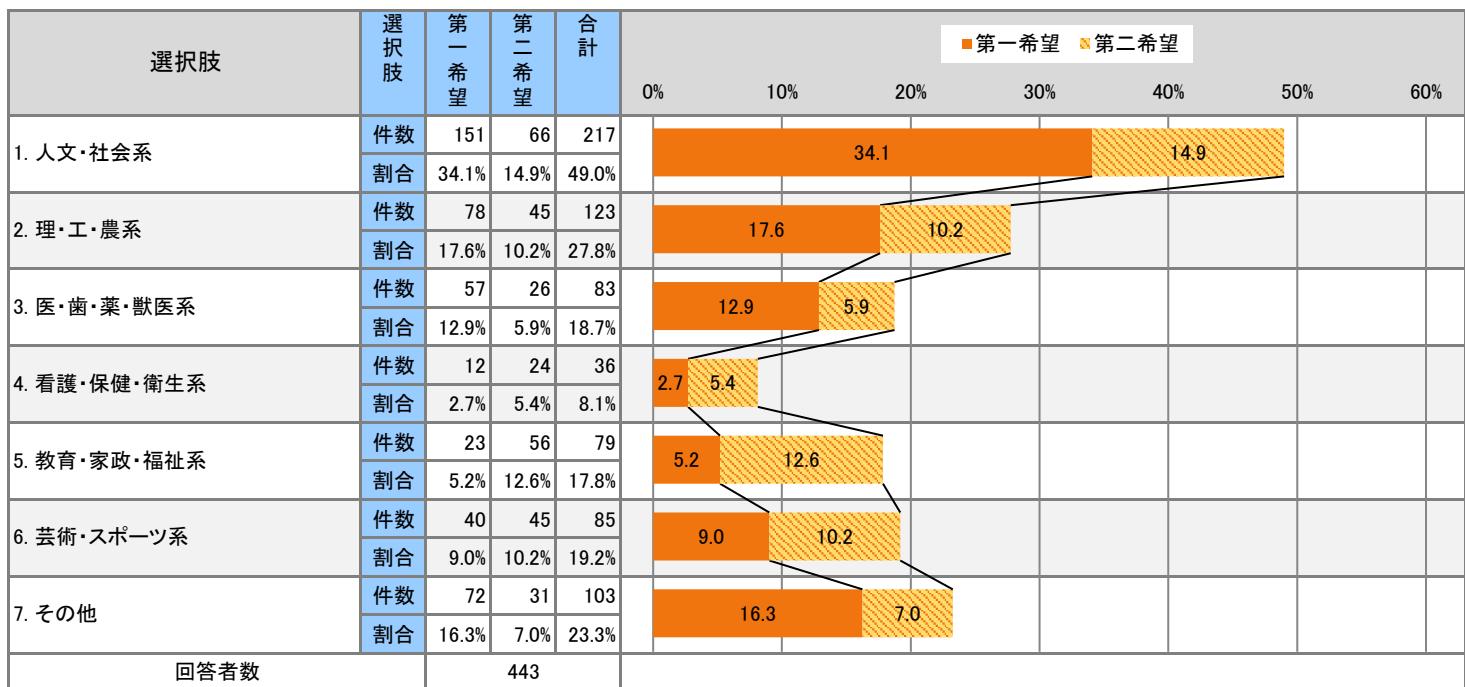
443

## 質問9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



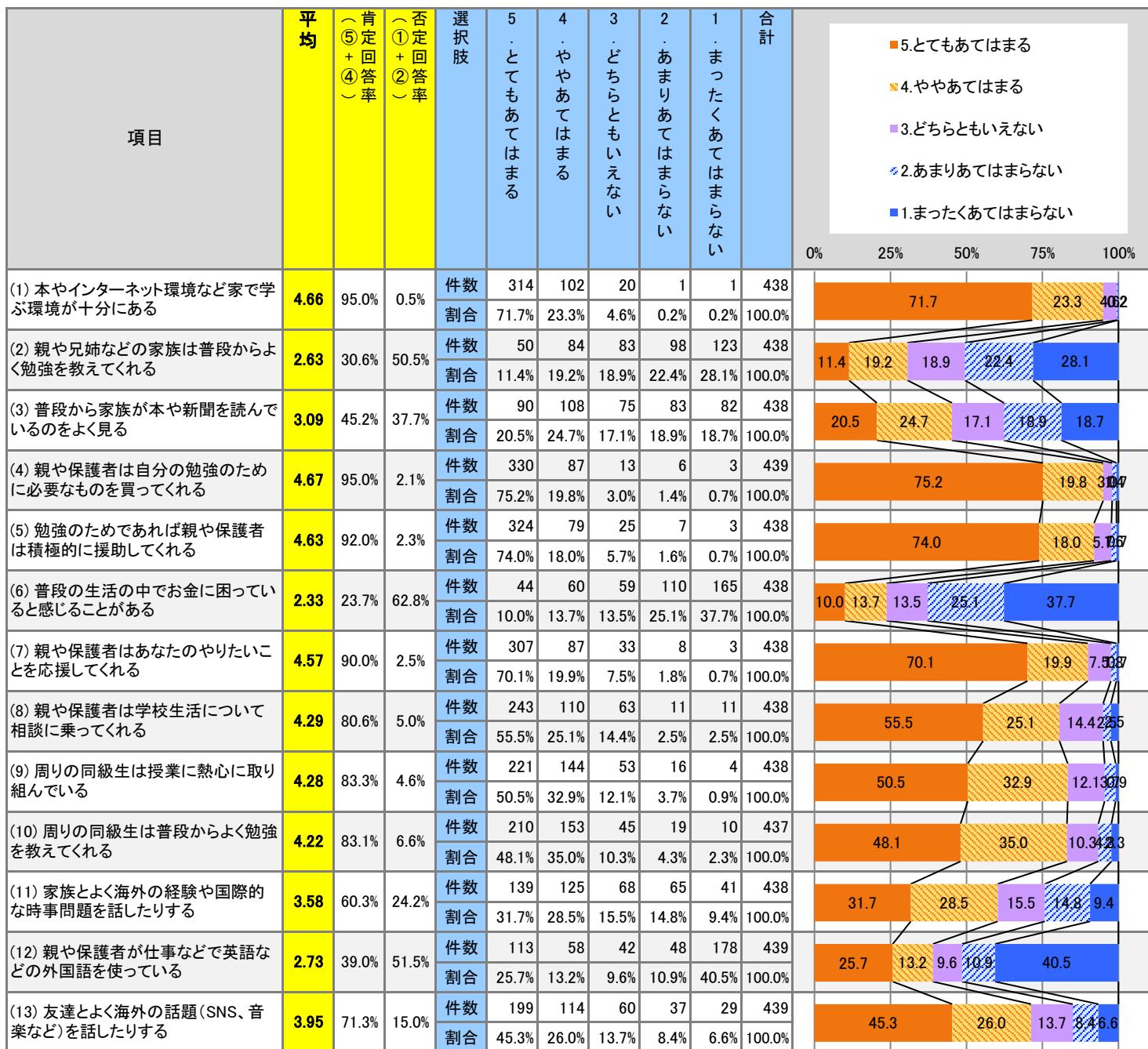
(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 1.履修有り：全体集計	回答者数	443
----	------------------	------	-----

## 質問10. あなたの周囲の環境についておたずねします。



平均点：「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 2.履修無し：全体集計

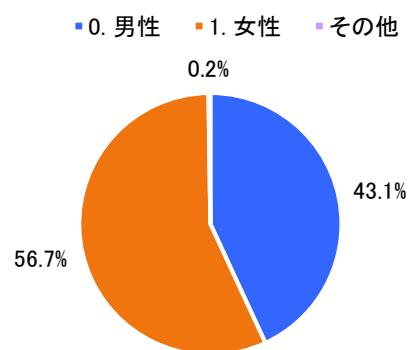
回答者数

1,351

## 質問1. あなた自身のことをうかがいます。

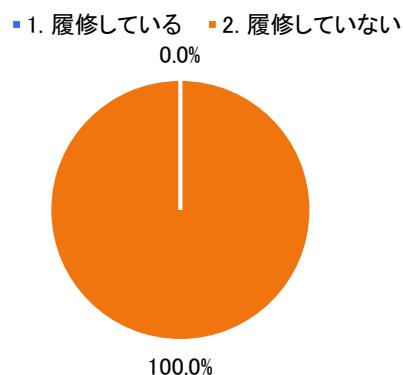
(3) 性別

選択肢	件数	割合
0. 男性	572	43.1%
1. 女性	752	56.7%
その他	3	0.2%
合計	1,327	100.0%



(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

選択肢	件数	割合
1. 履修している	0	0.0%
2. 履修していない	1,351	100.0%
合計	1,351	100.0%



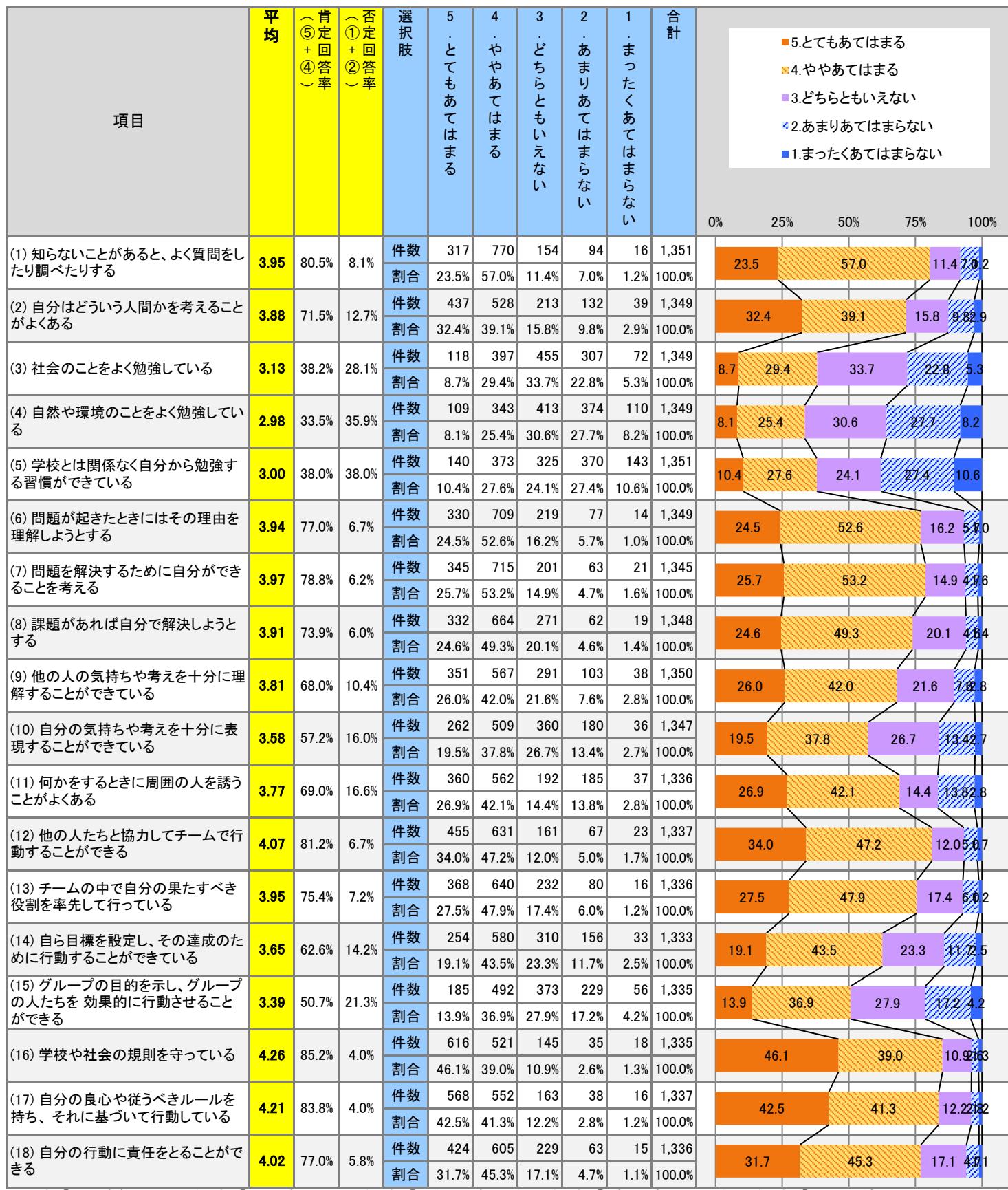
(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

選択肢	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
1. インターナショナル・スクール（日本）	69	5.1%	5.1							
2. インターナショナル・スクール(海外)	44	3.3%	3.3							
3. 海外の現地校	144	10.7%	10.7							
4. 海外の日本人学校	60	4.4%	4.4							
5. 國際バカロレア初等教育プログラム(PYP)	25	1.9%	1.9							
6. 國際バカロレア中等教育プログラム(MYP)	275	20.4%	20.4							
7. あてはまるものはない	856	63.4%	63.4							
回答者数	1,351	-								

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.履修無し : 全体集計	回答者数	1,351
----	--------------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

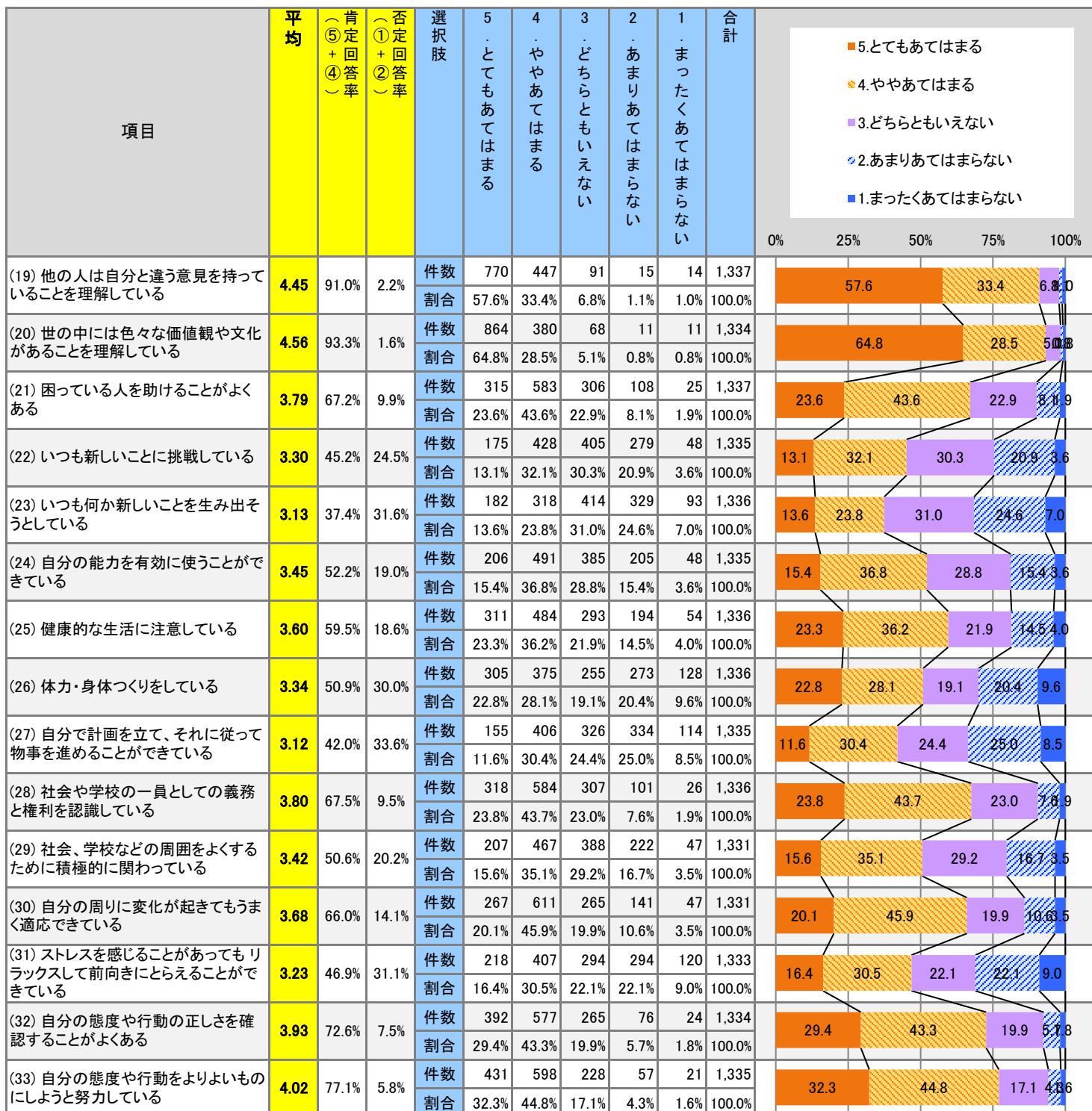


平均点：「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.履修無し : 全体集計	回答者数	1,351
----	--------------------	------	-------

質問2. あなたは以下の態度や状況にどのくらいあてはまると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

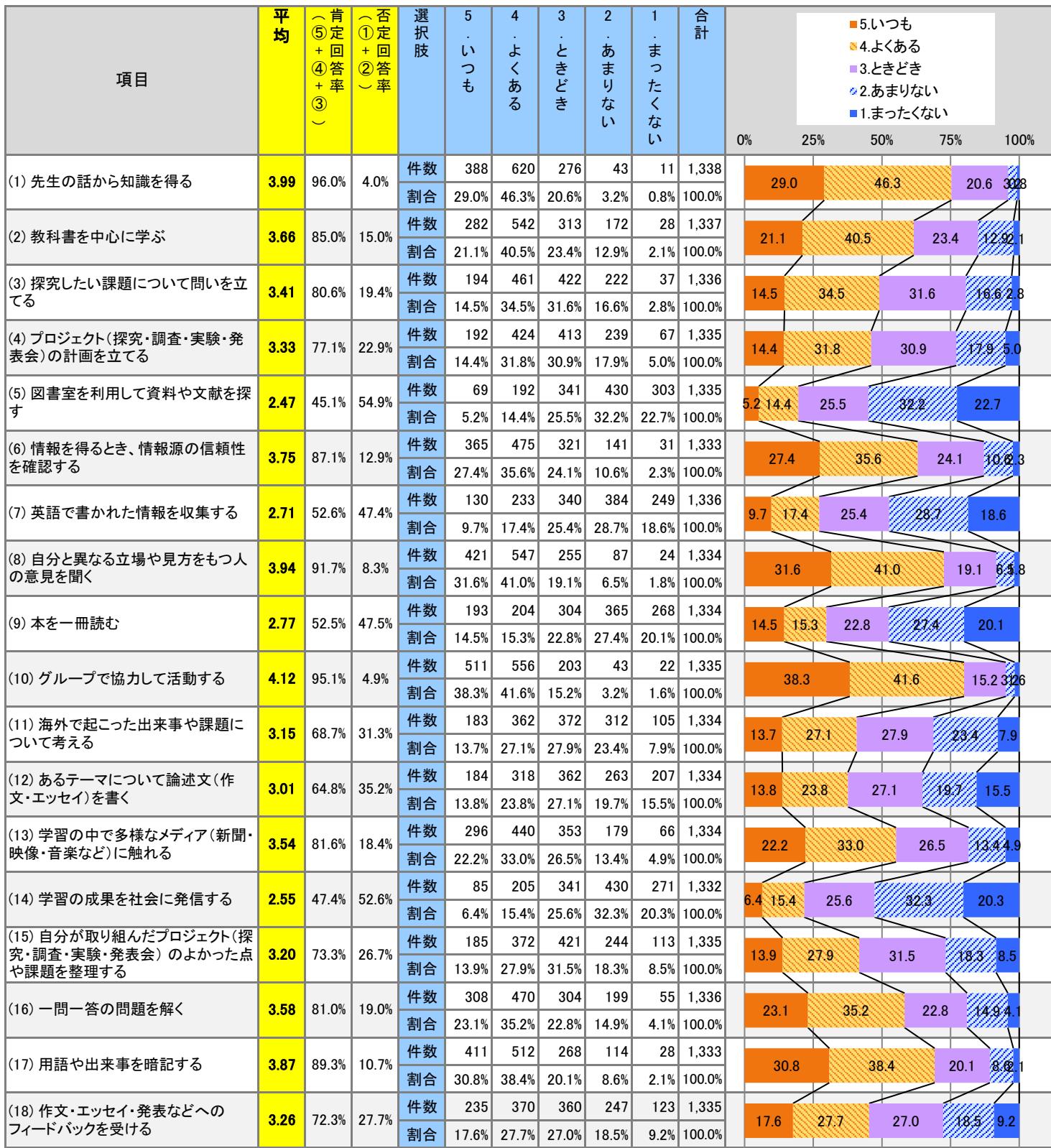


平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.履修無し : 全体集計											回答者数	1,351
----	--------------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	------	-------

質問3.これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.いつも」を5点、「4.よくある」を4点、「3.ときどき」を3点、「2.あまりない」を2点、「1.まったくない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

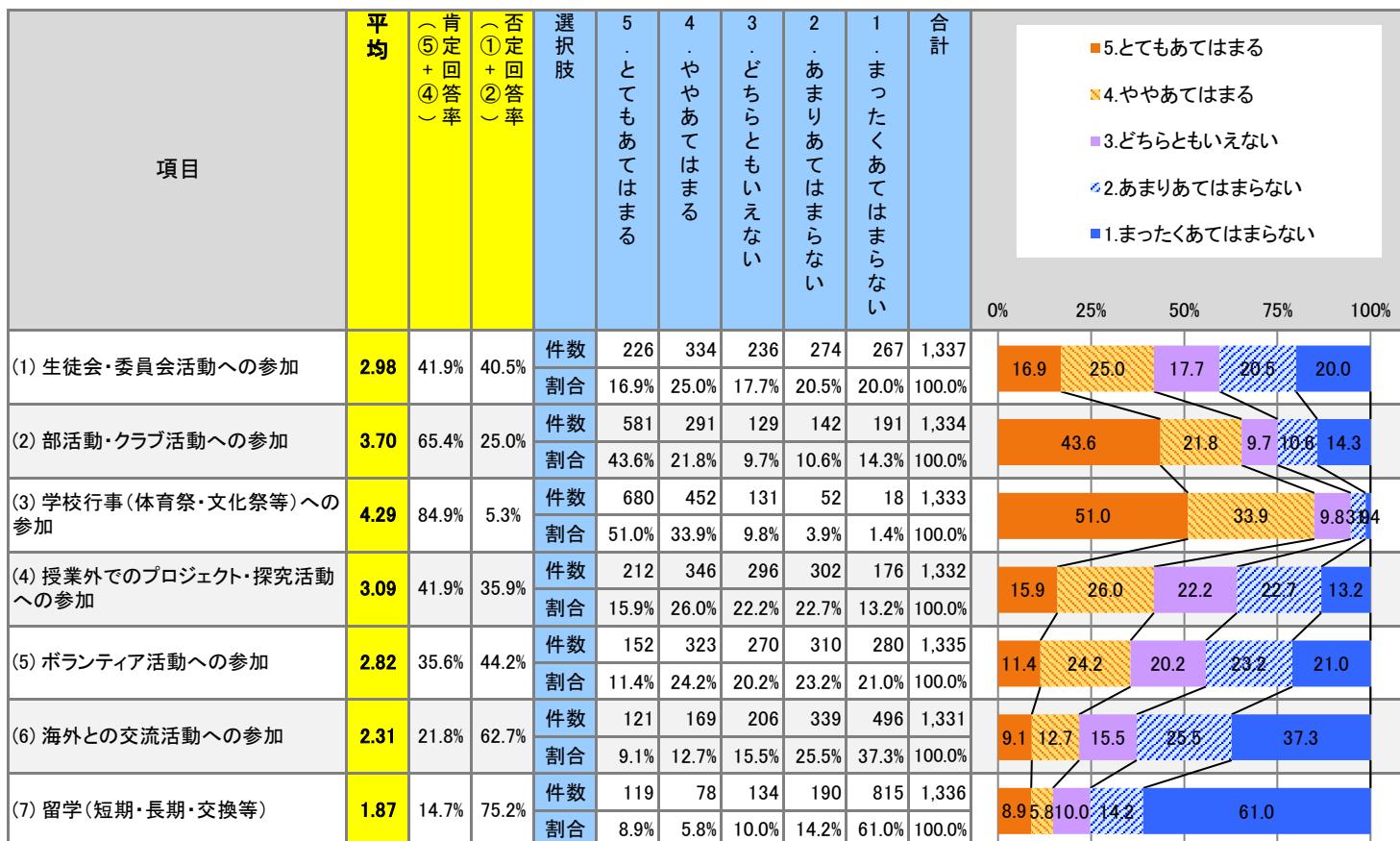
区分

学校ID 2.履修無し：全体集計

回答者数

1,351

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 2.履修無し：全体集計

回答者数

1,351

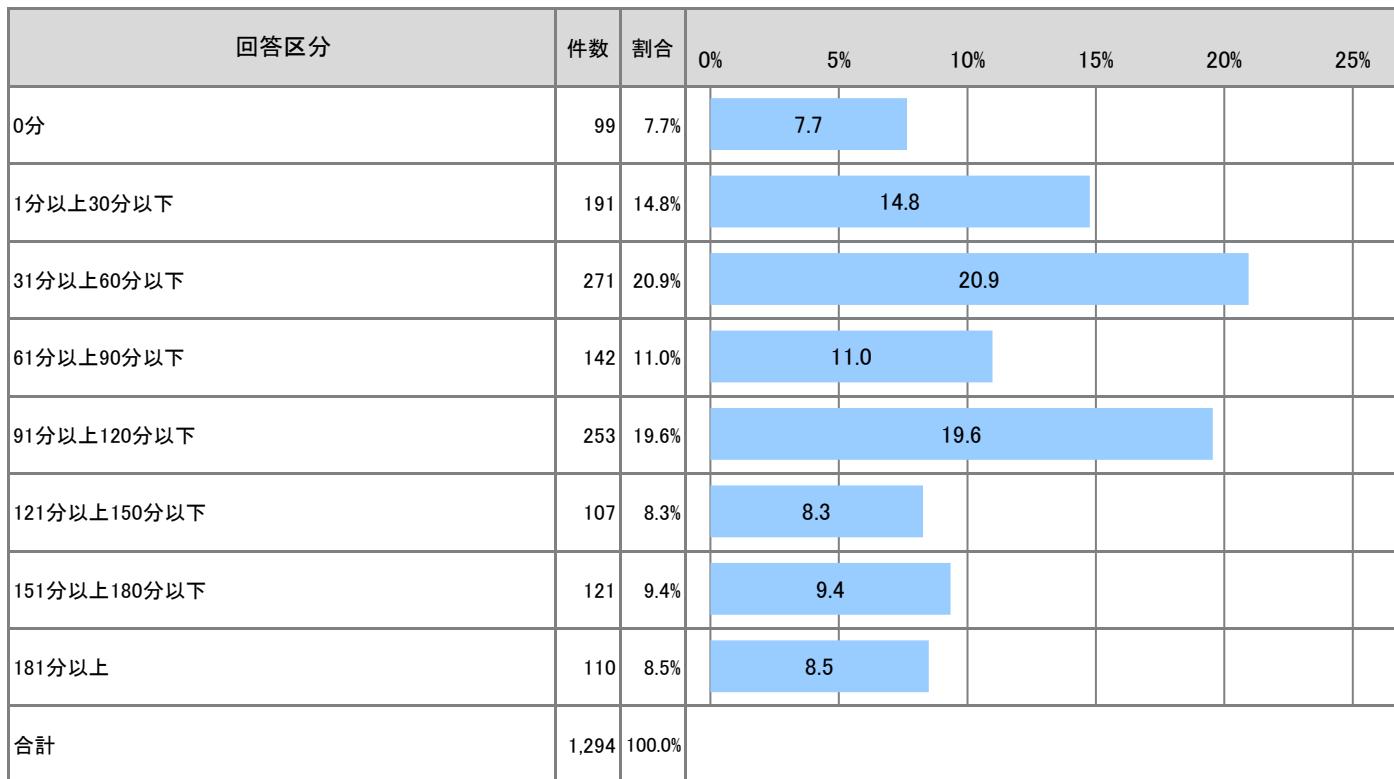
## 質問5. 学期中の平日(月曜～金曜)放課後の学習時間(=1日あたりの平均)と学習内容を教えてください。

※時間は10分や30分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が0の場合は、空欄ではなく、例のように( )内に0を記入してください。

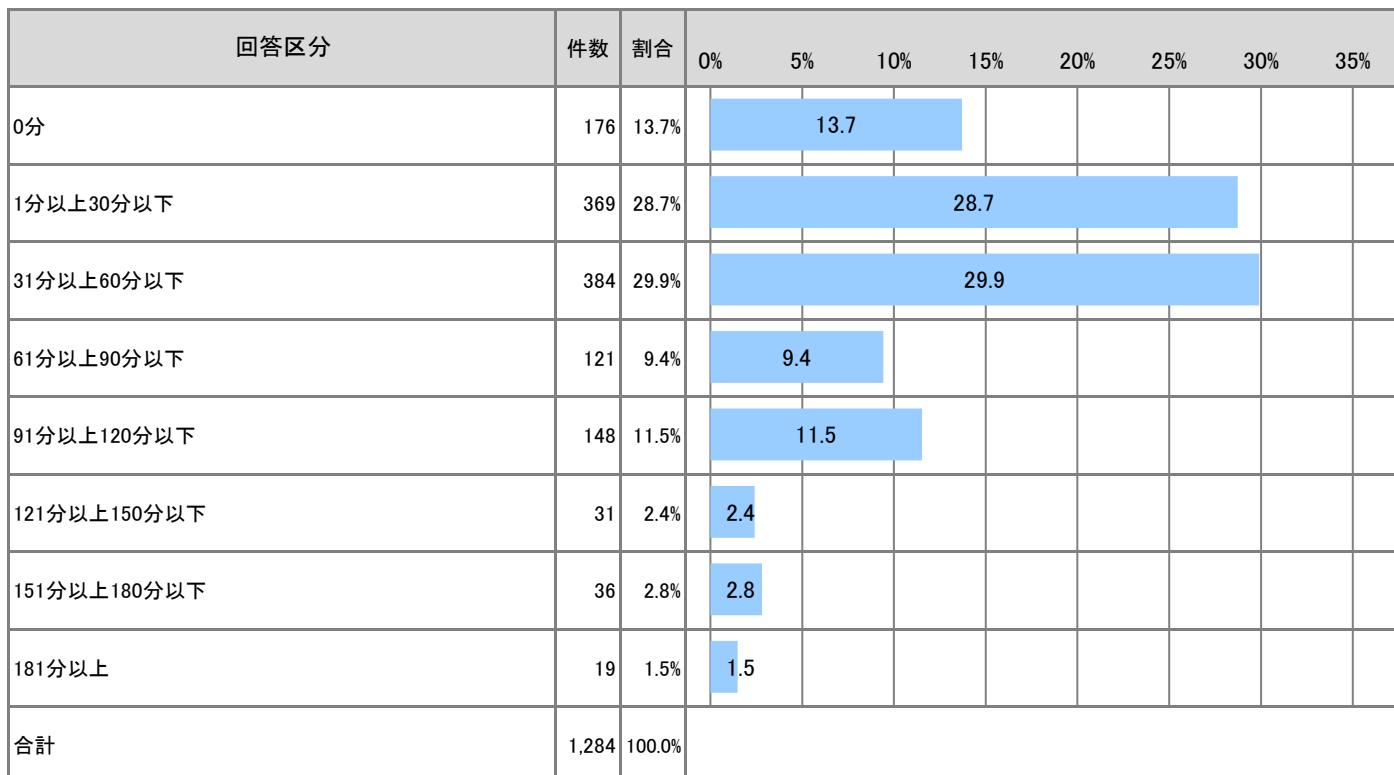
例)「およそ(0)時間(40)分」、「およそ(2)時間(0)分」など。

(1) 1日あたりの放課後の学習時間: よよそ( )時間( )分



(2) 上記の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

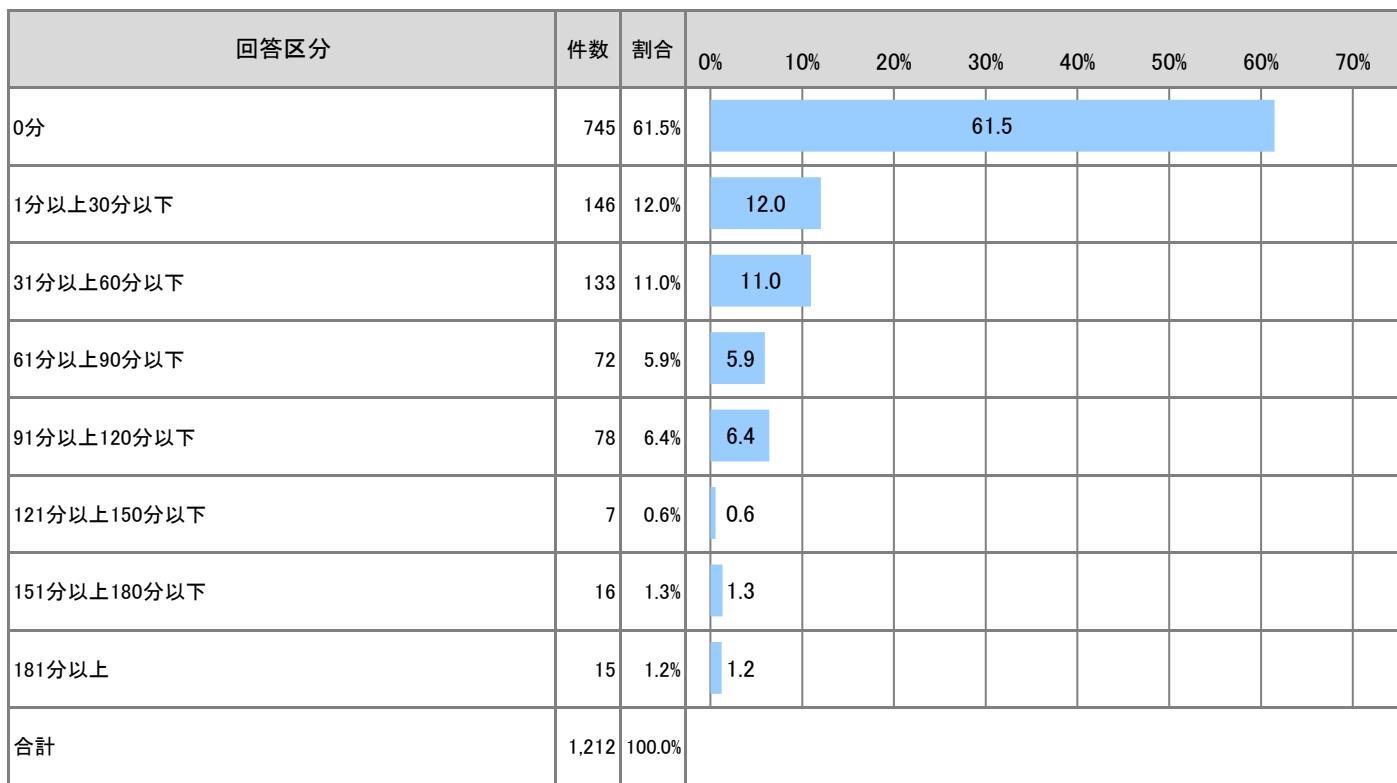
①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)



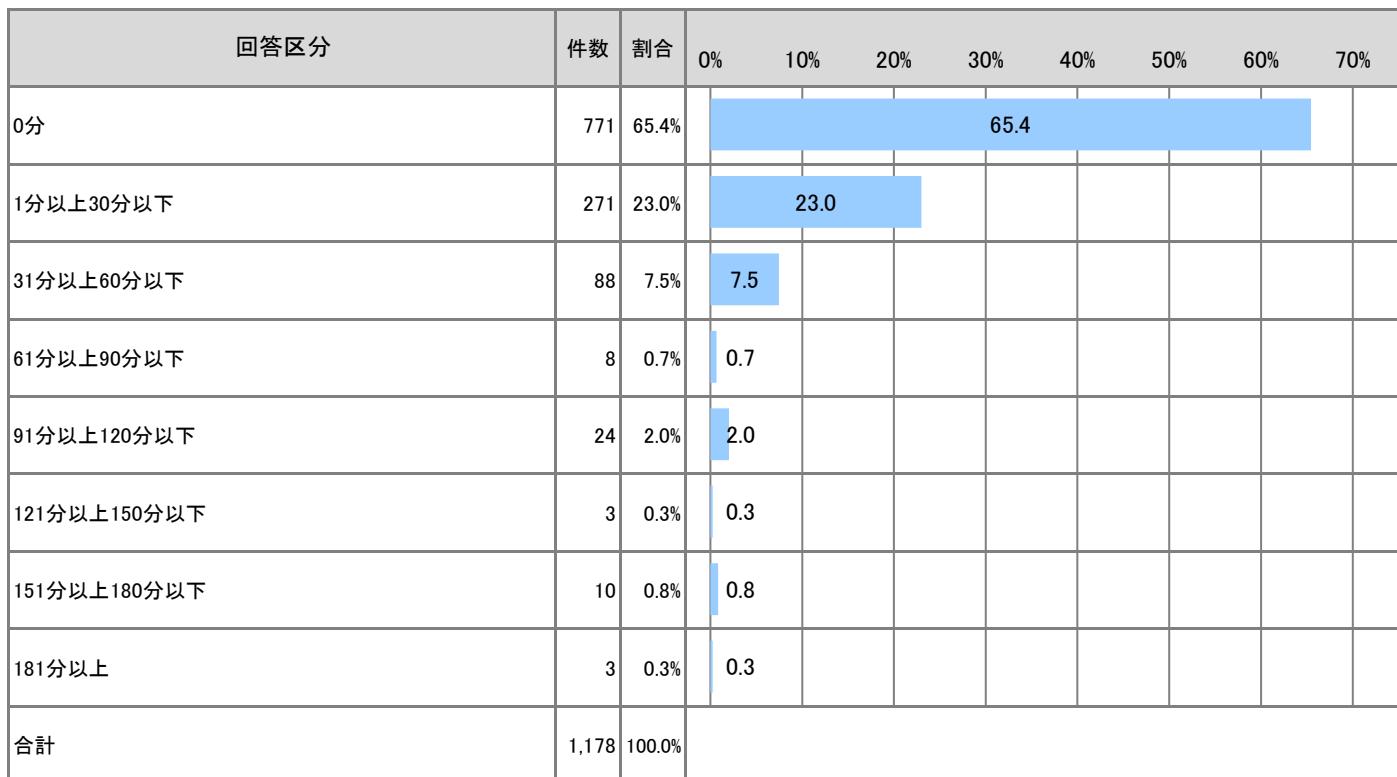
# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.履修無し : 全体集計	回答者数	1,351
----	--------------------	------	-------

## ②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)



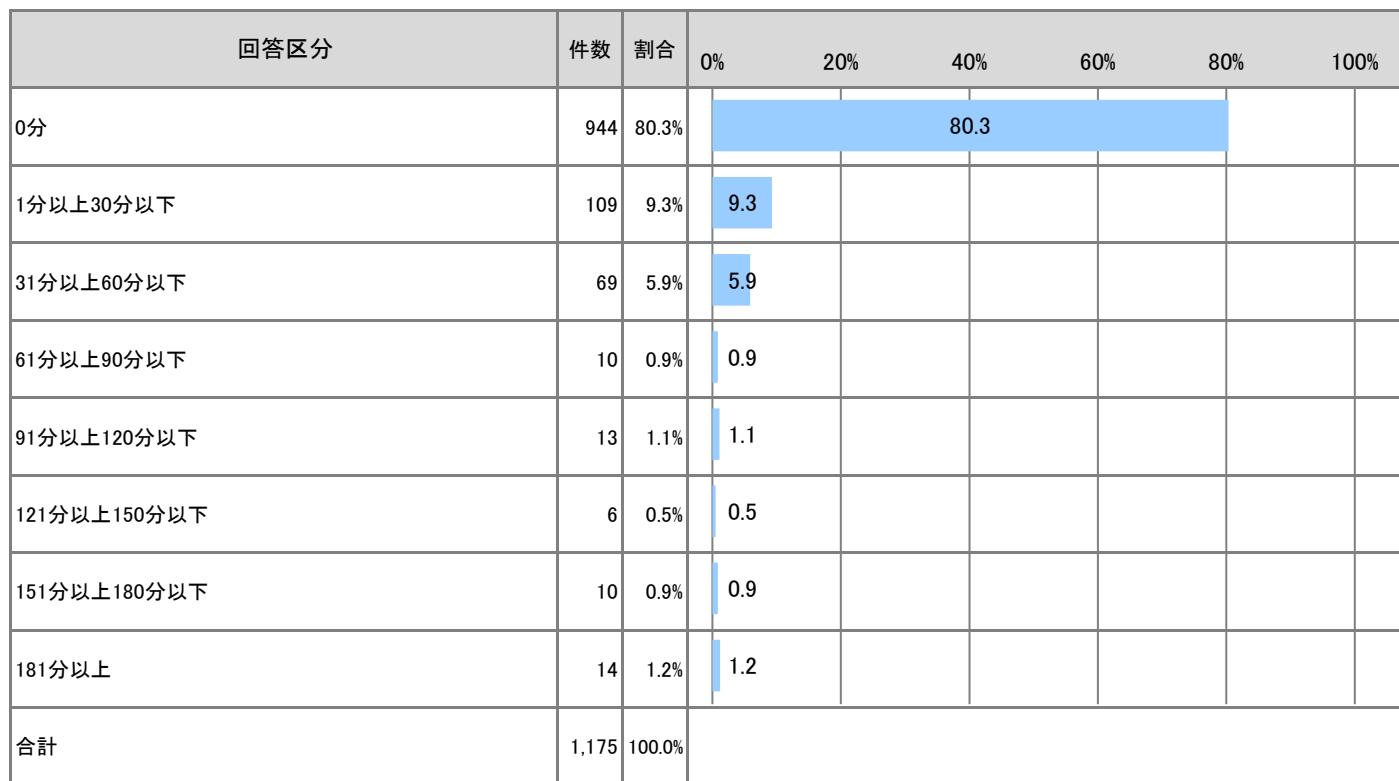
## ③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文



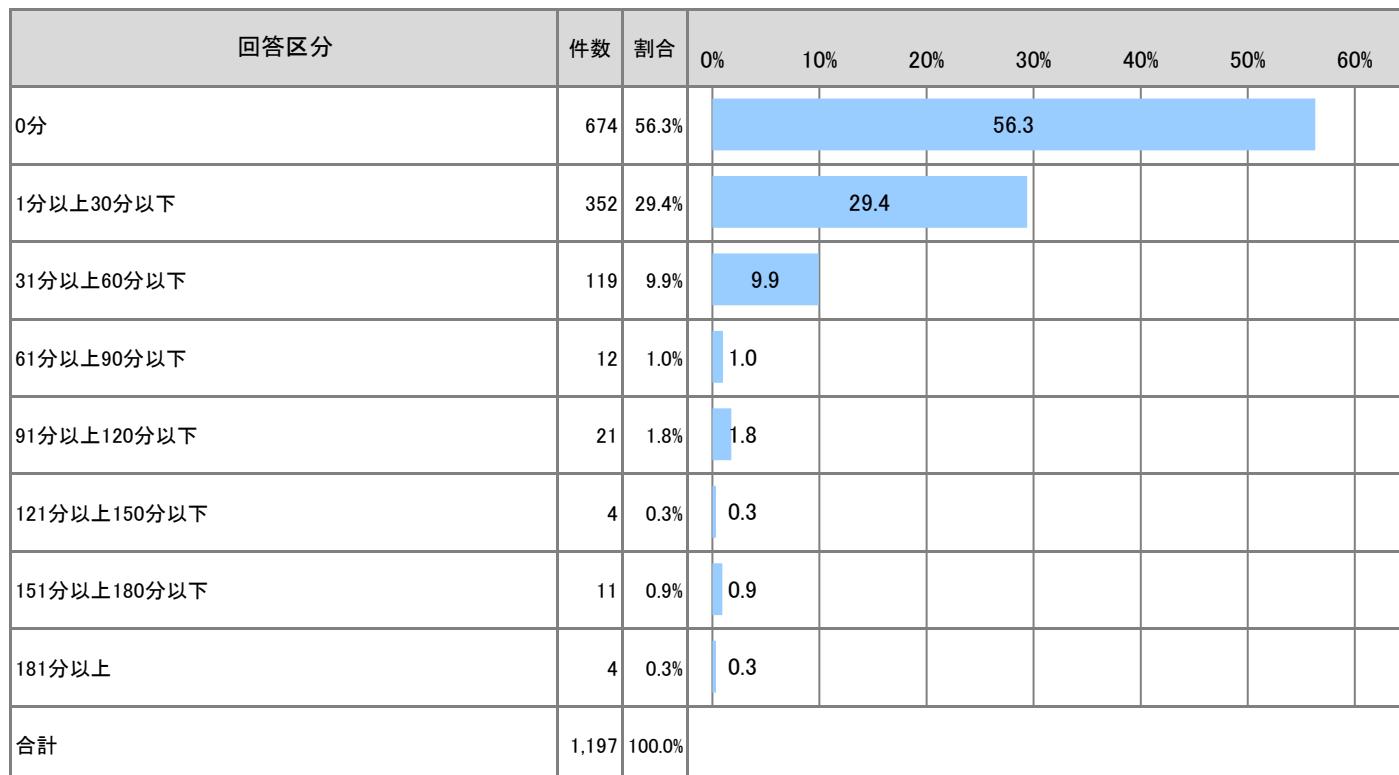
# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.履修無し : 全体集計	回答者数	1,351
----	--------------------	------	-------

## ④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)



## ⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)



# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 2.履修無し：全体集計

回答者数

1,351

## 質問6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

選択肢	件数	割合
1. 下のほう	403	30.1%
2. まんなか	679	50.7%
3. 上のほう	256	19.1%
合計	1,338	100.0%



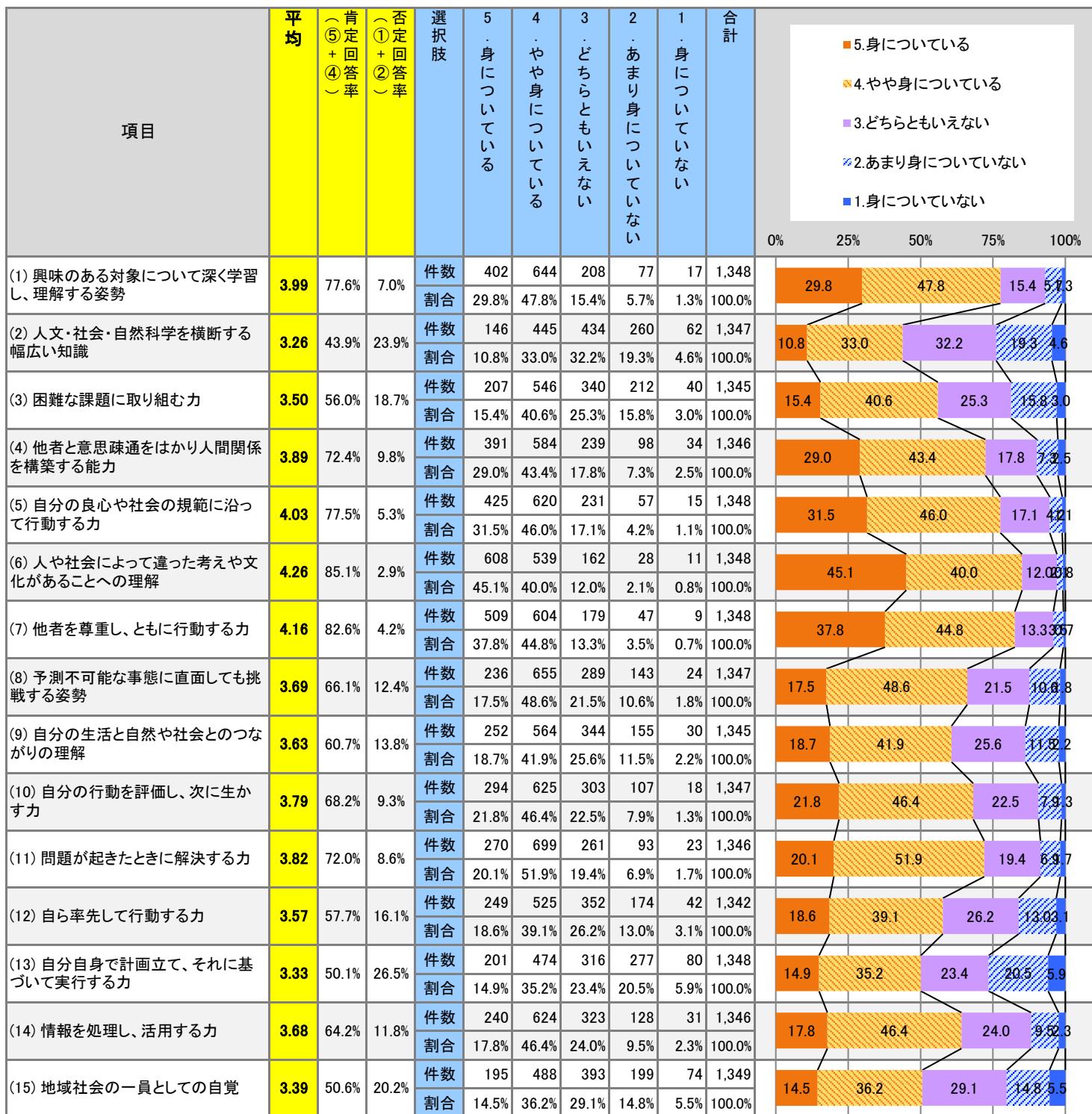
(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%
1. 英検(実用英語技能検定)	1,077	75.8%	75.8				
2. TOEFL	39	2.7%	2.7				
3. TOEIC	37	2.6%	2.6				
4. IELTSアカデミック・モジュール	7	0.5%	0.5				
5. その他	54	3.8%	3.8				
6. 資格は取得していない	207	14.6%	14.6				
合計	1,421	100.0%					

# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.履修無し : 全体集計	回答者数	1,351
----	--------------------	------	-------

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 2.履修無し：全体集計

回答者数

1,351

質問7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。



平均点:「5.身についている」を5点、「4.やや身についている」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまり身についていない」を2点、「1.身についていない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

学校ID 2.履修無し：全体集計

回答者数

1,351

## 質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

### (1) 学校生活について



平均点：「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

### (2) 将来について



平均点：「5.とてもそう思う」を5点、「4.ややそう思う」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりそう思わない」を2点、「1.まったくそう思わない」を1点として加重平均

# 高校での学習・経験に関する調査

区分

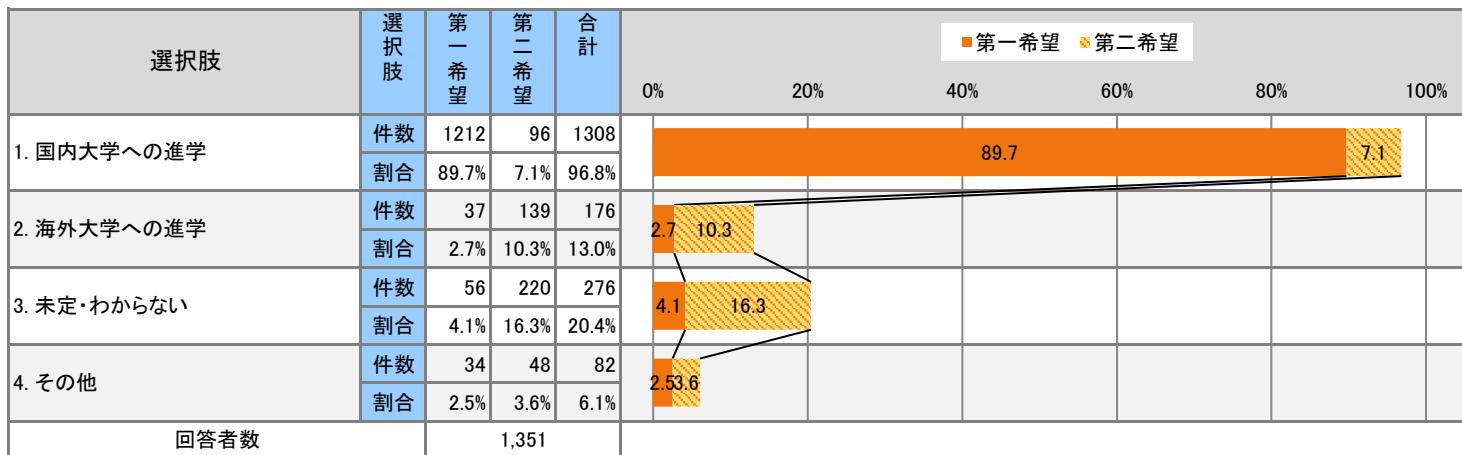
学校ID 2.履修無し：全体集計

回答者数

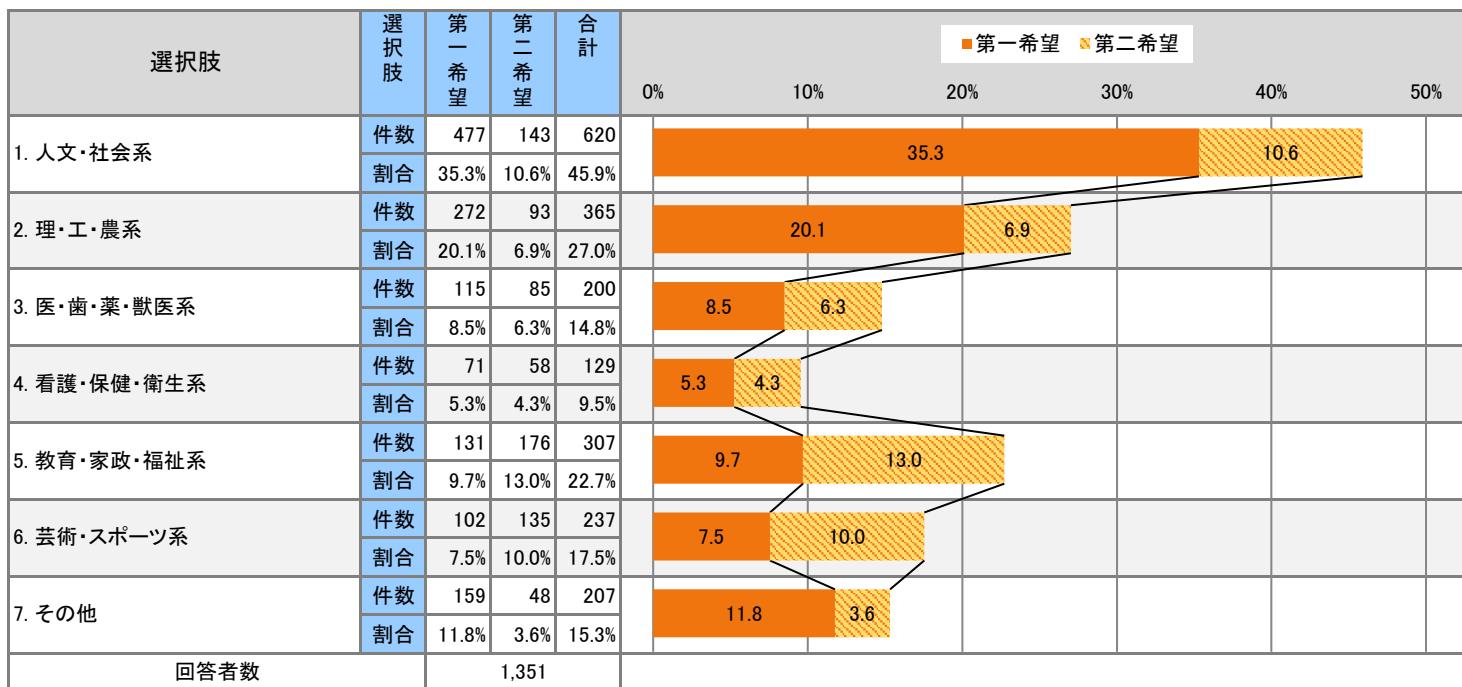
1,351

## 質問9. あなたの進路と将来の展望について教えてください。

(1) あなたは高校を卒業後、どのような進路を希望していますか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



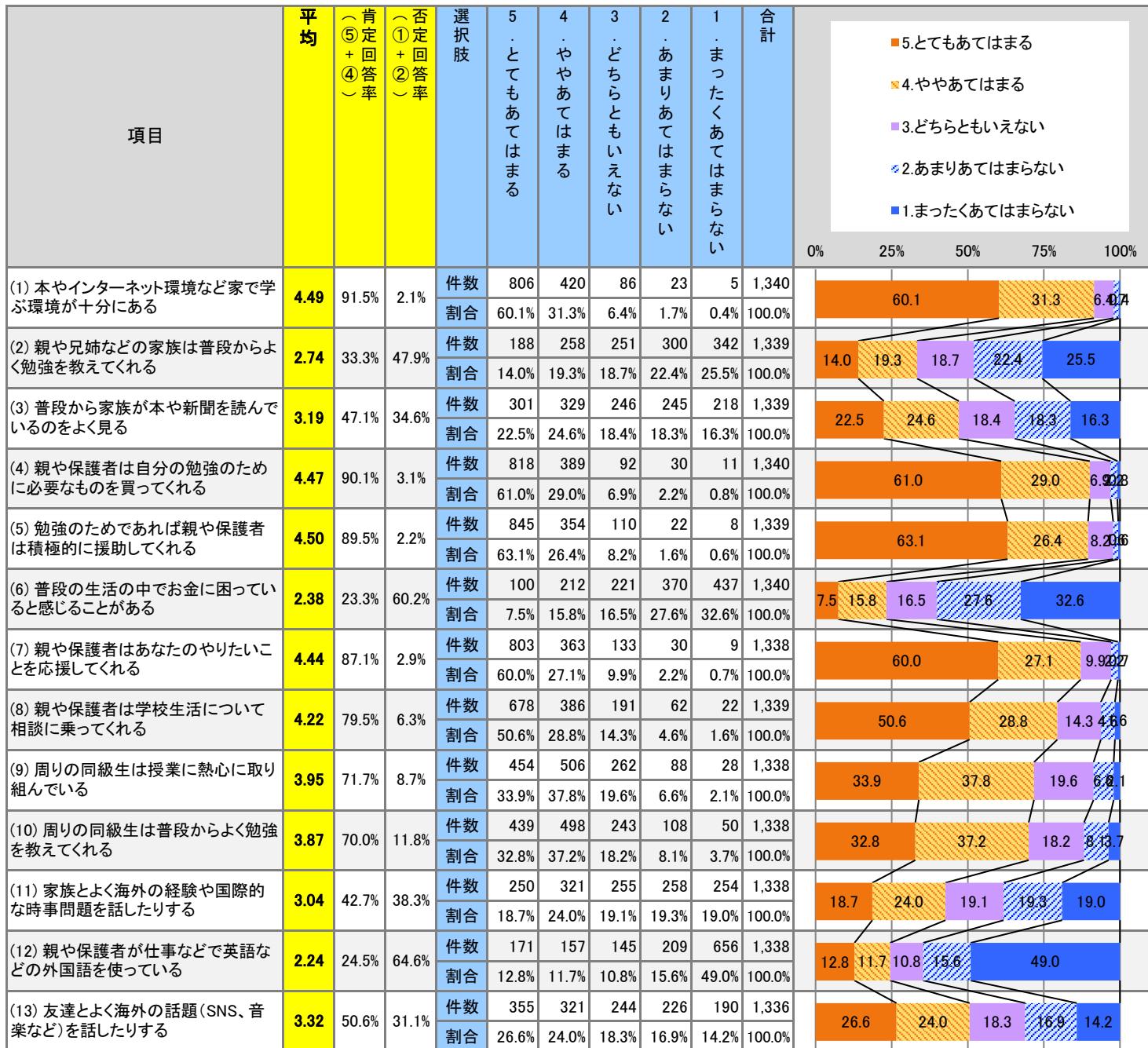
(2) あなたはどの専門分野に進みたいですか。もっとも当てはまるものから番号を選択してください(第一希望だけでも可)。



# 高校での学習・経験に関する調査

区分	学校ID 2.履修無し：全体集計	回答者数	1,351
----	------------------	------	-------

## 質問10. あなたの周囲の環境についておたずねします。



平均点:「5.とてもあてはまる」を5点、「4.ややあてはまる」を4点、「3.どちらともいえない」を3点、「2.あまりあてはまらない」を2点、「1.まったくあてはまらない」を1点として加重平均

2025年1月6日

国際バカロレア（IB）認定校  
学校長 殿

文部科学省委託

「国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究」  
研究代表者 藤田晃之（筑波大学人間系・教授）

## 国際バカロレアの各プログラムの実施状況に関する基礎調査について（依頼）

平素より格別の御高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

筑波大学では、文部科学省の委託を受け、国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究業務を行っています。このたび、日本国内のIB認定校の各プログラムの実施状況を把握するための基礎調査を実施いたします。

つきましては、御多用中お手数ですが、下記要領により御回答くださるようお願いします。

記

### 1. 調査対象

IB認定校のうち、学校教育法第一条に定める学校（ディプロマプログラム、中等教育プログラム、初等教育プログラム（小学校及び幼稚園）を含む。）

### 2. 回答方法

オンラインフォームへの入力

- ①幼稚園／初等教育プログラム（PYP）調査票：<https://forms.gle/8U8RdTfgeqKZwuuX8>
- ②小学校／初等教育プログラム（PYP）調査票：<https://forms.gle/FqgPfPEbVd9TbeKZA>
- ③中等教育プログラム（MYP）調査票：<https://forms.gle/hhriB4kVFEvnw4Fp6>
- ④ディプロマプログラム（DP）調査票：<https://forms.gle/HmPGPTLYBBFB6jM39>

※調査票は学校種別、プログラム別に4種類あります。

※郵送・FAX等での御回答を御希望の場合、[ibkk@un.tsukuba.ac.jp](mailto:ibkk@un.tsukuba.ac.jp)まで御連絡ください。

### 3. 回答期限

2025年1月31日（金）

### 4. その他

- ・本調査結果は、文部科学省における今後の国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に活用させていただくとともに、報告書及び学会発表・論文等において公表する予定です。
- ・回答いただいたデータは統計的に処理し、学校名や個人を特定できる形で公表しません。
- ・収集したメールアドレスは厳重に管理し、本調査の目的以外では使用しません。
- ・昨年度の基礎調査の結果は、文部科学省IB教育推進コンソーシアムのホームページにおいて『令和5年度 成果報告書』（筑波大学研究チーム）の巻末資料に掲載しています。
- ・本調査について御質問等ございましたら、事務連絡先まで御連絡ください。

以上

<本件調査に関すること>

筑波大学人間系・IB教育調査室 ルステモヴァ・アクトルクン  
(TEL: 029-853-4831 E-mail: [ibkk@un.tsukuba.ac.jp](mailto:ibkk@un.tsukuba.ac.jp))

<委託事業に関すること>

文部科学省大臣官房国際課外国人教育政策推進第二係  
瀬戸、長谷部 (TEL: 03-5253-4111 / 内線 3675)

【①幼稚園／初等教育プログラム調査票】

国際バカロレア・初等教育プログラム（IBPYP）の  
実施状況に関する基礎調査

管理職及び PYP コーディネーター等の責任者のみなさま

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。御多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、御協力のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

＜回答者プロフィール＞

幼稚園名	
回答者役職	
回答者名	
連絡先	電話番号： メールアドレス：

問1. [IBPYP の実施形態] IBPYP をどの年齢で実施していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 3歳児                  2. 4歳児                  3. 5歳児  
4. その他 (具体的に : )

補足 :

--

問2. [IBPYP 園児数] 貴園の IBPYP の園児数を教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※例を参照の上、年齢を含めて御記入をお願いいたします。

学年	例: 3歳児				
人数	20名	名	名	名	名

【①幼稚園／初等教育プログラム調査票】

問3. [IBPYP 担当教員] 貴園の IBPYP を担当する教員について教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(2) IBPYP 担当教員数」の欄には、カリキュラム作成及び運営に携わる管理職・教員等の総数を御記入ください（非常勤を含む）。図書館司書、養護教諭等も会議への参加や単元の作成に関わっている場合は含めてください。

※「(4) IB 教員資格 (IBEC)」とは、大学・大学院の IB 教員養成コース等を修了し、IB 機構から認定された資格を指します。通常 3 日間で実施される IB ワークショップの修了証とは異なります。

(1) 全教員数 ※管理職、図書館司書、養護教諭、非常勤教員等も含む。	[ ] 名
(2) IBPYP 担当教員数	[ ] 名
(3) (2) のうち、2023年度に国際バカロレア機構(IBO)によるワークショップを受講した教員数	[ ] 名
(4) (2) のうち、IB 教員資格 (IBEC: IB educator certificate) を取得している教員数	[ ] 名

問4. [IBPYP 生の卒園後のプログラム] 貴園の IBPYP 生の卒園後のプログラム選択について教えてください。

※2023年度に卒園した園児の状況を御記入ください。

※初等教育プログラム (PYP) については、系列校や他校であることを問いません。

(1) IBPYP を履修して卒園した園児数	[ ] 名
(2) (1) のうち、小学校の初等教育プログラム (PYP) へ進んだ園児数	[ ] 名

問5. 貴園における IBPYP の実施状況について、補足や追加情報があれば御記入ください。

問6. 日本における IBPYP の現状や展望に関して御意見等ございましたら、自由に御記入ください。

質問は以上です。御協力ありがとうございました。

【②小学校／初等教育プログラム調査票】

国際バカロレア・初等教育プログラム（IBPYP）の  
実施状況に関する基礎調査

管理職及び PYP コーディネーター等の責任者のみなさま

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。御多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、御協力のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

＜回答者プロフィール＞

学校名	
回答者役職	
回答者名	
連絡先	電話番号： メールアドレス：

問1. [IBPYP の実施形態] IBPYP をどの学年で実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

※「1」の場合、小学6年生以降のMYPの実施の有無について補足欄に御記入ください。

1. 小学1年生から小学5年生まで
2. 小学1年生から小学6年生まで
3. その他（具体的に：）

補足：

--

問2. [IBPYP 児童数] 貴校のIBPYPの児童数を教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※例を参照の上、学年を含めて御記入をお願いいたします。

学年	例： 1年生						
人数	30名	名	名	名	名	名	名

【②小学校／初等教育プログラム調査票】

問3. [IBPYP 担当教員] 貴校の IBPYP を担当する教員について教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(2) IBPYP 担当教員数」の欄には、カリキュラム作成及び運営に携わる管理職・教員等の総数を御記入ください（非常勤を含む）。図書館司書、養護教諭等も会議への参加や単元の作成に関わっている場合は含めてください。

※「(4) IB 教員資格 (IBEC)」とは、大学・大学院の IB 教員養成コース等を修了し、IB 機構から認定された資格を指します。通常 3 日間で実施される IB ワークショップの修了証とは異なります。

(1) 全教員数 ※管理職、図書館司書、養護教諭、非常勤教員等も含む。	[ ] 名
(2) IBPYP 担当教員数	[ ] 名
(3) (2) のうち、2023年度に国際バカロレア機構(IBO)によるワークショップを受講した教員数	[ ] 名
(4) (2) のうち、IB 教員資格 (IBEC: IB educator certificate) を取得している教員数	[ ] 名

問4. [IBPYP 生の修了後のプログラム] 貴校の IBPYP 生の修了後のプログラム選択について教えてください。

※2023年度に卒業した児童の状況を御記入ください（小学5年生で PYP を修了している場合も、卒業学年の状況をお答えください）。

※中等教育プログラム (MYP) については、系列校や他校であることを問いません。

(1) IBPYP を修了した児童数	[ ] 名
(2) (1) のうち、中等教育プログラム (MYP) へ進んだ児童数	[ ] 名

問5. 貴校における IBPYP の実施状況について、補足や追加情報があれば御記入ください。

問6. 日本における IBPYP の現状や展望に関して御意見等ございましたら、自由に御記入ください。

質問は以上です。御協力ありがとうございました。

【③中等教育プログラム調査票】

国際バカロレア・中等教育プログラム（IBMYP）の  
実施状況に関する基礎調査

管理職及び MYP コーディネーター等の責任者のみなさま

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。御多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、御協力のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

＜回答者プロフィール＞

学校名	
回答者役職	
回答者名	
連絡先	電話番号： メールアドレス：

問1. [IBMYP の実施形態] IBMYP をどの学年で実施していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

※「1」の場合、小学5年生までの PYP の実施の有無について、「5」の場合、高校2年生以降の DP の実施の有無について補足欄に御記入ください。

1. 小学6年生      2. 中学1年生      3. 中学2年生  
4. 中学3年生      5. 高校1年生

補足：

--

問2. [IBMYP 生徒数] 貴校の IBMYP の生徒数を教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※例を参照の上、学年を含めて御記入をお願いいたします。

学年	例： 中学1年生					
人数	30名	名	名	名	名	名

【③中等教育プログラム調査票】

問3. [IBMYP 担当教員] 貴校の IBMYP を担当する教員について教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(2) IBMYP 担当教員数」の欄には、カリキュラム作成及び運営に携わる管理職・教員等の総数を御記入ください（非常勤を含む）。図書館司書、養護教諭等も会議への参加や単元の作成に関わっている場合は含めてください。

※「(4) IB 教員資格 (IBEC)」とは、大学・大学院の IB 教員養成コース等を修了し、IB 機構から認定された資格を指します。通常 3 日間で実施される IB ワークショップの修了証とは異なります。

(1) 全教員数 ※管理職、図書館司書、養護教諭、非常勤教員等も含む。	[ ] 名
(2) IBMYP 担当教員数	[ ] 名
(3) (2) のうち、2023年度に国際バカロレア機構(IBO)によるワークショップを受講した教員数	[ ] 名
(4) (2) のうち、IB 教員資格 (IBEC: IB educator certificate) を取得している教員数	[ ] 名

問4. 【中等教育学校あるいは中高一貫校でディプロマプログラム (DP) の認定を受けている場合のみ御回答ください】

[IBMYP 生の修了後のプログラム] 貴校の IBMYP 生の修了後のプログラム選択について教えてください。

※2023年度に高校1年生だった生徒の状況を御記入ください。

(1) IBMYP を修了した生徒数	[ ] 名
(2) (1) のうち、ディプロマプログラム (DP) へ進んだ生徒数	[ ] 名

問5. 貴校における IBMYP の実施状況について、補足や追加情報があれば御記入ください。

問6. 日本における IBMYP の現状や展望に関して御意見等ございましたら、自由に御記入ください。

質問は以上です。御協力ありがとうございました。

【④ディプロマプログラム調査票】

国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）の  
実施状況に関する基礎調査

管理職及び DP コーディネーター等の責任者のみなさま

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。御多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、御協力のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

＜回答者プロフィール＞

学校名	
回答者役職	
回答者名	
連絡先	電話番号： メールアドレス：

問1. [IBDP の開始年度] 貴校における国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）の開始年度等を教えてください。

(1) 第1期生が教育課程上正式に IBDP の履修を開始した年度	[ 年度 ]
(2) 第1期生が IBDP の最終試験を受けた年度	[ 年度 ]

問2. [IBDP の開始時期] 貴校における国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）の開始時期を教えてください（教育課程上正式に IBDP の履修を始める時期）。

〔高校\_\_\_\_\_年生の\_\_\_\_\_月〕

問3. [貴校の取組] 過去 10 年間で文部科学省や都道府県、財團等による指定を受けた取組があれば、その事業の名称と指定を受けた期間を教えてください（例：スーパーサイエンスハイスクール（SSH）、スーパーグローバルハイスクール（SGH）、ワールド・ワイド・ラーニング（WWL）、研究開発学校、教育課程特例校等）。

※枠が足りない場合、適宜追加してください。

(1) 事業の名称	(2) 指定を受けた期間
	[ 年度 ] ~ [ 年度 ]
	[ 年度 ] ~ [ 年度 ]
	[ 年度 ] ~ [ 年度 ]

【④ディプロマプログラム調査票】

[ 年度] ~ [ 年度]
[ 年度] ~ [ 年度]

- (3) SSH 指定校や WWL 抱点校との連携等、その他、探究学習の推進や国際性を高める特色のある取組があれば、IBDP との関連の有無を含めて教えてください。

--

- 問4.** [IBDP 生徒数] 貴校の IBDP の生徒数を教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(3) IBDP 生数」の欄は、IBDP の履修生がいない場合には「0（ゼロ）」、高校1年生等について履修生数が決まっていない場合には、予定されている定員数または「未定」と御記入ください。

※「(4) IB 科目履修生数」の欄には、IBDP コース以外に在籍している（ディプロマ資格取得を目指していない）生徒で、一部の IB 科目を履修している生徒数を御記入ください。

(1) IBDP 生の 1 学年あたりの受け入れ定員	[ ] 名
----------------------------	-------

	高校1年生 (2024年度入学)	高校2年生 (2023年度入学)	高校3年生 (2022年度入学)
(2) 学年の全生徒数			
(3) IBDP 生数 ※高校1年生は予定者数			
(4) IB 科目履修生数			

- 問5.** [IBDP 担当教員] 貴校の IBDP を担当する教員について教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(2) IBDP 担当教員数」の欄には、グループ1～6の各科目及び知の理論 (TOK) を担当する教員の総数を御記入ください（非常勤を含む）。

※「(4) IB 教員資格 (IBEC)」とは、大学・大学院の IB 教員養成コース等を修了し、IB 機構から認定された資格を指します。通常 3 日間で実施される IB ワークショップの修了証とは異なります。

(1) 全教員数 ※管理職、図書館司書、養護教諭、非常勤教員等も含む。	[ ] 名
(2) IBDP 担当教員数	[ ] 名
(3) (2) のうち、2023年度に国際バカロレア機構 (IBO) によるワークショップを受講した教員数	[ ] 名
(4) (2) のうち、IB 教員資格 (IBEC: IB educator certificate) を取得している教員数	[ ] 名

【④ディプロマプログラム調査票】

**問6.** [IBDP 開講科目と履修者数] 貴校の IBDP 科目の開講状況と履修者数を教えてください。

※2024年12月1日時点での高校3年生の人数を御記入ください（IB科目履修生数を含む）。

※「Environmental Systems and Societies／環境システムと社会」を開講している場合、グループ3か4のどちらかに御記入ください。

※下記以外の科目を開講している場合は、その他の欄に御回答ください。足りない場合には欄を追加してください。

(1) グループ1

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合は ○をつけてください	SL (人数)	HL (人数)
English A: Literature			
日本語 A：文学			
English A: Language & Literature			
日本語 A：言語と文学			
その他 ( )			
その他 ( )			

(2) グループ2

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合は ○をつけてください	SL (人数)	HL (人数)
English B			
日本語 B			
Language ab initio／初級外国語 〔言語： 〕			
その他 ( )			
その他 ( )			

(3) グループ3

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合は ○をつけてください	SL (人数)	HL (人数)
Economics			
経済			
Geography			

【④ディプロマプログラム調査票】

地理			
History			
歴史			
※Environmental Systems and Societies			
※環境システムと社会			
その他 ( )			
その他 ( )			

(4) グループ 4

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合は ○をつけてください	SL (人数)	HL (人数)
Biology			
生物			
Chemistry			
化学			
Physics			
物理			
※Environmental Systems and Societies			
※環境システムと社会			
その他 ( )			
その他 ( )			

(5) グループ 5

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合は ○をつけてください	SL (人数)	HL (人数)
Mathematics: Analysis and Approaches			
数学：解析とアプローチ			
Mathematics: Applications and Interpretation			
数学：応用と解釈			
その他 ( )			
その他 ( )			

【④ディプロマプログラム調査票】

(6) グループ 6

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合は ○をつけてください	SL (人数)	HL (人数)
Music			
音楽			
Visual Arts			
美術			
Theatre			
演劇			
その他 ( )			
その他 ( )			

問7. [IBDP 生の進路] 貴校の IBDP 修了生の進路について教えてください。

※2023年度の実績を御記入ください（確定している情報のみで構いません）。

※合格実績ではなく進学実績を御記入ください。

(1) IBDP 修了生数	[ ] 名
(2) (1) のうち、IB ディプロマ資格取得者数	[ ] 名
(3) (1) のうち、大学進学者の内訳	a) 国内大学 [ ] 名 b) 海外大学 [ ] 名
(4) (3) のうち、IB ディプロマ資格を用いて受験した生徒数 ※出願資格やスコアの利用等。	a) 国内大学 [ ] 名 b) 海外大学 [ ] 名
(5) (3) a) 国内大学に進学した生徒のうち、次の選抜方法により進路決定した生徒	a) IB 特別入試等の IB ディプロマ資格者のみが出願できる特色ある入試 [ ] 名 b) 総合型選抜 ①IB ディプロマ資格者対象 [ ] 名 ②IB ディプロマ資格者及びその他の者も対象 [ ] 名 ③上記以外の総合型選抜 [ ] 名 c) 学校推薦型選抜 [ ] 名 d) 一般選抜（大学入学共通テストの一部利用を含む） [ ] 名 e) その他の選抜方法 [ ] 名
(6) (3) b) 海外大学に進学した生徒のうち、次に該当する生徒	a) 奨学金（給付）を得た生徒 [ ] 名 b) 奨学金（貸与）を得た生徒 [ ] 名 c) 授業料免除の対象になった生徒 [ ] 名

【④ディプロマプログラム調査票】

(7) 2023年度修了生の進学先の情報を教えてください。

※複数名が同じ大学・学部学科に進学した場合は、学部学科の後に「(2)」のように人数を記入してください。

※枠が足りない場合、適宜追加してください。

①国内

大学	学部学科

②海外

国名	大学	学部学科

【④ディプロマプログラム調査票】

問8. 貴校における IBDP の実施状況について、補足や追加情報があれば御記入ください。

問9. 日本における IBDP の現状や展望に関して御意見等ございましたら、自由に御記入ください。

質問は以上です。御協力ありがとうございました。

# 国際バカロレア・幼稚園／初等教育プログラム(IBPYP)の 実施状況に関する基礎調査

回答数

8

**問1. [IBPYPの実施形態] IBPYPをどの年齢で実施していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。**

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
1. 3歳児	8	100.0%						100.0%
2. 4歳児	8	100.0%						100.0%
3. 5歳児	8	100.0%						100.0%
4. その他	1	12.5%		12.5%				
未回答	0	0.0%	0.0%					
回答数	8	-						

※その他:未就園児クラスもメソッドを取り入れています。

**問2. [IBPYP園児数] 貴園のIBPYPの園児数を教えてください。**

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※例を参照の上、年齢を含めて御記入をお願いいたします。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	合計人数			(名) 800
					0	200	400	
3歳児	8 (100.0%)	0 (0.0%)	68	543			543	
4歳児	8 (100.0%)	0 (0.0%)	66	524			524	
5歳児	8 (100.0%)	0 (0.0%)	67	538			538	
その他	4 (50.0%)	4 (50.0%)	160	640			640	

問3. [IBPYP担当教員]貴園のIBPYPを担当する教員について教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(2) IBPPY担当教員数」の欄には、カリキュラム作成及び運営に携わる管理職・教員等の総数を御記入ください(非常勤を含む)。図書館司書、養護教諭等も会議への参加や単元の作成に関わっている場合は含めてください。

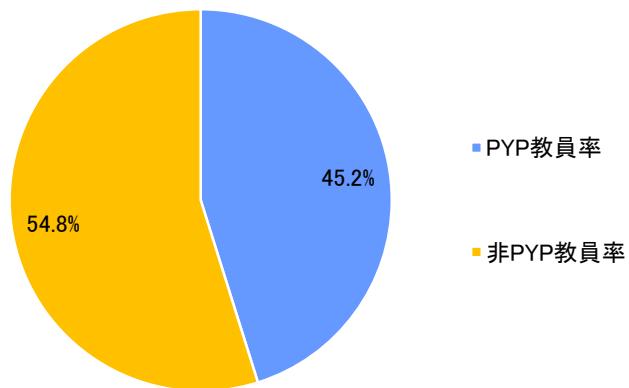
※「(4) IB教員資格 (IBEC)」とは、大学・大学院のIB教員養成コース等を修了し、IB機構から認定された資格を指します。通常3日間で実施されるIBワークショップの修了証とは異なります。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	合計人数（名）			
					0	100	200	300
(1) 全教員数 ※管理職、図書館司書、養護教諭、非常勤教員等も含む。	8 (100.0%)	0 (0.0%)	39	310				310
(2) IBPYP担当教員数	8 (100.0%)	0 (0.0%)	18	140			140	

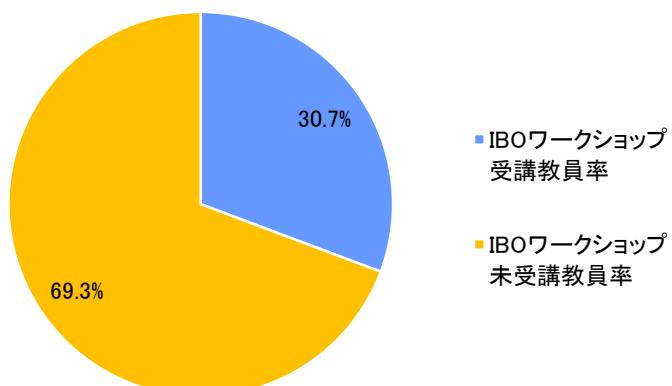
設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	0	50	100	150
(2) IB PYP 担当教員数	8 (100.0%)	0 (0.0%)	18	140				140
(2) の う ち	2023年度に国際バカロレア機構 (3) (IBO)によるワークショップを受 講した教員数	8 (100.0%)	0 (0.0%)	5	43		43	
	IB教員資格 (IBEC: IB educator (4) certificate) を取得している教員 数	8 (100.0%)	0 (0.0%)	1	9	9		

## ■教員数の傾向

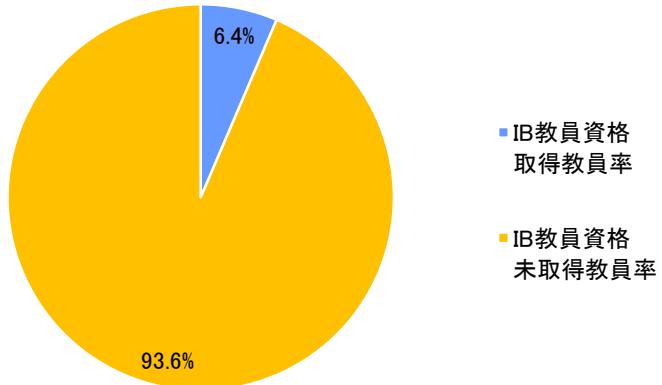
	合計 人数
全体の教員数	310
PYP教員数	140
全体のPYP教員比率	45.2%



	合計 人数
PYP教員数	140
IBOワークショップを受講した教員数	43
IBOワークショップを受講した教員比率	30.7%



	合計 人数
PYP教員数	140
IB教員資格取得教員数	9
IB教員資格取得教員比率	6.4%

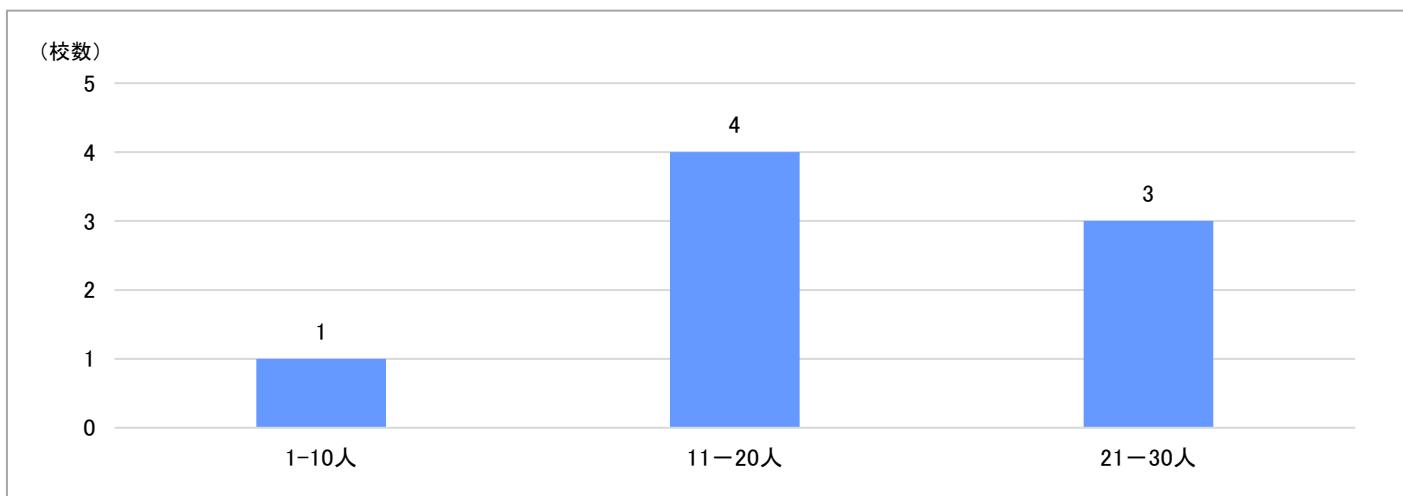


## ■全教員数とIBPYP教員数

	人数
全教員数の平均値	39
PYP教員数の平均	18
PYP教員比率の中央値	54.9%
PYP教員比率の標準偏差	17.0%

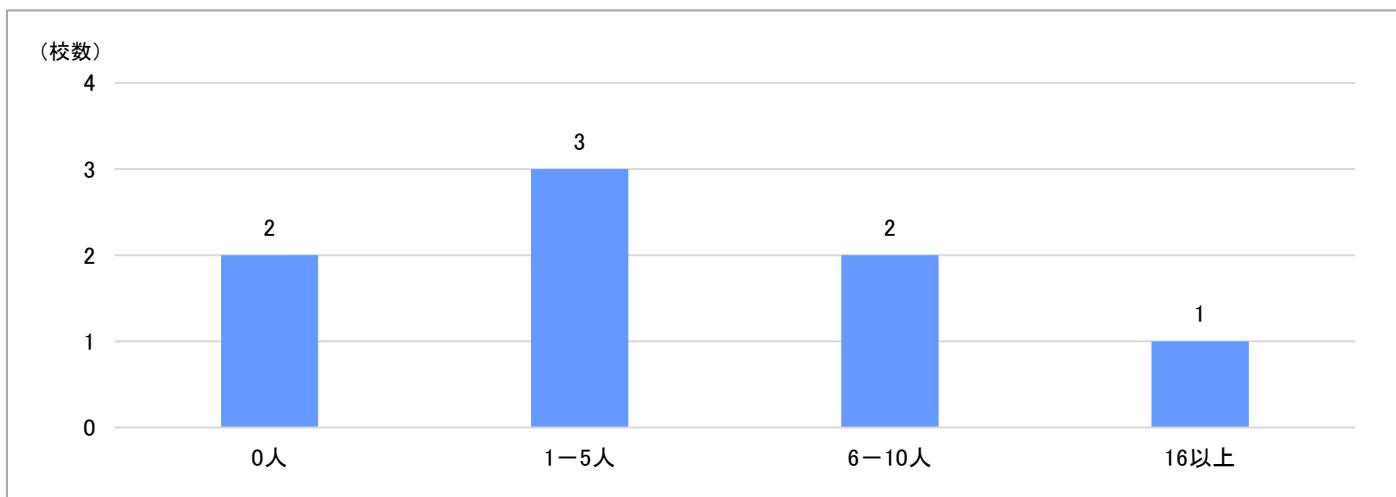
## ■IBPYP教員数

問3(2). IBPYP担当教員数	回答 校数	割合
0人	0	0.0%
1-10人	1	12.5%
11-20人	4	50.0%
21-30人	3	37.5%
31人以上	0	0.0%
未回答	0	0.0%
合計	8	100.0%



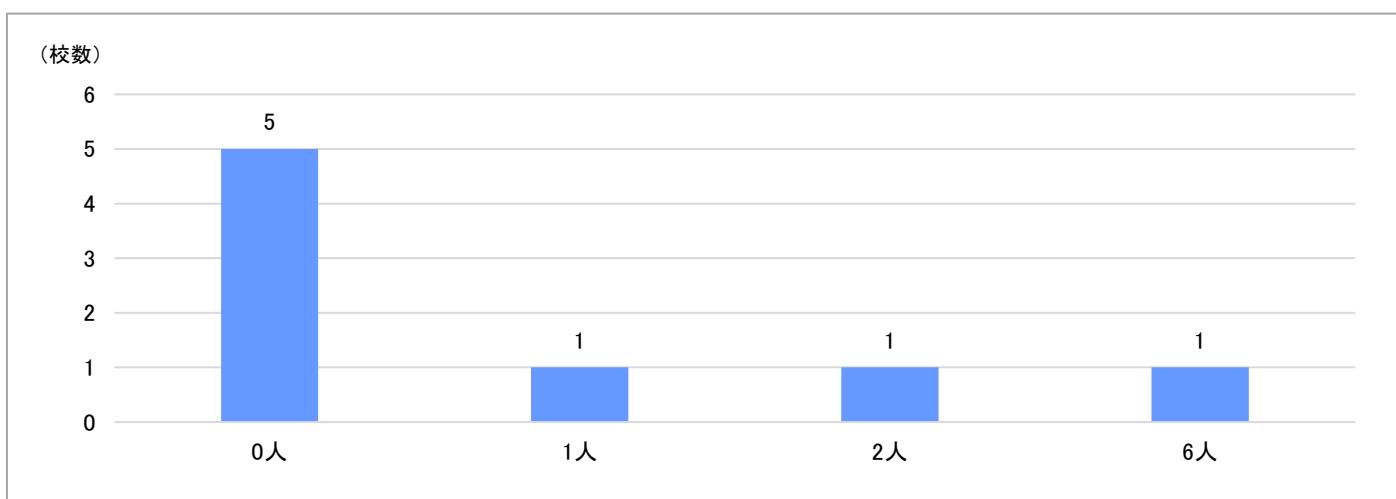
## ■IBのワークショップを受講教員数

問3(3) (2)のうち、2023年度に国際バカロレア機構(IBO)によるワークショップを受講した教員数	回答校数	割合
0人	2	25.0%
1~5人	3	37.5%
6~10人	2	25.0%
11~15人	0	0.0%
16以上	1	12.5%
未回答	0	0.0%
合計	8	100.0%



## ■IBEC取得教員数

問3(4) (2)のうち、IB教員資格(IBEC: IB educator certificate)を取得している教員数	回答校数	割合
0人	5	62.5%
1人	1	12.5%
2人	1	12.5%
6人	1	12.5%
未回答	0	0.0%
合計	8	100.0%



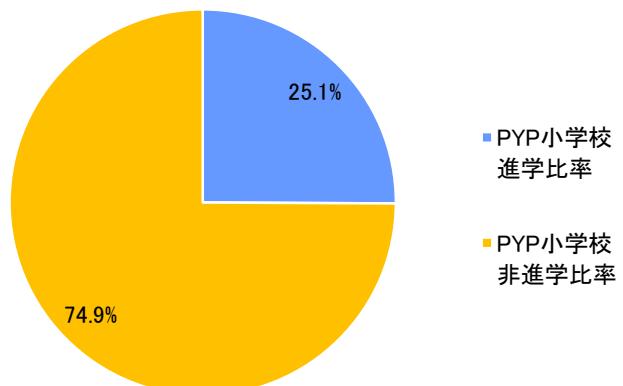
**問4. [IBPYP生の卒園後のプログラム]貴園のIBPYP生の卒園後のプログラム選択について教えてください。**

※2023年度に卒園した園児の状況を御記入ください。

※初等教育プログラム(PYP)については、系列校や他校であることを問いません。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	合計人数(名)						
					0	200	400	600	800	1,000	
(1) IBPYPを履修して卒園した園児数	8 (100.0%)	0 (0.0%)	115	921							921
(2) 小学校の初等教育プログラム(PYP)へ進んだ園児数	8 (100.0%)	0 (0.0%)	29	231		231					

	合計 人数
PYPを卒園した園児数	921
小学校のPYPへ進んだ園児数	231
PYP小学校進学比率	25.1%



# 国際バカロレア・小学校／初等教育プログラム(IBPYP)の 実施状況に関する基礎調査

回答数

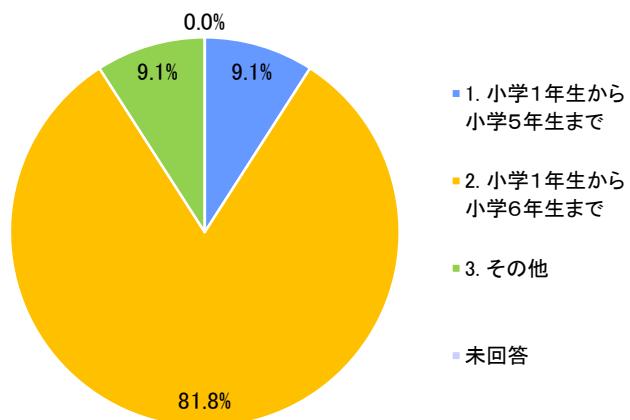
11

**問1. [IBPYPの実施形態] IBPYPをどの学年で実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。**

※「1」の場合、小学6年生以降のMYPの実施の有無について補足欄に御記入ください。

選択肢	件数	割合
1. 小学1年生から小学5年生まで	1	9.1%
2. 小学1年生から小学6年生まで	9	81.8%
3. その他	1	9.1%
未回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

※その他:記述なし



**問2. [IBPYP児童数] 貴校のIBPYPの児童数を教えてください。**

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※例を参照の上、学年を含めて御記入をお願いいたします。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	合計人数 (名)		
					0	200	400
1年生	11 (100.0%)	0 (0.0%)	51	563			563
2年生	11 (100.0%)	0 (0.0%)	54	594			594
3年生	11 (100.0%)	0 (0.0%)	57	632			632
4年生	11 (100.0%)	0 (0.0%)	54	595			595
5年生	10 (90.9%)	1 (9.1%)	52	519			519
6年生	9 (81.8%)	2 (18.2%)	44	392			392

### 問3. [IBPYP担当教員]貴校のIBPYPを担当する教員について教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(2) IBPYP担当教員数」の欄には、カリキュラム作成及び運営に携わる管理職・教員等の総数を御記入ください(非常勤を含む)。図書館司書、養護教諭等も会議への参加や単元の作成に関わっている場合は含めてください。

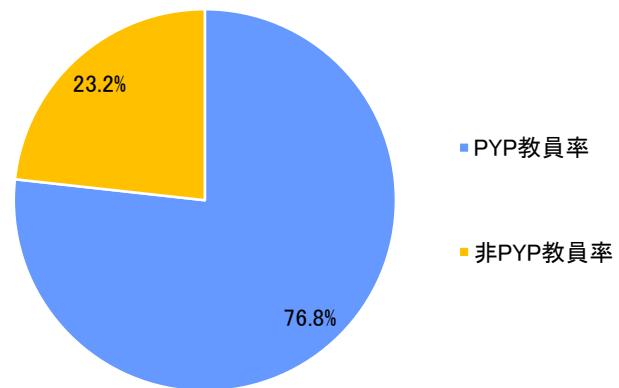
※「(4) IB教員資格(IBEC)」とは、大学・大学院のIB教員養成コース等を修了し、IB機構から認定された資格を指します。通常3日間で実施されるIBワークショップの修了証とは異なります。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	0	100	200	300	合計人数 (名)
									400
(1) 全教員数 ※管理職、図書館司書、養護教諭、非常勤教員等も含む。	11 (100.0%)	0 (0.0%)	32	357					357
(2) IBPYP担当教員数	11 (100.0%)	0 (0.0%)	25	274					274

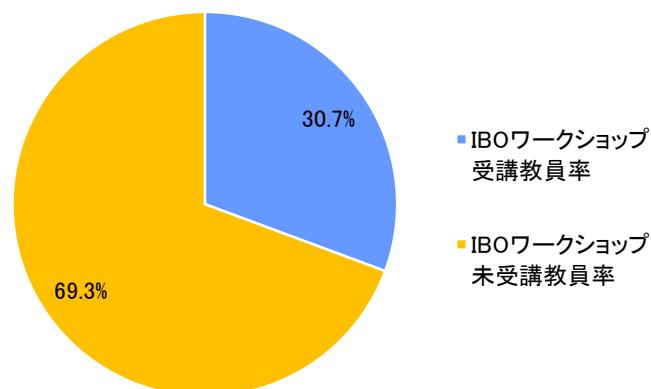
設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	0	100	200	300	合計人数 (名)
									400
(2) IBPYP担当教員数	11 (100.0%)	0 (0.0%)	25	274					274
(2) (3) 2023年度に国際バカロレア機構 のう ち (3) (IBO)によるワークショップを受 講した教員数	11 (100.0%)	0 (0.0%)	8	84					84
(2) (4) IB教員資格 (IBEC: IB educator certificate)を取得している教員 数	11 (100.0%)	0 (0.0%)	3	29					29

## ■教員数の傾向

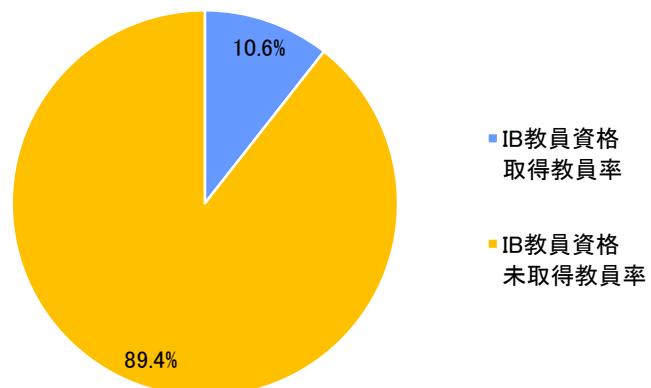
	合計 人数
全体の教員数	357
PYP教員数	274
全体のPYP教員比率	76.8%



	合計 人数
PYP教員数	274
IBOワークショップを受講した教員数	84
IBOワークショップを受講した教員比率	30.7%



	合計 人数
PYP教員数	274
IB教員資格取得教員数	29
IB教員資格取得教員比率	10.6%

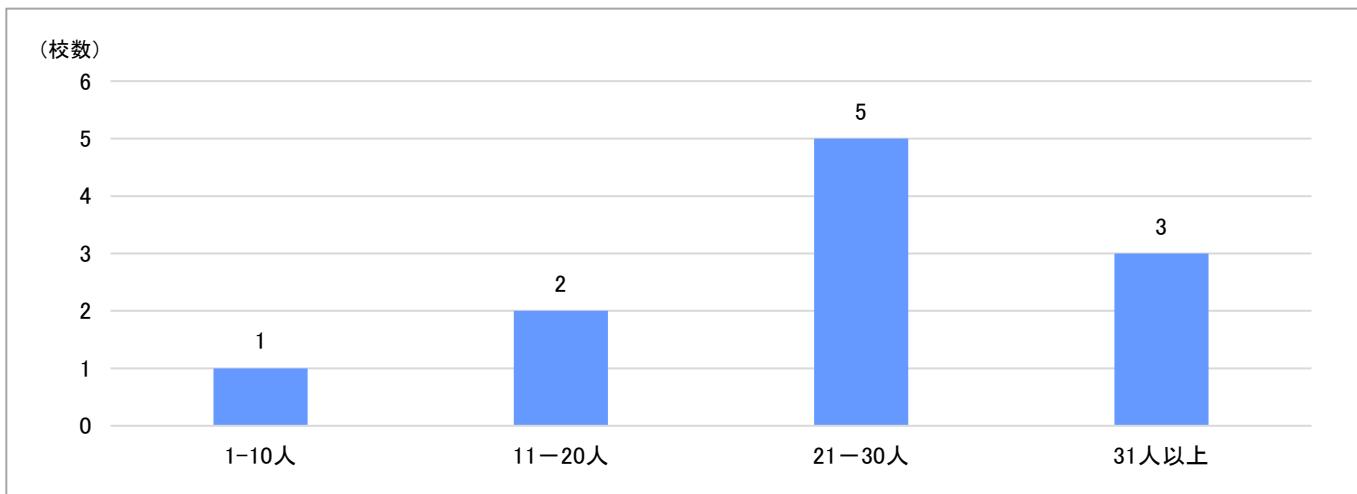


## ■全教員数とIBPYP教員数

	人数
全教員数の平均値	32
PYP教員数の平均	25
PYP教員比率の中央値	80.0%
PYP教員比率の標準偏差	11.0%

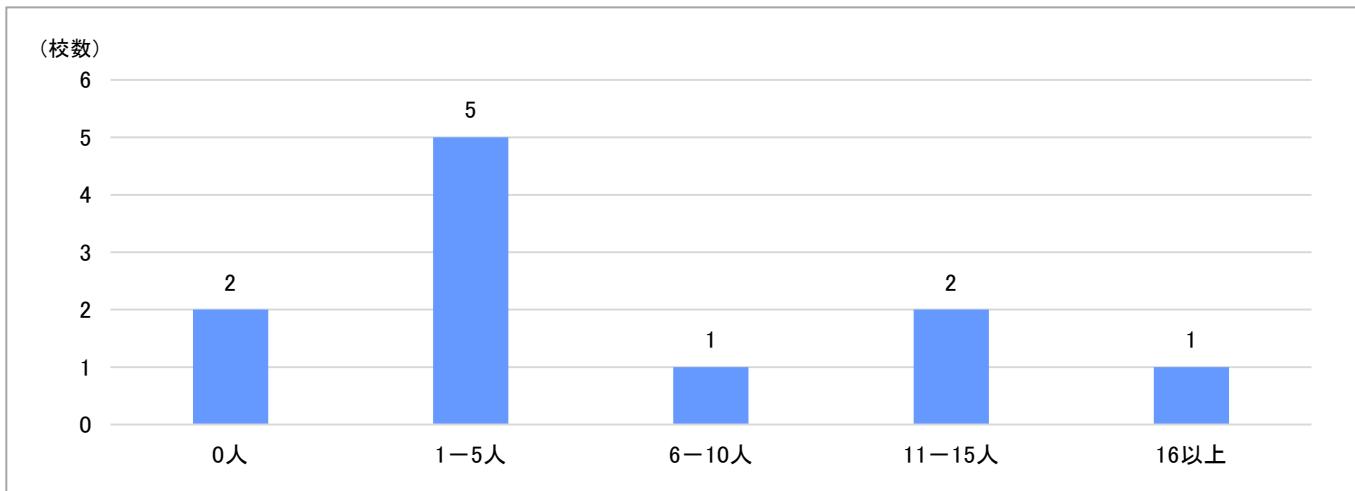
## ■IBPYP教員数

問3(2). IBPYP担当教員数	回答 校数	割合
0人	0	0.0%
1-10人	1	9.1%
11-20人	2	18.2%
21-30人	5	45.5%
31人以上	3	27.3%
未回答	0	0.0%
合計	11	100.0%



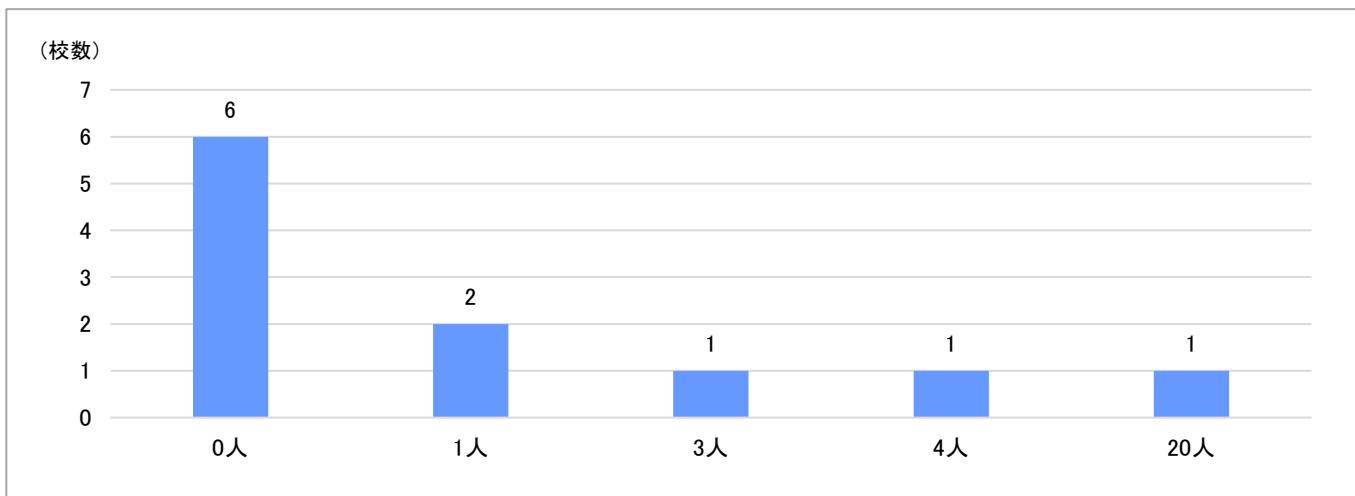
## ■IBのワークショップを受講教員数

問3(3)、(2)のうち、2023年度に国際バカロレア機構(IBO)によるワークショップを受講した教員数	回答校数	割合
0人	2	18.2%
1~5人	5	45.5%
6~10人	1	9.1%
11~15人	2	18.2%
16以上	1	9.1%
未回答	0	0.0%
合計	11	100.0%



## ■IBEC取得教員数

問3(4)、(2)のうち、IB教員資格(IBEC: IB educator certificate)を取得している教員数	回答校数	割合
0人	6	54.5%
1人	2	18.2%
3人	1	9.1%
4人	1	9.1%
20人	1	9.1%
未回答	0	0.0%
合計	11	100.0%



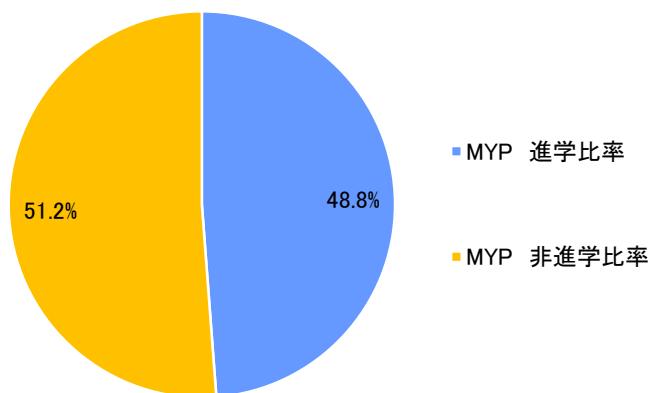
**問4. [IBPYP生の修了後のプログラム]貴校のIBPYP生の修了後のプログラム選択について教えてください。**

※2023年度に卒業した児童の状況を御記入ください(小学5年生でPYPを修了している場合 も、卒業学年の状況をお答えください)。

※中等教育プログラム(MYP)については、系列校や他校であることを問いません。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均人数	合計人数	0	200	400	合計人数 (名)
								600
(1) IBPYPを修了した児童数	11 (100.0%)	0 (0.0%)	49	543				543
(2) 中等教育プログラム(MYP)へ進んだ児童数	11 (100.0%)	0 (0.0%)	24	265			265	

	合計 人数
PYPを修了した児童数	543
MYPへ進んだ児童数	265
MYP進学比率	48.8%



# 国際バカロレア・中等教育プログラム(IBMYP)の 実施状況に関する基礎調査

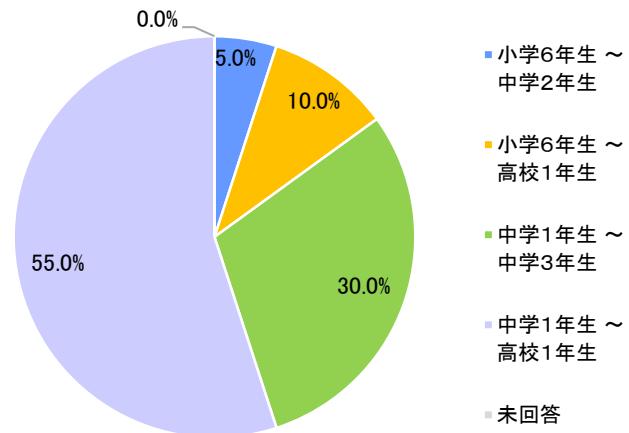
回答数

20

## 問1. [IBMYPの実施形態] IBMYPをどの学年で実施していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

※「1」の場合、小学5年生までのPYPの実施の有無について、「5」の場合、高校2年生以降のDPの実施の有無について補足欄に御記入ください。

選択肢	件数	割合
小学6年生～中学2年生	1	5.0%
小学6年生～高校1年生	2	10.0%
中学1年生～中学3年生	6	30.0%
中学1年生～高校1年生	11	55.0%
未回答	0	0.0%
合計	20	100.0%



## 問2. [IBMYP生徒数] 貴校のIBMYPの生徒数を教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※例を参照の上、学年を含めて御記入をお願いいたします。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	合計人数 (名)				
					0	500	1,000	1,500	2,000
小学6年生	9 (45.0%)	11 (55.0%)	24	217	217				
中学1年生	20 (100.0%)	0 (0.0%)	84	1,671				1,671	
中学2年生	20 (100.0%)	0 (0.0%)	83	1,663				1,663	
中学3年生	19 (95.0%)	1 (5.0%)	84	1,597				1,597	
高校1年生	14 (70.0%)	6 (30.0%)	61	857				857	

### 問3. [IBMYP担当教員]貴校のIBMYPを担当する教員について教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(2) IBMYP担当教員数」の欄には、カリキュラム作成及び運営に携わる管理職・教員等の総数を御記入ください(非常勤を含む)。図書館司書、養護教諭等も会議への参加や単元の作成に関わっている場合は含めてください。

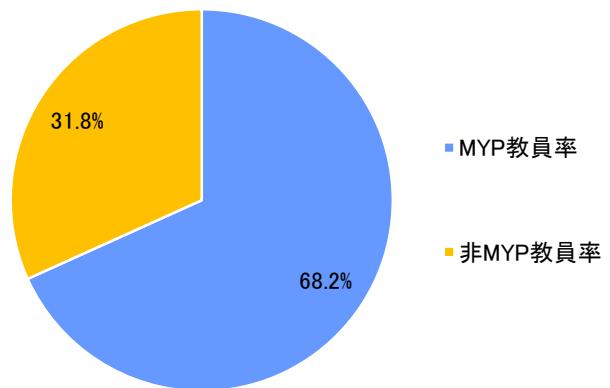
※「(4) IB教員資格(IBEC)」とは、大学・大学院のIB教員養成コース等を修了し、IB機構から認定された資格を指します。通常3日間で実施されるIBワークショップの修了証とは異なります。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	合計人数 (名)			
					0	500	1,000	1,500
(1) 全教員数 ※管理職、図書館司書、養護教諭、非常勤教員等も含む。	19 (95.0%)	1 (5.0%)	60	1,140			1,140	
(2) IBMYP担当教員数	19 (95.0%)	1 (5.0%)	41	778			778	

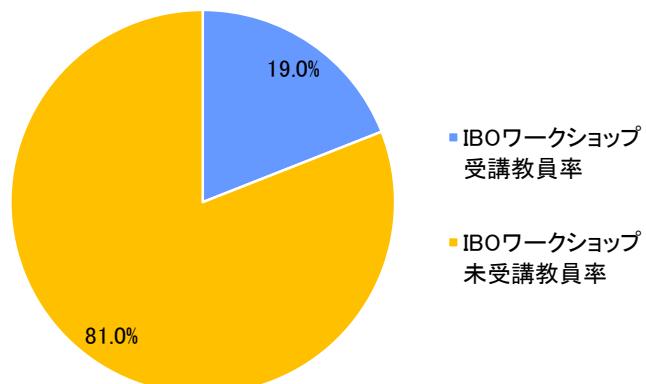
設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	合計人数 (名)			
					0	200	400	600
(2) IBMYP担当教員数	19 (95.0%)	1 (5.0%)	41	778				778
(2) (3) 2023年度に国際バカロレア機構 (IBO)によるワークショップを受 講した教員数	19 (95.0%)	1 (5.0%)	8	148	148			
うち (4) IB教員資格(IBEC: IB educator certificate)を取得している教員 数	20 (100.0%)	0 (0.0%)	1	19	19			

## ■教員数の傾向

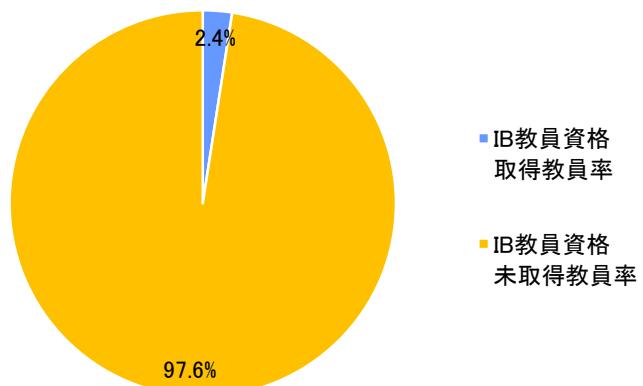
	合計 人数
全体の教員数	1,140
MYP教員数	778
全体のMYP教員比率	68.2%



	合計 人数
MYP教員数	778
IBOワークショップを受講した教員数	148
IBOワークショップを受講した教員比率	19.0%



	合計 人数
MYP教員数	778
IB教員資格取得教員数	19
IB教員資格取得教員比率	2.4%

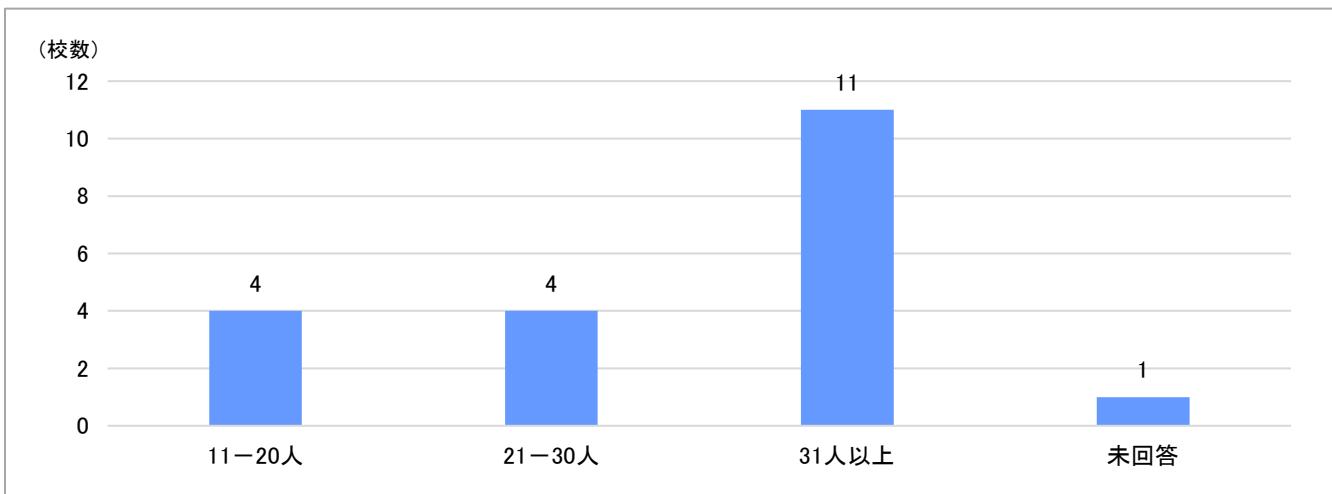


## ■全教員数とIB MYP教員数

	人数
全教員数の平均値	60
MYP教員数の平均	41
MYP教員比率の中央値	73.0%
MYP教員比率の標準偏差	20.9%

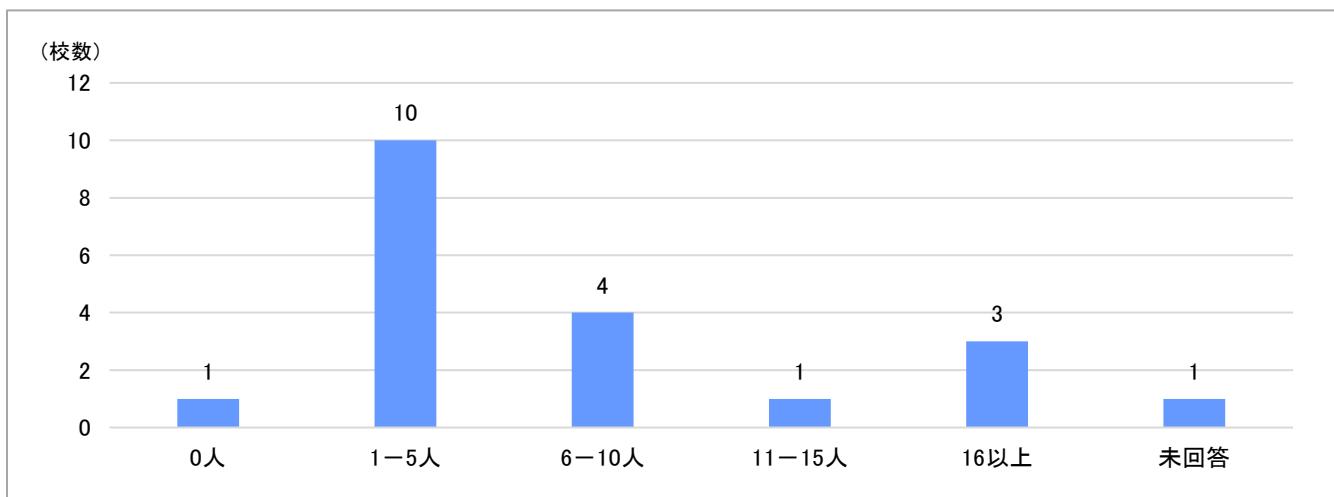
## ■IB MYP教員数

問3(2). IBMYP担当教員数	回答 校数	割合
0人	0	0.0%
1~10人	0	0.0%
11~20人	4	20.0%
21~30人	4	20.0%
31人以上	11	55.0%
未回答	1	5.0%
合計	20	100.0%



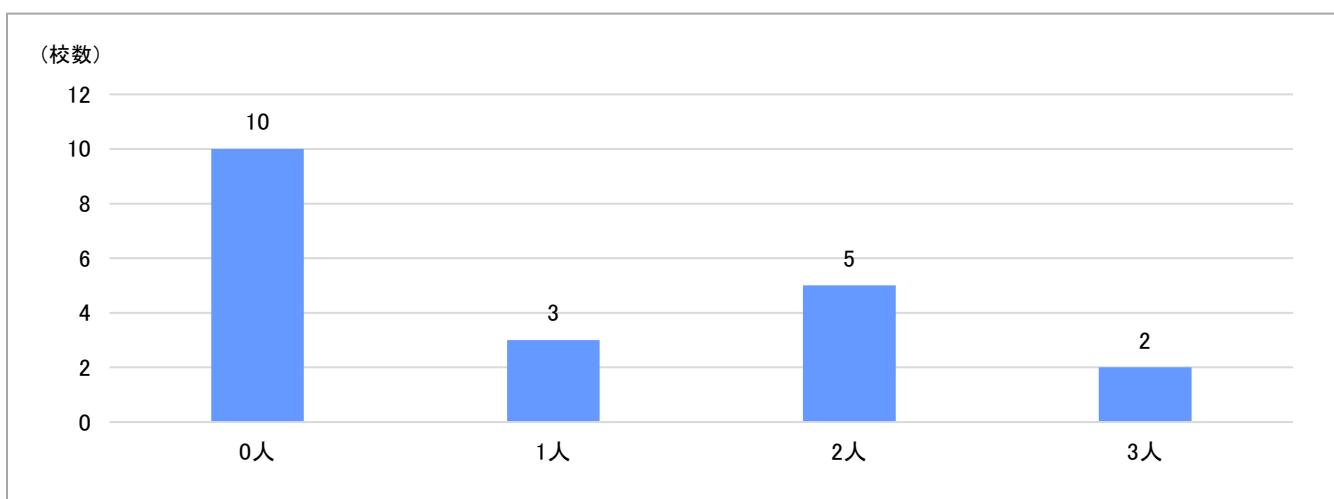
## ■IBのワークショップを受講教員数

問3(3). (2)のうち、2023年度に国際バカロレア機構(IBO)によるワークショップを受講した教員数	回答校数	割合
0人	1	5.0%
1~5人	10	50.0%
6~10人	4	20.0%
11~15人	1	5.0%
16以上	3	15.0%
未回答	1	5.0%
合計	20	100.0%



## ■IBEC取得教員数

問3(4). (2)のうち、IB教員資格(IBEC: IB educator certificate)を取得している教員数	回答校数	割合
0人	10	50.0%
1人	3	15.0%
2人	5	25.0%
3人	2	10.0%
未回答	0	0.0%
合計	20	100.0%



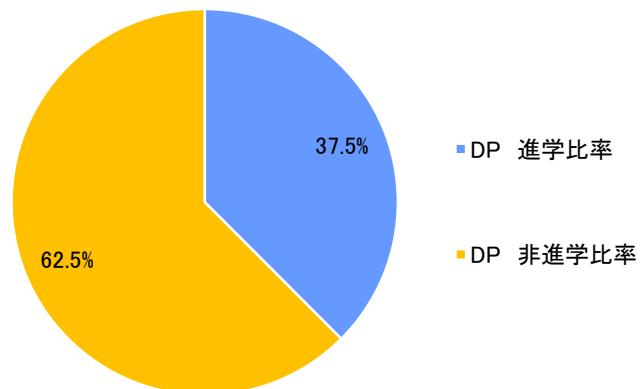
問4. 【中等教育学校あるいは中高一貫校でディプロマプログラム(DP)の認定を受けている場合のみ御回答ください】

[IB MYP生の修了後のプログラム] 貴校のIB MYP生の修了後のプログラム選択について教えてください。

※2023年度に高校1年生だった生徒の状況を御記入ください。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	合計人数 (名)						
					0	200	400	600	800	1,000	
(1) IB MYPを修了した生徒数	14 (70.0%)	6 (30.0%)	58	805							805
(2) ディプロマプログラム(DP)へ進んだ生徒数	14 (70.0%)	6 (30.0%)	22	302		302					

	合計 人数
MYPを修了した生徒数	805
DPへ進んだ生徒数	302
DP進学比率	37.5%



# 国際バカロレア・ディプロマプログラム(IBDP)の 実施状況に関する基礎調査

回答数

42

**問1. [IBDPの開始年度]貴校における国際バカロレア・ディプロマプログラム(IBDP)の開始年度等を教えてください。**

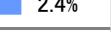
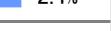
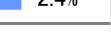
(1) 第1期生が教育課程上正式にIBDPの履修を開始した年度

開始年度	回答校数	割合	0%	5%	10%	15%	20%
2002年度	1	2.4%	2.4%				
2011年度	1	2.4%	2.4%				
2012年度	2	4.8%	4.8%				
2014年度	2	4.8%	4.8%				
2015年度	3	7.1%	7.1%				
2016年度	2	4.8%	4.8%				
2018年度	2	4.8%	4.8%				
2019年度	8	19.0%	19.0%				
2020年度	4	9.5%	9.5%				
2021年度	4	9.5%	9.5%				
2022年度	3	7.1%	7.1%				
2023年度	3	7.1%	7.1%				
2024年度	3	7.1%	7.1%				
未回答	4	9.5%	9.5%				
合計	42	100.0%					

(2) 第1期生がIBDPの最終試験を受けた年度

最終試験年度	回答校数	割合	0%	5%	10%	15%	20%
2003年度	1	2.4%	2.4%				
2012年度	1	2.4%	2.4%				
2013年度	1	2.4%	2.4%				
2014年度	1	2.4%	2.4%				
2015年度	1	2.4%	2.4%				
2016年度	4	9.5%	9.5%				
2017年度	1	2.4%	2.4%				
2018年度	1	2.4%	2.4%				
2019年度	1	2.4%	2.4%				
2020年度	7	16.7%	16.7%				
2021年度	3	7.1%	7.1%				
2022年度	5	11.9%	11.9%				
2023年度	3	7.1%	7.1%				
2024年度	3	7.1%	7.1%				
2025年度	1	2.4%	2.4%				
未回答	8	19.0%	19.0%				
合計	42	100.0%					

問2. [IBDPの開始時期]貴校における国際バカロレア・ディプロマプログラム(IBDP)の開始時期を教えてください(教育課程上正式にIBDPの履修を始める時期)。

開始時期		回答 校数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
高校1年生	11月	2	4.8%	 4.8%						
	12月	1	2.4%	 2.4%						
	1月	9	21.4%		 21.4%					
	2月	1	2.4%	 2.4%						
高校2年生	4月	22	52.4%		 52.4%					
	9月	1	2.4%	 2.4%						
	1月	2	4.8%	 4.8%						
未回答		4	9.5%	 9.5%						
合計		42	100.0%							

#### 問4. [IBDP生徒数]貴校のIBDPの生徒数を教えてください。

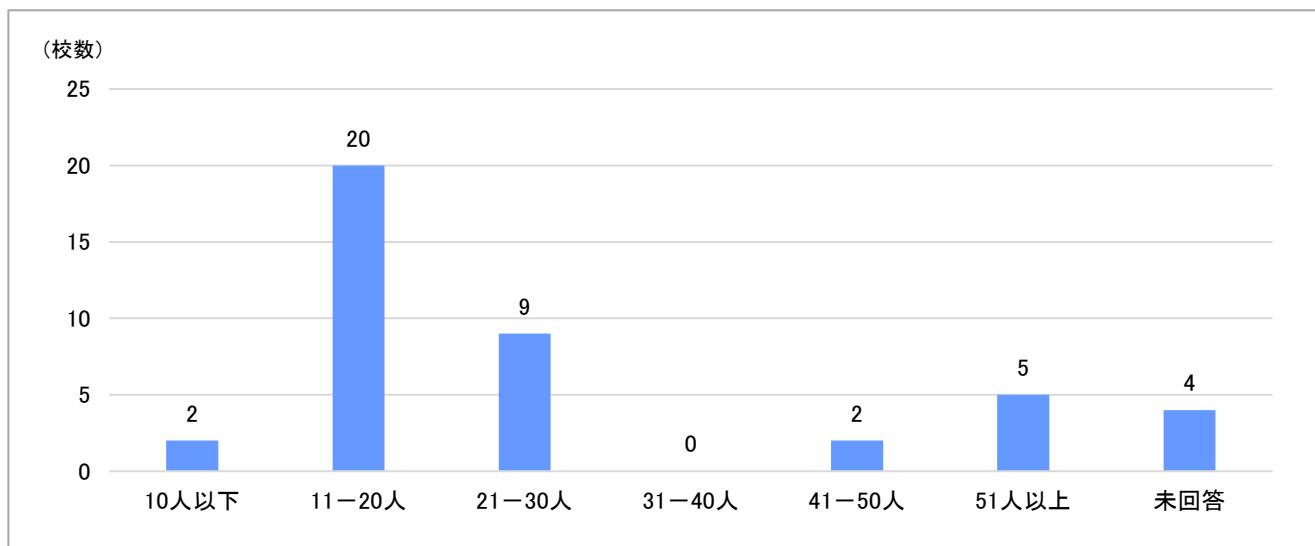
※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(3) IBDP生数」の欄は、IBDPの履修生がない場合には「0(ゼロ)」、高校1年生等について履修生数が決まっていない場合には、予定されている定員数または「未定」と御記入ください。

※「(4) IB科目履修生数」の欄には、IBDPコース以外に在籍している(ディプロマ資格取得を目指していない)生徒で、一部のIB科目を履修している生徒数を御記入ください。

設問	回答 校数	未回答 校数	最小値 人数	最大値 人数	中央値 人数	平均 人数	合計 人数
(1) IBDP生の1学年あたりの受け入れ定員	38 (90.5%)	4 (9.5%)	10	84	20	<b>29</b>	1,093

問4(1). IBDPの1学年あたりの受け入れ定員	回答 校数	割合
10人以下	2	4.8%
11－20人	20	47.6%
21－30人	9	21.4%
31－40人	0	0.0%
41－50人	2	4.8%
51人以上	5	11.9%
未回答	4	9.5%
合計	42	100.0%



## ■高校1年生（2024年度入学）

設問	回答 校数	未回答 校数	最小値 人数	最大値 人数	中央値 人数	平均 人数	合計 人数
(2) 学年の全生徒数	42 (100.0%)	0 (0.0%)	20	1,025	195	<b>267</b>	11,214
(3) IBDP生数 ※高校1年生は予定者数	40 (95.2%)	2 (4.8%)	0	64	10	<b>15</b>	583
(4) IB科目履修生数	38 (90.5%)	4 (9.5%)	0	33	0	<b>1</b>	56

	有り 校数	無し 校数	回答 校数	有り %
IB科目履修生在籍校	15	23	38	39.5%

## ■高校2年生（2023年度入学）

設問	回答 校数	未回答 校数	最小値 人数	最大値 人数	中央値 人数	平均 人数	合計 人数
(2) 学年の全生徒数	41 (97.6%)	1 (2.4%)	14	1,159	185	<b>270</b>	11,052
(3) IBDP生数	42 (100.0%)	0 (0.0%)	0	86	12	<b>17</b>	728
(4) IB科目履修生数	39 (92.9%)	3 (7.1%)	0	155	0	<b>6</b>	229

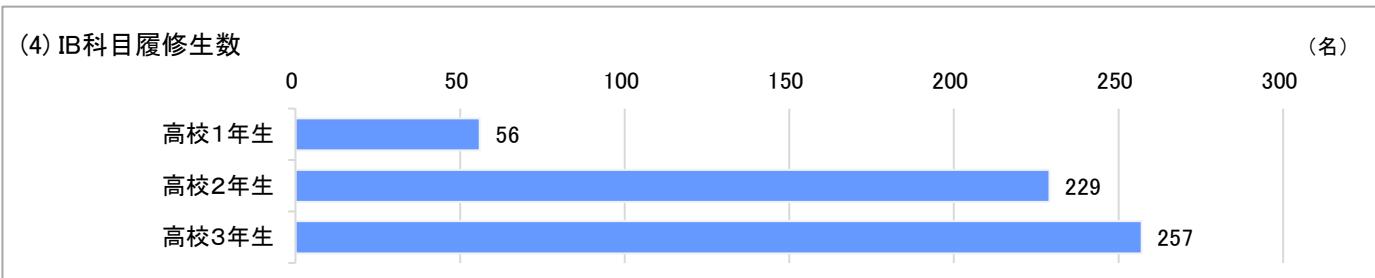
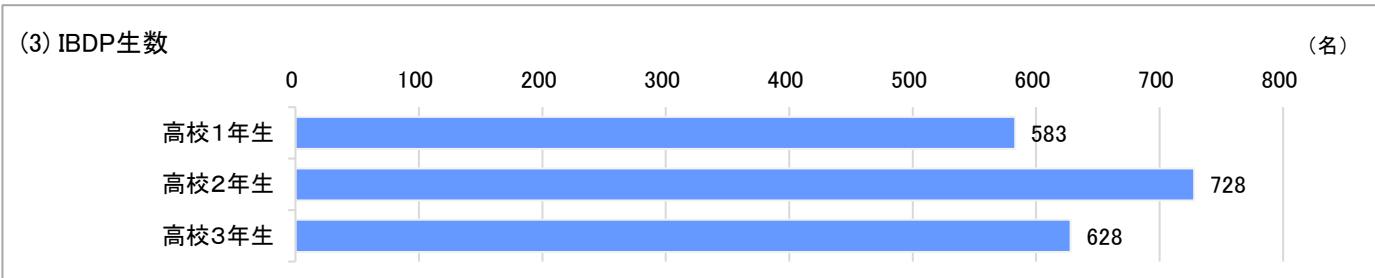
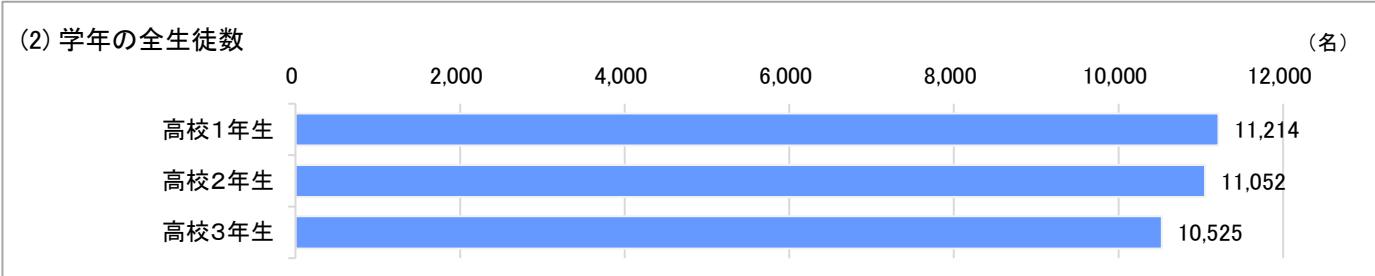
	有り 校数	無し 校数	回答 校数	有り %
IB科目履修生在籍校	16	23	39	41.0%

## ■高校3年生（2022年度入学）

設問	回答 校数	未回答 校数	最小値 人数	最大値 人数	中央値 人数	平均 人数	合計 人数
(2) 学年の全生徒数	41 (97.6%)	1 (2.4%)	0	992	185	<b>257</b>	10,525
(3) IBDP生数	42 (100.0%)	0 (0.0%)	0	74	11	<b>15</b>	628
(4) IB科目履修生数	39 (92.9%)	3 (7.1%)	0	145	0	<b>7</b>	257

	有り 校数	無し 校数	回答 校数	有り %
IB科目履修生在籍校	19	20	39	48.7%

## 【生徒数合計】

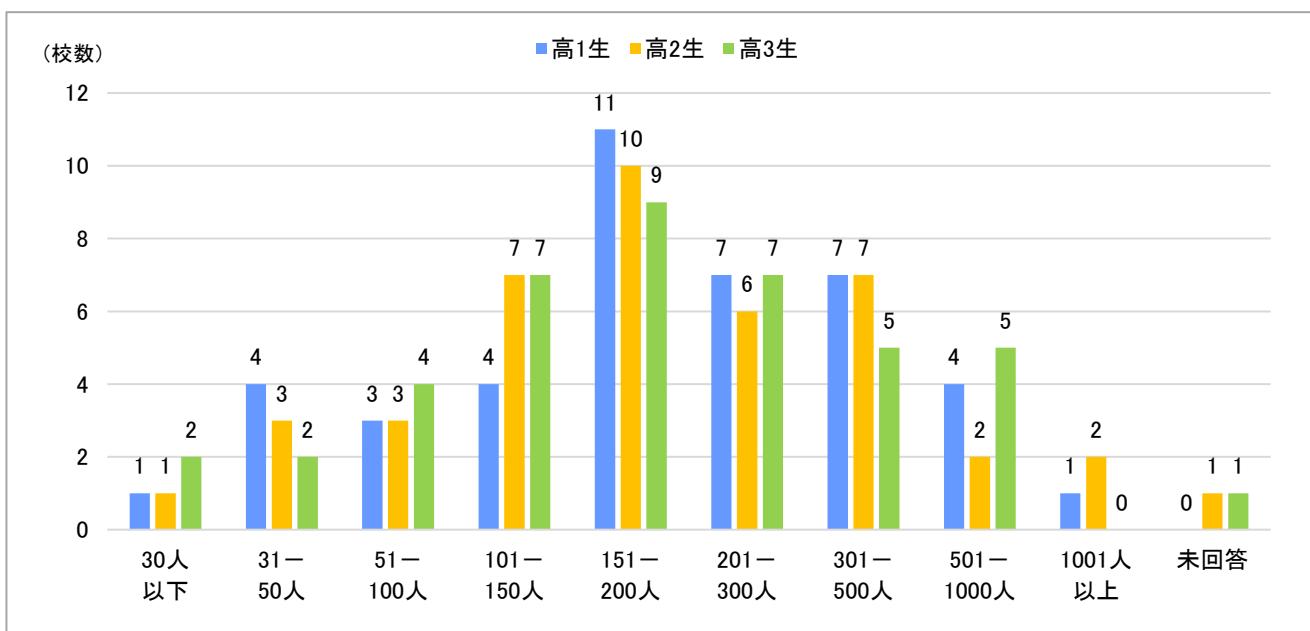


## ■DP生・DP科目履修生の割合

	一般生	DP生数	DP科目履修生数	全生徒数
高1生 (%)	10,575 (94.3%)	583 (5.2%)	56 (0.5%)	11,214 (100.0%)
高2生 (%)	10,095 (91.3%)	728 (6.6%)	229 (2.1%)	11,052 (100.0%)
高3生 (%)	9,640 (91.6%)	628 (6.0%)	257 (2.4%)	10,525 (100.0%)

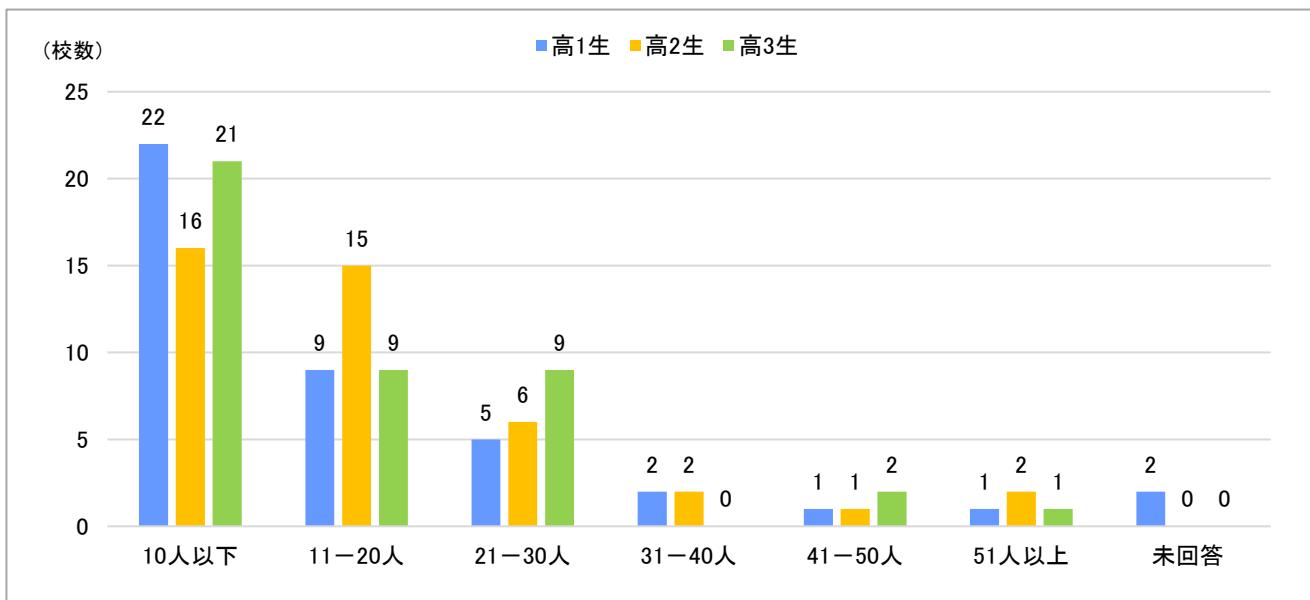
■問4(2). 1校あたりの全生数

	高1生		高2生		高3生	
	回答 校数	割合	回答 校数	割合	回答 校数	割合
30人以下	1	2.4%	1	2.4%	2	4.8%
31－50人	4	9.5%	3	7.1%	2	4.8%
51－100人	3	7.1%	3	7.1%	4	9.5%
101－150人	4	9.5%	7	16.7%	7	16.7%
151－200人	11	26.2%	10	23.8%	9	21.4%
201－300人	7	16.7%	6	14.3%	7	16.7%
301－500人	7	16.7%	7	16.7%	5	11.9%
501－1000人	4	9.5%	2	4.8%	5	11.9%
1001人以上	1	2.4%	2	4.8%	0	0.0%
未回答	0	0.0%	1	2.4%	1	2.4%
合計	42	100.0%	42	100.0%	42	100.0%



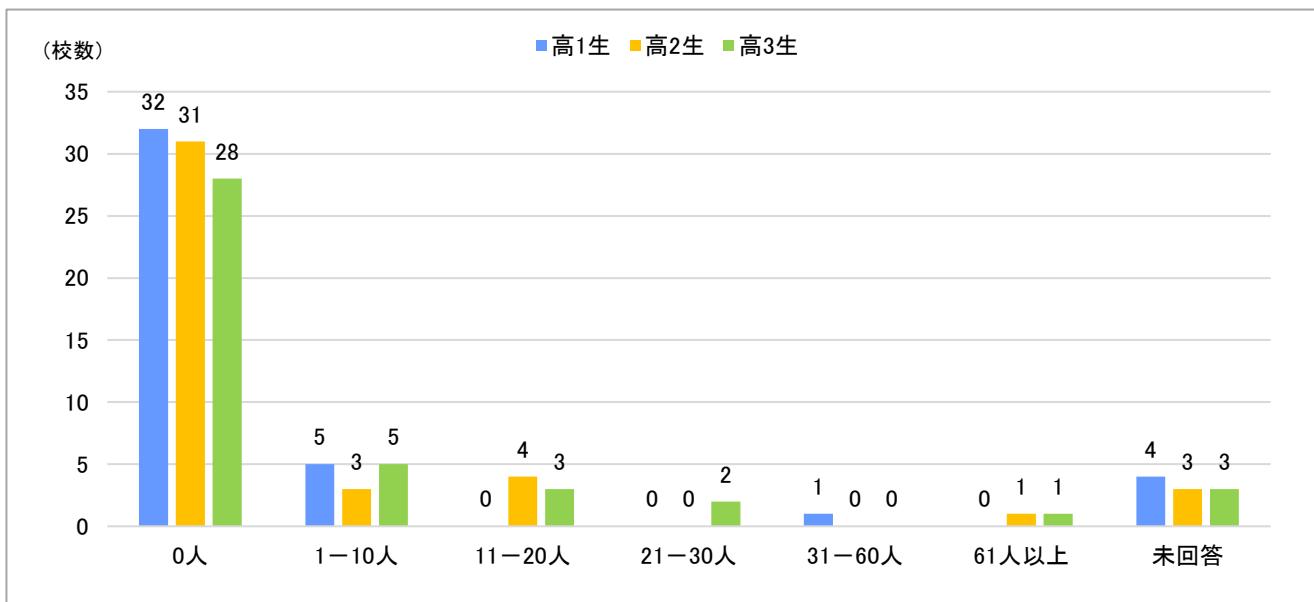
■問4(3). 1校あたりのDP生数

	高1生		高2生		高3生	
	回答 校数	割合	回答 校数	割合	回答 校数	割合
10人以下	22	52.4%	16	38.1%	21	50.0%
11–20人	9	21.4%	15	35.7%	9	21.4%
21–30人	5	11.9%	6	14.3%	9	21.4%
31–40人	2	4.8%	2	4.8%	0	0.0%
41–50人	1	2.4%	1	2.4%	2	4.8%
51人以上	1	2.4%	2	4.8%	1	2.4%
未回答	2	4.8%	0	0.0%	0	0.0%
合計	42	100.0%	42	100.0%	42	100.0%



■問4(4). 1校あたりの科目等履修生数

	高1生		高2生		高3生	
	回答 校数	割合	回答 校数	割合	回答 校数	割合
0人	32	76.2%	31	73.8%	28	66.7%
1–10人	5	11.9%	3	7.1%	5	11.9%
11–20人	0	0.0%	4	9.5%	3	7.1%
21–30人	0	0.0%	0	0.0%	2	4.8%
31–60人	1	2.4%	0	0.0%	0	0.0%
61人以上	0	0.0%	1	2.4%	1	2.4%
未回答	4	9.5%	3	7.1%	3	7.1%
合計	42	100.0%	42	100.0%	42	100.0%



## 問5. [IBDP担当教員]貴校のIBDPを担当する教員について教えてください。

※2024年12月1日時点での人数を御記入ください。

※「(2) IBDP担当教員数」の欄には、グループ1～6の各科目及び知の理論(TOK)を担当する教員の総数を御記入ください(非常勤を含む)。

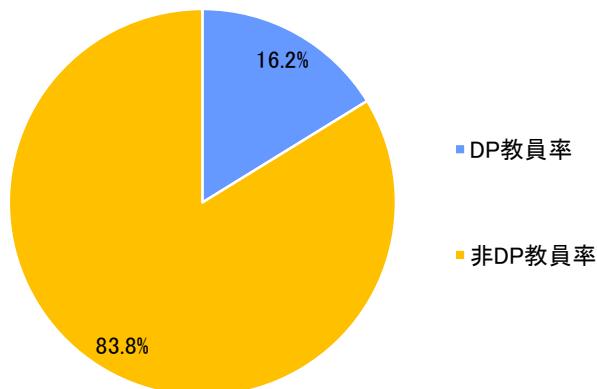
※「(4) IB教員資格(IBEC)」とは、大学・大学院のIB教員養成コース等を修了し、IB機構から認定された資格を指します。通常3日間で実施されるIBワークショップの修了証とは異なります。

設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	0	2,000	合計人数 (名)
					4,000	6,000	
(1) 全教員数 ※管理職、図書館司書、養護教諭、非常勤教員等も含む。	38 (90.5%)	4 (9.5%)	103	3,911	3,911		
(2) IBDP担当教員数	37 (88.1%)	5 (11.9%)	17	634	634		

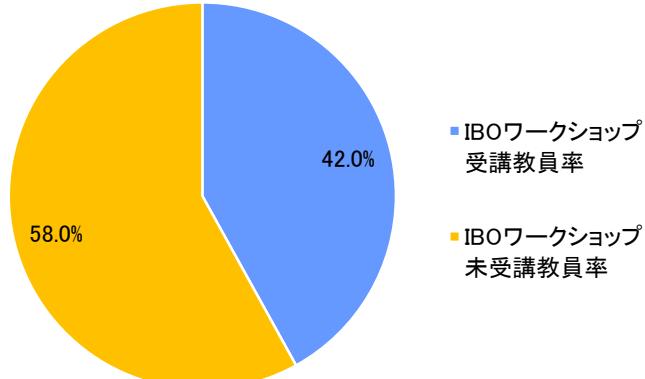
設問	回答 校数	未回答 校数	平均 人数	合計 人数	0	200	合計人数 (名)
					400	600	800
(2) IBDP担当教員数	37 (88.1%)	5 (11.9%)	17	634	634		
(2) の う ち	(3) 2023年度に国際バカロレア機構 (IBO)によるワークショップを受講した 教員数	38 (90.5%)	4 (9.5%)	7	266	266	
	(4) IB教員資格(IBEC: IB educator certificate)を取得している教員数	38 (90.5%)	4 (9.5%)	1	40	40	

### ■教員数の傾向

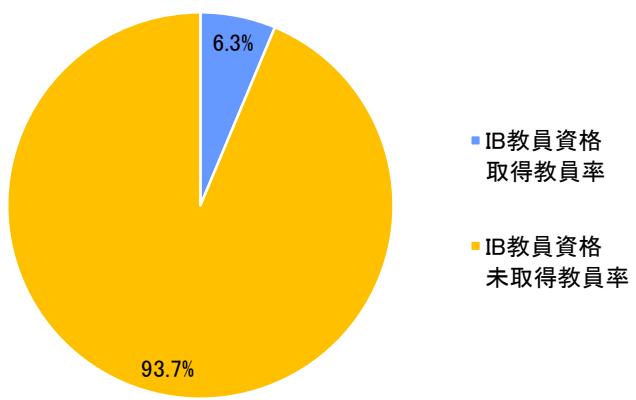
	合計 人数
全体の教員数	3,911
DP教員数	634
全体のDP教員比率	16.2%



	合計 人数
DP教員数	634
IBOワークショップを受講した教員数	266
IBOワークショップを受講した教員比率	42.0%



	合計 人数
DP教員数	634
IB教員資格取得教員数	40
IB教員資格取得教員比率	6.3%

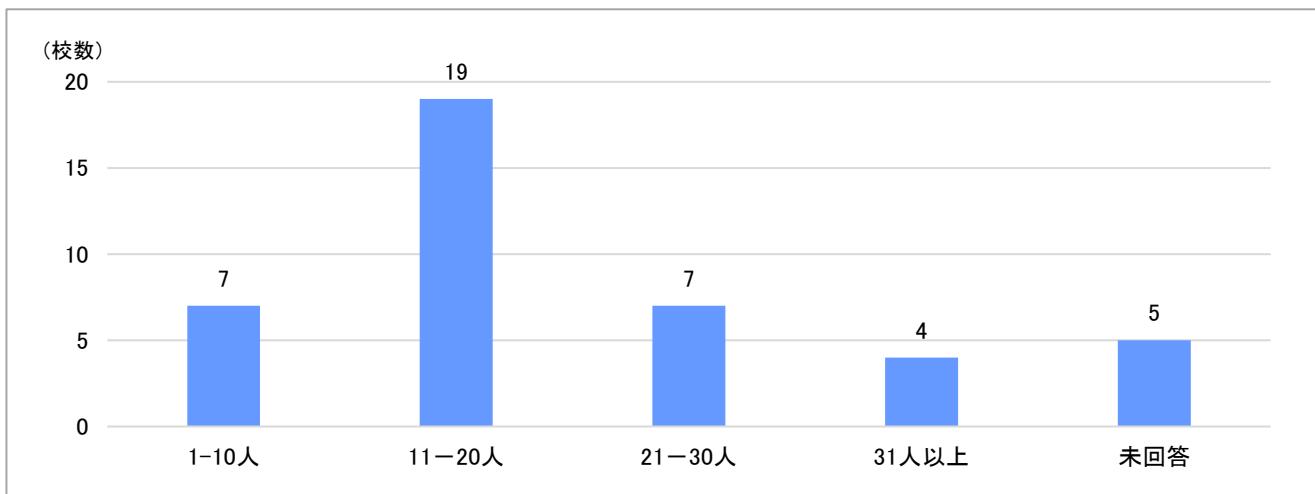


## ■全教員数とIBDP教員数

	人数
全教員数の平均値	103
DP教員数の平均値	17
DP教員比率の中央値	18.3%
DP教員比率の標準偏差	14.4%

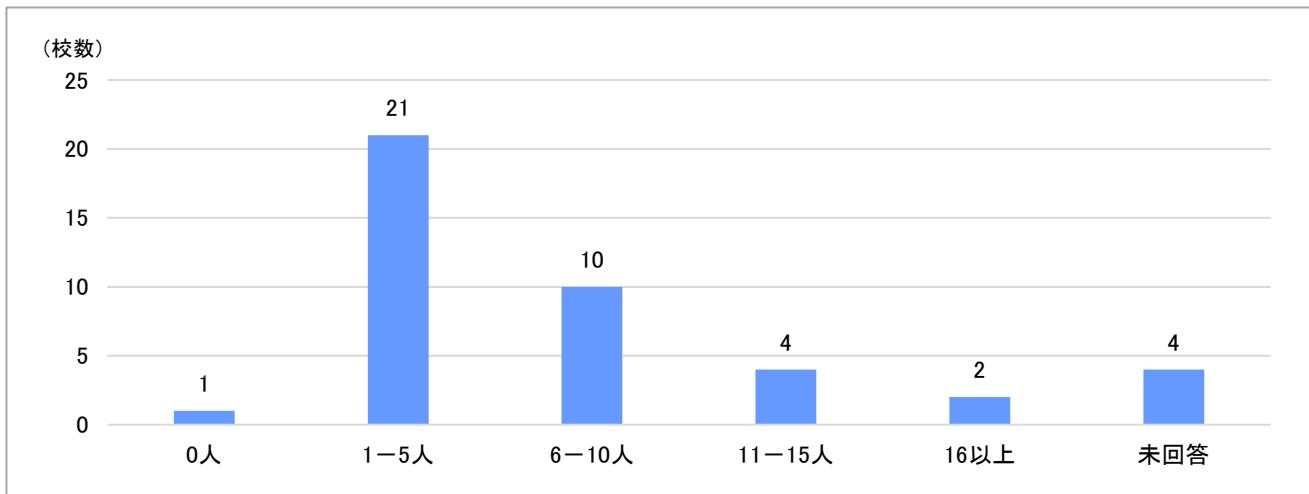
## ■IBDP教員数

問5(2). IBDP担当教員数	回答校数	割合
0人	0	0.0%
1~10人	7	16.7%
11~20人	19	45.2%
21~30人	7	16.7%
31人以上	4	9.5%
未回答	5	11.9%
合計	42	100.0%



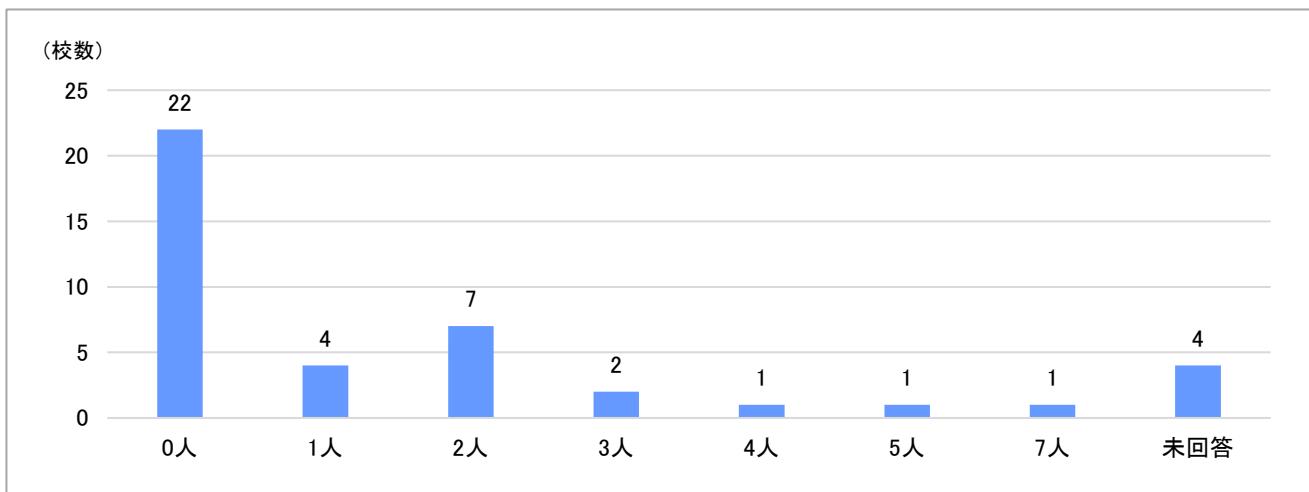
## ■IBのワークショップを受講教員数

問5(3). (2)のうち、2023年度に国際バカロレア機構(IBO)によるワークショップを受講した教員数	回答校数	割合
0人	1	2.4%
1~5人	21	50.0%
6~10人	10	23.8%
11~15人	4	9.5%
16以上	2	4.8%
未回答	4	9.5%
合計	42	100.0%



## ■IBEC取得教員数

問5(4). (2)のうち、IB教員資格(IBEC: IB educator certificate)を取得している教員数	回答校数	割合
0人	22	52.4%
1人	4	9.5%
2人	7	16.7%
3人	2	4.8%
4人	1	2.4%
5人	1	2.4%
7人	1	2.4%
未回答	4	9.5%
合計	42	100.0%



## 問6. [IBDP開講科目と履修者数]貴校のIBDP科目の開講状況と履修者数を教えてください。

※2024年12月1日時点での高校3年生の人数を御記入ください(IB科目履修生数を含む)。

※「Environmental Systems and Societies／環境システムと社会」を開講している場合、グループ3か4のどちらかに御記入ください。

※下記以外の科目を開講している場合は、その他の欄に御回答ください。足りない場合には欄を追加してください。

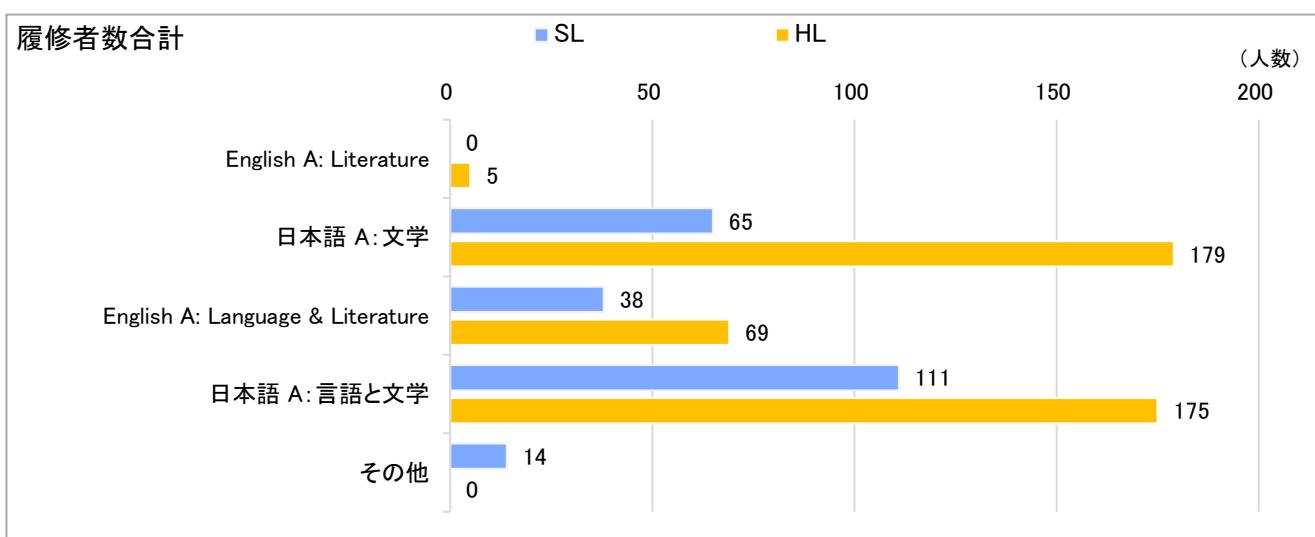
### (1) グループ1

#### 【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
English A: Literature	1	2.4%	2.4%					
日本語 A: 文学	18	42.9%						42.9%
English A: Language & Literature	14	33.3%						33.3%
日本語 A: 言語と文学	17	40.5%						40.5%
その他	4	9.5%						9.5%
未回答	6	14.3%						14.3%
回答数	42	-						

#### 【履修者数】

科目名	回答校数		未回答校数		平均人数		履修者数合計	
	SL	HL	SL	HL	SL	HL	SL	HL
English A: Literature	1 (2.4%)	1 (2.4%)	41 (97.6%)	41 (97.6%)	0	5	0	5
日本語 A: 文学	12 (28.6%)	17 (40.5%)	30 (71.4%)	25 (59.5%)	5	11	65	179
English A: Language & Literature	13 (31.0%)	13 (31.0%)	29 (69.0%)	29 (69.0%)	3	5	38	69
日本語 A: 言語と文学	13 (31.0%)	17 (40.5%)	29 (69.0%)	25 (59.5%)	9	10	111	175
その他	4 (9.5%)	1 (2.4%)	38 (90.5%)	41 (97.6%)	4	0	14	0



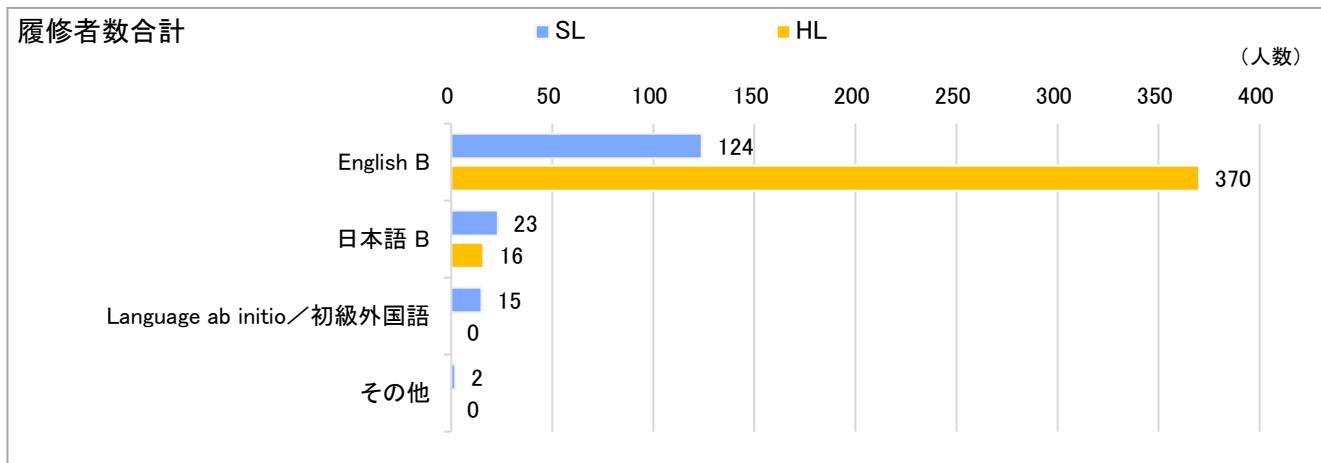
## (2) グループ2

### 【開講】

科目名	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
English B	35	83.3%						83.3%
日本語 B	11	26.2%			26.2%			
Language ab initio／初級外国語	3	7.1%		7.1%				
その他	3	7.1%		7.1%				
未回答	6	14.3%		14.3%				
回答数	42	-						

### 【履修者数】

科目名	回答校数		未回答校数		平均人数		履修者数合計	
	SL	HL	SL	HL	SL	HL	SL	HL
English B	27 (64.3%)	33 (78.6%)	15 (35.7%)	9 (21.4%)	5	11	124	370
日本語 B	11 (26.2%)	11 (26.2%)	31 (73.8%)	31 (73.8%)	2	1	23	16
Language ab initio／初級外国語	3 (7.1%)	1 (2.4%)	39 (92.9%)	41 (97.6%)	5	0	15	0
その他	2 (4.8%)	1 (2.4%)	40 (95.2%)	41 (97.6%)	1	0	2	0



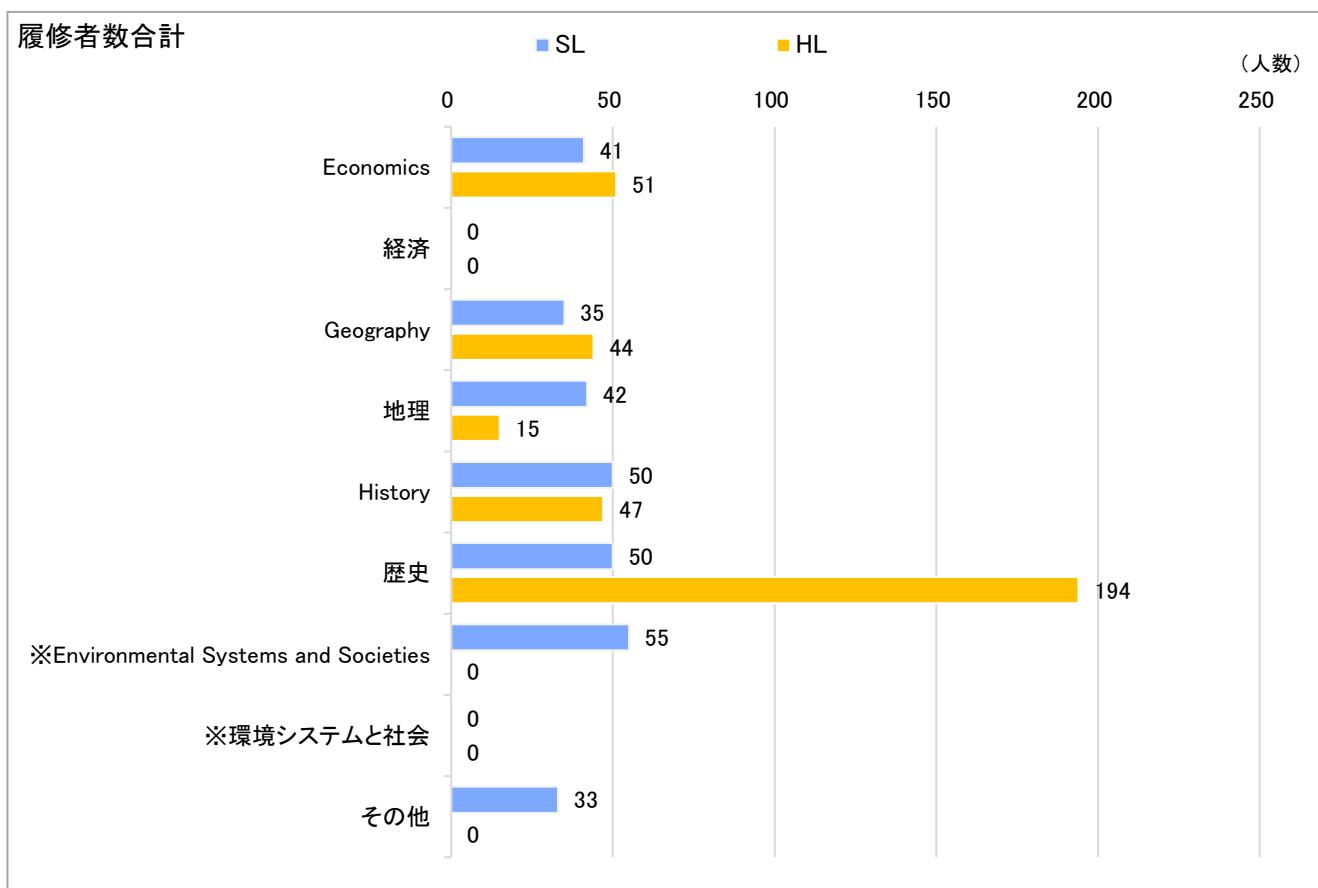
### (3) グループ3

#### 【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
Economics	8	19.0%			19.0%				
経済	0	0.0%	0.0%						
Geography	5	11.9%			11.9%				
地理	3	7.1%		7.1%					
History	11	26.2%				26.2%			
歴史	24	57.1%							57.1%
※Environmental Systems and Societies	5	11.9%			11.9%				
※環境システムと社会	0	0.0%	0.0%						
その他	5	11.9%			11.9%				
未回答	6	14.3%			14.3%				
回答数	42	-							

#### 【履修者数】

科目名	回答校数		未回答校数		平均人数		履修者数合計	
	SL	HL	SL	HL	SL	HL	SL	HL
Economics	7 (16.7%)	8 (19.0%)	35 (83.3%)	34 (81.0%)	6	6	41	51
経済	0 (0.0%)	0 (0.0%)	42 (100.0%)	42 (100.0%)	-	-	0	0
Geography	5 (11.9%)	5 (11.9%)	37 (88.1%)	37 (88.1%)	7	9	35	44
地理	3 (7.1%)	2 (4.8%)	39 (92.9%)	40 (95.2%)	14	8	42	15
History	10 (23.8%)	11 (26.2%)	32 (76.2%)	31 (73.8%)	5	4	50	47
歴史	17 (40.5%)	21 (50.0%)	25 (59.5%)	21 (50.0%)	3	9	50	194
※Environmental Systems and Societies	5 (11.9%)	4 (9.5%)	37 (88.1%)	38 (90.5%)	11	0	55	0
※環境システムと社会	0 (0.0%)	0 (0.0%)	42 (100.0%)	42 (100.0%)	-	-	0	0
その他	5 (11.9%)	3 (7.1%)	37 (88.1%)	39 (92.9%)	7	0	33	0



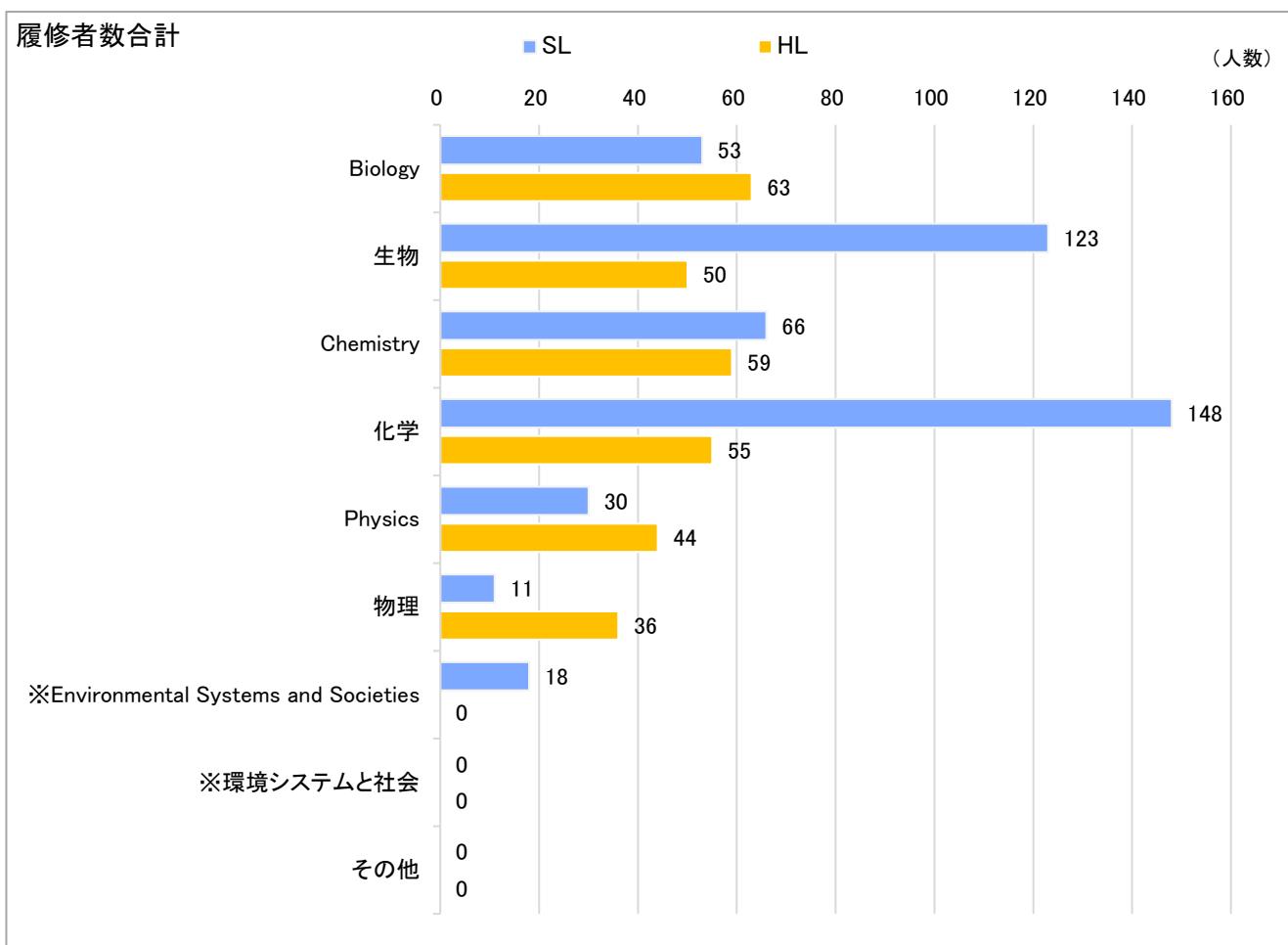
#### (4) グループ4

##### 【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
Biology	14	33.3%					33.3%		
生物	16	38.1%					38.1%		
Chemistry	14	33.3%					33.3%		
化学	21	50.0%						50.0%	
Physics	12	28.6%					28.6%		
物理	10	23.8%					23.8%		
※Environmental Systems and Societies	3	7.1%		7.1%					
※環境システムと社会	0	0.0%		0.0%					
その他	0	0.0%		0.0%					
未回答	6	14.3%			14.3%				
回答数	42	-							

##### 【履修者数】

科目名	回答校数		未回答校数		平均人数		履修者数合計	
	SL	HL	SL	HL	SL	HL	SL	HL
Biology	14 (33.3%)	14 (33.3%)	28 (66.7%)	28 (66.7%)	4	5	53	63
生物	13 (31.0%)	11 (26.2%)	29 (69.0%)	31 (73.8%)	9	5	123	50
Chemistry	14 (33.3%)	13 (31.0%)	28 (66.7%)	29 (69.0%)	5	5	66	59
化学	17 (40.5%)	15 (35.7%)	25 (59.5%)	27 (64.3%)	9	4	148	55
Physics	10 (23.8%)	11 (26.2%)	32 (76.2%)	31 (73.8%)	3	4	30	44
物理	6 (14.3%)	9 (21.4%)	36 (85.7%)	33 (78.6%)	2	4	11	36
※Environmental Systems and Societies	3 (7.1%)	2 (4.8%)	39 (92.9%)	40 (95.2%)	6	0	18	0
※環境システムと社会	0 (0.0%)	0 (0.0%)	42 (100.0%)	42 (100.0%)	-	-	0	0
その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	42 (100.0%)	42 (100.0%)	-	-	0	0



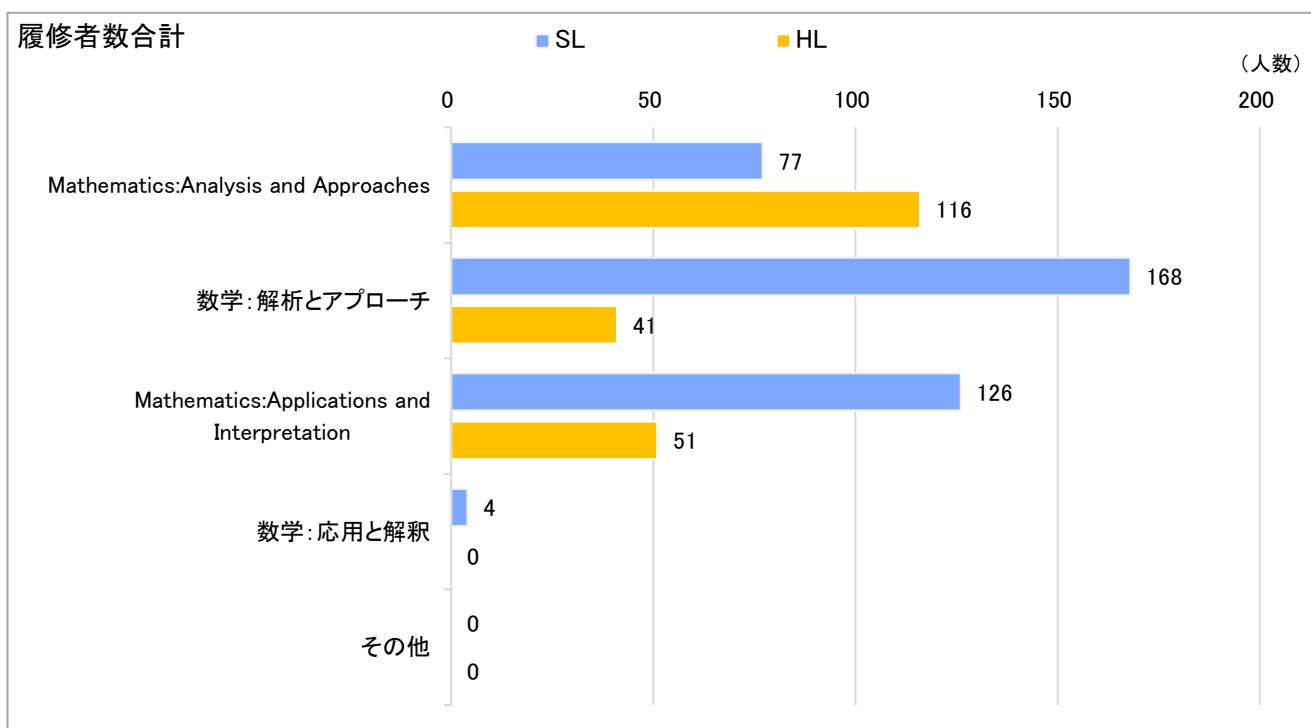
## (5) グループ5

### 【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
Mathematics:Analysis and Approaches	19	45.2%						45.2%
数学:解析とアプローチ	17	40.5%						40.5%
Mathematics:Applications and Interpretation	15	35.7%						35.7%
数学:応用と解釈	1	2.4%	2.4%					
その他	0	0.0%	0.0%					
未回答	6	14.3%			14.3%			
回答数	42	-						

### 【履修者数】

科目名	回答校数		未回答校数		平均人数		履修者数合計	
	SL	HL	SL	HL	SL	HL	SL	HL
Mathematics:Analysis and Approaches	17 (40.5%)	17 (40.5%)	25 (59.5%)	25 (59.5%)	5	7	77	116
数学:解析とアプローチ	16 (38.1%)	12 (28.6%)	26 (61.9%)	30 (71.4%)	11	3	168	41
Mathematics:Applications and Interpretation	15 (35.7%)	11 (26.2%)	27 (64.3%)	31 (73.8%)	8	5	126	51
数学:応用と解釈	1 (2.4%)	1 (2.4%)	41 (97.6%)	41 (97.6%)	4	0	4	0
その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	42 (100.0%)	42 (100.0%)	-	-	0	0



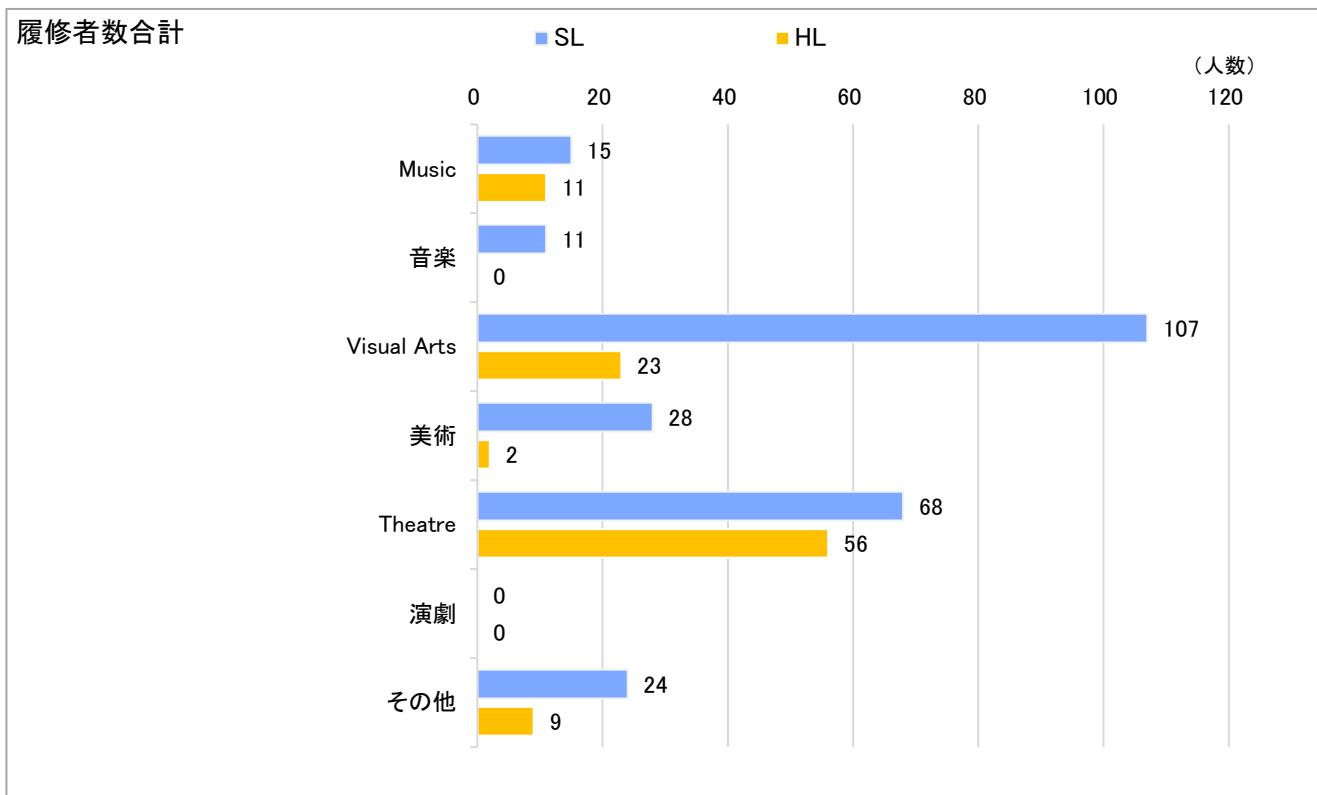
## (6) グループ6

### 【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%
Music	5	11.9%		11.9%			
音楽	4	9.5%		9.5%			
Visual Arts	16	38.1%					38.1%
美術	4	9.5%		9.5%			
Theatre	4	9.5%		9.5%			
演劇	0	0.0%	0.0%				
その他	4	9.5%		9.5%			
未回答	12	28.6%				28.6%	
回答数	42	-					

### 【履修者数】

科目名	回答校数		未回答校数		平均人数		履修者数合計	
	SL	HL	SL	HL	SL	HL	SL	HL
Music	5 (11.9%)	5 (11.9%)	37 (88.1%)	37 (88.1%)	3	2	15	11
音楽	4 (9.5%)	2 (4.8%)	38 (90.5%)	40 (95.2%)	3	0	11	0
Visual Arts	14 (33.3%)	11 (26.2%)	28 (66.7%)	31 (73.8%)	8	2	107	23
美術	4 (9.5%)	1 (2.4%)	38 (90.5%)	41 (97.6%)	7	2	28	2
Theatre	4 (9.5%)	2 (4.8%)	38 (90.5%)	40 (95.2%)	17	28	68	56
演劇	0 (0.0%)	0 (0.0%)	42 (100.0%)	42 (100.0%)	-	-	0	0
その他	3 (7.1%)	2 (4.8%)	39 (92.9%)	40 (95.2%)	8	5	24	9



## 問7. [IBDP生の進路]貴校のIBDP修了生の進路について教えてください。

※2023年度の実績を御記入ください(確定している情報のみで構いません)。

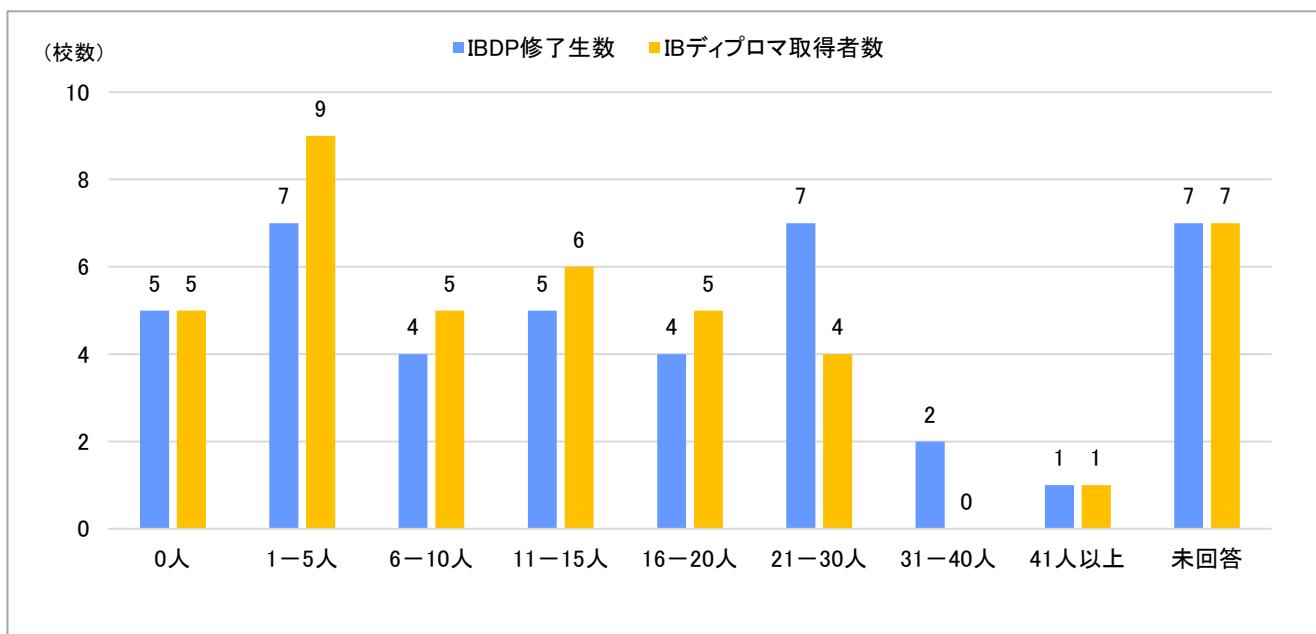
※合格実績ではなく進学実績を御記入ください。

設問	回答 校数	未回答 校数	最小値 人数	最大値 人数	中央値 人数	平均 人数	合計 人数
(1) IBDP修了生数	35 (83.3%)	7 (16.7%)	0	52	12	14	475
(2) IBディプロマ資格取得者数	35 (83.3%)	7 (16.7%)	0	41	10	11	369

設問		回答 校数	未回答 校数	平均人数	合計人数	0	200	400	合計人数 (名)	600
(1) IBDP修了生数		35 (83.3%)	7 (16.7%)	14	475				475	
(2) IBディプロマ資格取得者数		35 (83.3%)	7 (16.7%)	11	369				369	
(1) のうち (3) 大学進学者 の内訳	a) 国内大学	33 (78.6%)	9 (21.4%)	9	309				309	
	b) 海外大学	32 (76.2%)	10 (23.8%)	4	124				124	
	(4) IBディプロマ 資格を用いて 受験した生徒数 ※出願資格やスコアの利 用等	a) 国内大学	33 (78.6%)	9 (21.4%)	4	133			133	
		b) 海外大学	32 (76.2%)	10 (23.8%)	3	100			100	
	(5) 次の選 抜方法によ り進路決定 した生徒	a) 国内大 学	IB特別入試等のIBディ プロマ資格者のみが出 願できる特色ある入試	29 (69.0%)	13 (31.0%)	2	61		61	
			①IBディプロマ資格者 対象	27 (64.3%)	15 (35.7%)	1	25		25	
			②IBディプロマ資格者 及びその他の者も対象	26 (61.9%)	16 (38.1%)	2	51		51	
			③上記以外の総合型選 抜	28 (66.7%)	14 (33.3%)	2	62		62	
			c) 学校推薦型選抜	30 (71.4%)	12 (28.6%)	3	80		80	
	(6) 次に該 当する生徒	b) 海外大 学	d) 一般選抜(大学入学共 通テストの一部利用を 含む)	26 (61.9%)	16 (38.1%)	1	19		19	
			e) その他の選抜方法	23 (54.8%)	19 (45.2%)	0	1		1	
			a) 奨学金(給付)を得た生 徒	24 (57.1%)	18 (42.9%)	1	19		19	
			b) 奨学金(貸与)を得た生 徒	22 (52.4%)	20 (47.6%)	0	1		1	
			c) 授業料免除の対象に なった生徒	23 (54.8%)	19 (45.2%)	0	8		8	

問7(1)(2)1校あたりの生徒数	IBDP修了生数		IBディプロマ取得者数	
	回答校数	割合	回答校数	割合
0人	5	11.9%	5	11.9%
1~5人	7	16.7%	9	21.4%
6~10人	4	9.5%	5	11.9%
11~15人	5	11.9%	6	14.3%
16~20人	4	9.5%	5	11.9%
21~30人	7	16.7%	4	9.5%
31~40人	2	4.8%	0	0.0%
41人以上	1	2.4%	1	2.4%
未回答	7	16.7%	7	16.7%
合計	42	100.0%	42	100.0%

※完成年度前



## 問7. (7) 2023年度修了生の進学先の情報を教えてください。

## 【国内大学名】

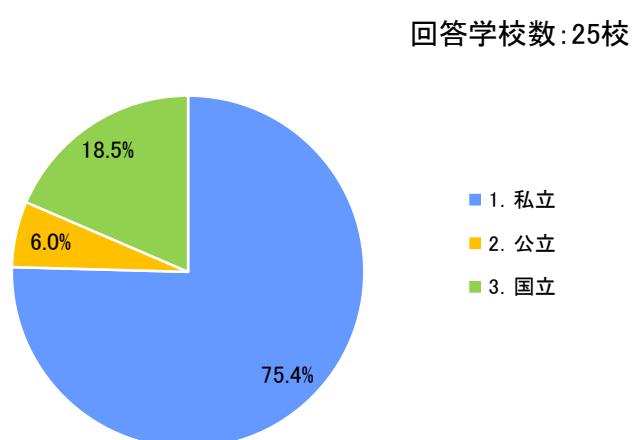
回答学校数:25校

合計	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%
	232	100.0%						
上智大学	45	19.4%					19.4%	
立教大学	23	9.9%				9.9%		
岡山大学	13	5.6%		5.6%				
国際基督教大学	13	5.6%		5.6%				
早稲田大学	10	4.3%		4.3%				
法政大学	8	3.4%		3.4%				
立命館大学	7	3.0%		3.0%				
玉川大学	6	2.6%		2.6%				
慶應義塾大学	5	2.2%		2.2%				
広島大学	5	2.2%		2.2%				
大阪公立大学	4	1.7%		1.7%				
北海道大学	4	1.7%		1.7%				
横浜市立大学	3	1.3%		1.3%				
関西学院大学	3	1.3%		1.3%				
高知大学	3	1.3%		1.3%				
桜美林大学	3	1.3%		1.3%				
鹿児島大学	3	1.3%		1.3%				
順天堂大学	3	1.3%		1.3%				
中央大学	3	1.3%		1.3%				
東京外国語大学	3	1.3%		1.3%				
東京理科大学	3	1.3%		1.3%				
武蔵野美術大学	3	1.3%		1.3%				
立命館アジア太平洋大学	3	1.3%		1.3%				
学習院大学	2	0.9%		0.9%				
関西大学	2	0.9%		0.9%				
金沢大学	2	0.9%		0.9%				
香川大学	2	0.9%		0.9%				
神田外語大学	2	0.9%		0.9%				
青山学院大学	2	0.9%		0.9%				
筑波大学	2	0.9%		0.9%				
都留文科大学	2	0.9%		0.9%				
同志社大学	2	0.9%		0.9%				
武蔵野大学	2	0.9%		0.9%				
明治学院大学	2	0.9%		0.9%				
デジタルハリウッド大学	1	0.4%		0.4%				
愛知医科大学	1	0.4%		0.4%				
創啓大学	1	0.4%		0.4%				
環太平洋大学	1	0.4%		0.4%				
岩手大学	1	0.4%		0.4%				
京都外国語大学	1	0.4%		0.4%				
京都工芸繊維大学	1	0.4%		0.4%				
京都府立大学	1	0.4%		0.4%				
九州大学	1	0.4%		0.4%				
高知工科大学	1	0.4%		0.4%				
国際教養大学	1	0.4%		0.4%				
芝浦工業大学	1	0.4%		0.4%				
常葉大学	1	0.4%		0.4%				
神奈川大学	1	0.4%		0.4%				
聖路加国際大学	1	0.4%		0.4%				
専修大学	1	0.4%		0.4%				
創価大学	1	0.4%		0.4%				
帝広畜産大学	1	0.4%		0.4%				
大阪芸術大学	1	0.4%		0.4%				
拓殖大学	1	0.4%		0.4%				
東海大学	1	0.4%		0.4%				
東京音楽大学	1	0.4%		0.4%				
東京工科大学	1	0.4%		0.4%				
東京国際工科専門職大学	1	0.4%		0.4%				
東京都立大学	1	0.4%		0.4%				
東北芸術工科大学	1	0.4%		0.4%				
奈良女子大学	1	0.4%		0.4%				
日本女子大学	1	0.4%		0.4%				
日本体育大学	1	0.4%		0.4%				
福山大学	1	0.4%		0.4%				
北里大学	1	0.4%		0.4%				
名古屋大学	1	0.4%		0.4%				
明治大学	1	0.4%		0.4%				
獨協大学	1	0.4%		0.4%				

調査対象校:46校 調査協力校:42校 問7(7)の回答学校数:25校  
問7. (7) 2023年度修了生の進学先の情報を教えてください。

### 【国内大学 大学区分】

	件数	割合
1. 私立	175	75.4%
2. 公立	14	6.0%
3. 国立	43	18.5%
合計	232	100.0%

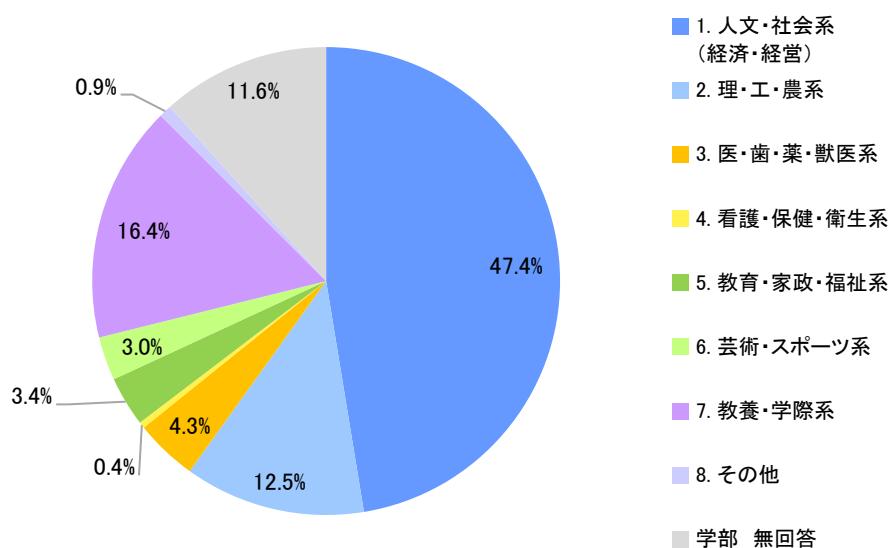


調査対象校:46校 調査協力校:42校 問7(7)の回答学校数:25校  
問7. (7) 2023年度修了生の進学先の情報を教えてください。

### 【国内大学 学部分類】

回答学校数:25校

	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
1. 人文・社会系 (経済・経営)	110	47.4%						47.4%
2. 理・工・農系	29	12.5%		12.5%				
3. 医・歯・薬・獣医系	10	4.3%		4.3%				
4. 看護・保健・衛生系	1	0.4%		0.4%				
5. 教育・家政・福祉系	8	3.4%		3.4%				
6. 芸術・スポーツ系	7	3.0%		3.0%				
7. 教養・学際系	38	16.4%			16.4%			
8. その他	2	0.9%		0.9%				
学部 無回答	27	11.6%		11.6%				
合計	232	100.0%						

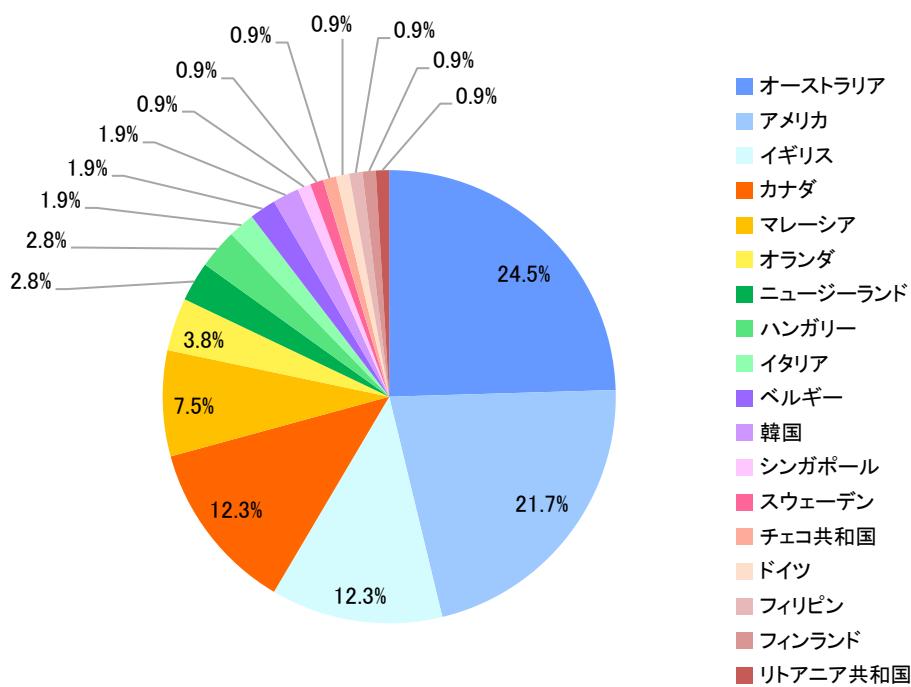


## 問7. (7) 2023年度修了生の進学先の情報を教えてください。

## 【海外大学 国名】

回答学校数:19校

合計	件数	割合	0%	5%	10%	15%	20%	25%	30%
			106	100.0%					
オーストラリア	26	24.5%						24.5%	
アメリカ	23	21.7%					21.7%		
イギリス	13	12.3%			12.3%				
カナダ	13	12.3%			12.3%				
マレーシア	8	7.5%		7.5%					
オランダ	4	3.8%		3.8%					
ニュージーランド	3	2.8%		2.8%					
ハンガリー	3	2.8%		2.8%					
イタリア	2	1.9%		1.9%					
ベルギー	2	1.9%		1.9%					
韓国	2	1.9%		1.9%					
シンガポール	1	0.9%		0.9%					
スウェーデン	1	0.9%		0.9%					
チェコ共和国	1	0.9%		0.9%					
ドイツ	1	0.9%		0.9%					
フィリピン	1	0.9%		0.9%					
フィンランド	1	0.9%		0.9%					
リトアニア共和国	1	0.9%		0.9%					



問7. (7) 2023年度修了生の進学先の情報を教えてください。

【海外大学名】

	件数	割合
合計	106	100.0%
メルボルン大学	7	6.6%
Temple University,Japan Campus	5	4.7%
ティラーズ大学	5	4.7%
Queensland University of Technology	4	3.8%
University of new South wales	4	3.8%
モナッシュ大学	4	3.8%
University of Toronto	3	2.8%
サイモンフレーザー大学	3	2.8%
シドニー大学	3	2.8%
ブリティッシュコロンビア大学	3	2.8%
Dickinson College	2	1.9%
University of Manchester	2	1.9%
オタゴ大学	2	1.9%
クイーンズランド大学	2	1.9%
ハンガリー国立大学	2	1.9%
ライデン大学	2	1.9%
ルーベン・カトリック大学	2	1.9%
Aberystwyth University	1	0.9%
American University	1	0.9%
Arizona State University	1	0.9%
Asia Pacific University of Technology & Innovation	1	0.9%
Case Western Reserve University	1	0.9%
Charles University	1	0.9%
Columbia University	1	0.9%
George Bown College	1	0.9%
Green River College	1	0.9%
Help University	1	0.9%
Indiana University	1	0.9%
Korean Aerospace University	1	0.9%
Lancaster University	1	0.9%
Lithuanian University of Health Sciences	1	0.9%
London School of Economics and Plitical Science	1	0.9%
Lund University	1	0.9%
Massey University	1	0.9%
McGill University	1	0.9%
National University of Singapore	1	0.9%
Oregon州立大学	1	0.9%
Pennsylvania State University	1	0.9%
Princeton University	1	0.9%
Savannah College of Art & Design	1	0.9%
Stanford University	1	0.9%
Technical University of Munich	1	0.9%
The University of Edinburgh	1	0.9%
The University of Santo Tomas	1	0.9%
Universita degli Studi di Messina	1	0.9%
University College London	1	0.9%
University of Bournemouth	1	0.9%
University of California San Diego	1	0.9%
University of Debrecen	1	0.9%
University of Eastern Finland	1	0.9%
University of Maryland	1	0.9%
University of New Brunswick	1	0.9%
University of Oxford	1	0.9%
University of Sussex	1	0.9%
University of western Australia	1	0.9%
University of York	1	0.9%
Utrecht University	1	0.9%
Vrije Universiteit Amsterdam	1	0.9%
York University	1	0.9%

回答学校数: 19校

	件数	割合
合計	106	100.0%
カトリカ大学	1	0.9%
カリフォルニア芸術大学	1	0.9%
ケンブリッジ大学	1	0.9%
サンウェイ大学	1	0.9%
ディーキン大学	1	0.9%
プリマス大学	1	0.9%
ミネルバ大学	1	0.9%
ユタ大学	1	0.9%
延世大学	1	0.9%

問7. (7) 2023年度修了生の進学先の情報を教えてください。

【海外大学 学部学科】

回答学校数:19校

	件数	割合
合計	106	100.0%
Bachelor of Arts	3	2.8%
Bachelor of Science	3	2.8%
Business	3	2.8%
医学部	3	2.8%
デザイン	2	1.9%
ビジネスアドミニストレーション	2	1.9%
観光学部	2	1.9%
経済学部	2	1.9%
Arts	1	0.9%
Bachelor of Agriculture	1	0.9%
Bachelor of Information Sciences,Data Science	1	0.9%
Bachelor of Nursing	1	0.9%
Business Administration	1	0.9%
Chemistry	1	0.9%
College of Engineering	1	0.9%
Commerce Marketing	1	0.9%
Design	1	0.9%
Faculty of Medicine	1	0.9%
Faculty of Science	1	0.9%
Film Art	1	0.9%
Fine Arts	1	0.9%
Global Management	1	0.9%
History and International Relations	1	0.9%
International Relations	1	0.9%
Literary Studies	1	0.9%
Management	1	0.9%
Management and Technology	1	0.9%
MEDICAL AND VETERINARY GENETICS	1	0.9%
Music	1	0.9%
Occupational Therapy	1	0.9%
Political Science	1	0.9%
Pre-Business	1	0.9%
Psychology	1	0.9%
Rotman Commerce	1	0.9%
Single cycle degree in medicine and surgery	1	0.9%
コミュニケーション	1	0.9%
海洋生物学	1	0.9%
看護	1	0.9%
国際経済学部	1	0.9%
自然科学	1	0.9%
森林学部	1	0.9%
数学	1	0.9%
幼児教育	1	0.9%
学部 無回答	51	48.1%

大学入試御担当者様

文部科学省委託

「国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究」

研究代表者 藤田晃之（筑波大学人間系・教授）

## 国際バカロレアを活用した大学入学者選抜の 実施状況に関する基礎調査について（依頼）

平素より格別の御高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

筑波大学では、文部科学省の委託を受け、国際バカロレア（IB）の教育効果等に関する調査研究業務を行っています。このたび、日本国内の大学におけるIBを活用した大学入学者選抜の実施状況を把握するための基礎調査を実施いたします。

つきましては、御多用中お手数ですが、下記要領により御回答くださるようお願いします。

記

### 1. 調査対象

IBを活用した入学者選抜を実施している国内大学

### 2. 調査内容

（IB認定校等での情報活用を想定し2部構成としています。）

#### ①IBを活用した大学入学者選抜の実施状況に関する基礎調査

（1）公開情報…文部科学省IB教育推進コンソーシアムのホームページ（※）の「国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧」に掲載します。

（2）非公開情報…回答いただいたデータは統計的に処理し、大学名や個人を特定できるかたちで公表しません。今後の大学を対象とした調査実施の際の基礎データとさせていただき、報告書及び学会発表・論文等において公表する可能性があります。

#### ②IBを活用した入試概要

文部科学省IB教育推進コンソーシアムのホームページ（※）に大学ごとに掲載します。

※[IBを活用した入試 | IB教育推進コンソーシアム \(mext.go.jp\)](#)

### 3. 回答方法及び回答期限

①②のファイルに御記入の上、12月13日（金）までにメール添付にて、株式会社トモノカイ／pe-global@tomonokai-corp.comまで御送信ください。本調査について御質問等ございましたら、下記の連絡先まで御連絡ください。

以上

#### ＜本件調査にすること＞

株式会社トモノカイ Personal Education部門（担当：中原、岩本）

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-12-24 東建・長井ビル5階

TEL: 03-5766-2006 E-mail: pe-global@tomonokai-corp.com

#### ＜本件調査の事務にすること＞

筑波大学人間系・IB教育調査室 ルステモヴァ・アクトルクン（E-mail: ibkk@un.tsukuba.ac.jp）

#### ＜委託事業にすること＞

文部科学省大臣官房国際課外国人教育政策推進第二係

瀬戸、長谷部（TEL: 03-5253-4111／内線3675）

## 国際バカロレアを活用した大学入学者選抜の実施状況に関する基礎調査

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。御多用中お手数ですが、御協力のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。

### <記入上の注意点>

- ・次ページの【記入例】を御参照の上、水色のセルに御記入をお願いいたします。
- ・2024年度中に実施済み、あるいは実施予定の入学者選抜の情報を御記入ください（帰国情生や留学生のみを対象としている場合は含めないでください）。

### (1) 公開情報 ※文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページに掲載します。

国公私	国立／公立／私立	
大学名（所在地）	所在地は都道府県で記入	
入試名称		
試験導入年度		
対象学部	①全学部 ②一部の学部	
学部名	②の場合	
募集人員		
出願資格	①IB ディプロマ資格者のみ ②IB ディプロマ資格者及び IB 科目修了証明書（サーティフィケート）取得者を含む ③IB ディプロマ資格者及びその他の者を含む	
対象者 ※該当する項目をすべて選択	①国内一条校の IB 生 ②国内インターナショナルスクールの IB 生 ③海外現地校・インターナショナルスクールの IB 生	
IB スコア基準	※募集要項等で公表している場合、御記入ください。	
主な出願書類		
関連 URL	募集要項掲載ページ URL	

### (2) 非公開情報 ※可能な範囲で御記入ください。

a) IB 生の評価ポイント 選抜にあたり IB 生が優位的に評価される点があれば教えてください。	
b) 直近の入試実績	実施年度
	志願者数
	合格者数
	入学者数
c) 今後の方向性について 貴学での IB を活用した入試の今後の方向性について、もっともあてはまる記号を選んでください。	ア 全学部へ拡大する予定 イ 未導入の学部にも拡大する予定 ウ 募集人数を増やす予定 エ 現状を維持する予定 オ 見直し又は削減予定 カ その他（具体的に：）

d) その他 御意見や御質問がありましたら御記入ください。	
----------------------------------	--

【記入例】

(1) 公開情報 ※文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページに掲載します。

国公私	国立／公立／私立	国立
大学名（所在地）	所在地は都道府県で記入	◎◎大学（東京都）
入試名称		全選抜方式（一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜）
試験導入年度		2017 年度
対象学部	①全学部 ②一部の学部	②一部の学部
学部名	②の場合	経営学部、法学部
募集人員		一般選抜：春期 140 名、秋期 70 名 総合型選抜、学校推薦型選抜：若干名
出願資格	①IB ディプロマ資格者のみ ②IB ディプロマ資格者及び IB 科目修了証明書（サテイフィケート）取得者を含む ③IB ディプロマ資格者及びその他の者を含む	③IB ディプロマ資格者及びその他の者を含む
対象者 ※該当する項目をすべて選択	①国内一条校の IB 生 ②国内インターナショナルスクールの IB 生 ③海外現地校・インターナショナルスクールの IB 生	①～③すべて該当
IB スコア基準	※募集要項等で公表している場合、御記入ください。	なし
主な出願書類		EE の写し、自己推薦書
関連 URL	募集要項掲載ページ URL	

(2) 非公開情報 ※可能な範囲で御記入ください。

a) IB 生の評価ポイント 選抜にあたり IB 生が優位的に評価される点があれば教えてください。	IB スコアにより加点。 EE、TOK、CAS に関する提出資料の審査により加点。
b) 直近の入試実績	実施年度 2024 年度
	志願者数 18 名
	合格者数 10 名
	入学者数 8 名
c) 今後の方向性について 貴学での IB を活用した入試の今後の方向性について、もっともあてはまる記号を選んでください。	ア 全学部へ拡大する予定 イ 未導入の学部にも拡大する予定 ウ 募集人数を増やす予定 エ 現状を維持する予定 オ 見直し又は削減予定 カ その他（具体的に：）
d) その他 御意見や御質問がありましたら御記入ください。	

【2024 年度更新】

## ○○大学 <国際バカロレア (IB) を活用した入試概要>

※2024 年度中に実施済み、あるいは実施予定の入学者選抜の情報を掲載しています。

※掲載内容はあくまでもポイントをまとめたものになります。出願前には必ず募集要項を御確認ください。

入試名称 :	
大学の IB 入試のアピールポイント（入試課記入） :	
	<b>4月入学</b>
<b>学部名</b>	
<b>募集人員</b>	
<b>出願資格 ※IB スコア 基準を含む</b>	
<b>対象者</b>	
<b>選抜方法 及び 出願書類</b>	
<b>出願期間</b>	
<b>選考日程</b>	
<b>合格発表</b>	
<b>備考</b>	
<b>入試要項</b>	
<b>問合せ先</b>	

【記入例】

○○大学 <国際バカロレア（IB）を活用した入試概要>

※2024年度中に実施済み、あるいは実施予定の入学者選抜の情報を掲載しています。

※掲載内容はあくまでもポイントをまとめたものになります。出願前には必ず募集要項を御確認ください。

入試名称 :		
大学のIB入試のアピールポイント（入試課記入）：		
	4月入学	10月入学
学部名	国際関係学部	国際関係学部
募集人員	1~2名	若干名
出願資格 ※IBスコア 基準を含む	IBディプロマ資格を取得見込みの者。 ディプロマ・プログラムの最終試験の成績が〇点以上の者。	IBディプロマ資格を取得している者。 ディプロマ・プログラムの最終試験の成績が〇点以上の者。
対象者	IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	IBディプロマ資格者のみ
選抜方法 及び 出願書類	書類審査及び面接	面接のみ
出願期間	9月上旬	1月上旬
選考日程	10月上旬	2月上旬
合格発表	11月上旬	3月上旬
備考		
入試要項	○○大学入学試験要項（募集要項のURL等記載等）	
問合せ先	○○大学学務部入試課 Tel:	Fax: E-mail:

## 国際バカロレア（IB）を活用した大学入学者選抜例（令和7年1月時点）※2025年1月31日更新

【注】

- ・本資料は日本の学校の卒業生を対象としているものを掲載しています（いわゆる帰国生や留学生に対象を限定しているものを除く）。
- ・本資料での「試験導入年度」は、入学年度ではなく、試験が行われる年度として掲載しています。また、「出願資格」の「IBディプロマ資格者」には資格取得見込者を含む可能性があります。
- ・本資料は文部科学省委託事業により各大学へのアンケートに基づき作成した資料（令和6年1月時点）の更新版として各大学からの回答を元に作成しております。必ずしも全ての情報を網羅しているわけではありません。また、実際の出願等にあたっては、各大学より最新の情報を入手してください。

国公私	大学名	所在地	入試名称	試験導入年度	対象学部 ①全学部 ②一部の学部	学部名	募集人員	出願資格 ①IBディプロマ資格者のみ ②IBディプロマ資格者及びIB科目修了証明書（セーティфикей特）取得者を含む ③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	対象者 ①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	IBスコア基準 ※募集要項等で公表している場合	主な出願書類	関連URL	
1 国立	帯広畜産大学	北海道	国際バカロレア選抜	2025年度	①全学部	すべて	若干名	②IBディプロマ資格者及びIB科目修了証明書（セーティфикей特）取得者を含む	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	EEの写し、TOKの学習成果物、CASの概要レポート	<a href="https://www.ohihiro.ac.jp/undergrad-adm#5">https://www.ohihiro.ac.jp/undergrad-adm#5</a>	
2 国立	北海道大学	北海道	国際総合入試	2017年度	②一部の学部	総合教育部	若干名	※今年次進級時に学部へ転行。移行対象は全学部（文学部、教育学部、法医学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、農学部、工芸部、農学部、獣医学部、水産学部）	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	以下URLに掲載の「学生募集要項」を参照。 <a href="https://www.hokudai.ac.jp/admission/faculty/international/">https://www.hokudai.ac.jp/admission/faculty/international/</a>	<a href="https://www.hokudai.ac.jp/admission/faculty/international/">https://www.hokudai.ac.jp/admission/faculty/international/</a>	
3 国立	弘前大学	青森県	総合型選抜	2025年度（2025年4月入学者）	②一部の学部	人文社会学部（文化創生課程）	総合型選抜：35名（国際バカロレア枠3名を含む）	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校の旧生	なし	募集要項参照	<a href="https://nyushi.hiroaki-u.ac.jp/">https://nyushi.hiroaki-u.ac.jp/</a>	
4 国立	東北大	宮城県	国際バカロレア入試	2016年度	②一部の学部	文学部・法医学部・経済学部・理学部・医学部・歯学部・薬学部・農学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生 ※出願書類の他、提出要件が学部ごとに異なる	学生募集要項などを参照してください	EEの写し、TOKの学習成果物、CASの概要レポート <a href="https://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/voko/r7Baccalaureate.pdf">https://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/voko/r7Baccalaureate.pdf</a>	<a href="https://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/voko/r7Baccalaureate.pdf">https://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/voko/r7Baccalaureate.pdf</a>	
5 私立	東北福祉大	宮城県	総合型選抜 探究型	2018年度	①全学部	すべて	総合福栄学部：88名、共生学科：15名、教育学部：43名、保健医療学科：53名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校の旧生	English 4以上 English 5 SL 5以上	出願確認表、調査書、志望理由書、活動報告書、国際バカロレア資格証明書の申し受け	<a href="https://www.tfu.ac.jp/admissions/2025-sougou.html">https://www.tfu.ac.jp/admissions/2025-sougou.html</a>	<a href="https://www.tfu.ac.jp/admissions/2025-sougou.html">https://www.tfu.ac.jp/admissions/2025-sougou.html</a>
6 国立	秋田大学	秋田県	国際バカロレア入試	2020年度	②一部の学部	国際資源学部・教育文化学部・総合環境理工学部・情報データ科学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	学生募集要項などを参照してください	学部により異なります（自己アピール書、EE（写）など）	<a href="https://www.akita-u.ac.jp/honbu/ex_kind.html">https://www.akita-u.ac.jp/honbu/ex_kind.html</a>	
7 公立	国際教養大学	秋田県	総合選抜型入試Ⅰ（4月入学）、 総合選抜型入試Ⅱ（9月入学）	2021年度（旧試験名称では2010年度）	①全学部	国際教養学部	総合選抜型入試Ⅰ（4月入学）：10名 総合選抜型入試Ⅱ（9月入学）：5名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生 ※別途要件あり	Diploma Programを修了し、最終試験6科目に合格していること	自己アピール書、Diploma原本、最終試験スコア（見込みスコア）等	<a href="https://admission.aui.ac.jp/ug_admission/">https://admission.aui.ac.jp/ug_admission/</a>	
8 公立	会津大学	福島県	ICTグローバルプログラム全英語コース入試	2016年度	①全学部	コンピュータ理工学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	要件付 6科目のうち ・数学 : Higher Level ・理科 : 生物、化学、物理の Higher Level から少なくとも1科目	①英語履歴 ②宿泊（男女） ③成績証明書 ④履修成績証明書 ⑤成績証明書 ⑥IB賞支弁書及び資産を証明できる書類 ⑦EATLの提出 ⑧推薦料 ⑨入学検定料 (被認定証明等送金を証明する書類)	<a href="https://u-niiz.ac.jp/en/materials/">https://u-niiz.ac.jp/en/materials/</a>	
9 国立	筑波大学	茨城県	国際バカロレア特別入試	2014年度（2015年度4月入学者を対象）	①全学部	すべて	若干名（医学群医学類以外）/ 3名（医学群医学類）	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	36点以上であることが望ましい（社会・国際学群国際総合学類） 38点以上であることが望ましい（医学群医学類）	EEの写し、TOKの日本語要約と学習成績をまとめたレポート等	<a href="https://ac.tsukuba.ac.jp/">https://ac.tsukuba.ac.jp/</a>	
10 私立	国際医療福祉大学	栃木県	帰国生および外国人学校卒業生特別選抜	2023年度	②一部の学部	医学部	若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	・国際バカロレア試験の総合成績（合計点）において32点以上を収めていること。 ・物理、化学、生物から2科目及び数学の3科目を複数選択していること。 ※3科目のうち2科目はHLで成績評価が5以上上、残り1科目はHLで成績評価が5以上またはSLで成績評価7を収めていること。	・国際バカロレア資格証書（IB Diploma）の写し ・IB最終試験6科目の成績評価証明書（原本）	<a href="https://nanta.iuhw.ac.jp/gakubu/igakubu/admission/">https://nanta.iuhw.ac.jp/gakubu/igakubu/admission/</a>	
11 国立	群馬大学	群馬県	学校推薦型選抜	2019年度（2018年11月実施）	②一部の学部	共同教育学部（数学專攻・理科専攻） 医学部	若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生	学部により異なるため、入試要項をご確認ください	調査書、推薦書	<a href="https://www.gunma-u.ac.jp/admission/s2107/x38483">https://www.gunma-u.ac.jp/admission/s2107/x38483</a>	
12 私立	浦和大学	埼玉県	総合型選抜、一般選抜、共通テスト利用型	2007年度入学者	①全学部	すべて	若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生 ※諸条件あり	なし	調査書、各入試区分に準じる課題	<a href="https://www.urawa.ac.jp/boshu_yoko">https://www.urawa.ac.jp/boshu_yoko</a>	
13 私立	東京国際大学	東京都、埼玉県	アメリカ留学(ASP)待生入試	2017年度	②一部の学部	商、経、言語コミュニケーション、国際関係、人間社会	特待生A 5名、特待生B 20名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	24点以上	志願票、調査書または卒業証明書、国際バカロレア最終試験の成績評価証明書	<a href="https://www.tiu.ac.jp/entrance-examination/special/faculty/application/2025/yokou_gakubu.pdf">https://www.tiu.ac.jp/entrance-examination/special/faculty/application/2025/yokou_gakubu.pdf</a>	
14 私立	明海大学	千葉県	総合型選抜(AO)	2016年度	②一部の学部	外国语学部、経済学部、不動産学部、ホスピタリティーサービスマネジメント学部、保健医療学部	254名（各学科内訳は入学者選抜試験要項を参照）	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	出願申請書、成績証明書、IB Diploma 取得（見込）証明書	<a href="https://www.mekai.ac.jp/03applicant/upload/files/2025.pdf">https://www.mekai.ac.jp/03applicant/upload/files/2025.pdf</a>	
15 私立	開智国際大学	千葉県	総合型選抜国際バカロレア型	2025年度	①全学部	すべて	若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む ※国際バカロレア MYP (Middle Years Programme)プログラム修了者を含む	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	調査書またはIB資格に関する証明書	<a href="https://www.kaiichi.ac.jp/examination/admission-2/">https://www.kaiichi.ac.jp/examination/admission-2/</a>	
16 私立	青山学院大学	東京都	自己推薦入学者選抜	[A]文部学部(英米文学科):2011年度 [B]地球社会共生学部:2015年度	②一部の学部	[A]文部学部(英米文学科) [B]地球社会共生学部	[A]文部学部(英米文学科) 約30名 [B]地球社会共生学部 約51名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む ※[B]地球社会共生学部:30名	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	入学者選抜要項参照	(入学者選抜要項) <a href="https://www.seyama.ac.jp/admission/undergraduate/request/reque st.html">https://www.seyama.ac.jp/admission/undergraduate/request/reque st.html</a>	
17 国立	お茶の水女子大学	東京都	総合型選抜(新フンボルト入試)	2016年度	①全学部 ※芸術・表現行動学科を除く	すべて	若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む ※高等学校は中等教育学校を含むが、3月以降卒業した者及び令和3年3月卒業見込み者については、高等學校のほか高等専門学校及び高等部を置く特別支援学校並びに文部科学大臣から高等学校の課程と同等の課程又は相当する課程を有するものとして認定された在外教育施設出身者を含む。	①国内一条校の旧生 ※履修科目規定あり	なし	調査書、志願理由書、活動報告書及び関連資料(IBは活報告書の添付資料として提出できる)	<a href="https://www.ocha.ac.jp/">https://www.ocha.ac.jp/</a>	
18 私立	慶應義塾大学	東京都	国際バカロレア資格取得者(日本国外)対象入試	2014年度	②一部の学部	法医学部(法律学科・政治学科)	20名(帰国生対象入試と併せて)	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生	なし	国際バカロレア最終試験6科目の成績評価証明書(Transcript of grades)、TOEFL® iBTもしくはIELTS Academic Moduleの結果など	<a href="https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/examinations/ib/">https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/examinations/ib/</a>	
19 私立	工学院大学	東京都	国際バカロレア特別選抜	2016年度	①全学部	すべて	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	募集要項参照	<a href="admission2025_returnee-b.pdf">admission2025_returnee-b.pdf</a>	
20 私立	国際基督教大学	東京都	1. 総合型選抜(国際認定校枠) 2. ユーカーラム7月受験入試(4月入試) 3. ユーカーラム7月受験(4月入試)	2021年度 2.3. 2012年度以前	①全学部	教養学部	2.3. 総合型選抜全額免除 ※ユーカーラム7月受験とは、4月入試帰国生選抜、English Language Based Admissions (April/September Entry)、EJU(英語留学試験)利用選抜(4月/9月入学)の略称です	①IBディプロマ資格者のみ ※認定校枠は150名 それ以外入試は30名IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	入学試験要項参照	1. <a href="https://www.icu.ac.jp/admissions/undergraduate/exam/special/">https://www.icu.ac.jp/admissions/undergraduate/exam/special/</a> 2. <a href="https://www.icu.ac.jp/admissions/undergraduate/exam/returnees/">https://www.icu.ac.jp/admissions/undergraduate/exam/returnees/</a> 3. <a href="https://www.icu.ac.jp/en/admissions/undergraduate/engdoc/">https://www.icu.ac.jp/en/admissions/undergraduate/engdoc/</a>	
21 私立	芝浦工業大学	東京都、埼玉県	国際バカロレア特別入学者選抜	2018年度	①全学部	すべて	若干名	①IBディプロマ資格者のみ ※国際バカロレア資格取得見込者は、在籍する身障者の学校、進路指導担当者等が提出する「IBディプロマ資格取得見込者用申請書」(任意様式)を提出することで出願可能	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	自己推薦書、評価書、国際バカロレア資格証書、IB最終試験の成績評価証明書	<a href="https://admissions.shibaura-it.ac.jp/admission/exam/special/international/baccalaureate.html">https://admissions.shibaura-it.ac.jp/admission/exam/special/international/baccalaureate.html</a>	
22 私立	順天堂大学	東京都	国際バカロレア選抜I・II	2015年度	②一部の学部	国際教養学部	I: 45名、II: 45名 ※他の選抜方式と併せて合計人数	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	志願確認書、志願理由書、成績証明書、資格証書、自己PR書等	<a href="https://www.juntendo.ac.jp/admission/exam/nyushi/la/outline/">https://www.juntendo.ac.jp/admission/exam/nyushi/la/outline/</a>	
23 私立	上智大学	東京都	国際バカロレア入試 第2期募集	2016年度	②一部の学部	文学部、総合人間科学部、法医学部、経済学部、外國語学部、統合グローバル学部、理工学部	1年次募集 各学科とも若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校の旧生 ②国内イントナショナルスクールの旧生 ③海外現地校・イントナショナルスクールの旧生	なし	入学志願票、国際バカロレア資格証明書、IB最終試験6科目の成績評価証明書、学業計画書等	<a href="https://www.juntendo.ac.jp/exam/international/baccalaureate.html">https://www.juntendo.ac.jp/exam/international/baccalaureate.html</a>	
24 私立	創価大学	東京都	国際バカロレア推薦入試	2018年度	②一部の学部	経済学部、経営学部、法医学部、文学部、教育学部、国際教養学部	各学部若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校の				

28	国立	東京科学大学	東京都	特別選抜I(国際バコロア)	2017年度	②一部の学部	医学部、歯学部	若干名(医学科のみ2名)	①IBディプロマ資格者のみ  ②国内一条校のIB生 ③国内インターナショナルスクールのIB生 ④海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	国際バコロア資格の取得において、以下の各学科・専攻が指定する科目を履修したとする。 ただし、歯学部歯科、歯学部口腔保健医学科、歯学部口腔保健衛生専攻及び歯学部口腔保健医学科口腔保健工学専攻につきは、必要な成績評価を修めた者とする。 【参考】 ①日本語A(HL 又はSL) 又は日本語B(HL) ②数学Analysis and Approaches(HL) 又は Applications and Interpretation(HL) ③物理、化学、生物から1科目(いずれか)1科目(HL) 又は Applications and Interpretation(HL) ④日本語A(HL 又はSL) 又は日本語B(HL) ②物理、化学、生物から1科目(HL 又はSL) 【歯学部保健衛生専攻科検査技術専攻】 ①日本語A(HL 又はSL) 又は日本語B(HL) ②物理、化学、生物から1科目(HL 又はSL) ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生 ④日本語A(HL 成績評価4以上又はSL 成績評価4以上) ②数学Analysis and Approaches(HL 成績評価4以上) 又は Applications and Interpretation(HL 成績評価4以上) ③物理、化学、生物から1科目(HL 成績評価4以上) ④日本語A(HL 又はSL) 又は日本語B(HL) 【歯学部口腔保健学科口腔保健衛生専攻】 ①日本語A(HL 又はSL) 又は日本語B(HL) ②物理、化学、生物から1科目(HL 又はSL) ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生 ④日本語A(HL 成績評価4以上又はSL 成績評価4以上) ②数学Analysis and Approaches 又は Applications and Interpretation、物理、化学、生物から1科目(HL 成績評価4以上) ③物理、化学、生物から1科目(HL 成績評価4以上) ④日本語A(HL 成績評価4以上又はSL 成績評価4以上) ②数学Analysis and Approaches 又は Applications and Interpretation、物理、化学、生物から1科目(HL 成績評価4以上)	入学志願票、志望理由書、評価書(要綱封)、国際バコロア資格証書の写し、IB最終試験成績証明書(原本)、EE(課題論文)の写し、日本語要約、TOK(知識の理論)の学習成果をまとめたポート、CAS(創造性・活動・奉仕)の概要、英語の成績を証明するもの(原本)、英語を履修していない者のみ	<a href="https://admissions.isct.ac.jp/plugins/cms/component_download_file.php?type=1&amp;aged=308&amp;contentId=&amp;contentDataId=&amp;keyId=&amp;ey=7b214e9772668cb120b04cf7ef0673.pdf&amp;fileName=guideline-02">https://admissions.isct.ac.jp/plugins/cms/component_download_file.php?type=1&amp;aged=308&amp;contentId=&amp;contentDataId=&amp;keyId=&amp;ey=7b214e9772668cb120b04cf7ef0673.pdf&amp;fileName=guideline-02</a>
29	国立	東京学芸大学	東京都	国際バコロア選抜	2020年度	①全学部	教育学部	各専攻・コース・プログラムとも若干名(一部の専攻・コース・プログラムでは実施していません)。	①旧IBディプロマ資格者のみ  ②国内一条校のIB生 ③国内インターナショナルスクールのIB生 ④海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	学生募集要項参照	東京学芸大学I学部入試情報サイト <a href="https://www.u-pakuge.ac.jp/hyaku/gakubu/">https://www.u-pakuge.ac.jp/hyaku/gakubu/</a>
30	国立	東京藝術大学	東京都	東京藝術大学音楽学部外国教育課程出身者特別入試	2017年度	②一部の学部	音楽学部	若干名(一般選抜の募集人員に含む)	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む  ②国内一条校のIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	卒業(修了)証明書、成績証明書、志望理由書など	53ff7bf5d2c9165143553d919a3d5ca5.pdf
31	国立	東京大学	東京都	学校推薦型選抜	2015年度	②一部の学部	法学部、教養学部、工学部	法学部(10人程度)、教養学部(5人程度)、工学部(30人程度)	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む  ①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	募集要項参照	<a href="https://www.u-tokyo.ac.jp/admissions/undergraduate/e01_28.html">https://www.u-tokyo.ac.jp/admissions/undergraduate/e01_28.html</a>
32	私立	東京都市大学	東京都・神奈川県	国際バコロア特別入試	2020年度	①全学部	すべて	若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ※取得見込み者はその調査時に記載 ②国内一条校のIB生 ③国内インターナショナルスクールのIB生 ※国外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	調査書、IB資格証書、IB最終試験成績証明書	to19_myusaku_yoko.pdf
33	公立	東京都立大学	東京都	SAT/ACT・IB入試、秋季入学試入試(10月入学)、2024年度	SAT/ACT・IB入試、2017年度 秋季入学試入試(10月入学)、2024年度	②一部の学部	理学部生命科学科	SAT/ACT・IB入試、IB方式は2名 秋季入学試入試(10月入学)、若干名	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	志願票、Essay form等	<a href="https://www.tmu.ac.jp/entrance/faculty/application_guideline.html">https://www.tmu.ac.jp/entrance/faculty/application_guideline.html</a>
34	私立	東京理科大学	東京都	国際バコロア入学者選抜	2021年度	②一部の学部	経営学部(国際デザイン経営学科)	若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ②国内一条校のIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	入学願書、志願者調査、国際バコロア資格証書のコピー、IB最終試験成績証明書、志願理由書	<a href="https://www.tus.ac.jp/admissions/university/guideline/general/">https://www.tus.ac.jp/admissions/university/guideline/general/</a>
35	私立	東洋大学	東京都	国際バコロア入試その他の国際バコロア入試(4月入学・9月入学)実施	2015年度	①全学部	文学部、経済学部、経営学部、法学院、社会学部、国際学部、国際教養学部、情報連携学部、福祉社会デザイン学部、健康スポーツ科学部、理工学部、総合情報学部、生命科学部、環境科学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ※取得見込み者はその調査時に記載 ②国内一条校のIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	志願票、国際バコロア資格証書の写し、IB最終試験成績証明書、志願理由書	<a href="https://www.toyo.ac.jp/nvishi/">https://www.toyo.ac.jp/nvishi/</a>
36	私立	日本歯生命科学大学	東京都	特別選抜「海外就学経験者(帰国生)及びIB取得者」	2000年度	①全学部	すべて	学校推薦型選抜の枠内で若干名	⑧他ディプロマ資格者及びその他の者を含む ※該年度10月1日から翌年3月31日までの間に得取見込み者及び取得見込みの者	なし	Web出願票/志望理由書/身上記録/英語資格検定試験(4技能)の成績証明書/日本国籍又は日本国外の永住許可を得ていることを証明する類似な	<a href="https://www.nvlu.ac.jp/nichiyunavi/admissions/guideline/06.html">特別選抜「帰国生及びIB取得者」</a>
37	私立	日本体育大学	東京都	帰国生及び国際バコロア資格選抜	2017年度	①全学部	すべて	若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ②国内インターナショナルスクールのIB生	なし	志願理由書、学歴書、出身校の卒業(修了)証明書または卒業(修了)見込み証明書、IB成績証明書	<a href="https://www.nittai.ac.jp/exam/com/recruitment.html#ncho04">https://www.nittai.ac.jp/exam/com/recruitment.html#ncho04</a>
38	私立	ビジネス・ブレーカーズ大学	東京都	全選抜方式(一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜)若干名	2014年度	①全学部	すべて	一般選抜、春期 50名、秋期 30名 総合型選抜、学校推薦型選抜、若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む  ①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	総合点25点以上(6教科から24点、Extended Essay 又はTheory of Knowledgeで1点、Creativity/Action/Service修了)が必要 (ア)国際バコロア資格最終試験6科目の成績証明原本(写し不可)(Transcript of (イ)高等学年2年間の成績証明書原本(写し不可) (ウ)高等学校の卒業証明書または卒業見込み証明書(写し不可)	<a href="https://bbt.ac.jp/admission/regular.html">https://bbt.ac.jp/admission/regular.html</a>	
39	私立	武蔵大学	東京都	総合型選抜IB入試	2025年度入試(2024年度実施)	②一部の学部	国際教養学部	経済経営学専攻:若干名 グローバルスタディーズ専攻:若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む  ※资格取得見込み者 ①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	志願理由書、推奨書、DP試験結果等、英語スコア証明書、調査書等	<a href="https://www.musashi.ac.jp/admissions/index.html">https://www.musashi.ac.jp/admissions/index.html</a>
40	私立	武蔵野大学	東京都	国際バコロア特別選抜	2015年度	②一部の学部	グローバル学部、教育学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ②国内一条校のIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	学生募集要項などを参照してください	エントリーシート、国際バコロア資格証明書等 日本語: <a href="https://www.musashino-u.ac.jp/admission/download/faculty.html">https://www.musashino-u.ac.jp/admission/download/faculty.html</a>	<a href="https://www.musashino-u.ac.jp/admission/5bc23bf033eaaf244062b40b25762.pdf">https://www.musashino-u.ac.jp/admission/5bc23bf033eaaf244062b40b25762.pdf</a>
41	私立	明治学院大学	神奈川県	自己推薦AO入学試験(B)	2016年度	②一部の学部	国際学部(国際キャリア学科)	国際キャリア学科の自己推薦AO(B) (4月入学約10名、9月入学若干名)	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む  ①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生	なし	志願票、IB Full Diploma または最終試験の成績見込評価証明書(Grade Predicted Grade)、志願機会、エントリーシート 所定の志願書類	<a href="https://www.meijigakuen.ac.jp/admission/guidelines/pdf/2023_guide_to.pdf">https://www.meijigakuen.ac.jp/admission/guidelines/pdf/2023_guide_to.pdf</a>
42	私立	明治大学	東京都	総合型選抜(自己推薦特別入試)	2022年度	②一部の学部	国際日本学部	12名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む  ①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	志願票、IB Full Diploma または最終試験の成績見込評価証明書(Grade Predicted Grade)、志願機会、エントリーシート 所定の志願書類	<a href="https://www.meiji.ac.jp/exam/reference/tansho.html">https://www.meiji.ac.jp/exam/reference/tansho.html</a>
43	私立	立教大学	東京都	自由選抜入試	2014年度	②一部の学部	経営学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ※ディプロマ取得予定者が入学までIBディプロマを取得できない場合は欠席となる。	なし	IBディプロマ取得(見込)証明書、志願理由書、活動報告書B、英語資格検定試験Scope証明書	<a href="https://exam.52school.com/nikkvo/admissions/undergraduate/guidelines/_j3_guideline_B.html">https://exam.52school.com/nikkvo/admissions/undergraduate/guidelines/_j3_guideline_B.html</a>
44	私立	早稲田大学	東京都	AO入試(英語学部プログラム)	2012年度以前	②一部の学部	政治経済学部、社会学部、国際教養学部、文化構想学部、基幹理工学部、創造理工学部	学部により15名～150名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む  ①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	※Average Scores of Successful Applicants (SAT, ACT, IB)のPDFファイルをご参照ください。 なお、基準点・最低点は設けておりません。	卒業(見込)証明書、成績証明書、エッセイ、統一試験のスコア、英語能力証明書、推薦状	<a href="https://www.waseda.jp/inst/admission/en/undergraduate/english/">https://www.waseda.jp/inst/admission/en/undergraduate/english/</a>
45	公立	横浜市立大学	神奈川県	国際バコロア特別選抜	2013年度(2014年度入試)	①全学部	すべて	医学部医学科2名、他の学部学科は各若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ②国内一条校のIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	医学部医学科は40以上(科目別の最低基準もあり)、他の学部学科は無し。	志願理由書、IBのTranscript	<a href="https://www.yokohama-cu.ac.jp/admissions/admissions/special-selection/">https://www.yokohama-cu.ac.jp/admissions/admissions/special-selection/</a>
46	国立	金沢大学	石川県	特別選抜 国際バコロア入試	2016年度	①全学類	すべて	若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む ※取得見込みの者を含む	令和7(2025)年度国際バコロア入試 学生募集要項 <a href="https://www.kanazawa-u.ac.jp/admission/boshuyoku">https://www.kanazawa-u.ac.jp/admission/boshuyoku</a>	国際バコロア資格証書(写し)、成績評価証明書、身上調書、志願理由書	令和7(2025)年度国際バコロア入試 学生募集要項 <a href="https://www.kanazawa-u.ac.jp/admission/boshuyoku">https://www.kanazawa-u.ac.jp/admission/boshuyoku</a>
47	公立	都留文科大学	山梨県	学校推薦型選抜(IB)	入試年度2017年度、試験実施年度2016年度	②一部の学部	教養学部国際教育学科	若干名	②IBディプロマ資格者及びIB修了証明書(サーティファイ)の取得者を含む  ①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	日本語Aが4点以上かつIB科目全体で5点以上との科目が1つ以上	IB最終試験成績証明書、活動記録報告書、資格・検定証明書等	<a href="https://www.tsuru.ac.jp/site/nvishi/yousou.html">https://www.tsuru.ac.jp/site/nvishi/yousou.html</a>
48	私立	愛知医科大学	愛知県	国際バコロア選抜	2017年度	②一部の学部	医学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ②国内一条校のIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	入学願書、自己推薦書、IB資格証書、成績証明書、英語外部試験(IELTS/J/TOEIC/TOEFL-IB)の提出書類を記載する書類	<a href="https://www.aichi-med-u.ac.jp/su11/su107/su11070101/1201064_2725.html">https://www.aichi-med-u.ac.jp/su11/su107/su11070101/1201064_2725.html</a>
49	私立	中京大学	愛知県	①グローバル特別入試、②英語プレゼンテーション特別入試	①2016年度 ②201年度	①①全学部 ②一部の学部	国際学部(12名)、文部科学部(若干名)、心理学部(2名)、法医学部(2名)、経営学部(3名)、総合政策学部(2名)、人間科学部(4名)、工学部(4名)、スポーツ科学部(若干名) ②国際学部(12名)	①①グローバル特別入試、②IBディプロマ資格者及びその他の者を含む ①①国際学部(12名)のIB生、②国内インターナショナルスクールのIB生、③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生 ②②英語プレゼンテーション特別入試、③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む ①①国際学部(12名)のIB生	国際バコロア資格(International Baccalaureate Diploma)を取得している者及び2025年3月31日までに取得見込みの者(日本語による講義を理解する能力がある者)	志願理由書、IBのTranscript	<a href="https://www.yokohama-cu.ac.jp/admissions/admissions/special-selection/">https://www.yokohama-cu.ac.jp/admissions/admissions/special-selection/</a>	
50	国立	名古屋大学	愛知県	学校推薦型選抜、総合型選抜	2016年度	①全学部	すべて	※国際バコロアに関する書類の提出を要した年度	①国内一条校のIB生  ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	各選択の募集要項参照 「国際バコロアの成績証明する書類」は任意提出書類の1つです。	<a href="http://www.nagoya-u.ac.jp/admission/guide/index.html">http://www.nagoya-u.ac.jp/admission/guide/index.html</a>	
51	私立	名古屋商科大学	愛知県	国際バコロア(IB)入試	2023年度	①全学部	すべて	若干名	①IBディプロマ資格者のみ  ②国内一条校のIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	公表表記	成績証明書、課業エッセイ	<a href="https://www.nucba.ac.jp/admission/schedule/entry-24612.html">https://www.nucba.ac.jp/admission/schedule/entry-24612.html</a>
52	私立	豊田工業大学	愛知県	特別選抜(国際バコロア入試)	2024年度入試(2023年度実施)	①全学部	工学部	若干名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む ※IB資格取得者およびIB取得見込み者も含む	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生		

62	私立	関西大学	大阪府	国際バカロレア入学試験、AO入学試験	2022年度	②一部の学部	【国際バカロレア入学試験】文学部、経済学部、 【AO入学試験】商学部、ビジネスデータサイエンス学部	文学部：若干名 商学部：5名（IB資格者以外も含む） ビジネスデータサイエンス学部：(3名) ・IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	文学部、経済学部：①由ディプロマ資格者のみ ・商学部：①国内一条校の生徒、②国内インターナショナルスクールのIB生 ・ビジネスデータサイエンス学部：①国内一条校の生徒、②国内インターナショナルスクールの生徒・現地校・インターナショナルスクールのIB生	①文部省、経済学部：①国内一条校のIB生 ・商学部：①国内一条校の生徒、②国内インターナショナルスクールのIB生 ・ビジネスデータサイエンス学部：①国内一条校の生徒、②国内インターナショナルスクールの生徒・現地校・インターナショナルスクールのIB生	学生募集要項などを参照してください	関連URLより入学試験要項参照	【国際バカロレア入学試験】 <a href="https://www.nyusikansai-u.ac.jp/admission/baccalaureate/">https://www.nyusikansai-u.ac.jp/admission/baccalaureate/</a> 【AO入学試験】 <a href="https://www.nyusikansai-u.ac.jp/admission/ao/">https://www.nyusikansai-u.ac.jp/admission/ao/</a>
63	私立	近畿大学	大阪府	総合型選抜(AO入試)	2015年度(2016年度入試)	②一部の学部	国際学部(国際学部グローバル専攻、国際学部東アジア専攻・韓国語コース)	33名以内(2専攻合計)	②IBディプロマ資格者及び他の科目修了証明書 (サーティファイケート)取得者を含む	②IBディプロマ資格者及び他の科目修了証明書 (サーティファイケート)取得者を含む	国際バカロレア認定校(日本語DP、英語Diplomaいずれも取得可能)において、IB Diploma取得者または令和7年3月31日までに取得見込みの者。(令和7年度募集要件特典)	自己紹介書、志願理由書、出願資格を証明する書類など	<a href="https://kindai.jp/exam/system/ao/">https://kindai.jp/exam/system/ao/</a>
64	私立	関西学院大学	兵庫県	グローバル入学試験 (II.インターナショナル・バカロレア入学試験)	2014年度	①全学部	すべて	II. インターナショナル・バカロレア入学試験を含むグローバル入学試験全体の人数 神学部：若干名、文学部：社会文化系：5名、法学部：10名、経済学部：5名、商学部：5名、国際学部：25名、教育学部：各コース若干名、人間福祉学部：(社会福祉学科：3名、社会起業学科：3名、人間科学科：2名)総合政策学部：15名、理学部：若干名、工学部：若干名、環境学部：若干名、建築学部：若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	調査書等・志願理由書・資料説明書(IB成績評価証明書および卒業証明)・英語資格の合格証やスコア(文系学部のみ任意)	グローバル入学試験 入試要項 関西学院大学 入試情報サイト (kwansel.ac.jp)
65	私立	神戸女学院大学	兵庫県	国際バカロレア入学試験	2017年度	①全学部	すべて	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	インターナショナル・バカロレアDP(ティプロマ・プログラム)のフレディプロマを取得済みの者。もしくは2025年3月末までに取得見込みでPredicted Scoreが出版時に26点以上で予測される者。大学にはフレディプロマを取得していることが条件。	志願票、高等学校等の卒業証明書または卒業見込証明書、出身高等学校等の校長または教員の推薦状(バカロレアDPプログラムを取得済みの者は、IBディプロマとIB最終試験成績証明書、取得見込みの者は高等学校等より受けた証明書、志願理由書 等)	<a href="https://www.kobe-e.ac.jp/admissions/info/baccalaureate/">https://www.kobe-e.ac.jp/admissions/info/baccalaureate/</a>
66	私立	兵庫医科大学	兵庫県	総合型選抜(国際バカロレア併)	2025年度入試(2024年度実施)	②一部の学部	医学部	約2名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	出願資格として、国際バカロレア資格に於いて、言語を日本語とするSLの高い得点を有する者。また、日本語能力検定試験を日本語(HL)に取り替し成績評価6以上の者	国際バカロレア資格証書の写し、IB最終試験の成績証明書、調査書、志願理由書	<a href="https://www.hyo-med.ac.jp/admission/outline/documents/">https://www.hyo-med.ac.jp/admission/outline/documents/</a>
67	公立	兵庫県立大学	兵庫県	帰国生選抜	2019年度	②一部の学部	国際商経学部	5名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	入学者選抜方法等参照	<a href="https://www.u-hyogo.ac.jp/hyogon/admissions/selection/">https://www.u-hyogo.ac.jp/hyogon/admissions/selection/</a>
68	国立	岡山大学	岡山県	国際バカロレア選抜	2012年度	①全学部	すべて	8月募集:10人 10月募集:47人	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	医学部医学科 30点以上(45点満点) 薬学部薬学科 32点以上(45点満点)	自己推薦書及び評価書	<a href="http://www.okayama-u.ac.jp/tp/admission/baccalaureatebooyoukyo.html">http://www.okayama-u.ac.jp/tp/admission/baccalaureatebooyoukyo.html</a>
69	私立	倉敷芸術科学大学	岡山県	国際バカロレア選抜	2017年度	①全学部	すべて	若干名	※2025年3月31日までに18歳未達する者で、国際バカロレア資格を取得または2025年3月31日までに取得見込み者。	①国内一条校のIB生	なし	高校調査書、志願理由書、国際バカロレア資格証明書	<a href="https://www.kusa-u.ac.jp/exam/applicationguidelines/">https://www.kusa-u.ac.jp/exam/applicationguidelines/</a>
70	公立	淑徳大学	広島県	総合型選抜(春入学) Integrated Selection/Autumn Admission(総合型選抜・秋入学)	2021年度入試(2020年度実施)	①全学部	ソーシャルシステムデザイン学部	総合型選抜(春入学):50名 ③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	Integrated Selection/Autumn Admission(総合型選抜・秋入学):若干名	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	志願理由書、活動報告書、履歴書、小論文、高等學校等の成績証明書、英語資格・総合試験のスコアなど	<a href="https://www.eikei.ac.jp/english/admissions/outline/e_sogo.html">https://www.eikei.ac.jp/english/admissions/outline/e_sogo.html</a>
71	私立	広島修道大学	広島県	学校推薦型(公募・専属)指定資格方式		②一部の学部	人間環境学部	5名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	入学試験要項2025参照	<a href="https://www.shudo-u.ac.jp/admissions/exam/kouho.html">https://www.shudo-u.ac.jp/admissions/exam/kouho.html</a>
72	国立	広島大学	広島県	広島大学より採入試 総合型選抜 国際バカロレア型	2016年度	②一部の学部	国際バカロレア型	若干名	②IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	学生募集要項などを参照してください	国際バカロレア資格を証明する書類、志願理由書 ほか	<a href="https://www.hiroshima-u.ac.jp/nyushi/yoko_doga/yoko">https://www.hiroshima-u.ac.jp/nyushi/yoko_doga/yoko</a>
73	公立	山口県立野田市立山口東京理科大学	山口県	国際バカロレア選抜	2024年度	②一部の学部	工学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	国際バカロレア資格証書の写し IB最終試験の成績証明書 EE(課題文)の写し及び日本語の要約 TOK(知識の理解)の学習成果をまとめたレポート(日本語) CAS(創造性・活動・奉仕)の概要(日本語)	<a href="https://www.socu.ac.jp/uploads/images/1_r7baka.pdf">https://www.socu.ac.jp/uploads/images/1_r7baka.pdf</a>
74	国立	香川大学	香川県	国際バカロレア選抜	2023年度	①全学部	すべて	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	学生募集要項などを参照してください	国際バカロレア資格証書の写し等、募集要項をご確認ください	<a href="https://www.kagawa-u.ac.jp/admission/admission_guide/">https://www.kagawa-u.ac.jp/admission/admission_guide/</a>
75	国立	高知大学	高知県	国際バカロレア選抜	2023年度	②一部の学部	人文社会科学部・教育学部・理工学部・医学部・農林海洋科学部	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	学生募集要項などを参照してください	募集要項参照	<a href="https://nyusi.kochi-u.ac.jp/nyushi/admissions">https://nyusi.kochi-u.ac.jp/nyushi/admissions</a>
76	国立	九州大学	福岡県	国際コース入試(10月入学) 国際入試		②一部の学部	農学部 ②一部の学部	10名程度 3名程度	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	卒業(見込)証明書、成績証明書など	<a href="https://www.kyushu-u.ac.jp/ia/admission/faculty/selection/">https://www.kyushu-u.ac.jp/ia/admission/faculty/selection/</a>
77	国立	九州工業大学	福岡県	総合型選抜(IB)	2020年度選抜(2019年度実施)	①全学部	すべて	若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	成績証明書、履歴書、志願理由書など	<a href="https://www.kyutech.ac.jp/examination/gv_ib.html">https://www.kyutech.ac.jp/examination/gv_ib.html</a>
78	私立	西南学院大学	福岡県	国際バカロレア入学試験	2016年度	①全学部	すべて	若干名(全学部・学科共通)	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	入学志願書、国際バカロレア資格証書(コピー可)、成績証明書、EEの写し、志願理由書	<a href="https://www.seinan-u.ac.jp/admissions/entrance_system/other_selection.html">https://www.seinan-u.ac.jp/admissions/entrance_system/other_selection.html</a>
79	国立	長崎大学	長崎県	総合型選抜 I (グローバル・国際バカロレア型)	2016年度	②一部の学部	多文化社会学部	1名(グローバル枠を含む)	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む ※グローバル枠を含む	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	出願確認書、自己推薦書、諸活動の記録、調査書、国際バカロレア資格証書の写し、IB最終試験の成績証明書	<a href="https://www.nazasaki-u.ac.jp/nyusaku/admission/selection/">https://www.nazasaki-u.ac.jp/nyusaku/admission/selection/</a>	
80	私立	立命館アジア太平洋大学	大分県	国際バカロレア(IB)選抜	2014年度(国際バカロレア(IB)選抜は2021年度)	①全学部	すべて	各学部7名(4月・9月入学合算)	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	EE、志願理由書、エッセイシート	<a href="https://www.apumate.net/admissions_guide/examination/ao/">https://www.apumate.net/admissions_guide/examination/ao/</a>
81	国立	鹿児島大学	鹿児島県	国際バカロレア選抜	2015年度	①全学部	すべて	専門学部:2人、専門学部以外の学部:若干名	①IBディプロマ資格者のみ	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	学生募集要項などを参照してください	【資格既取得者】国際バカロレア資格証書の写し、IB最終試験6科目の成績評価証明書 【資格取得見込み者】IB最終試験の予測スコア証明書 【共通】志願理由書、EEの写し、TOKの学習成果書、CASの概要レポート	<a href="https://www.kagoshima-u.ac.jp/exam/youkou.html">https://www.kagoshima-u.ac.jp/exam/youkou.html</a>
82	国立	琉球大学	沖縄県	総合型選抜 I・II・一般選抜	1983年度(1984年度入試)	①全学部	すべて	総合型選抜 I・II: 53名 一般選抜 1,206名	③IBディプロマ資格者及びその他の者を含む	①国内一条校のIB生 ②国内インターナショナルスクールのIB生 ③海外現地校・インターナショナルスクールのIB生	なし	国際バカロレア資格取得者は、成績証明書をもって調査書に代えることができる。	<a href="https://www.u-ryukyu.ac.jp/admissions/recruitment/">https://www.u-ryukyu.ac.jp/admissions/recruitment/</a>